

岩手県埋文センター文化財調査報告書第56集

上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書

二戸バイパス関連発掘調査

岩手県教育委員会

(財)岩手県埋蔵文化財センター

建設省岩手工事事務所

岩手県埋文センター文化財調査報告書第56集
上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書正誤表

頁 行	誤	正	頁 行	誤	正	頁 行	誤	正
組織 下3	田村荘一	田村壮一	14 15	担当	相当	64 10	円羽氏	丹羽氏
例言 13	大般渡農業	大船渡農業		31 遺跡のとして	遺跡として		下3 鈴木隆史	鈴木隆英
	14 コハタ	コハク	15 6	再発見	開発		奥柳遺跡	鬼柳遺跡
	下5 1. 遺跡群の立地	二戸市の地形区分面		13 特期別	時期別	67 8	平担	平坦
		遠藤勝博		14 ことに	ことに		14・15 かすかに	かすかに
	下4 2 周辺の遺跡	二戸市の遺跡…高橋与右		17 1遺跡 1遺跡	1遺跡	69 2	土杭	土塚
		エ門	16 10	山内清夫	山内清男		5 d 0 3 塚	F d 0 3 塚
	3 二戸バイパス～	2 遺跡群の環境…遠藤		の年の中で	の編年の中で		9 発掘前	発掘前
		高橋与右エ門		13 特に本書で報告する	削除		16 3・a 4 層	a ₃ ・a ₄ 層
	下3 (中世住居址)	(中世)		20 発掘調査	発掘調査		下6 である先端部	である。先端部
本文目次下3	竪穴住居址	竪穴遺構		21 発展	発表	72 下1	と出土	と出土遺物
図版目次19	遺構出土遺物	遺構出土遺物		23 段上に	段丘上に	74 1	写真図版5・6	写真図版6
	53 B b 0 6 住居址	B b 0 6 竪穴遺構		25 金田一バイパス	金田一バイパス		18 Cj 50 塚	Cj 50 土塚
	54 C c 12 住居址	C c 12 竪穴遺構		28 (寺八沢式)	(寺の沢式)	78 10	平坦な	平坦な
写真目次8	土器埋設土塚	土器埋設遺構		30 上田面遺跡	上田面遺跡	79 2	住所址	住居址
	36 竪穴住居址	竪穴遺構	25 12	400 m をを測る	400 m を測る		16 隋所	随所
6 図版1	7 中尊根遺跡	7 中曽根遺跡	58 下	66～79 (第IV群土器)	66～79 (第III群土器)	80 下1	凶	凶
9 7	平担	平坦	62 下2	とした	A 2 とした	81 下4	堀り込み	掘り込み
	22 分する	分布する		13 西の浜見塚	西の浜貝塚	102 図版	配石土土塚	配石土塚
11 24	図版4	図版Ⅲ		14・15 円羽	丹羽		下4 完掘	完掘
12 27	粒粘	粗粒		19 脱脚	脱却	103 10	楕円形	楕円形
14 1	図版VI	図版IV		下1 円羽氏	丹羽氏		12 捺糸回転文	捺糸回転文

頁 行	誤	正	頁 行	誤	正	頁 行	誤	行
下 4	掘り込	掘り込	149 21	皇字通寶	皇宋通寶	200 下 3	網状底	網代底
112 3	掘られて	掘られて	27	C c 12住居址	C c 12竪穴遺構	248 写真36	住居址	竪穴遺構
18	「 cm	50cm	150 1・3	B b 0 9 住居址	B b 0 9 竪穴遺構	奥付 1	調査報告 第56集	調査報告書第56集
117 4	小伴形	小判形	2	C c 12竪穴遺構	C c 12竪穴遺構	2	岩手県埋蔵文化財発掘	上村遺跡・下村A遺跡・
20	付随する	付随する	151 下 6	粘土紐が粘土紐が	粘土紐が		調査略報	下村B遺跡発掘調査報告
127 下 6	石てい	石で	167 20	である。	できる。			書
131 18	掘る。	掘る。	168 15	そ	削除			
下 1	検出部長は	検出面の長さは	17	された。～である。	された可能性が想定され			
146 2	竪穴住居址	竪穴遺構			る。			
6	矩形の、張り出し	矩形の張り出し	169 下 1	混ざれる	混在する			
8	P ₁₂ から P ₁₀	P ₁₂ から P ₁₆	170 18	可能性性	可能性			
9	0.10 m 0.15 m	0.10～0.15 m	171 4	推される	推測される			
147 下 1	B b 0 6 住居址	B b 0 6 竪穴遺構	10	土抔	土抔			
	平面図	南西隅ピットから順に	下10	隆十	隆十			
		1～24を入れる	下7・6	土抔	土抔			
148 下 1	C c 12住居址	C c 12竪穴遺構	下 5	特徴	特徴			
	平面図	南側ピットから順に1～	下 4	住居址城	住居域			
		24を入れる	下 4・3	土抔	土抔			
149 1	第 表	第 2表	下 1	あろうと	あろうという			
10	重複する。柱穴	重複する柱穴	172 2	石室状土製品	石室状遺構出土石製品			
20	形成	形状	184 下 3	土器埋設遺墟	土器埋設遺構			
21	北字銭	北宋銭	下 1	土器埋設土墟	土器埋設遺構			

上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書

二戸バイパス関連遺跡発掘調査

序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重点施策となっております。

一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。貴重な文化財の保護、保存と現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つことは大きな課題でもあります。

本報告書にかかわる二戸バイパスは、二戸市中心部を通る国道4号線の交通渋滞緩和のため二戸郡一戸町鳥越駒木平を起点に、現国道4号線西側馬淵川左岸の山沿を北上し二戸市金田一上田面までの総延長7.7kmに及ぶ計画路線であります。

このバイパスルート内に13遺跡が所在し昭和49年度から県教育委員会事務局文化課によって発掘調査が行なわれ、52年度からは当埋蔵文化財センターが文化課の調整と指導によって調査を続行してまいりました。

本報告書は昭和49年度に発掘調査した上村遺跡・下村A遺跡、昭和49・50年度調査の下村B遺跡の結果についてまとめたものであります。上村遺跡の縄文時代中期末葉の住居址は石囲炉の構造をよく示し、下村B遺跡は縄文時代後期初頭の配石土壌から宗教的な場であったと思われれます。

この報告書が研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願ってやみません。

最後にこれまで発掘調査から報告書刊行に至るまでの間、ご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、二戸市教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝するとともに今後のご指導ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年3月

財団法人 岩手県埋蔵文化センター

理事長 新 里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	柴内 真	(県教育次長)
常務理事	熊谷 正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田 良和	(県農政部次長)
〃	田代 太志	(県林業水産部次長)
〃	後藤 光雄	(県土木部次長)
〃	板橋 源	(県立博物館長)
〃	草間 俊一	(県立盛岡短期大学長)
〃	小形 信夫	(元常務理事)
監事	白石 丈雄	(県教委総務課長)
〃	小原 吉雄	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷 正男	専門調査員	畠山 靖彦	専門調査員	光井 文行
副所長	小野寺 登	〃	朝野 孝二	〃	石川 長喜
	【総務課】	〃	菊池 利和	〃	工藤 利幸
総務課長	小笠原 喜一	〃	鈴木 恵治	〃	中川 重紀
庶務係長	阿部 詔夫	〃	大原 一則	〃	高橋 与右工門
主事	佐藤 久四郎	〃	渡辺 洋一	〃	佐々木 清文
〃	戸草内 幸男	〃	田鎖 寿夫	〃	酒井 宗孝
〃	立花 多加志	〃	佐々木 嘉直		【資料課】
技能員	佐藤 春男	〃	柄沢 満郎	資料課長	吉田 努
	【調査課】	〃	平井 進	主任専門調査員	国生 尚
調査課長	嶋 千秋	〃	種市 進	専門調査員	小平 忠孝
主任専門調査員	近藤 宗光	〃	田村 莊一	〃	鈴木 隆英
〃	遠藤 勝博	〃	三浦 謙一	〃	高橋 文夫
〃	村上 達夫	〃	岩 渕 久	〃	高橋 義介

例 言

1. 本報告書は、国道4号線二戸バイパス建設予定地内に所在する二戸市上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 発掘調査は建設省東北地方建設局の委託をうけ、岩手県教育委員会が主体となり文化課が担当した。
3. 発掘調査の期間と調査担当者及び調査面積等は各遺跡の扉に記載している。
4. 発掘調査及び整理にあたっては次の諸機関のご協力をいただいた。
建設省東北地方建設局岩手工事事務所・岩手工事事務所二戸国道維持出張所・二戸市教育委員会
5. 室内整理作業及び報告書刊行は、(財)岩手県埋蔵文化財センターが委託をうけ担当した。
6. 整理作業は昭和56年4月～57年3月まで四井謙吉が担当し、昭和57年4月～12月まで吉田努・鈴木優子が担当した。
7. 本報告書の執筆にあたり石器の石質鑑定は、岩手県立大般渡農業高等学校教諭佐藤二郎氏、コハタの鑑定は和洋女子大学教授寺村光晴氏に依頼した。
8. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。
 - I 序文 1 調査に至る経過……嶋 千秋 2 調査方法……四井謙吉
 3 整理の方法……四井謙吉、鈴木優子
 - II 二戸地区の概観 1 遺跡群の立地……高橋与右エ門、遠藤勝博
 2 周辺の遺跡 3 二戸バイパス関連遺跡群の概観……高橋与右エ門
下村A遺跡……吉田 努 下村B遺跡……鈴木優子、昆野 靖（中世住居址）
上村遺跡……鈴木優子
9. 発掘調査及び整理作業にあたっては多数の作業員のかたがたのご協力をいただいた。

本文目次

序

例 言

I. 序 文	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査方法	2
3. 整理方法	4
II. 二戸地区概観	8
1. 二戸市の地形面区分	8
2. 遺跡群の環境	11
3. 二戸市の遺跡	14

【上村遺跡】

I. 位置と立地	25
II. 基本層序	27
III. 発見遺構と出土遺物	28
1. 竪穴住居址及び竪穴状遺構	28
2. 炉 址	49
3. 土 壇	49
4. 土器埋設土壇	50
5. 遺構外出土遺物	51
IV. ま と め	61

【下村A遺跡】

I. 位置と立地	67
II. 基本層序	67
III. 発見遺構と出土遺物	69
1. 塚	69
2. 土 壇	72
3. 遺構外出土遺物	74
IV. ま と め	74

【下村B遺跡】

I. 位置と立地	78
II. 基本層序	78
III. 発見遺構と出土遺物	79
1. 縄文時代	79
(1) 竪穴住居址	79
(2) 炉 址	86
(3) 溝	88
(4) 配石遺構及び土壇群	93
2. 中 世	146
(1) 竪穴住居址	146
3. 遺構外出土遺物	151
IV. ま と め	167

図 版 目 次

<p>図版Ⅰ 二戸バイパス関連遺跡の位置図… 6</p> <p>図版Ⅱ 遺跡周辺の地形図…………… 7</p> <p>図版Ⅲ 地形区分図……………10</p> <p>図版Ⅳ 二戸市の遺跡位置図…………… 17・18</p> <p style="text-align: center;">【上村遺跡】</p> <p>図版1 上村遺跡地形及びグリット配置図26</p> <p>図版2 基本層序……………27</p> <p>図版3 上村遺跡遺構配置図…………… 29・30</p> <p>図版4 Cd 65竪穴住居址平断面図 ……31</p> <p>図版5 Ce 68竪穴住居址平断面図 ……34</p> <p>図版6 Cf 68竪穴住居址平断面図 ……35</p> <p>図版7 Cd 65竪穴住居址出土遺物、 Ce 68竪穴住居址出土遺物(1) ……36</p> <p>図版8 Ce 68竪穴住居址出土遺物(2) ……37</p> <p>図版9 Ce 68竪穴住居址出土遺物(3) ……38</p> <p>図版10 Ce 68竪穴住居址出土遺物(4) ……39 Cf 68竪穴住居址出土遺物 ……39</p> <p>図版11 Db 71・Dc 74竪穴状遺構平断面図 ……41</p> <p>図版12 Db 71竪穴状遺構出土遺物 ……42</p> <p>図版13 Dc 03竪穴住居址平断面図 ……44</p> <p>図版14 Df 03竪穴住居址平断面図 ……46</p> <p>図版15 Dc 03竪穴住居址平断面図、 Df 03竪穴住居址土遺物 ……47</p> <p>図版16 Df 03竪穴住居址土遺物(2) ……48</p> <p>図版17 Ch 68炉址 ……49</p> <p>図版18 Cf 65土器埋設遺構、 Be 62土址平断面図 ……50</p> <p>図版19 Cf 65土器埋設遺構出土遺物 ……50</p> <p>図版20 遺構外の出土遺物及び土壇出土遺物 53</p>	<p>図版21 遺構外の出土遺物…………… 54</p> <p>図版22 遺構外の出土遺物…………… 55</p> <p>図版23 遺構外の出土遺物…………… 56</p> <p>図版24 遺構外の出土遺物…………… 57</p> <p>図版25 遺構外の出土遺物…………… 58</p> <p>図版26 遺構外の出土遺物…………… 59</p> <p>図版27 遺構外の出土遺物…………… 60</p> <p style="text-align: center;">【下村A遺跡】</p> <p>図版1 基本層序…………… 67</p> <p>図版2 地形図、グリット遺構配置図… 68</p> <p>図版3 Fd 03塚平断面図 ……70</p> <p>図版4 Fd 03塚出土遺物 ……71</p> <p>図版5 Cj 03土壇平断面図と出土 ……72</p> <p>図版6 遺構外の出土遺物…………… 73</p> <p style="text-align: center;">【下村B遺跡】</p> <p>図版1 基本層序構配置図…………… 77</p> <p>図版2 地形図グリット遺…………… 78</p> <p>図版3 Ah 09住居址平断面図 ……80</p> <p>図版4 Ah 12住居址出土遺物 ……81</p> <p>図版5 Ah 12住居址平断面図及び出土遺物 82</p> <p>図版6 Ah 50住居址平断面図 ……83</p> <p>図版7 Bb 03住居址平断面図及び出土遺物 85</p> <p>図版8 Bb 12住居址平断面図及び出土土器 86</p> <p>図版9 Cg 50炉址及びCc 09炉址平断面図 及び出土遺物 ……87</p> <p>図版10 溝状遺構出土遺物…………… 88</p> <p>図版11 下村B遺跡配石遺構周溝89・90・91・92</p> <p>図版12 A:03・A:50土壇平断面図及び出土遺物… 96</p> <p>図版13 A:53・A:50土壇平断面図及び出土遺物… 97</p>
--	--

図版14	Bb 03-1・2、Bb 03土壇平断面図	・ 98	図版42	配石遺構群(7)	…………… 130
図版15	Be 09・50・56土壇平断面図及び出土遺物	・100	図版43	Da 15-1・2配石及び土壇平断面図	・132
図版16	Aj 53・Bb 56・Bc 56配石遺構平断面図	……101	図版44	Da 15-1土壇内出土土器	…………… 133
図版17	Be 56配石土壇	……………102	図版45	Da 15-2土壇出土土器	……………134
図版18	配石遺構群(1)―土壇	……………104	図版46	Da09-1・2、Da12、Da15、Db15-1・2土壇平断面図	・136
図版19	Cc 09-1・2、Cd 06土壇平断面図	……105	図版47	Da 09-3~6、Db 09-2~5土壇平断面図	……138
図版20	Cd 03-1・2土壇平断面図及び出土遺物	……106	図版48	Db 09-1土壇平断面図及び出土遺物(1)	・139
図版21	配石遺構群(2)―配石	……………107	図版49	Db -9-1土壇出土遺物(2) 及びDb 06、Db 12土壇平断面図	・140
図版22	配石遺構群(6)―土壇	……………107	図版50	Da 06土器埋設遺構、Dc 12土壇 平断面図及び出土遺物	…………… 142
図版23	Ce 12・Ce 09配石遺構及び土壇平断面図	・108	図版51	Ch 50、Da 50土壇平断面図及び出土遺物	・143
図版24	Cf 06-1・2、Cg 09-1配石及び 土壇平断面図・出土遺物	……………110	図版52	Dc 15配石遺構平断面図	…………… 145
図版25	Cf 09配石土壇平断面図	…………… 111	図版53	Bb 06住居址	……………147
図版26	Cf 12-1・2土壇平断面図、出土遺物	113	図版54	Cc 12住居址	……………148
図版27	平断面図及び出土遺物	……………115	図版55	Cc 住居址出土古銭	……………149
図版28	Cg 09-2・3、Cg 12-1・2土壇平断面図 及び出土遺物	……………116	図版56	遺構外出土土器(1)	…………… 153
図版29	Cg 12-3・4・5土壇、Cg 15-1・2 土壇平断面図及び出土遺物	……………117	図版57	遺構外出土土器(2)	…………… 154
図版30	Ch 09-1・Ch 12-1土壇平断面図	・119	図版58	遺構外出土円盤状製品(1)	…………… 155
図版31	配石遺構群(4)土壇	……………120	図版59	遺構外出土円盤状製品(2)	……156
図版32	配石遺構群(5)	……………120	図版60	遺構外出土円盤状製品(3)	…………… 157
図版33	Ch 12-2・3土壇、平断面図及び出土土器	……121	図版61	遺構外出土石器実測図(1)	…………… 159
図版34	Ci 12-3配石、Ch 09-2土壇平断面図	……122	図版62	遺構外出土石器、出土石器実測図(2)	……160
図版35	Ci 15-4、Ci 12-1・2土壇平断面図及び出土遺物	……123	図版63	遺構外出土石器実測図(3)	……………161
図版36	Ci 15-1・2・3土壇、Ci 15-5配石遺構 平断面図及び出土遺物	……………124	図版64	遺構外出土石器実測図(4)	……………162
図版37	Ch 12列石遺構	……………125	図版65	遺構外出土石器実測図(5)	……………163
図版38	Cj 12-4、Cj 15土壇平断面図	・127	図版66	遺構外出土古銭	……………164
図版39	Cj 12-1・2・3・5配石及び土壇平断面図	・128			
図版40	Ci 06-1・2、Ci 06土壇平断面図	・129			
図版41	配石遺構群(7)土壇	……………130			

【下村B遺跡 付図目次】

付図1	下村B遺跡遺構配置図	……………
付図2	C・D区土壇配置図	……………
付図3	C・D区配石遺構全体図	……………
付図4	C・D区土壇全体図	……………

写 真 目 次

【上村遺跡】

写真図版 1	上村遺跡全景	177
写真図版 2	Cd 65住居址	178
写真図版 3	Ce 68住居址	179
写真図版 4	Cf 68住居址	180
写真図版 5	Cb 71、Dc 71竪穴状遺構	181
写真図版 6	Dc 03住居址	182
写真図版 7	Df 03住居址	183
写真図版 8	Be 62土坛、Cf65土器埋設土坛	184
写真図版 9	C区遺物出土状況	185
写真図版10	Cd 65住居址出土土器	186
写真図版11	Ce 68住居址出土土器	187
写真図版12	Ce 68住居址出土土器	188
写真図版13	Ce 68、Cf68住居址出土土器	189
写真図版14	Dc 03住、Db 71竪穴状遺構出土土器	190
写真図版15	Df 03住居址出土土器	191
写真図版16	遺構外出土土器(1)	192
写真図版17	遺構外出土土器(2)	193
写真図版18	遺構外出土土器(3)	194
写真図版19	遺構外出土土器(4)	195
写真図版20	遺構外出土土器(5)	196
写真図版21	遺構外出土土器(6)	197
写真図版22	遺構外出土土器(7)	198
写真図版23	遺構外出土土器(8)	199
写真図版24	遺構外出土土器(9)	200
写真図版25	石器類(1)	201
写真図版26	石器類(2)	202

【下村A遺跡】

写真図版 1	遺跡全景	205
写真図版 2	塚全景と土層断面	206
写真図版 3	塚近景と石碑	207
写真図版 4	基本土層と土坛	208
写真図版 5	塚埋土出土遺物	209
写真図版 6	遺構外出土遺物	210

【下村B遺跡】

写真図版 1	遺跡全景	213
写真図版 2	Ah 09竪穴住居址	214
写真図版 3	Ah 12、Bd 12竪穴状遺構	215
写真図版 4	Ah 50竪穴状遺構	216
写真図版 5	Bb 03住居址	217
写真図版 6	土坛	218
写真図版 7	Bb 03-1土坛、Bb 03-2土坛	219
写真図版 8	土坛	220
写真図版 9	土坛	221
写真図版10	Bb 56配石	222
写真図版11	Be 56配石	223
写真図版12	土坛、炉址	224
写真図版13	土坛、出土遺物	225
写真図版14	配石全景	226
写真図版15	C、D区溝土層断面	227
写真図版16	C、D区配石群全景	228
写真図版17	配石	229
写真図版18	配石断面	230
写真図版19	配石と土坛	231

写真図版20	配石	232	写真図版32	配石と土壇	244
写真図版21	配石	233	写真図版33	土壇	245
写真図版22	土壇群	234	写真図版34	土器埋設遺構と土壇	246
写真図版23	Cf 09石室状遺構	235	写真図版35	配石土壇と土器埋設遺構出土土器	247
写真図版24	Cf 09石室状遺構	236	写真図版36	竪穴住居址と古銭	248
写真図版25	Cf 09石室状遺構	237	写真図版37	遺構内出土石器	249
写真図版26	土壇	238	写真図版38	遺構外出土石器(1)	250
写真図版27	土壇	239	写真図版39	遺構外出土石器(2)	251
写真図版28	土壇	240	写真図版40	遺構外出土石器(3)	252
写真図版29	土壇、出土土器	241	写真図版41	土製円盤(1)	253
写真図版30	土壇	242	写真図版42	土製円盤(2)	254
写真図版31	配石と土壇	243	写真図版43	土製円盤(3)と古銭	255

I 序 文

1. 調査に至る経過

二戸バイパスの建設は、国道4号線工事の一環であり、建設省東北地方建設局岩手工事事務所が事業主体である。

バイパス工事は昭和48年から工事施行となり、その時点で埋蔵文化財の取り扱いが県教育委員会事務局文化課と岩手工事事務所の間で開始されている。文化課は早速、48年49年に分け遺跡の分布調査を実施し、全路線内13遺跡が発掘調査の対象となった。

発掘調査は昭和49年度4月から文化課が担当し路線中央部にある上村遺跡から開始し、下村A・B遺跡、昭和50年度に下村B遺跡の第二次及び荒谷A遺跡の調査を行った。

昭和50年度長瀬地区発掘調査の経過の中で、火山灰を間層として縄文時代早期から平安時代までの文化層の堆積が約1kmに亘って続いていることが推定されたため、その確認をすべくこの区間に30mメッシュのトレンチを入れ試掘調査を行った。その結果はほぼ全面に遺構、遺物の検出が見られたが特に北端の長瀬D遺跡には土師器伴出の住居址と、縄文時代住居址、ピット類が集中していることがわかった。この結果をもとに文化課では文化庁の指導のもとに岩手工事事務所と遺跡保存を含めてその取り扱いについて協議が行われた。その結果、長瀬D遺跡は第一面については記録保存を前提とした発掘調査を行い、第二面以下は現状保存措置とすることにした。

発掘調査は昭和51年度までは文化課が担当し、52年度以降は当埋蔵文化財センターが継続し行うことになった。

昭和52年度は長瀬B、C、D遺跡と上田面遺跡の側道分を調査した。ただし長瀬C遺跡の一部は用地買収未解決のため未調査となった。

昭和53年度は上田面遺跡を継続調査した。中曽根遺跡は二戸市教育委員会で調査した。さらに12月には54年度調査予定三遺跡の範囲確認調査を、文化課、当埋蔵文化財センター、岩手工事事務所の三者で行い、その結果、調査対象面積が増加することが判明し、面積の修正を行った。

昭和54年度は大淵遺跡、上里遺跡、火行塚遺跡の調査を行った。二戸市教育委員会は中曽根遺跡を継続調査し終了している。

なお、昭和56年度に長瀬C遺跡の調査が終了し、これによってバイパス関連遺跡発掘調査は全て終了し、これらと関係する報告書は既刊のものを含めて57年度内に完了のはこびとなっている。

2. 調査方法

(1) 座標軸の設定

上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡の発掘調査において、次のように座標軸の設定を行なった。各遺跡とも調査対象区域内のバイパス中心杭の中から、基準点としてそれぞれ任意の2点を選びその一方を座標原点とした。選定した2点間を結ぶ直線と、座標原点を通りこれに直交する直線を座標軸とした。調査対象区域全体と二つの座標軸に沿って30mごとに大区画し、これらのうち南北方向の区画に対して北からA・B……のアルファベットを付した。また30mの大区画を南北方向および東西方向にそれぞれ10等分し、3m×3mのグリッドを設定した。これらのグリッドには北からa～jのアルファベットをふり、南北方向の座標軸を中心にして西方へは03・06・09……、東方へは50・53・56……のアラビア数字を付した。グリッド名は、以上のアルファベットとアラビア数字の組合せによって例えばA b 50・B a 03などのように表わした。なお各遺跡の基準点として選定したバイパスの中心杭は以下のとおりである。

- 上村遺跡 No.200+40 (座標原点)・No.200+40とこれに伴う西側の路線幅杭とを結ぶ直線に対して時計まわりに90°の方向で、No.200+40から北方15m (水平距離)の位置に設定された点、南北方向の座標軸の方位N-10°-W

- 下村A遺跡 No.214+80 (座標原点)・No.215+00 南北方向の座標軸の方位N-13°-W

- 下村B遺跡 No.237+2.697……K E 8-2 (座標原点)・No.238+00南北方向の座標軸の方位N-18°-E

(2) 粗掘り・遺構検出

粗掘りは人力によって行ない、層位ごとに遺構の有無を確認しながら遺構検出面までの土層を除去した。遺構が検出された場合には、その周辺を全面発掘し遺構の平面形の把握に努めた。検出された遺構には、その種別に関係なく次のような方法で名称を与えた。遺構と係わりのあるグリッドのうちでもっとも北西に位置しているグリッド名を付すことを原則として、例えばB b 03住居址・B e 56配石遺構などのように呼称した。

(3) 精査方法

住居址・住居址状遺構は4分法、ピット配石遺構は2分法を原則として、移植ベラおよび竹ベラを使用して遺構の精査を行なった。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を行なった。しかし遺構の中で埋土が単層で構成されているものの一部については、その性状をフィールド・ノートに記載しただけで土層断面図の作成を省略した。出土遺物の取り上げは次のように行なった。遺構内のは遺構名・出土位置・出土レベルを、また遺構外のはグリッド名あるいは地区名とともに出土層位を記入の上取り上げた。これらの出土遺物の洗浄は、発掘現場のプレハブにおいて野外作業が雨天のため中止となった際に行なった。

(4) 実測方法

上村遺跡・下村B遺跡においては、遺構が分布している区域に6m～9m間隔の遣り方を設定して実測を行なった。また下村A遺跡においては、平板測量やグリッドの基準杭にトランシットを据え基準線を起こす簡易な遣り方測量の方法を実施した。遺構の実測図は $\frac{1}{50}$ の縮尺を基本とし、炉などの特別な部分についてはその状況に応じて $\frac{1}{20}$ の縮尺とした。遺構のレベル計測は20cm間隔で行なったが、必要に応じて計測の間隔を細かくした。遺構の実測・埋土の土層注記は調査員・調査補助員が、現場で養成した実測補助員（女子作業協力員・アルバイトの高校生）の協力を得て行なった。

(5) 写真撮影

上村遺跡・下村A遺跡では、6×7cm判カメラ1台・35mm判カメラ1台を1セットとして使用したが、下村B遺跡の野外調査の際は上記のカメラのほかに4×5インチ判カメラ1台・35mm判カメラ1台を追加し各調査段階の状況を記録撮影した。写真撮影は主に四井謙吉が担当した。

(6) その他

●上村遺跡の発掘調査は、予算上の問題から一時中断せざるを得ないという事態が生じ、二次に渡る調査となった。調査班は江刺市の蔦ノ木遺跡の調査に従事した後再び上村遺跡の調査にはいった。二次調査は、バイパス工事が開始され調査の終了期限が明示されたことから、雨天時でも調査を行なわなければならないという状況になった。そのため雨天時でもシートをかけて調査できるようにという考えから、鉄パイプで遺構の周囲を覆うという方法がとられた。遺構に関する写真の中にみられる鉄パイプはこのような事情により設けられたものである。

●下村A遺跡の発掘調査では、調査区域内の遺構や遺物の分布を把握するために、2グリッドを1単位として市松模様状に粗掘りを行なった。その結果、遺構や遺物が分布する範囲は限定されたものであることが判明したため、上村遺跡や下村B遺跡のような全面発掘の方法をとらなかった。

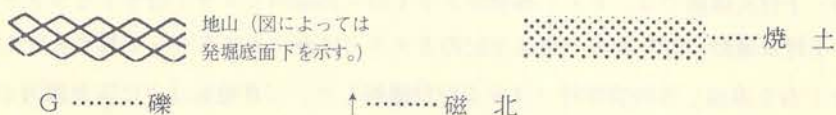
●下村B遺跡の配石遺構については、建設省岩手工事事務所との協議により工事計画を一部変更して「保存」することに決定した。以上の決定に基き調査終了後、配石遺構に伴うピットの上に浮石質の砂をかぶせその上にさらに土盛りをするという措置がとられた。

●下村B遺跡および荒谷A遺跡の発掘調査において、夏期休業の期間を利用して中村良幸氏（現岩手県大迫町教育委員会）をはじめとする明治大学文学部考古学専攻学生の諸氏に遺構精の一部や実測の仕事を手伝っていただいた。

3. 整理方法

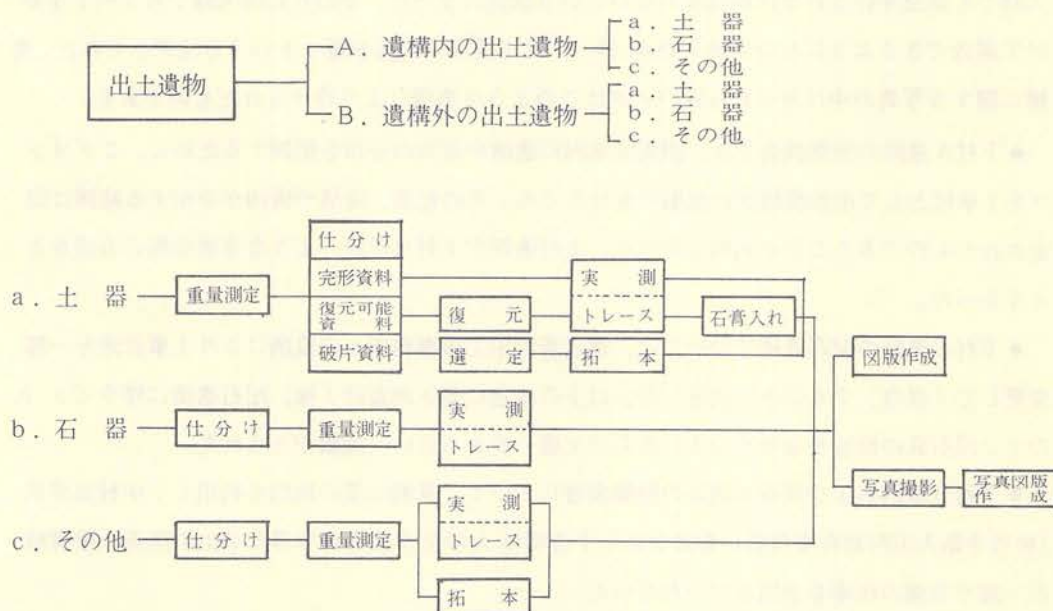
(1) 遺構図面の整理方法

野外調査で作成した遺構実測図を各遺構ごとに整理し、「図面台張」に登録した。この後報告書に使用する図面を選択しそれぞれに必要指示事項を記入の上、トレース作業の段階にまわした。トレース作業にあたっては、東北縦貫自動車道班が用いている「トレース作業の手引き」を基本とした。全遺構のトレースが完了した後図版作成を行なった。図版の作成は第21集の報告書（安代町荒谷Ⅰ遺跡などを集録したもの）を作る際に定めた「図版作成要項」にもとづいて進められた。各遺構の図の縮尺率に合わず不定となるものについてはスケールを付した。図版の中に使用されているスクリーントーンおよび記号は次のような事項を表わすものである。



(2) 遺物整理の方法

上村・下村A・B遺跡における遺物の整理方法を図式化すると次のようになる。



本報告中で図示した遺物は、原則として次の縮尺で掲載した。

土器実測図・拓影図…… $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{4}$ （通例 $\frac{1}{3}$ だが、大きさに応じて $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ の縮尺を用いたものもある。図版中に付したスケールを参照されたい。）

石器実測図…… $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$

土製品実測図…… $\frac{1}{3}$

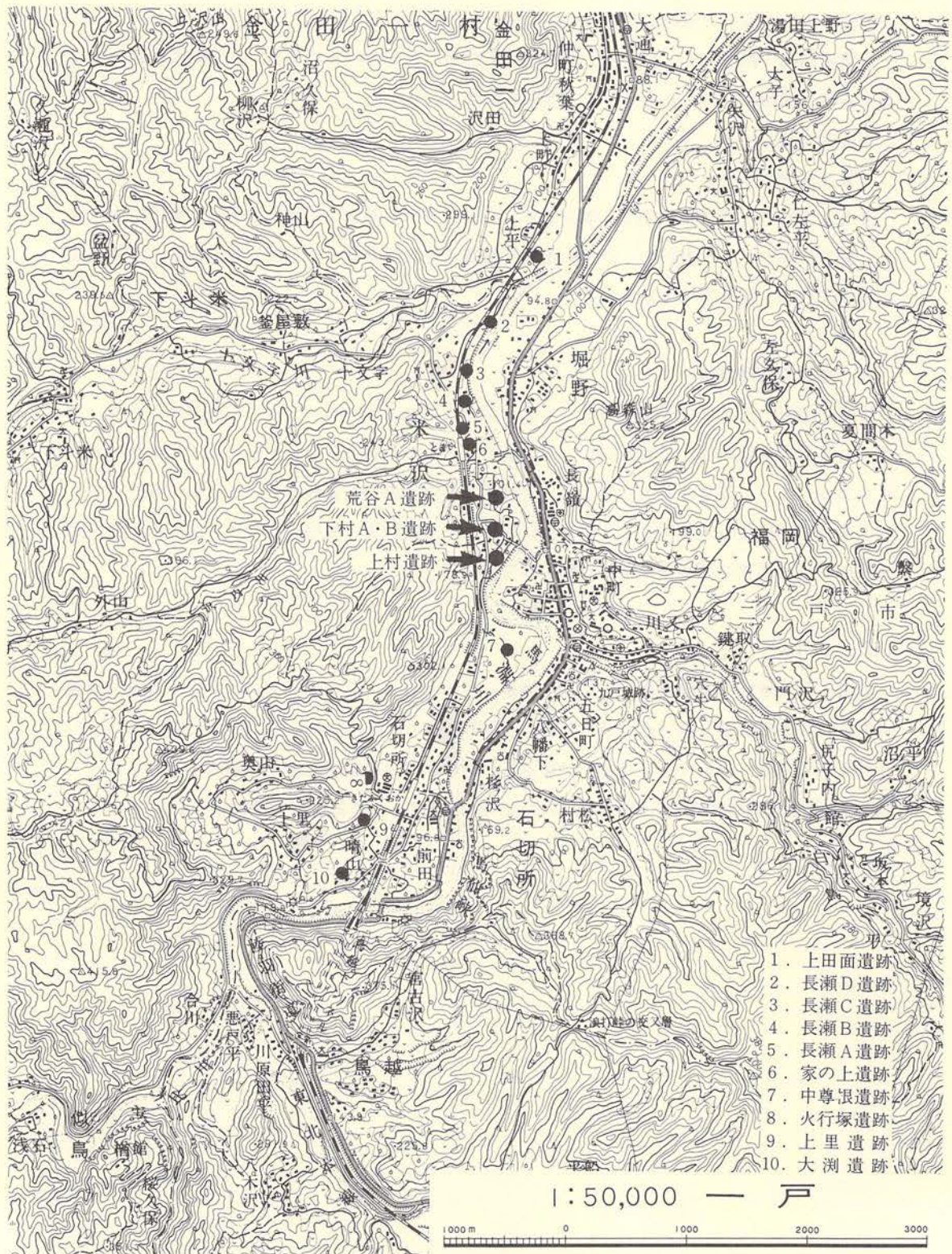
また、土器の規模については、本文中あるいは実測図の周囲に記録をした。実測図左上に付した数字は次のことを表わす。口径・底径・器高。欠失部分は——を付した。石器・土製品は一覧表に計測・観察事項をまとめた。

(3) 写真の整理方法

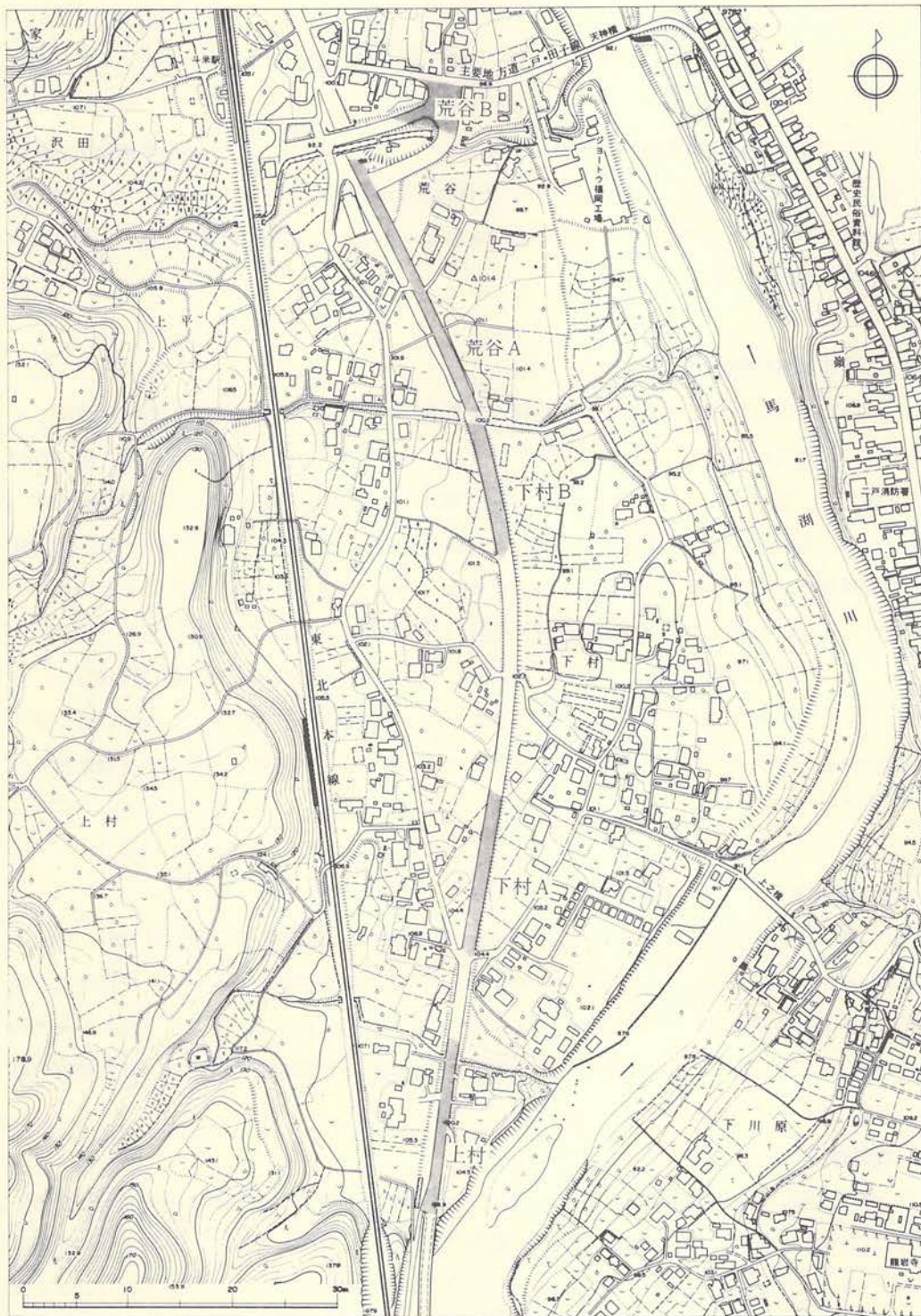
現場で撮影した写真の整理にあたってはモノクロの35mm判のネガアルバムを基本とした。整理した写真は上記のほかには35mm判カラースライド・6×7判モノクロ・4×5インチ判モノクロである。以上の写真の各カットごとにそれぞれの撮影事項を記載の上、これらを収納しているアルバム単位で目次を作成しその表紙に掲げた。写真図版に使用した写真の引伸し・焼付は当センター写真室の仕事量の関係からすべて外注にした。

(4) その他

収録した3遺跡の整理事業は昭和56年度から行われた。併せて56年度には家の上遺跡・長瀬A遺跡、長瀬B遺跡（報告済。33・36集に収録）荒谷A遺跡の整理も実施した。57年度は上村、下村A、下村B、荒谷Aの4遺跡を対象とし、図版の作成と原稿執筆を作業の中心とした。（第36集長瀬B遺跡報告書「室内整理の方法」から転載、一部鈴木が加筆修正した。）



図版 I ニ戸バイパス関連遺跡の位置図



図版II 遺跡周辺の地形図

Ⅱ 二戸地区概観

本遺跡の所在する二戸市地域の地形については二戸市で調査を行った中曾根Ⅱ遺跡の調査報告書(二戸市教育委員会 1981)の中の第Ⅱ章自然的環境(松山 力 P11~P30)に詳しく記述されているが、本報告書でも先学の成果を参考にしながら二戸市地域での地形や地質について簡単に触れておく。

1. 二戸市地域の地形面区分(図版Ⅲ)

二戸市地域は岩手郡葛巻町の多々良山付近を源流とする馬淵川が南から北に向って貫流しており、この馬淵川によって多くの段丘面が形成され、二戸市の市街地もこれらの段丘面(特に米沢段丘)に発達している。各段丘面と段丘面の間は比較的明瞭な崖線で限られる場合が多く、各段丘面とも良好な残存状態を示し安定した地形面を形成している。馬淵川流域の段丘面区分の調査研究は大池や中川らの業績(大池・中川他 1966)に負うところが大きく、その報告の中で二戸市地域には仁左平・福岡・米沢・堀野の各段丘に区分されることを記述している。その後、松山は前記の報告の中で、大池ら(1966)の米沢段丘は高位の部分と低位の部分に二分されるとして、前者は中町段丘(新称)後者を大池らの堀野段丘と包括している。ここでは大池らの区分を基本として松山の論考を加味しながら、各段丘面の概略を高位面から順次紹介していくことにする。

〔仁左平段丘〕

この段丘は仁左平付近や馬淵川の東岸川又地区の北東部付近に分布し、標高は140m~220m位である。やや起伏があり比較的強い傾斜をもっている。基盤層の上にチャートや頁岩等の中礫を主とする砂礫層があり、その上位には層厚2m位の高館火山灰と、さらに上位に1m位の八戸火山灰が堆積している。下位の福岡段丘とは30m前後の比高があり低位面とは比較的明瞭な崖線で限られている。

〔福岡段丘〕

この段丘面は、金田一・川又・五日町・米沢・上里等のほか海上川や十文字川流域に比較的広範囲に分布し、標高は110m~140mで低位面との比高は15m~20mを測り、明瞭な崖線で限られている。八戸浮石流凝灰岩に相当する火山灰流凝灰岩の堆積層によって構成されるシラス台地の性格をもっている。火山灰流凝灰岩の上位には八戸火山灰やそれより上位の浮石や火山灰が覆っている。

〔長嶺段丘〕

この段丘は長嶺地区の中で高森山（325.2m）の西麓に張りついた標高110m～120mの小規模な段丘で、松山（前掲1981）によって報告されている。低位の米沢段丘の高位面（松山の中町段丘）とは4m～6mの段丘崖で限られている。

〔米沢段丘〕

この段丘は馬淵川の両岸に広く分布する段丘で、二戸市の市街地の多くはこの面に発達している。河床面との比高は約25mで標高100m～110mのほぼ水平に近い平坦面を呈している。円磨された中礫によって構成され、その上位に南部浮石とそれより上位の浮石や火山灰をのせている。しかし、松山（1981）は、この面は標高110m前後の高位面と100m位の低位面に細分けられるとした上で、前者を中町段丘（新称）そして後者を堀野段丘に包括している。松山（1981）が中町段丘としたのは市街中心部の中町付近の面を標式とし、上平から北方の馬淵川西岸と市街地の長嶺～五日市付近の馬淵川東岸に分布している。

〔堀野段丘〕

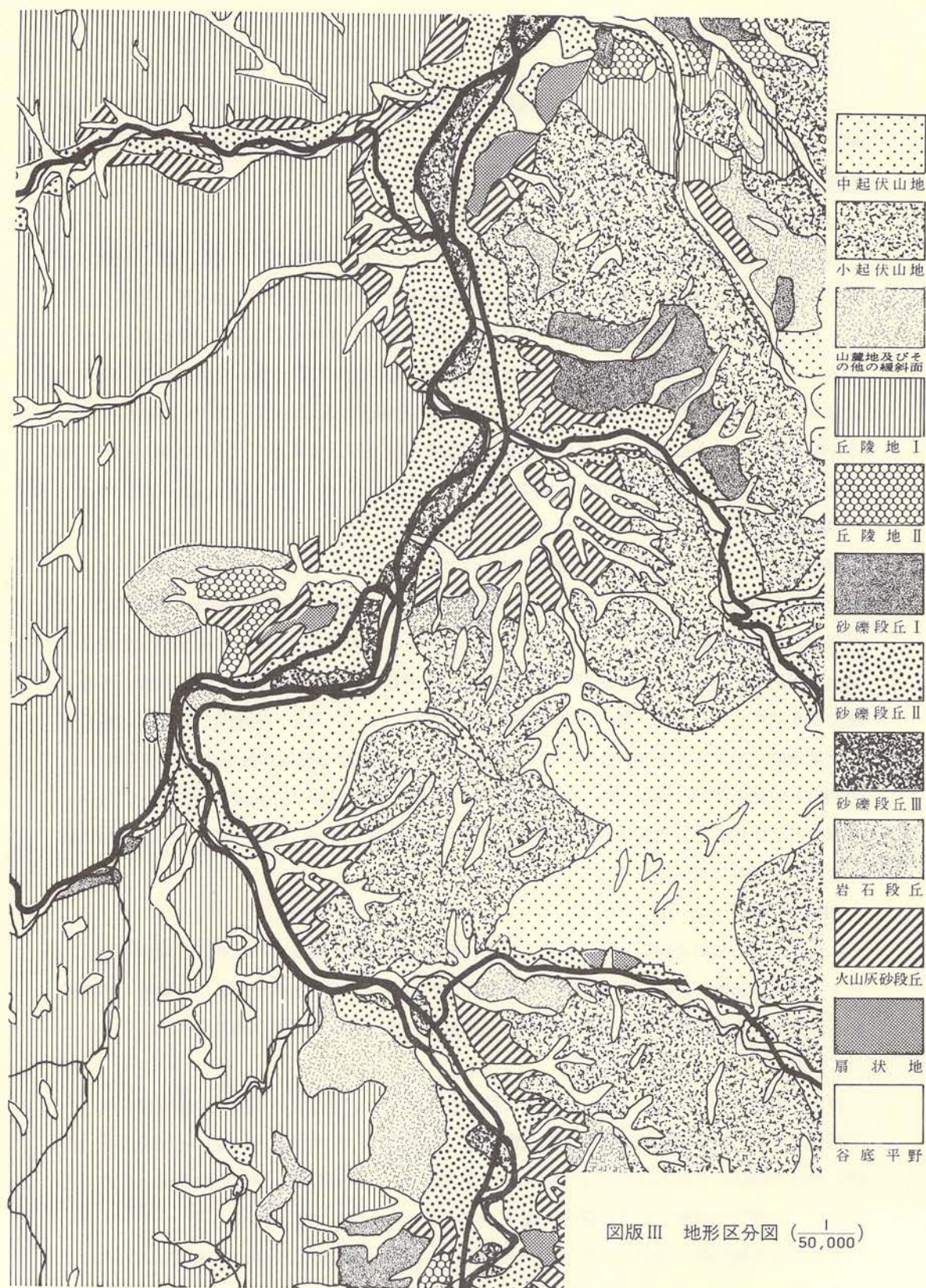
堀野段丘という名称は大池ら（1966）によって命名され、その特性は南部浮石をのせないことであると報告されている。ところが松山（前掲1981）は堀野遺跡の発掘調査（草間1965）で南部浮石の堆積が確認されているとした上で、このことは大池ら（1966）の米沢段丘の中の低位面（米沢付近）と同じ層相を呈すると判断し、大池ら（1966）の堀野段丘と米沢段丘の中の低位面を包括して、松山が新たに堀野段丘と命名している。しかし、大池ら（1966）の堀野段丘と米沢段丘では5m前後の比高があり、位置によっては明瞭な崖線が観察される部分もある。馬淵川との比高は15m位で明瞭な崖線で限られている。分布範囲は、大池ら（1966）は金田一や堀野付近を標式とし馬淵川両岸に細長く分布するとしているが、松山（1981）は馬淵川西岸と金田一や堀野付近に分ずるとしている。

〔中曽根段丘〕

この段丘は白鳥川河口の対岸中曽根Ⅰ遺跡付近とこれに続く東岸にみられる小規模な段丘である。標高は96m～100m位で高位の堀野段丘とは2m～3mの比高がある。砂礫層と中礫浮石を含む黒色土の堆積が観察されるが南部浮石を欠いている。段丘面は傾斜をもっている。

以上、大池の論考を中心にして、松山の区分と対比させながら二戸市地域の段丘区分について紹介したが、これらの段丘面の中で洪積段丘といえるのは仁左平段丘（中位）と福岡段丘（低位）だけで他はいずれも沖積段丘であるという。馬淵川と福岡段丘との比高は約50mもの大差があり、馬淵川の浸蝕したその営力の強大さというものを感じさせられる。

このような地形面の中で、二戸バイパス路線に直接関わりのある段丘は福岡段丘と大池の米



図版 III 地形区分図 (1/50,000)

沢段丘であり、関連する遺跡は兩段丘ともに立地している。例えば、福岡段丘には上里と火行塚の各遺跡が、そして米沢段丘（松山の堀野段丘の一部）には大淵・上村・下村A・下村B・荒谷A・荒谷B・家の上・長瀬A～D・上田面の各遺跡が立地している。

引用文献

- (1) 松山力 1981「第2章自然的環境」『中曾根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会
- (2) 大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米倉伸之 1966「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究vol.5 No.1』
- (3) 草間俊一 1965「岩手県福岡町堀野遺跡」福岡町教育委員会

2. 遺跡群の環境

岩手県の西には奥羽山脈が、東には北上山地がそれぞれ南北に連なっており、県の南半ではその二つの山脈の間を北上川が南流し、広い谷底平野を形成している。これに対して、県の北半では馬淵川が二つの山脈の間を北流しているものの、谷底平野の発達は不良で、河口の八戸に至るまで、狭い河岸段丘と深い侵蝕谷が続いている。そのような状況の中で延長142kmの馬淵川の河口から約40km上流の比較的広い数段の河岸段丘上に立地し、県北内陸部最大の市街地を形成しているのが二戸市である。二戸市のある低地に向って裾野を引く山々の中にあっては、東方の折爪岳（標高852m）が最も目立つ山となっている。標高で優る南方の西岳（標高1,018m）、稲庭岳（標高1,078m）、さらに、西方の十和田湖に続く奥羽の山々も、20km以上の傾斜面を延ばしてはいるものの、間近に迫る200m～300mの丘陵の背後に隠れているため、その存在を感ずることは極めて難しい。

二戸市の一つ南の一戸町を過ぎた馬淵川は、鳥越の峡谷で安比川を合流させて東へ屈折し、馬仙峽の崖裾を洗って北へ流れを変え、白鳥川・沢内川・十字字川等の小河川を合わせつつ、大きく蛇行しながら北流を続け、金田一の東方で北西に屈折して間もなく、再び峡谷に入る。この間、直線で凡そ8kmの流路の両側に四つの段丘面が形成（大池ら1966）されている。段丘としては低位から高位へ、堀野段丘・米沢段丘・福岡段丘・仁左平段丘と呼ばれているものがあるし（図版4、地形面区分図を参照のこと砂礫段丘Ⅰ＝仁左平段丘、火山灰砂台地＝福岡段丘、砂礫段丘Ⅱ＝米沢段丘、砂礫段丘Ⅲ＝堀野段丘）。馬淵川の両岸に接して最も広く分布するのは米沢段丘面である。また、北流する馬淵川が西よりに蛇行する部分では右岸に、東よりに蛇行する部分では左岸に、最下位の段丘である堀野段丘が発達している。米沢段丘は他の面に比較して広いとはいえ、絶対的には狭い河岸段丘の僅かな平地を、人間は各時代を通じて活用せざるをえず、結果的にいわゆる複合遺跡が形成され易い。二戸バイパスに関連して次の14遺跡が調査されたが、その大部分は複合遺跡であった。

大淵遺跡（縄文・弥生・古代・中世・近世）　上里遺跡（縄文・古代・中世）
火行塚遺跡（縄文・弥生・古代）　中曽根遺跡（縄文・古代）　上村遺跡（縄文）
下村A遺跡（時期不明）　下村B遺跡（縄文・中世）　荒谷A遺跡（縄文・古代）
家の上遺跡（縄文・古代・中世）　長瀬A・B遺跡（縄文・古代）
長瀬C・D遺跡（縄文・古代・中世）　上田面遺跡（縄文・古代）

なお、石切所地内の上里・火行塚の二遺跡が福岡段丘上に立地しているが、他はすべて米沢段丘面上に営まれている。ただし、中曽根遺跡付近の区分については若干の疑問が提出されている（関1978）。

各段丘面上の堆積物としては、十和田起源の火山噴出物が大部分を占めており、それらの層序や噴出年代についての地質学的研究の成果は、発掘調査の際の極めて有効な手掛りとなっている。調査段階で担当者がよく観察した土層の基本的層序は次のようになる。

- I 表土層。火山灰起源のためか、極めて軽い。いわゆる「くろぼく」である。
- II 「十和田 a 降下火山灰層」。灰白色から淡黄褐色の極めて微粒の火山灰層。広範囲に連続堆積していることは余りないようで、ロクロ使用以前の土師器を出土する竪穴住居址の埋土中に、レンズ状に弓なりに堆積している点が極めて印象的である。ロクロ使用土師器を出土する竪穴住居址の場合は、単一の層を形成することなく、埋土中に塊状をなして混入する。堀野遺跡の調査（草間1965）で報告され、後に地質学の方から十和田 a 降下火山灰とされたのは、この層である。
- III 黒色砂質土層。黒色砂層と呼んでも良い程、真黒で少しザラザラした感じの土である。良く観察すると、直径 2mm～3mm の断面白色の小石が含まれている。これは発泡の良くない軽石である。
- IV 「中振浮石層」。上部は黒褐色で中部では黄褐色。下部ではしばしば淡黄色の全く粘性のない土層で、地元では「あわずな」と呼んでいる。浮石とはいうものの二戸市付近では正しく砂に近い細粒状をなしている。
- V 黒色砂質シルト。旧表土とおもわれる土で、極めて黒くまた少し粘性があり、中に下位の V 層起源の浮石を含んでいる。
- VI 「南部浮石層」。湿っている時は黄橙色、乾燥すると黄白色を呈する粒粘の浮石で、空隙部が目立つ層である。地元では「ごろた」と呼んでいる。
- VII 「八戸火山灰層ないし八戸浮石層」。白色ないし灰白色の火山灰層で、米沢段丘の基盤をなしている様子が、馬淵川の崖でよく観察される。長瀬 B 遺跡南端でのボーリングの結果では、地表下 1.5m から 38.5m 位まで 7m 近く堆積している。

I 層、III 層、V 層、VII 層の噴出年代についての地質学の成果は、次のとおりである。（大池

1972) I層1000年B.P.、III層4000年B.P.、V層8000年B.P.、VI層13000年B.P.、これらの層序と遺構・遺物との関係は次のようである。

I層は前述のとおり、古代の遺構と深く関わっており、この地域での竪穴住居址の検出の目安となることが古くから指摘されている(草間1965)。II層は古代の地表であったとおもわれるが、埋土との区別がつきにくいいため、掘り込み面を確認することは極めて難しい。III層は、古代の竪穴住居址に限らず、縄文中期以降の竪穴住居址等の壁面として一般的に観察される土層であり、この土層中において大部分の遺構の輪郭が明瞭に把握される。ただし、上部の暗色部以外では遺物を包含しないようである。IV層は上部が縄文早期末から前期初頭の遺構や遺物を包蔵し、下部では早期後半の遺物を含んでいる(高橋1979)。V層には全く遺物を包含しないが古代の竪穴住居址では大部分、より古い竪穴住居址でもしばしば、床面としているのはこの層である。VI層上面には縄文早期の竪穴住居址が存在し、貝殻文土器群の包含層があることが、長瀬B遺跡(四井1982)の調査で確認されている。また、縄文時代の「陥し穴状遺構」の底部は、VI層中まで掘り下げられている。

段丘面上には、前述の遺跡以外にも多数の遺跡がある。中でも堀野遺跡は古代集落址として良く知られており、復元家屋1棟が展示されている。なお同遺跡の北東2kmの小高い丘陵(仁左平段丘)上の地名「仁左平」は、日本後紀弘仁2年の文屋綿麻呂の記事にある「爾薩体」と無縁ではあるまい。さらに、堀野遺跡および「仁左平」と同じ右岸に、国指定史跡の九戸城跡も立地する。

参考文献

- 関 豊 1978『二戸市中曾根I遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会
松山力 1981「第2章自然的環境」『中曾根II遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会
大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米倉伸之 1966「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究vol5No1』
大池昭二 1972「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四期研究vol11No4』
草間俊一 1965『岩手県福岡堀野遺跡』福岡町教育委員会
高橋与右エ門 1979「二戸市沢内B遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集』(財)岩手県埋蔵文化財センター

3. 二戸市の遺跡（図版Ⅵ表1～3）

二戸市内に所在する遺跡は昭和57年12月31日現在で123ヶ所が知られている（県教委文化課の遺跡登録台帳による）。これらの遺跡名と性格等は第1表に、時代別の集計は第2表、縄文時代の遺跡では時期別の遺跡数を第3表に示しておいたが、登録遺跡数と時代別遺跡数や時期別遺跡数とが合致しないのは、1時代1遺跡、1時期1遺跡として第2表と第3表を作成したからである。

第2表でもっとも目につくのは、総遺跡数の50%強の79遺跡で縄文土器が採集されていることで、堀野遺跡に代表される古代は17.4%の26遺跡である。また、二戸市地域は日本中世史を締め括った九戸政実の乱の合戦が行われた所でもあり、それを反映してか、中世と目される城館跡が20.13%の29ヶ所も在る。その他の弥生時代は2.08%の3遺跡、特殊な遺跡ととして経塚が0.69%の1遺跡の構成比率である。また、遺跡の種別として散布地と登録された遺跡の中に、時代・時期ともに不明という遺跡が4.9%の7遺跡あり、今後の分布調査で確認していく必要があるものと考えられる。

では、次に時代別にみてみよう。まず縄文時代の遺跡であるが、92遺跡を時期別に分類したのが第3表である。この時代の遺跡でもっとも多いのは晩期の遺跡で25%の23遺跡が担当する。岩手県内の縄文時代遺跡の中でもっとも多いとされる中期が13.00%の12遺跡と少いのと、対照的である。そのほか後期が15.21%で14遺跡、早期が4.34%の4遺跡、前期が6.52%の6遺跡でそれぞれ構成されている。しかし、縄文時代とされている遺跡の中に、時期不明として明示していない遺跡が35.86%の33遺跡があり、今後これらの遺跡の時期が確定されることによってこの構成比率に異動があることは勿論のこと、この比率がそのままこの地域の実態と考えるのは早計であり、今後の分布調査によって新しい遺跡が発見されていくことによっても、構成比率に異動がでるものと思う。

古代の遺跡が25遺跡あるわけであるが、その中の14遺跡は馬淵川本流の両岸に立地し、残る11遺跡が支流で発見されている。土師器が採集されたとは記載されているが、奈良時代なのか平安時代なのか明示していないの多いが、中に前期土師器が採集されたことを記録しているものもあることから、奈良時代の遺跡も含まれているであろう。現在までの調査成果からいうと、平安時代の遺跡より奈良時代の遺跡が多いことからみると、時代によって集落立地が違う可能性がある。少なくとも、米沢面や堀野面でのこの時代の遺跡は奈良時代に相当する場合は圧倒的に多いことは事実である。これは弘仁二年の爾薩体の賊の征伐に関連するものでもあろうか。

中世の遺跡のとしてもっとも多いのは城館跡で、29ヶ所が登録されている。この地域は先にも記したように、九戸政実が本拠を置いた所でもあり、その城が現在九戸城跡として国の史跡

指定を受けている。各支流域にも多くの城館跡が存在することは集落の発生とは無縁ではあるまい。これらの支流域奥深くにも相当早い時期から集落が形成され、その結果が九戸政実の底力ともなったのであろう。

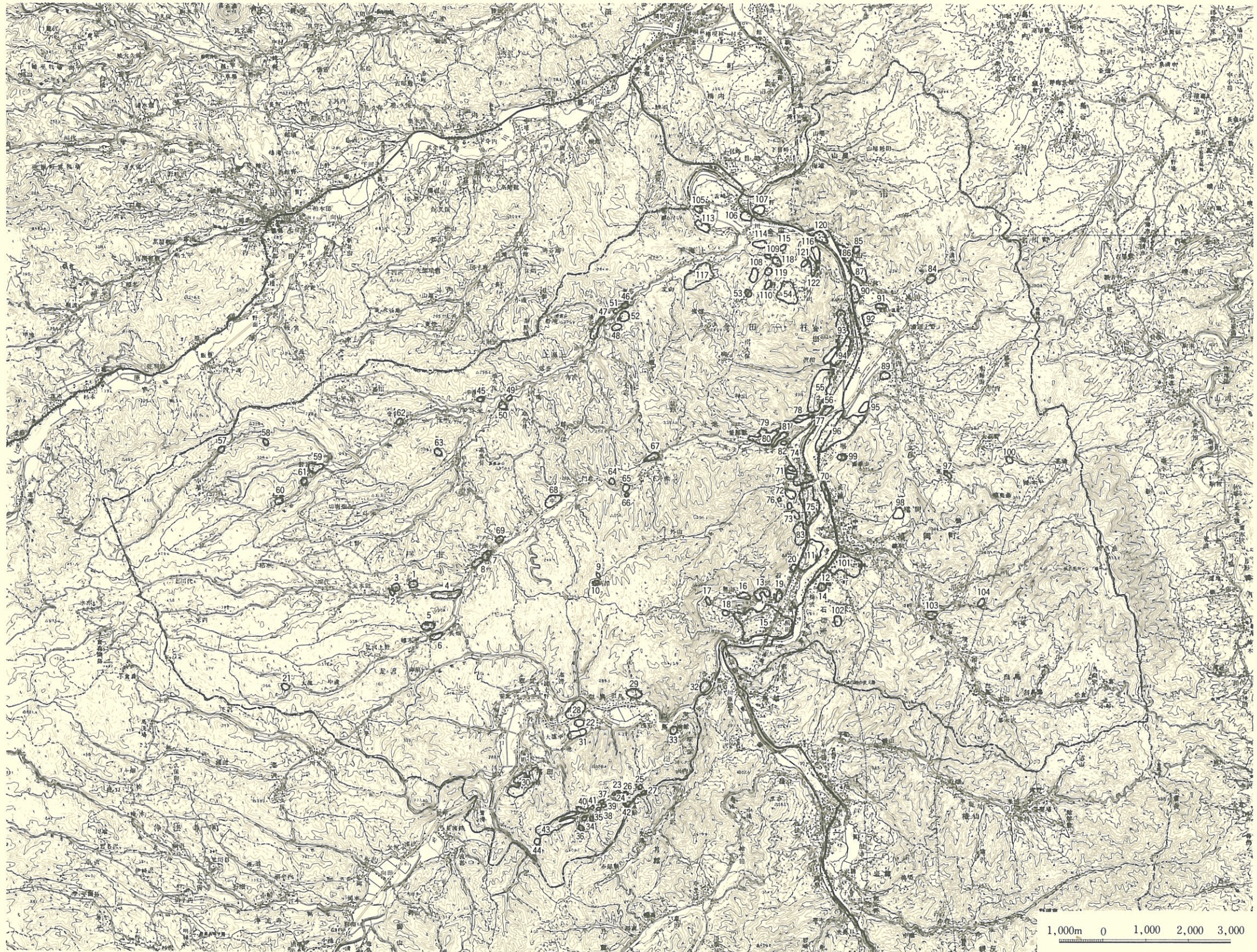
以上の遺跡をさらに流域別にみてみよう。二戸市内の河川をみると、馬淵川とその支流があり、遺跡は主にそれらの流域で発見されている。これはまた、その範囲が現在我々の手によって再発見されていることを表してもいる。地形と環境の項でも記したように、二戸市域はこれらの河川によって形成された河岸段丘が平坦地として観察される以外は、起伏の大きい地形を形成し、遺跡立地としての好条件とは必ずしも言えない。現在の集落立地をみてもそのほとんどは河岸段丘に立地し、流路に沿うように点在している。まず、支流からみると、もっとも南にある安比川流域では22遺跡が知られている。これらはさらに、安比川本流7遺跡・支流15遺跡になる。時代別にみると、18遺跡が縄文時代で、その他古代2遺跡、城館跡2遺跡である。沢内川流域では2遺跡が知られているが、いずれも縄文時代である。十文字川流域では19遺跡の存在が知られている。特期別にみると縄文6遺跡、古代6遺跡、城館跡7遺跡である。この流域には、現在も多くの集落が立地していることから、古い時代から集落が発達したことによって城館が多いものとおもわれる。海上川流域では16遺跡の所在が確認され、縄文11遺跡、城館跡5遺跡が含まれている。白鳥川流域では2遺跡と少く、それには弥生時代1遺跡、城館跡1遺跡1遺跡がある。馬淵川本流域には67遺跡と非常に多くの遺跡があり、特に馬淵川左岸に多く所在し、段丘面では米沢段丘と堀野段丘、福岡段丘に多く立地している。遺跡の時代や時期が単一という例はほとんどなく、いずれも複合遺跡で、特に古代と縄文時代の遺跡が複合している場合が多い。古代の中では前期土師器を出土するという遺跡が多い。

以上、二戸市の遺跡を時代・時期別にそして流域別にその分布状況を見てきたわけであるが、これらの遺跡に対する発掘調査の経過・歴史もたどっておく必要がある。

二戸市内の遺跡を最初に発掘調査したのは小田島禄郎氏であろう。氏は大正13年に発表した書の中で、今だに完全に埋没しきらない竪穴住居が県北部に多数存在することを報告し、17遺跡群^①を紹介している。その中で当二戸市に関連する遺跡が4ヶ所含まれている。その遺跡は①上斗米字立富144-2に30棟（立富竪穴群）、②上斗米字立富144-11に29棟（外中沢竪穴群）、③下斗米字寺久保に8棟（寺久保竪穴群）であり、その他に爾薩体字浅内にもあるとしている。これらの中から各遺跡とも何棟かずつを発掘している。調査結果の詳細は報文にゆずるとして、これらの遺跡は奈良時代の遺跡で、いずれも白砂（十和田a降下火山灰とおもう）が堆積していることを述べている。その後、戦前はしばらく発掘調査はなかったらしい。戦後になると、昭和27年に金田一字舌崎で偶然発見された配石遺構が岩手大学の草間俊一氏（現盛岡短大長）によって調査され、翌28年には明治大学の芹沢長介氏（現東北大学）が金田一の雨滝遺跡を調^②

③

査している。舌崎の配石遺構を調査した草間俊一氏は、その時に爾薩体堀野にも配石群が存在することを知り、昭和28年にこの配石群を調査し、配石遺構とともに堅穴住居も1棟調査している。その結果、この住居跡は7世紀末～8世紀頃に位置づけられることを報告している。昭和30年に上斗米字小端の小端遺跡で道路工事中に炉跡（図では石囲い炉）が発見され、翌31年には上斗米字子子沢の子子沢遺跡で、水田工事中に多くの土器・石器が出土したことを、亀沢 馨氏が岩手史学研究に報告している。続いて同氏は同じ岩手史学研究No29誌上に「福岡町の金田一川遺跡」という報告文を発表し、上斗米字金田一川の金田一川遺跡で人骨の入った縄文晩期終末の合口甕棺が発見されたことを報告した。昭和28年に天滝遺跡を調査した芹沢長介氏は昭和35年に再度この遺跡を調査し、氏はこの時の層的事実にもとづいて天滝式を提唱し、山内清夫氏の大洞式土器の年の中でB式とBC式は同時存在する土器であることを発表した。その後、昭和36年には県民待望の岩手県史第1巻が刊行され、小岩未治氏が考古学関係を担当し、それまでの研究成果を集大成した。県史の中で二戸市関係の遺跡に直接触れているのは少ないが、その中で二戸市に29遺跡が存在することを記述しているし、特に本書で報告する上里遺跡は縄文前期～晩期（実際は縄文早期～中世）までの土器が出土することを述べている。その他、弥生時代の土器が、金田一川遺跡、矢沢遺跡、足沢遺跡、月折遺跡等から出土していることを紹介している。一方、草間俊一氏は和年37・38・39年と3ヶ年間堀野遺跡を発掘調査し、この遺跡の性格を明らかにし、昭和28年調査の分も含めて、昭和40年に「岩手県福岡町堀野遺跡」として報告書を刊行している。それによれば、本遺跡は縄文時代（後期か？）の配石遺構と古代（奈良）の集落、そして石室を伴う古墳等の複合した大集落遺跡であるとしている。現在、この時調査された住居跡が復元されて展示に供されている。其の後はしばらく発掘調査や考古学的な発展もなく過ぎたが、昭和40年代後半になると、国道4号線二戸バイパスやそれに伴う県道の一部改修工事が計画された。地形の項でも詳述したように、二戸市は馬淵川の両岸に細長く続く段上に市街地が立地し、同じ面に遺跡もまた多く立地している。結果的にバイパス路線が遺跡の上を通ることになり、建設工事に関連する記録保存のための緊急調査が昭和49年より開始され、昭和56年まで続けられている。終了後引き続き国道4号線金田一バイパスに関連する遺跡も昭和56・57年に調査している。その間に調査された遺跡は20遺跡であり、時代的には縄文時代早期から近世に至る非常に多くの遺構や遺物が発見されている。例えば、長瀬B遺跡の縄文早期の集落と共伴土器（寺八沢式）、上里遺跡と沢内遺跡の縄文前期初頭の土器群、上里遺跡の縄文前期の人骨7体出土、荒谷A遺跡の縄文中期の大型住居跡、下村B遺跡の配石群、大淵遺跡の弥生時代住居跡、中曾根遺跡・長瀬遺跡群と上田面遺跡の奈良時代の集落（住居跡が合計約200棟）等々、枚挙にいとまがない。このような調査結果は岩手県北のみならず、また、岩手県に止まらず、「みちのく」の歴史解明のための資料として集大成されて行



くものと確信している。

以上簡単ではあるが、二戸市の遺跡とその分布、傾向、調査研究史を振り返って本項の終りとしたい。

参考文献

- ① 小田島祿郎 「県下における竪穴及び「チャシ」に関するもの其1」『史跡名勝天然記念物調査報告 第4号』岩手県 大正13年
- ② 草間俊一 「岩手県福岡町堀野遺跡」福岡町教育委員会 昭和40年
- ③ 芹沢長介 「石器時代の日本」築地書館 昭和35年
- ④ 前記②に同じ
- ⑤ 亀沢 馨 「福岡町上斗米の子子沢遺跡と小端遺跡」『岩手史学研究No23』岩手史学会 昭和31年
- ⑥ 亀沢 馨 「福岡町の金田一川遺跡」『岩手史学研究No29』岩手史学会 昭和33年
- ⑦ 前記③に同じ
- ⑧ 小岩末治 「上古篇」『岩手県史第1巻』岩手県 昭和33年
- ⑨ 前記②に同じ

第1表 周辺の遺跡 ①

遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考	
1	J E-07-0291	米田	散布地	上斗米字米田	土器、縄文晩期、土師	
2	J E-07-1116	本田	散布地	〃 字本田	土器、縄文晩期、石器	
3	J E-07-1106	木田	館城館跡	〃 〃	居館	
4	J E-07-1228	米田	館	〃 〃 字米田	〃	
5	J E-07-1296	足沢	館	〃 〃 字足沢	〃	
6	J E-07-2226	足沢古	館	〃 〃 字長畑	〃	
7	J E-07-0328	上斗米	館	〃 〃 字前田	縄文中期土器	
8	J E-07-0355	前田	館	〃 〃 〃	〃	
9	J F-08-0274	野新田 A	散布地	上斗米野新田	土師器	
10	J F-08-0294	野新田 B	散布地	〃 〃 〃	土器、縄文晩期、注口土器、石器、土偶	
11	J F-09-0314	中曾根	集落跡	石切所字中曾根	土器、縄文中期	
12	J E-09-0356	橋場	散布地	石切所字橋場	縄文晩期土器	
13	J E-09-1202	火行塚	集落跡	〃 字火行塚	〃	
14	J E-09-0396	八幡下	散布地	〃 字八幡下	縄文土器、土師器	
15	J E-09-1273	上里遺跡群	集落跡	〃 字上里遺跡群	〃	
16	J E-09-1126	横長根	散布地	〃 字横長根	〃	
17	J E-09-1130	土川 I	〃	〃 字土川	〃	
18	J E-09-1164	土川 II	〃	〃 字土川	〃	
19	J E-09-1216	森合	〃	〃 字森合	土器、縄文	
20	J E-09-0259	大村	〃	〃 字大村下平	土師器	
21	J E-16-0341	大渡	集落跡	大字足沢字大渡	土器、縄文中期	
22	J E-8-1210	大向 I	〃	似鳥字大向	〃	
23	J E-18-2289	馬立 I	散布地	福田字	土器、縄文後期	
24	J E-18-2298	馬立 II	〃	〃	〃	
25	J E-18-2375	鳥越久保	〃	〃	土器、縄文後期	
26	J E-18-2381	馬立 III	〃	〃	土器、前期土師、晩期縄文	
27	J E-18-2386	八前	散布地	福田字	〃	
28	J E-18-0199	大向上平	集落跡	似鳥字大向上平		範囲がかなり拡大する可能性あり
29	J E-18-0153	似鳥	館跡	〃 字寺上	土師器	
30	J E-18-2057	福田	館	〃 福田字館	縄文土器	
31	J E-18-1049	大向 II	集落跡	似鳥字大向	〃	
32	J E-19-0130	合川	散布地	〃 字合川	縄文土器 (中期)	
33	J E-19-1022	樽	館跡	〃 字樽	〃	
34	J E-28-0241	日影久保	散布地	福田字日影久保	〃	
35	J E-28-0243	梶久保	〃	〃 字梶久保	〃	
36	J E-28-0261	七百久保	〃	〃 字七百久保	土器、縄文中後期	
37	J E-28-0206	大倉 II	〃	〃 字大倉	〃 縄文	
38	J E-28-0215	野場塚 I	〃	〃 字野場塚	土器、縄文	
39	J E-28-0216	野場塚 II	〃	〃	〃 縄文後期	
40	J E-28-0226	福田久保	〃	〃 字福田久保	〃 縄文	
41	J E-28-0223	大倉 I	〃	〃 字大倉	〃 縄文	
42	J E-28-0302	笹森	〃	〃 字笹森	〃 縄文前～後期	
43	J E-28-0154	仲口	集落跡	〃 字仲口、橋助久保、橋久保	〃 土器、縄文後期、土師器	
44	J E-28-1100	大久保	〃	〃 字大久保	縄文 (晩) 土器	
45	I E-87-2386	谷地尻	散布地	下斗米字谷地尻	土器、晩期	
46	I E-88-0259	荒谷	散布地	野々上字荒谷	土器、縄文、石皿、石棒	
47	I E-88-1203	濃谷地	散布地	〃 字濃谷地	弥生式土器、縄文晩期	
48	I E-88-1208	月折	散布地	〃 字月折	縄文土器、石棒、土偶	壊滅
49	I E-88-2062	牛間木	散布地	下斗米字牛間木	土器、縄文晩期、矢ノ根	
50	I E-88-2081	牛間木	集落跡	〃 〃	〃	
51	I E-88-0258	荒谷	館跡	野々上字荒谷	〃	壊滅
52	I E-88-0279	月折	館	〃 字月折	縄文土器、石鏡	
53	I E-89-0118	上ノ沢 I	散布地	野々上字上ノ沢	〃	
54	I E-89-0227	上ノ沢 II	散布地	野々上字上ノ沢	〃	
55	I E-89-2346	上町	集落跡	金田一字上町上平	土師器	
56	I E-89-2387	上田面	集落跡	〃 字上田面	土器、縄文後晩期	
57	I E-96-0185	小端	散布地	上斗米字小端	土器、縄文後、石器、燧跡	
58	I E-96-0276	子子沢	散布地	上斗米字野月平	〃	
59	I E-96-1337	根森	館跡	〃 〃	土器、縄文、石鏡	
60	I E-96-2219	根森	散布地	〃 字根森	〃	
61	I E-96-1365	根森松屋敷	館跡	〃 〃	土器、縄文晩期、注口土偶、土板	
62	I E-97-0127	金田一川	散布地	上斗米字金田一川	〃	
63	I E-97-0296	外中沢	集落跡	下斗米字中外沢	〃	
64	I E-98-1268	蝦夷森	集落跡	下斗米字寺久保	土師器局触した鉄器	
65	I E-98-1370	下斗米 A	散布地	〃 〃	〃	

第1表 周辺の遺跡 ②

遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考	
66	I E-98-1380	下斗米 B	散布地	下斗米寺久保	縄文土器	
67	I E-98-0397	下斗米 館	跡	〃		
68	I E-98-2103	田中 館	〃	上斗内字田中		
69	I E-98-2091	上斗米古 館	〃	〃 字梅木		
70	I E-99-1377	長 嶺	散布地	福岡字長嶺	縄文土器、矢ノ根	
71	I E-99-1249	佐々木 館	城館跡	米沢字家の上	居館、土器、縄文土師	
72	I E-99-1289	上平 I	散布地	米沢字上平	土器、縄文土師	
73	I E-99-2330	上平 IV	集落跡	〃	土器、縄文土師	
74	I E-99-0390	米沢遺跡群	〃	米沢字下平長瀬家の上	土師器、縄文土器	
75	I E-99-1393	下村遺跡群	〃	〃 字下村、上村	土師器、縄文土器	
76	I E-99-2207	上平 II	散布地	〃 字上平	縄文土器	
77	I E-99-0305	上平 経塚	塚	金田一字上平		
78	I E-99-0312	海蛇田	散布地	〃 字海蛇田	縄文土器、土師器	
79	I E-99-0242	十文字 I	散布地	下斗米字十文字	縄文土器、土師器	
80	I E-99-0263	十文字 II	散布地	下斗米字十文字	縄文土器、土師器	
81	I E-99-0266	細越	散布地	下斗米字細越	縄文土器	
82	I E-99-0277	十文字 III	〃	〃 字十文字	土師器	
83	I E-99-2372	円 館	跡	米沢字上村		
84	I E-70-2281	天 狗	散布地	金田一字天狗	縄文晩期土器	壊滅
85	I E-70-2084	下山井 館	跡	〃 字下山井		
86	I E-70-2021	下山井	散布地	〃		
87	I E-70-2074	段ノ越	〃	〃 字段ノ越		
88	I F-80-1041	館	散布地	金田一字館	縄文土器、土師	
89	I F-80-2110	戸 花	散布地	仁左平字戸花	土器、縄文晩期	
90	I F-80-0024	駒 燒	集落跡	金田一字駒燒場	土師器、須恵器	
91	I F-80-0150	大 釜	散布地	〃 字大釜	縄文土器	
92	I F-80-0086	馬 場	〃	〃 字馬場	〃	
93	I F-80-1011	秋 葉	〃	〃 字仲町秋葉		
94	I F-80-1061	四 戸 城	館 跡	〃		
95	I F-80-2076	大川原毛	散布地	堀野字大川原毛		
96	I F-90-0000	堀野遺跡群	集落跡・祭祀跡	堀野字長地	土器、縄文	
97	I F-90-1230	夏 間 木	散布地	福岡字夏間木	土器、縄文後晩期、注口、土板、土偶	
98	I F-90-2134	横 山	〃	〃 字横山	土器、縄文晩期、注口、土偶	
99	I F-90-0091	堀野 館	跡	堀野字小四郎館		
100	I F-91-0091	大 萩 野	散布地	福岡字大萩野	土器、縄文後期? 石鏃	
101	J F-00-0053	九 戸 城	城 跡	福岡字城内		
102	J F-00-1070	村 松 館	館 跡	石切所字榎木沢		
103	J F-00-1262	坂 本 館	館 跡	白鳥字館		
104	J F-00-1334	内ノ沢	散布地	〃 字内ノ沢	弥生式土器	
105	I E-79-1026	道の 下	散布地	金田一釜沢字道の 下	土器、縄文前期	
106	I E-79-1148	舌先石	造 散布地	〃 字雨滝	土器、縄文晩期、石器、土偶	
107	I E-79-1221	舌先 B	祭祀跡	〃	土器、晩期	
108	I E-79-2179	林 向	散布地	野々上字林向	土器、縄文晩期	
109	I E-79-2233	出 張	〃	〃 字出張	土師器	
110	I E-79-2293	仏 畑	〃	〃 字仏畑	土器縄文後、晩期	
111	I E-79-1126	舌 崎 A	包蔵地	金田一字雨滝	土器縄文晩期	
112	I E-79-1200	舌先上野	散布地	〃 字上野	〃	
113	I E-79-1077	釜 沢 館	城館跡	〃 字釜沢	居館	
114	I E-79-2201	野々上 I	散布地	野々上字野々上	土器縄文	
115	I E-79-2216	野々上 II	〃	〃	〃	
116	I E-79-2325	勝負沢 I	集落跡	〃 字勝負沢	土器、前期土師	
117	I E-79-2077	海 上 館	城館跡	金田一字海上	居館中世	
118	I E-79-2246	野々上 館	〃	野々上字野々上	〃	
119	I E-79-2263	野々上 III	散布地	〃	土器、前期土師	
120	I E-79-1396	小 野	〃	金田一字小野	縄文土器	
121	I E-79-2352	勝負沢 II	〃	野々上字勝負沢	縄文土器、土師器	
122	I E-79-2354	勝負沢 III	〃	〃	〃	
123	I E-99-2218	上 平 III	〃	米沢字上平	土器、縄文晩期、土師エノハタイプ	

昭和57年12月31日現在 県教委文化課資料による。

第2表 時代別遺構数

項目	縄文	弥生	古代	塚	城館	不明
遺跡数	79	3	25	1	29	7
比率	54.86%	2.08%	17.36%	0.69%	20.13%	4.86%

第3表 縄文時代の時期別遺跡数

項目	早期	前期	中期	後期	晩期	不明
遺跡数	4	6	12	14	23	33
比率	4.34%	6.52%	13.04%	15.21%	25.00%	35.86%

上^{うわ}村^{むら}遺跡

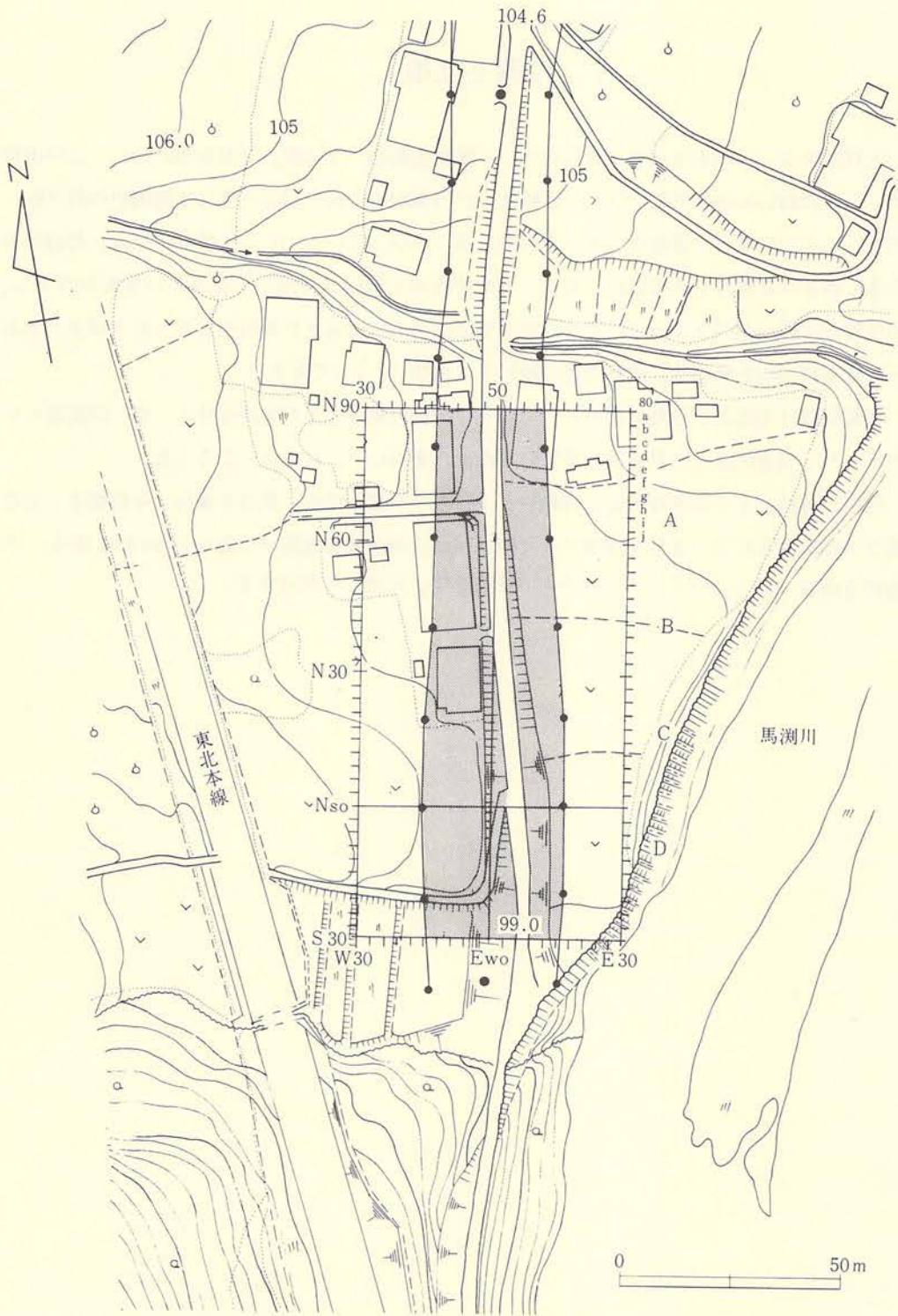
1. 遺跡所在地 岩手県二戸市米沢字上村
2. 調査担当者 四井謙吉・斎藤 淳・高橋信雄
3. 調査補助員 高田和徳・坂川 進
4. 調査期間 昭和49年5月1日～8月9日
5. 調査対象面積 2160㎡
6. 発掘面積 2160㎡
7. 遺跡記号 UM74

I 位置と立地

上村遺跡は、二戸市米沢字上村に所在し、国鉄東北線「斗米駅」の南方約0.8km、「二戸市役所」の北西約1.08kmに位置している。遺跡は二戸市街地の中央を南北に流れる馬淵川の西岸際に在り、この川によって形成された「米沢段丘面」に載っている。しかし遺跡付近は、馬淵川が大きく西寄りに蛇行した屈曲点に近く、また背後の丘陵がせり出して迫るという条件の下に、河岸段丘は狭いものとなっている。遺跡の東側は河川に侵食された段崖となってそびえ、水面とは比高12.6mを隔てる。遺跡周辺の絶対高は海拔100.2mである。

遺跡周辺は宅地及び畑地に使用されている。調査対象区もまた宅地部分と、畑、旧農道とが含まれた。調査区はこの農道部分を除いたため、東西に分かれることとなった。

周辺の遺跡としては本報告書に掲載した下村A・B遺跡の他、荒谷A遺跡、中曽根I・II遺跡などが挙げられる。下村A遺跡からは南へ16m、中曽根II遺跡から北へ400mをを測る。中曽根II遺跡とは二戸バイパスルート内で「日金橋」を狭んで相對する。



図版Ⅰ 上村遺跡地形及びグリッド配置図

II 基本層序

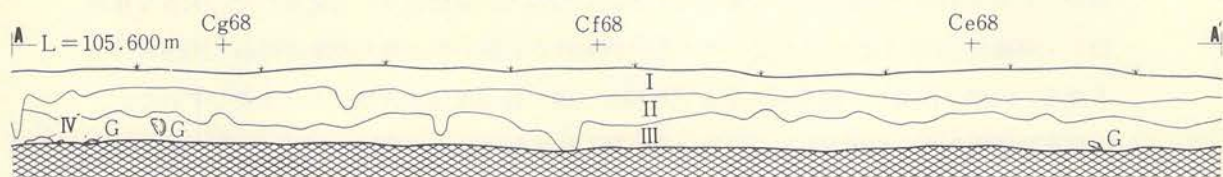
本遺跡の主体部での標高は100.2 mを測る。図版2の土層断面図はC d ~ C gグリッドにか
けての縦断面土層図、D区における横断面図である。以下の記述はこれに基づいて行う。

I層 10Y R 3/1 黒褐色土層。表土層であり、耕作による攪乱が著しい。層厚15~30cmを測る。

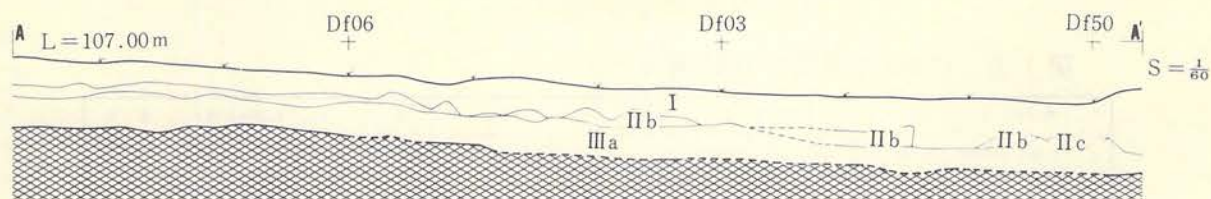
II層 10Y R 2/1 黒色土層。層厚10~20cmを計る。パミスの混入の割合によりa~cに区分さ
れている。

III層 10Y R 1.7/1 黒色土層。層厚12~26cmを計る。II・III層は前項「2遺跡群の環境」中の
II層黒色砂質土層に相当すると思われる。遺構はIII層中、III層下面で検出されている。

IV層 発掘底面以下に堆積。中撒浮石層である。



- I. 10Y R 3/1 黒褐色土層(含炭化物)
- II. 10Y R 2/1 黒色土層(含炭化物)
- III. 10Y R 1.7/1 黒色土層(含炭化物)



図版2 基本層序

S = $\frac{1}{60}$

Ⅲ 発見遺構と出土遺物

検出された遺構には竪穴住居址5棟、竪穴状遺構2棟、炉址1基、土器埋設土壇1基、土壇1基がある。遺物は総数約15箱（コンテナ）を数える。大半が縄文式土器と石器類である。

1. 竪穴住居址及び竪穴状遺構

Cd65住居址

遺構（図版4、写真図版2）

やや不整な隅丸長方形を示す住居址で、その長軸はN-25°-Eに傾く。規模は直径約3.0×2.5m床面までの深さ5~10cmを測る。この住居址はⅢa層上面で検出したために、埋土は消失しており不明である。炉は長軸よりやや北にづれて、東壁よりに発見された。大きな花崗岩?・腐礫岩(原図注記より)によって方形に囲われた石囲い炉で最大の礫は46cm×20cm×39cmを測る。内部には焼土が約5cmの厚さで堆積し、礫の露出部分は火熱により赤変していた。

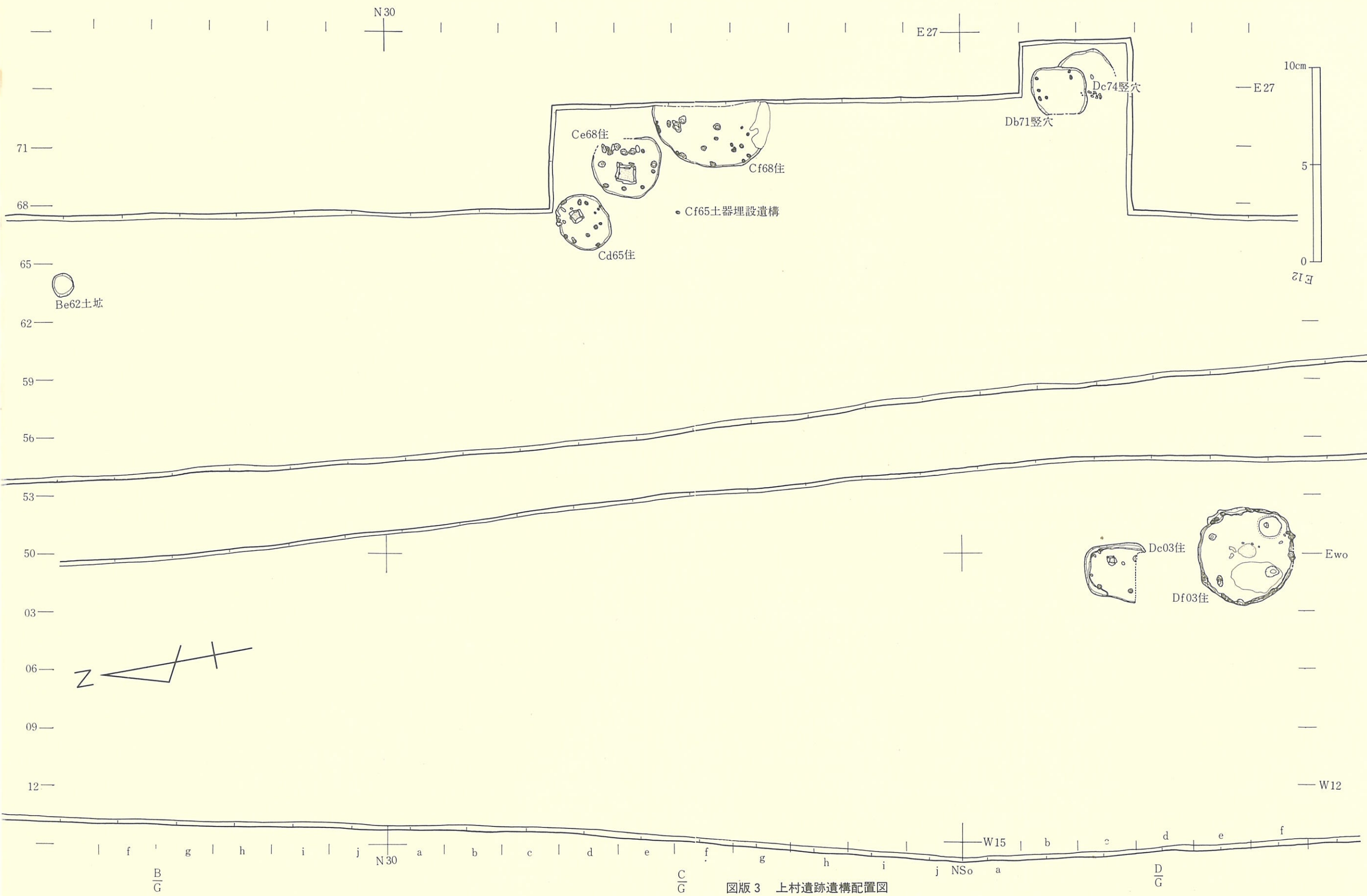
柱穴は床面上から検出されたP₁・P₃・P₄・P₆・P₈またはP₉の5個~6個ピット群で構成され、五角形の配置を示すものと思われる。また、四方の壁に浅い小ピット群(P₂・P₅・P₇・P₁₀)が検出されているが補助柱穴としての性格も考えられる。

第1表 Cd65住居址柱穴計測表

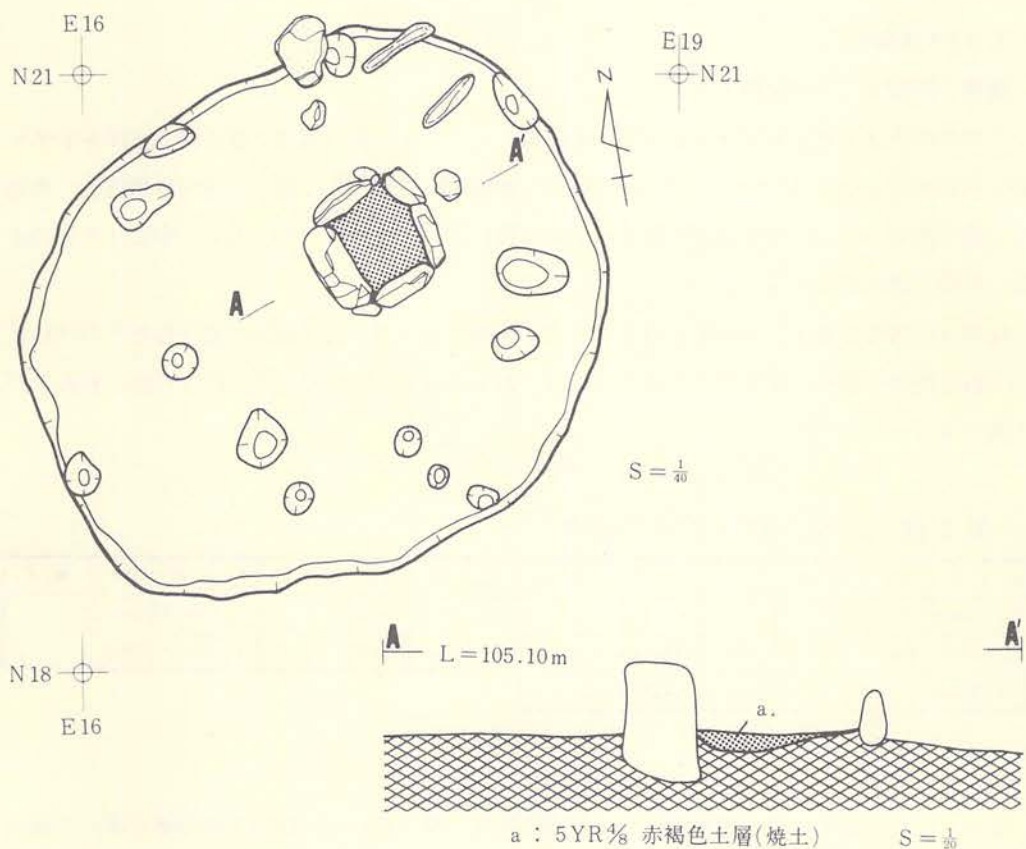
P _{no}	開口径	深さ	備考	P _{no}	開口径	深さ	備考	P _{no}	開口径	深さ	備考	P _{no}	開口径	深さ	備考
P ₁	20cm±	41cm±	柱穴状	P ₂		8cm±		P ₃	19cm±	28cm	柱穴状	P ₄	18cm±	22cm±	柱穴状
P ₅				P ₆	26cm±	25cm±	柱穴状	P ₇				P ₈	23cm±	41cm±	柱穴状
P ₉	36cm±	36cm±	柱穴状												

北壁際に2個の礫が並んで検出された。礫は41cm×8cmと36cm×8cmの細長いもので、住居の北隅付近に、東北壁に直交する形で設置されたものである。2個の礫の間隔は約31cmある。前述の炉址はこの2個の礫により近く配置する。「出入口」状施設^註と考えた。

出土遺物には数片の土器片があるが、いずれも全容不明の小片であり、この住居址の時期決定には薄弱な手掛かりであった。



図版3 上村遺跡遺構配置図



図版4 Cd65 竖穴住居址平断面図

遺物 (図版7-1・2、9-19・20・24-31 写真図版10・12)

図版7-1・2、9-20は粗製深鉢口縁部片である。19は深鉢の波状口縁部片で、内面に鱗状突起が貼付されたものである(本遺跡第Ⅱ群土器・中期末)。24-30は沈線文が施された深鉢胴部片である。無文部は入念なミガキによって縄文の擦り消しが行われている。すべて小片のため時期は明言できない。第Ⅱまたは第Ⅲ群の可能性がある

31はL r一段撚りの網目状撚糸である。(第Ⅲ群)

註. 類似した施設を検出した遺跡として紫波郡都南村の「湯沢遺跡」がある。その遺構編の報告中で、三浦はいくつの特徴を検討し、「出入口」状施設を指摘している(三浦：1977)。本報告中では、同様施設についてこの呼称を踏襲する。

Ce68 住居址

遺構 (図版5、写真図版3)

この住居址は東壁が判然とせず不整な平面形となったが、概ね南北に長い隅丸方形を示すものと思われる。規模は3.9m × 3.0 を測り、長軸はN-11°-Eに傾く。埋土は黒色土、黒褐色土層で占められ、住居中心部を覆う層中には炭化物が含まれていた。d, q, y 中には多量の土器、石器、礫の廃棄が見られた。

柱穴は住居址長軸上の P₁・P₆ を中心として、西側に P₂・P₃・P₄、東側に P₅・P₈ などの浅いピット群を配する構成を示すものと考えられた。あるいは P₉・P₇ なども含まれる可能性もあるが不明である。

第2表 Ce68住居址柱穴計測表

P _{番号}	径	深さ	備考	P _{番号}	径	深さ	備考	P _{番号}	径	深さ	備考	P _{番号}	径	深さ	備考
P ₁	38cm±	50cm±		P ₂	25cm±	13cm±		P ₃	24cm±	18cm±		P ₄	24cm±	18cm±	
P ₅	36cm±	51cm±		P ₆	22cm±	11cm±		P ₇	39cm±	35cm±		P ₈	32cm±	20cm±	
P ₉	29cm±	23cm±		P ₁₀	29cm±	17cm±									

これらピット群の一角(北東隅)にCd65住居址で見られたと同様の2個の礫が並んで検出された(出入口状施設)。やはり東壁に直交する形で設置されており、礫の間隔は32cmを測る。礫の付近には性格不明の浅いピットが見られた。

炉跡は住居址中央やや西寄りに検出された。床面を深く掘り窪めて、長さ110cm程(最大礫)の大きな礫を方形に埋設した石囲炉である。炉の規模は外縁で92cm × 90cm、底面までの深さは20cmを測る。埋土は下層黒褐色土層と上層の暗褐色土層に大別されるが、いずれも炭化物を含んでいる。暗褐色土層の下部には土器片が敷設されていた。

遺物 (図版7-3~7、図版8・9・10写真図版11~13)

土器: 復元土器を含めて多量の土器が出土した。すべて深鉢である。3は口縁が外反し、山形口縁形を呈する土器である。頸部内面に肥厚帯があり、山形突起部で「鱗状突起」を形成する。頸部外面は縄文原体を押捺し、その下方にLR単節縄文を縦回転したものである。4は3に類似した器形であり、山形口縁の内面にはやはり「鱗状突起」を付している。胴部文様は上半部で終結し、下部の地文帯とは波状沈線文+鱗状突起で一線を画している。胴部文様は沈線+「鱗」状突起によって「コ」の字状文を区画し、外部を擦り消したものである。5は4に類似するが、「鱗」状突起の見られない土器である。代わって、口縁部文様体が形成されている。口縁突

起は8個となり、突起頂部から頸部にかけ隆帯を貼付したものである。隆帯上には地文を回転する。地文はR L R 複節縄文である。

9は小形の深鉢で、口縁部をほとんど欠失しているが、4個の突起部分が認められる。頸部～口縁に上昇して連結する隆帯が見られ、隆帯に側して刺突文が施される。胴部文様は地文回転の後、沈線区画文を施し、区画外を擦り消したものである。擦消縄文手法は拓影図の15、17、29、30にも観察されるところであるが、15、17は平口縁となっている。

11は小形の深鉢で、口縁直下にキザミを伴う隆帯を貼付したものである。胴部は地文帯となりL R 単節縄文縦回転。

6、8、18、20～22、31～40はいわゆる粗製土器である。6、8は共に大形の深鉢で、口縁部複合となり肥厚している。地文はR L 結節縄文縦回転である。

石器：42～45のフレイク類が出土した。

C f 68 住居址

遺構（図版6、写真図版4）

住居東半分が調査区外にかかり、また南壁が風倒木によって破壊されているために、平面形は不明であるが、不整の円形状の輪郭が想定される。残存する規模は南北5.9m + α を測る。

埋土は黒褐色土及び黒色によって構成され、内部に土器、礫を包含している。

柱穴は、床面から多数のピット群を発見したが、調査区内からは明瞭な配置を得られなかった。深さから考えて、P₁・P₄・P₃・P₇・P₆などが柱穴群を構成するものと思われる。この場合複数の柱穴配置（例えばP₁・P₄・P₆とP₃・P₇）が想定でき、住居の重複を可能性づけるものであるが、詳細は不明である。また、壁際を深さ15～35cm程の小ピット群が巡るが、補助柱穴状の施設の痕跡であろうか。

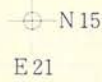
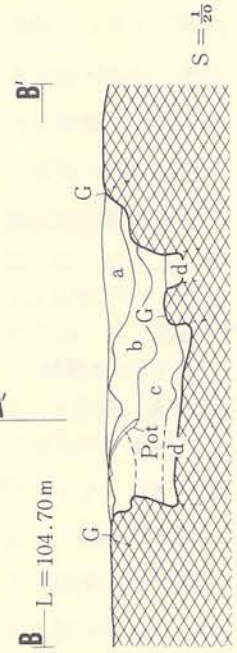
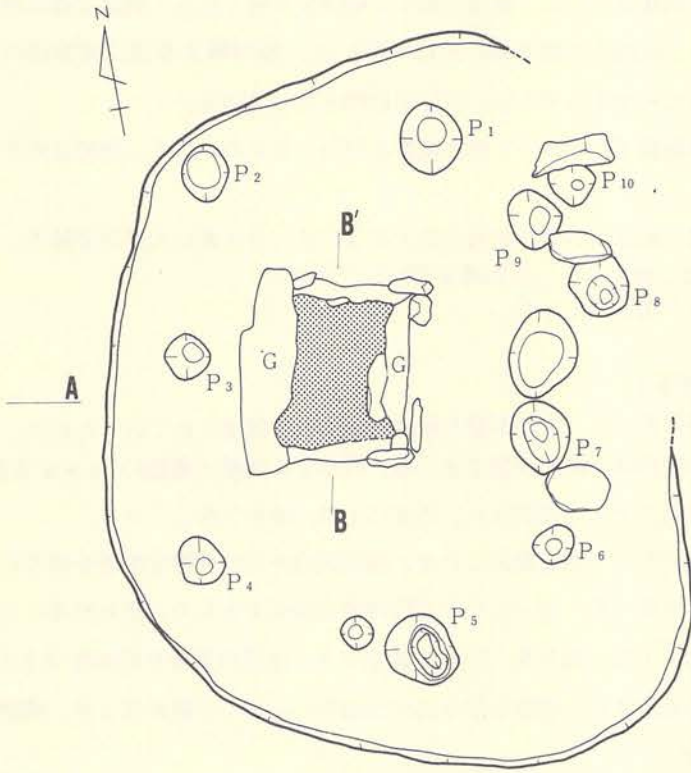
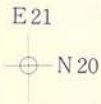
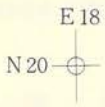
調査区内からは炉跡は検出されなかった。

表3 C f 68 住居址柱穴計測表

P _{no}	径	深さ	備考	P _{no}	径	深さ	備考	P _{no}	径	深さ	備考	P _{no}	径	深さ	備考
P ₁	24cm±	63cm±	柱穴状	P ₂	20cm±	32cm上	不整形	P ₃	28cm±	80cm±	柱穴状	P ₄	17cm±	61cm±	柱穴状
P ₅	14cm±	22cm±		P ₆	18cm±	59cm±	柱穴状	P ₇	22cm±	74cm±	柱穴状	P ₈	19cm±	27cm±	
P ₉		24cm±													

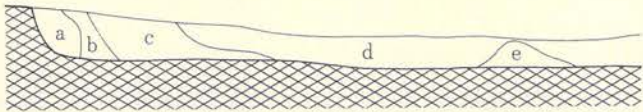
遺物（図版10写真図版13）

少量の遺物が出土しただけで、時期は決定し得なかった。46は深鉢底部片である。47は石鏃で、二等辺三角形状、挟入基の鏃である。



A — L = 104.70 m

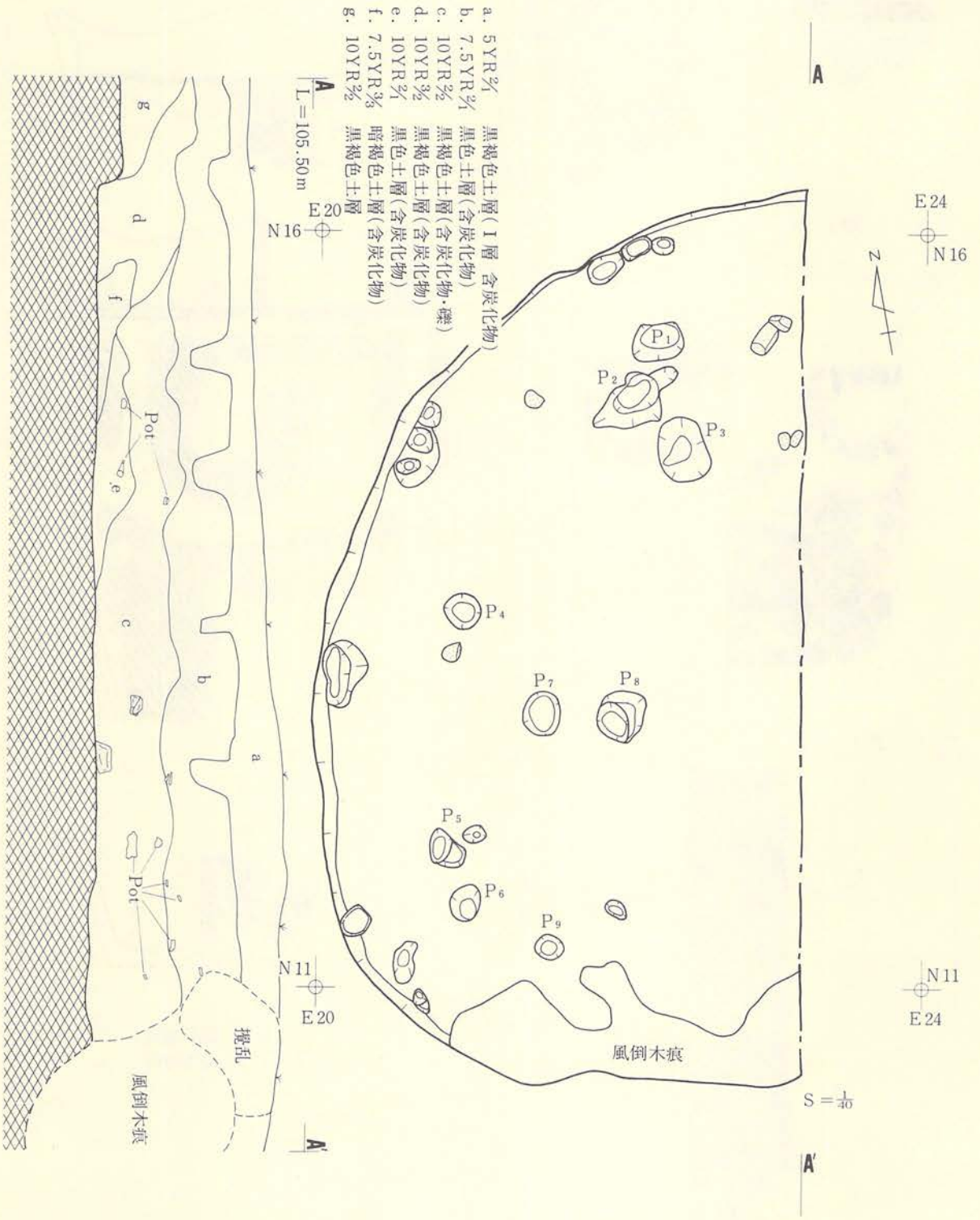
A'



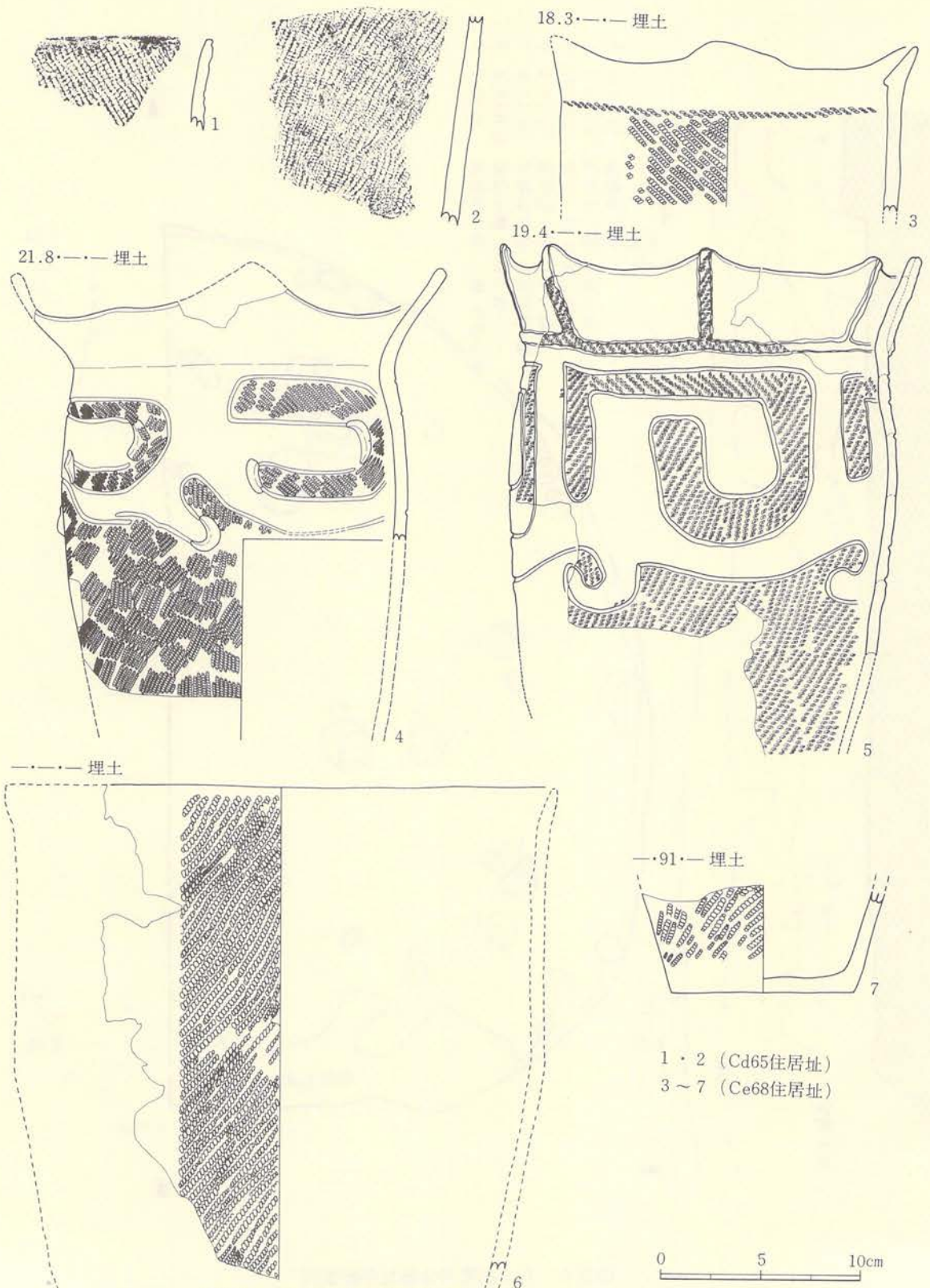
- a. 7.5YR 3/1 黑褐色土層
- b. 7.5YR 3/1 褐灰色土層
- c. 7.5YR 3/2 黑褐色土層
- d. 7.5YR 3/1 黑色土層(含炭化物)
- e. 7.5YR 3/2 黑褐色土層(含炭化物)

- a. 10YR 3/3 暗褐色土層(含炭化物)
- b. 10YR 3/4 暗褐色土層(含炭化物)
- c. 10YR 3/2 黑褐色土層(含炭化物)
- d. 10YR 3/3 黑褐色土層(含炭化物)

图版 5 C e 68 竖穴住居址平面图

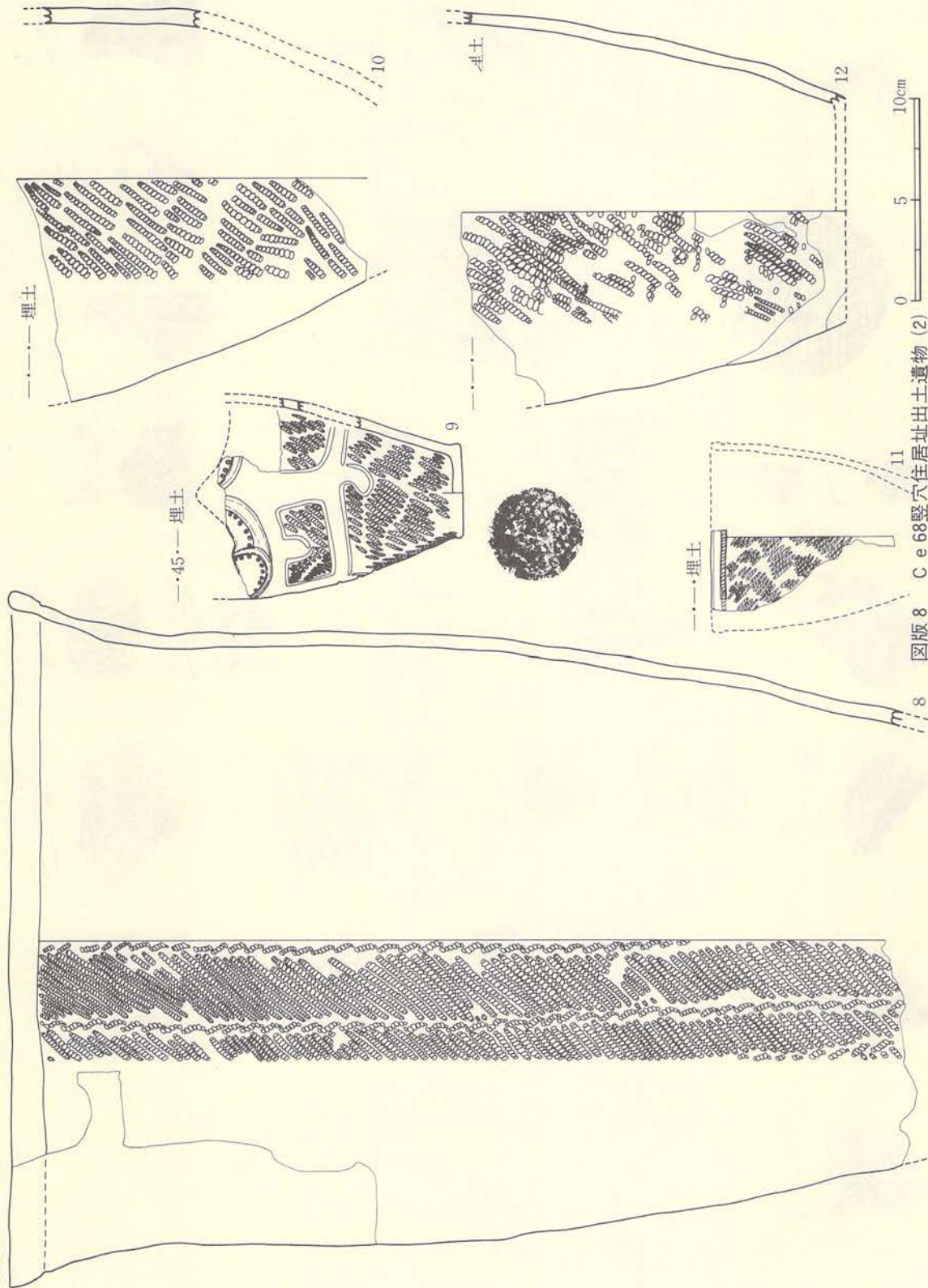


図版6 C f 68竪穴住居址平断面図

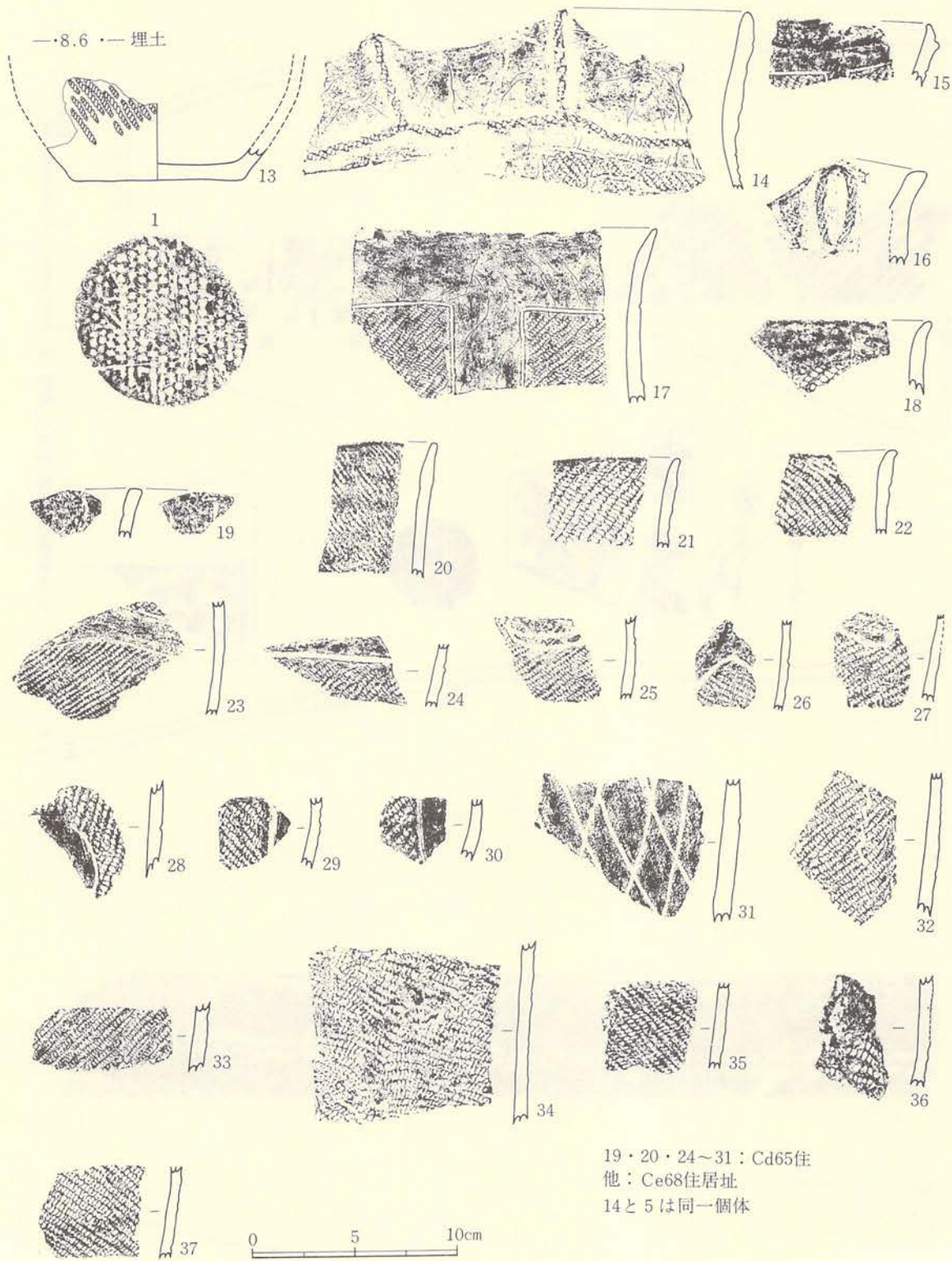


図版 7 C d 65 竖穴住居址出土遺物、C e 68 竖穴住居址出土遺物 (1)

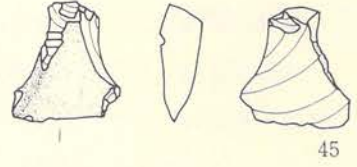
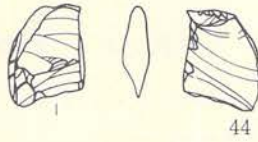
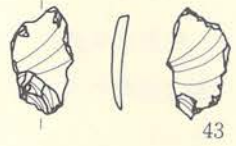
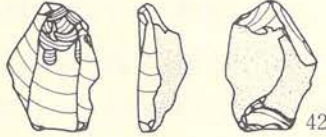
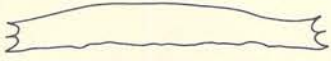
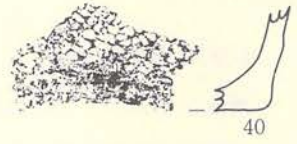
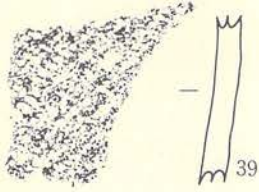
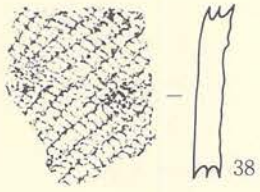
34.0.——埋土



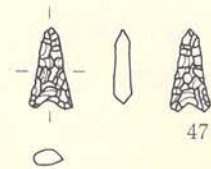
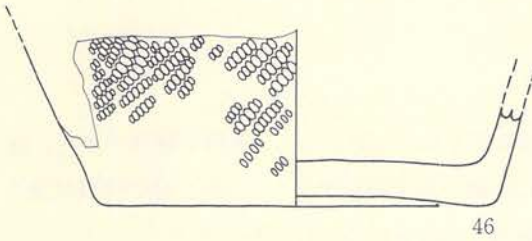
图版 8 Ce 68 竖穴住居址出土遗物 (2)



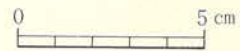
図版9 Ce68竪穴住居址出土遺物(3)



—·10.3·—埋土



38—45 (Ce68住居址)
46·47 (Cf68住居址)



图版10 C e 68竖穴住居址出土遗物 (4)
C f 68竖穴住居址出土遗物

D b 71 竪穴状遺構

遺構（図版11、写真図版5）

平面形は西壁が張り出す形の隅丸方形である。西壁の一部は調査区外に延びているため、全体規模は不明だが、南北約2.8mを測る。埋土は上層の黒褐色土層と、下層の黒色土層とで構成される。

床面は平坦で、数個のピットが検出されているが、深さ等の記録はなく柱穴にあたるかどうかは疑問である。（写真の観察によれば、極めて浅く規模の小さなもので、柱穴とは見做し得ないものである。）床面からは礫などが発見されたが、炉跡等の施設は存在しない。

D c 71 住居址状遺構と重複する。新旧関係については不明であるが、残存の状況から考えて、D b 71 竪穴状遺構が新しい可能性がある。

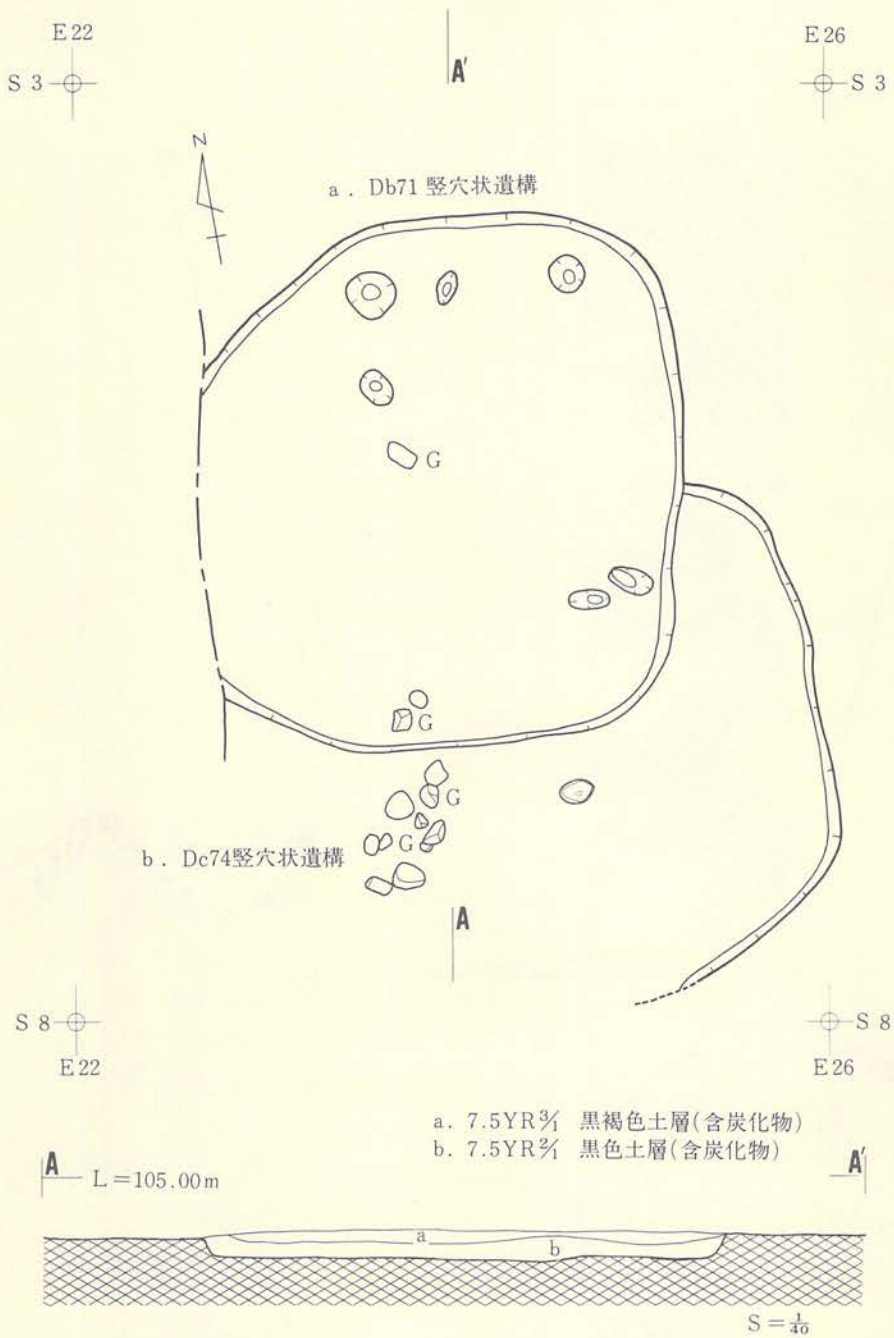
遺物（図版12、写真図版14）

土器が2点出土した。1は深鉢胴部～底部片である。胴部はR L 単節縄文縦回転。底部は網代痕が見られる。2は筒形の土器で、底部が広く、口頸部が内屈する。口縁は4個の山形隆起をなし、その下方に口縁に沿った形で隆帯を巡らせたものである。隆帯の上方には刺突列が施されている。口縁径11cm、推定器高19cmを測る。胴部はL r 無節縄文縦回転である。

D c 74 竪穴状遺構

遺構（図版11、写真図版5）

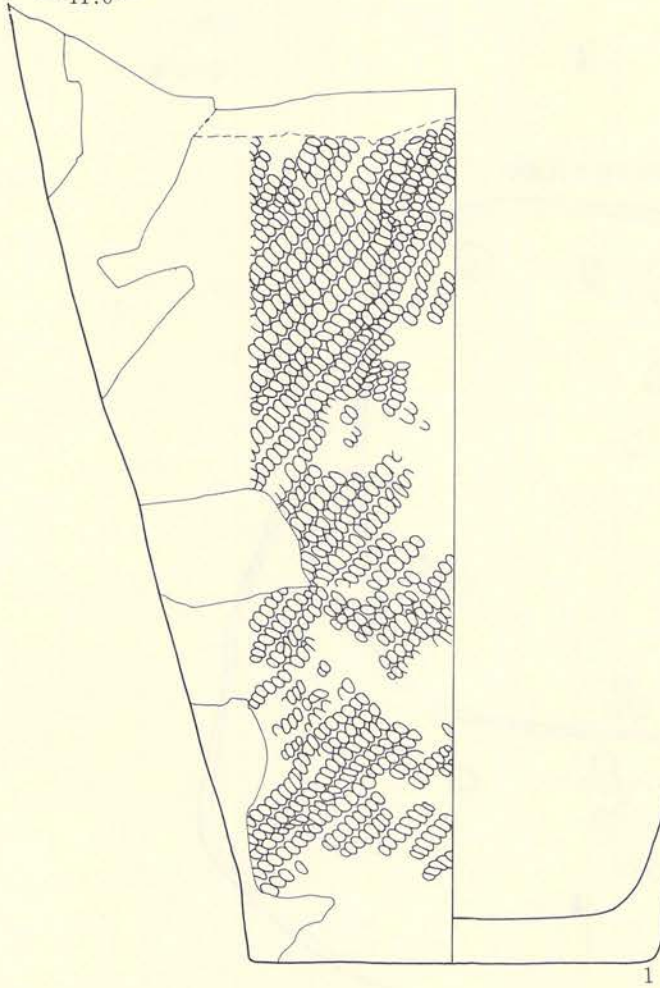
この住居址は、東壁と、南壁の一部が僅かに残存していたことにより、遺構を確認できた。従って、平面形、規模は共に不明である。遺構内には礫の集中部分があるものの、他の施設は全く認められなかった。D b 71 住居址と重複し、新旧関係は上記のとおりである。



图版II D b 71 · D c 74 竖穴状遺構平断面图

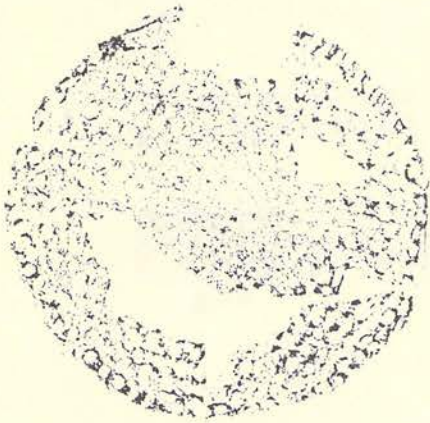
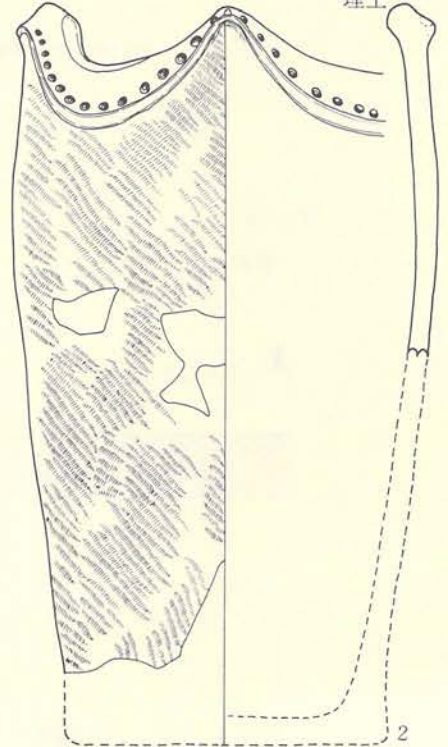
—11.0—

埋土



11.2·—·—

埋土



0 5 cm

图版12 D b 71 竖穴状遗构出土遗物

Dc03住居跡

遺構 (図版13、写真図版6)

南辺が幅広の隅丸方形を呈する住居址で、規模は $2.6+\alpha$ m \times 2.9m を測る。

検出面から床面までの深さ約10cmと浅いために埋土の堆積状況は明らかではない。黒褐色土層の上面に焼土を含む暗褐色土層が点在しており、また全体に炭化物が多量包含されたことなどから、焼土、土器を含む廃棄が行われたものと考えられる。

周溝は西北～北～東壁にかけて確認された。深さ5cmである。

柱穴は床面及び周溝上から検出された4個のピットがあたるものと思われるがいずれも浅めのものである。

第4表 Dc03住居址柱穴計測表

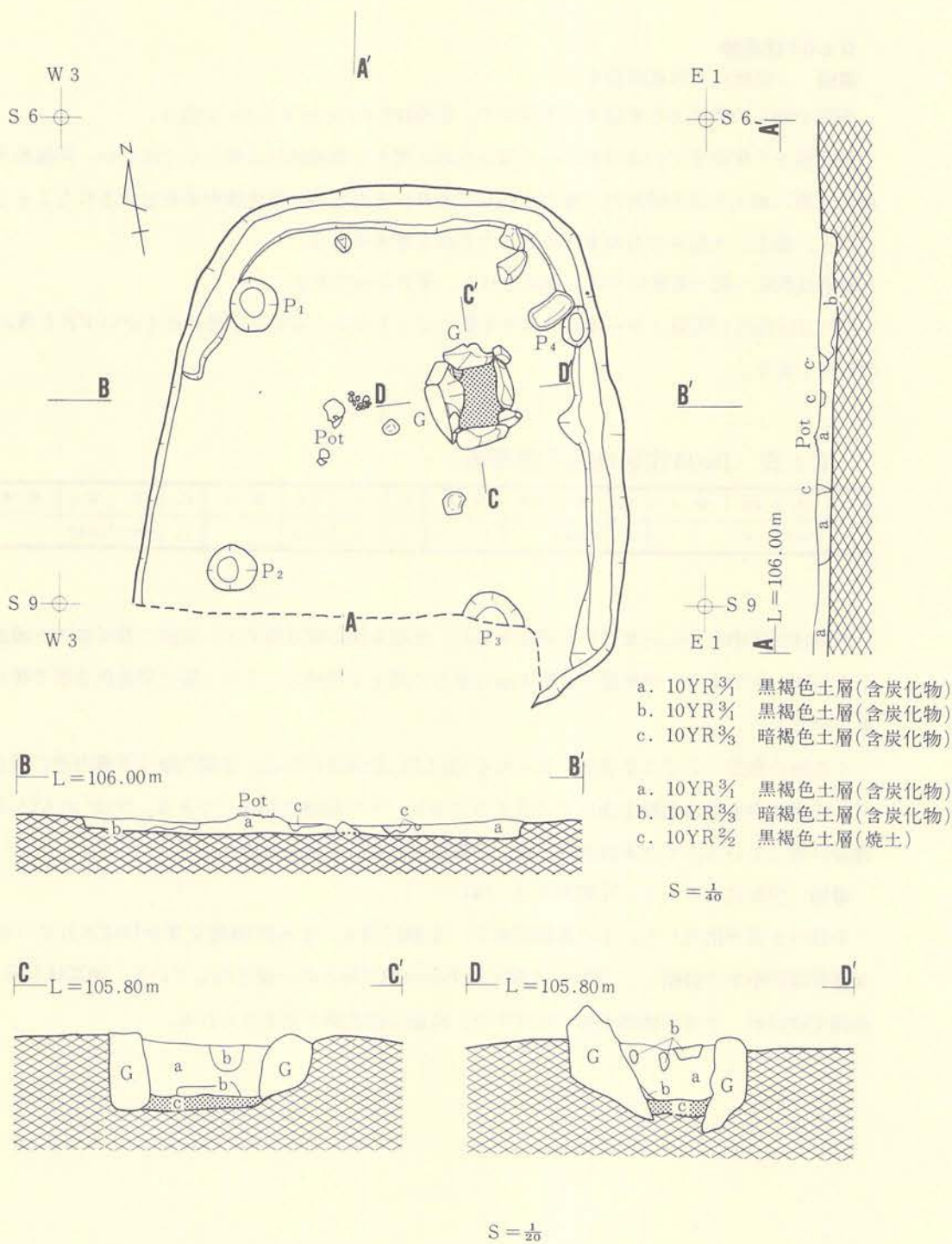
P ₁	径	深さ	備考	P ₂	径	深さ	備考	P ₃	径	深さ	備考	P ₄	径	深さ	備考
P ₁	31cm±	15cm±		P ₂	31cm±			P ₃	—	20cm±		P ₄	16cm±	13cm±	

炉跡は住居中央から北東寄りに発見された。床面を深く掘り窪めて、周囲に凝灰岩(?)を埋設した石囲い炉である。炉底面には約4cmの厚さで焼土が堆積し、その上層は黒褐色土層で覆われていた。

その他の施設としては北東隅に見られる「出入口」状施設がある。2個の礫は周溝内壁に接して、住居址中央部に長軸を向けて設置されており、その間隔は30cm である。炉は「出入口」状施設に寄っている。また床面から、礫、土器等が点在して発見された。

遺物 (図版15-1～3、写真図版11、14)

少数の土器が出土した。1は深鉢胴部で、沈線区画文による擦消縄文帯が形成されている。文様帯は胴中半で終結し、波形の沈線文が下部の地文帯との一線を画している。地文はLR単節縄文縦回転。2は深鉢胴下部～底部片で、底面に網代痕が見受けられる。



图版 13 D c 03 豎穴住居址平断面图

D f 03 住居址

遺構 (図版14、写真図版7)

ほぼ円形の平面形を呈する住居址で、規模は5.0m×4.8mである。床面の一部は風倒木により、破壊をうけ、また南壁の一部が消失している。

柱穴はP₁・P₂・P₃のピット群と、D f 50フラスコピット底面に検出された小ピット (調査時の記載が無く、住居址に付随するものかは断定できないが) とを合わせた四本柱によって構成されるものと考えられる。

第5表 Df03 住居址柱穴計測表

P _{no}	開口部径	深さ	備考	P _{no}	開口部径	深さ	備考	P _{no}	開口部径	深さ	備考	P _{no}	開口部径	深さ	備考
P ₁	30cm±	65cm±		P ₂	29cm±	72cm±		P ₃	—	53cm±		P ₄	—	68cm±	D f 50 フラスコ状土塊と重複

周溝は南壁の一部などで途切れるもののほぼ全周する。規模は幅約10~25cm、深さ約7~20cmを測る。周溝内の所々に小ピット状の落ち込みが多数検出され、北壁の小ピットには、土器、礫などが入りこんでいる。

炉址は住居のやや中央南寄りに発見されたが、2個の炉址 (1号炉・2号炉) が重複した炉址である。調査時に第一に発見された1号炉は直径約123cmの掘り込みを伴った地床炉で、上部に焼土の堆積が見られた。2号炉は1号炉によって切られた炉跡で、底面に薄い焼土の堆積層が見られる。また1号炉の北側床面には多量の炭化物・焼土の集中散布が見られたが、これは1号炉を構築する際に、1号炉を破壊し、掘り上げた可能性が考えられる。

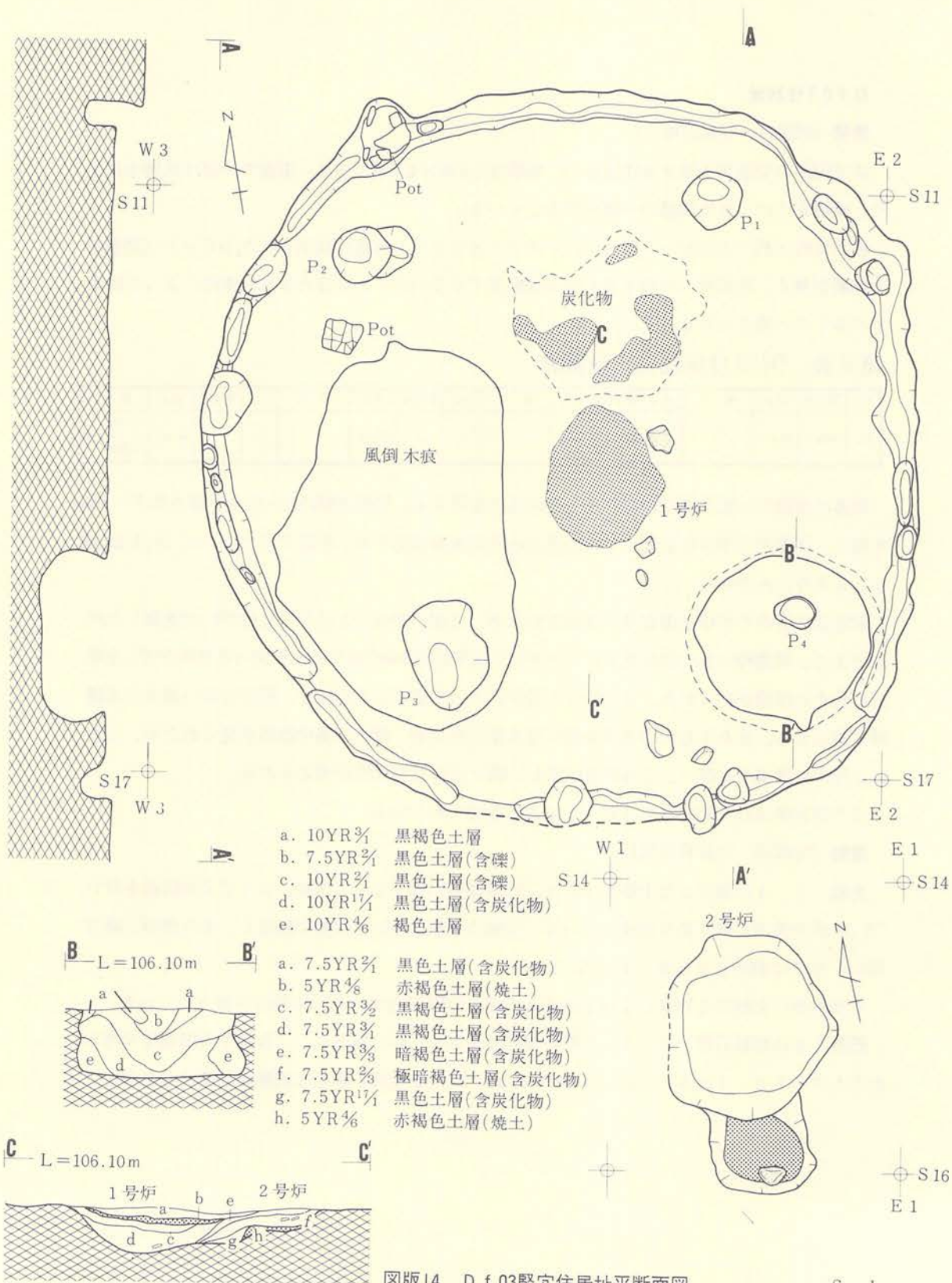
この住居跡はD f 50フラスコピットによって切られている。

遺物 (図版15、16写真図版15)

土器：1、4は類似した土器片である。口縁は平口縁をなし、沈線によって文様区画を行い「S」字状の擦消し縄文帯を形成している。沈線の一部は「鱗」状突起に転化し、また擦消し縄文帯の一部には刺突文を形成している。

6は外面に文様帯を形成しない土器であるが、口縁部内面に「鱗」状突起が施されている。

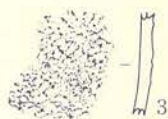
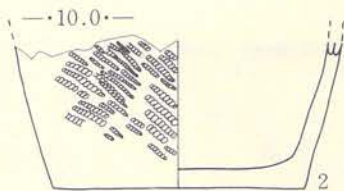
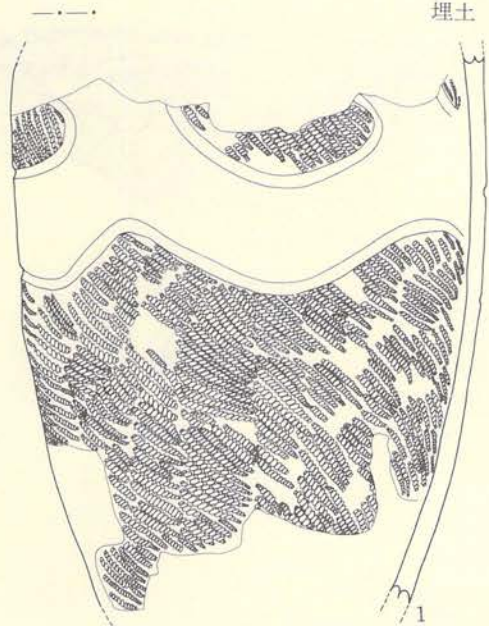
石器：6は磨製石斧であるが、石斧の刃部は使用のために損われ、二次的な刃部加工が施されたものである。1~5、7はフレイクである。3は先端部に細かな剥離が見受けられる。



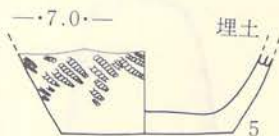
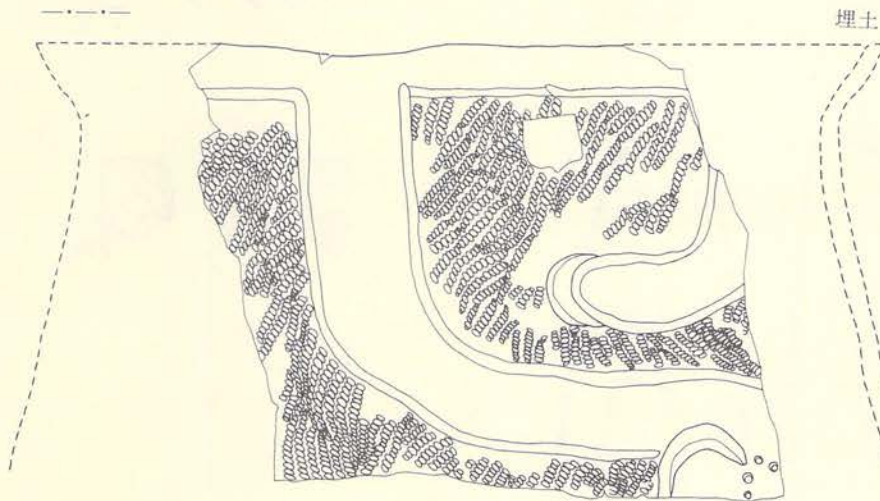
图版14 D f 03竖穴住居址平断面图

S = 1/40

埋土



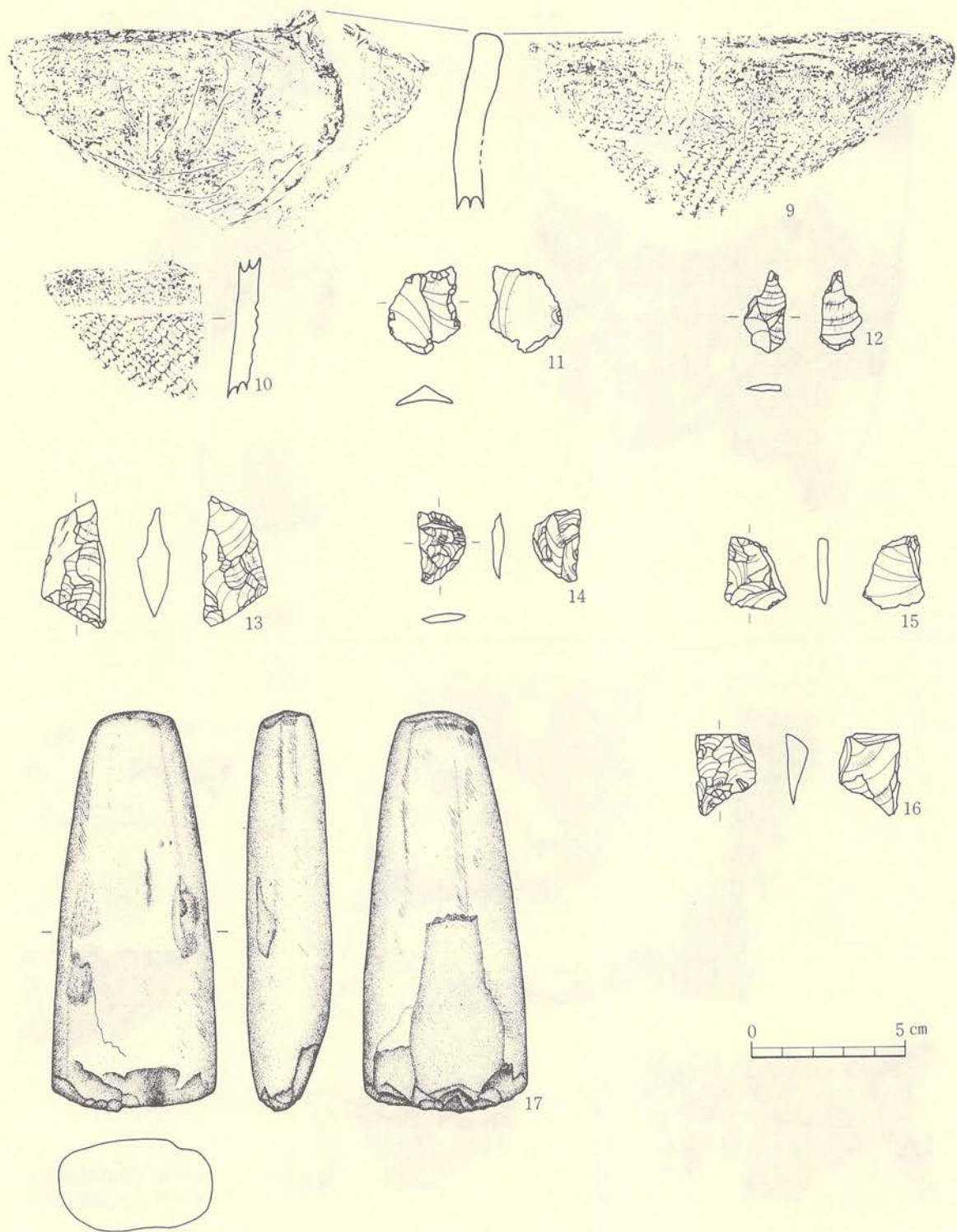
埋土



1 ~ 3 (Dc03住居址)
4 ~ 8 (Df03住居址)

0 5 10cm

图版15 D c 03竖穴住居址出土遺物、D f 03竖穴住居址土遺物



图版16 D f 03竖穴住居址出土遺物 (2)

2. 炉址

C h 68 炉址 (図版 17)

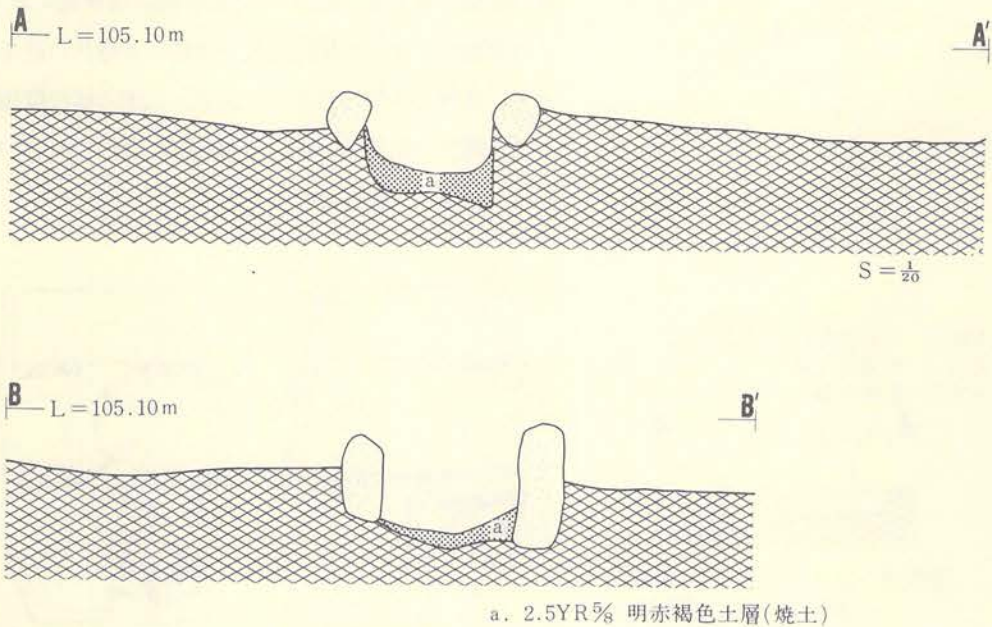
炉址のみが単独で検出された。住居の壁、柱穴など住居址に伴う他の施設は検出されていない。平面図は調査ミスにより欠落した。写真の観察によると、石を方形に巡らせた石囲い炉である。断面図から計測して、炉跡の規模は60cm×55cm(外径)である。炉底面は約22cm程掘られていて、約5cmの焼土が堆積していた。

3. 土壇

B e 62 土壇 (図版 18-b、写真図版 8)

不整な隅丸方形を呈する土壇である。規模は開口部径112cm×106cm、床面までの深さは14cmを測る。埋土は黒色土層が主体を占める。

埋土及び床面から土器片が出土しているものの、すべて粗製土器片であるため、時期は決定



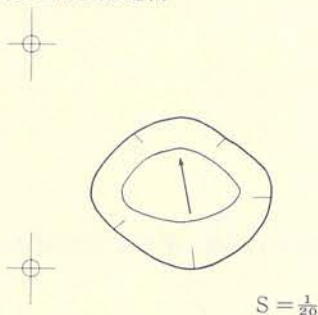
図版 17 C h 68 炉址

できなかった。(図版20-上、写真図版16-a)

D f 50 フラスコ状土壇 (図版14)

D c 03住居址に重複する土壇である。床面精査中の検出となったため、新旧関係は明瞭でないが、住居址の柱穴と思われる小ピットの関係から、DC 03住居址より新しいものと考えた。住居址床面上での直径103cm、底径110cm、壁は幾分オーバーハングして、フラスコ型の形状をとる。床面からの深さは45cmを測る。埋土は壁際に堆積した壁崩落土の他は、黒色土層が主体を占める。埋土中には礫、炭化物が含まれていた。

a. Cf65土器埋設遺構



b. Be62土壇

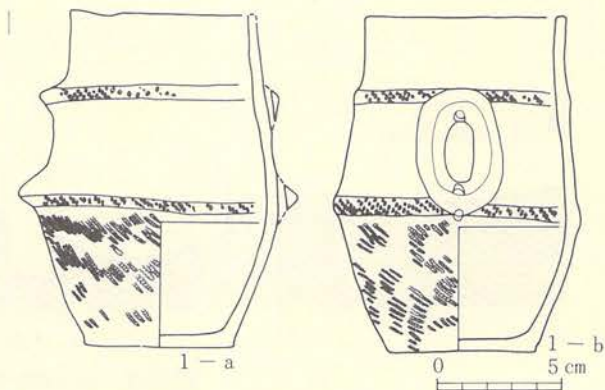


図版18 Cf 65土器埋設遺構、
Be 62土壇平断面図

4 Cf 65土器埋設遺構(図版18-a、写真図版8)

C f 68住居址の西方に、土器を伴う小さな土壇を発見した。土壇は不整な楕円形を呈していて、大きさは開口部形9.8cm×8cmである。土器はこの土壇の片隅に直立して埋設されていたものである。

埋設土器(図版19)は小形の壺形土器である。器高14cm、底径6.2cm、口径7.8cmを測る。頸及び胴部に2本の隆帯を巡らせ、左右一対の釣手状突起が見られる。この突起部は2本の横位隆帯を連結する輪状の隆帯の上下に貫通孔を穿ったものである。二本の横位隆線文上には縄文が回転されている。胴下部は地文帯となり、LR単節縄文を縦に回転している。



図版19 Cf 65土器埋設遺構出土遺物

5. 遺構外出土遺物

(1) 土器 (図版20～25, 写真図版16～24)

遺構検出作業中、主にⅡ層中から土器片などを得ている。特にC区で復元可能土器など多量の土器が出土したので、ここに一括して報告する。記述は大まかな時期によって群区分して行う。

第Ⅰ群土器 (図版22-1～4)

中期前葉の土器群と思われる土器片を一括した。図版22-1は深鉢口縁部で口縁直下から横に結節縄文を回転したものである。2、3は深鉢胴部片で撚糸縦回転が施されている。円筒土器の小片と思われる。

第Ⅱ群土器 (図版21、22-5～51)

本遺跡の主体をなす土器群で、遺構出土の土器群も多くはこれに含まれる。沈線による文様区画と、その結果形成される幅広の擦消または充填縄文帯を特徴とする。器形は深鉢が圧倒的である。中期末葉と思われる土器群を一括した。

図版21-1～3、図版22-5～29に上記の特徴は観察される。1は大型深鉢で、口縁を緩い波形とする。波形口縁の頂部には裏面に「鱗」状突起を貼付している。外面の文様は細い沈線によって文様区画を行い、充填縄文を施したものである。沈線の一部は「鱗」状突起に転化する。文様帯は胴部前半で終半し、波形沈線文によって下部の地文帯と一線を画したものである。充填縄文帯は「U」字状を呈する。2、3は擦消縄文法を用いた土器で、外面文様に「鱗」状突起は見られない。2は1同様に口縁部内面にのみ「鱗」状突起が見られる。図版22の拓影図土器においてもこれらの諸要素が観察されるが、文様帯の縄文は擦消し手法によるものが多い。口縁形は波状口縁と平口縁とが見られる。「鱗」状突起は、貼付されるものと、貼付されない土器とが存在するが、図版23-23、24は口縁直下あるいは頸部に刺突文が施される。25は口縁の山形頂部にボタン状突起を貼付し、周囲と突起頂部に刺突文を施したものである。30～31は破片のため詳細は不明の土器だが、へら状の工具で器面を掘り込み、粘土を盛り上げたものである。33はブリッジ状の把手部分である。18、33に朱塗りが見られる。

他に文様帯を持たない土器、いわゆる粗製土器がある。器形はやはり深鉢を主体としているが、少数の壺形土器(図版21-5)も含まれる。次の第Ⅲ群に伴う粗製土器とは、区別が明瞭ではない。51は羽状縄文横回転の土器であり、後期に含まれるものと思われる。

第Ⅲ群土器 (図版24-52~79, 21-7.8, 20-7~13)

後期初頭の土器群を一括した。いわゆる十腰内Ⅰ型式(あるいは前型式)と呼ばれる土器群である。(図版24-52~69)。

細いへら描きの多重沈線によって施文されるのを特徴とする。小破片のため、全容は把握できないが、深鉢と共に壺の破片も出土している。図版20 7、9は口唇が肥厚した口器片である。7は波状口縁の頂部下に円形の隆起文が施され、その上に円形の沈線文が描かれている。施文の主体は沈線文であるが、隆線+沈線の手法による土器も見られる(図版24-55、56、図版8)。

第Ⅲ群土器に伴う粗製土器には前述の51の他、撚糸施文されたものが見られる。図版25-70~79。

図版21-7はこの土器群に伴うミニチュア土器と思われる。

図版80~87は底部外面に残された網代痕、木葉痕である。網代は一本潜り一本超えの四ツ目編みが多く見られる。

(2) 石器 (図版26. 27)

1~6は石鏃である。1・2は無茎平基の鏃であるが、共に尖頭部はやや鈍く作られている。4は無茎抉入基の三角形鏃である。5、6は有形鏃。3は他に比べると大きめで加工の甘い石鏃である。

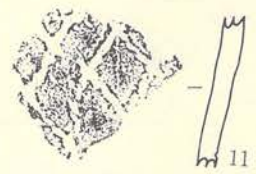
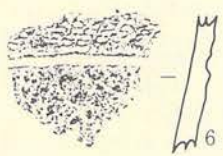
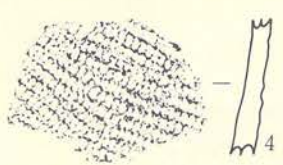
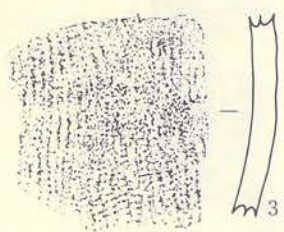
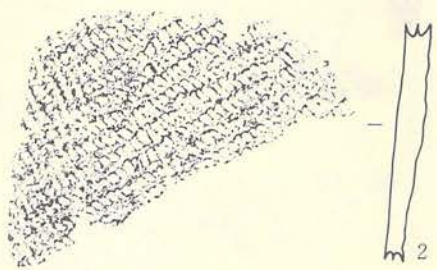
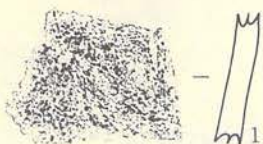
7はサイドスクレーパーである。先端部は尖頭形を呈する。8、9はスクレーパー様の加工痕を持つ剥片である。加工は側縁及び先端にのみ僅かな加工が観察されるが、素材の形状を留めている。12は楔形の剥片である。先端部に僅かな加工が観察されるが、使用については明言できない。10・11・13~18は剥片類である。

19は磨石、20は敲き石である。

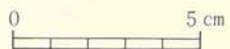
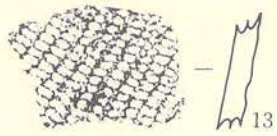
Be62ピット 1~4



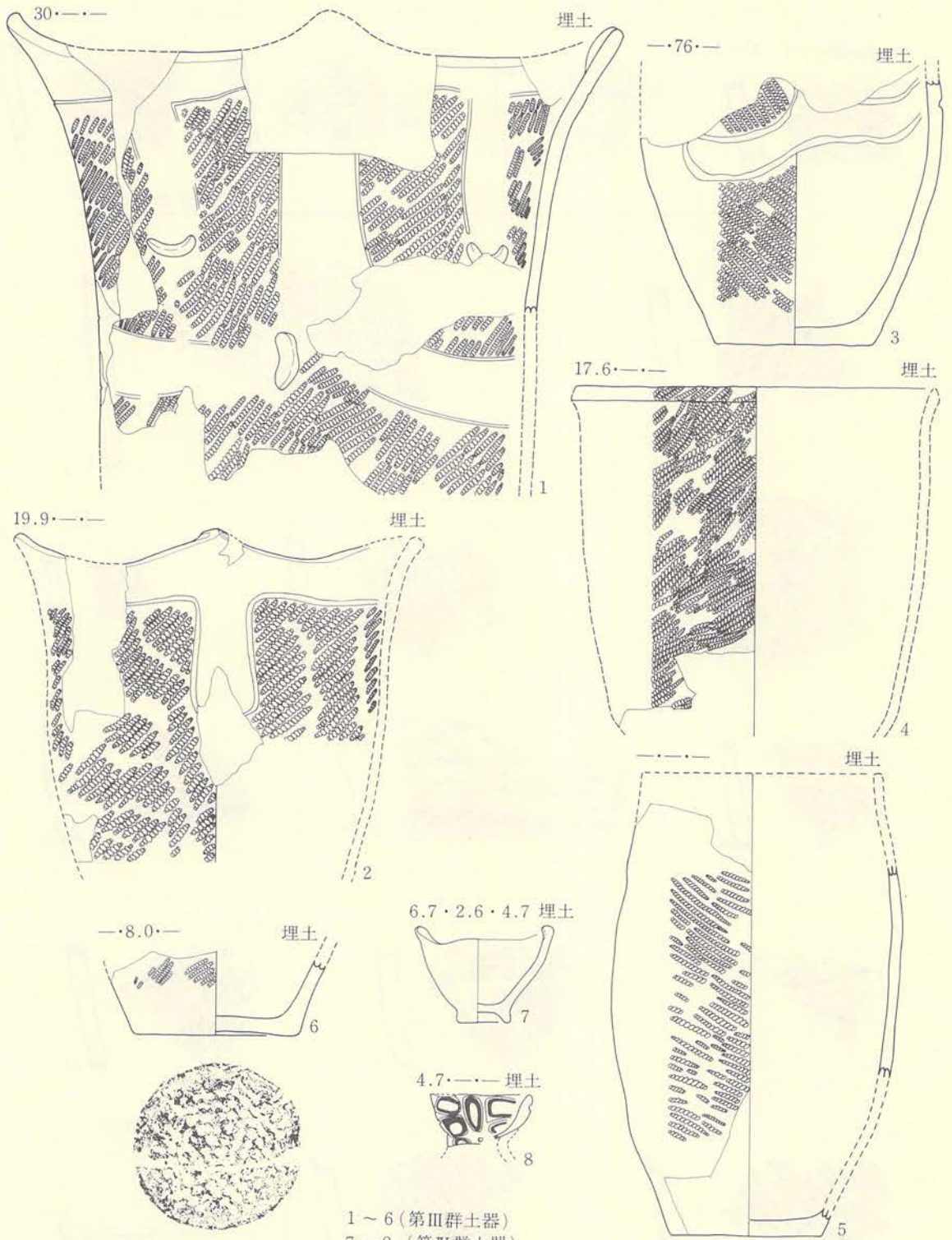
1~4 Be62 土壇出土



1~13: 遺構外出土

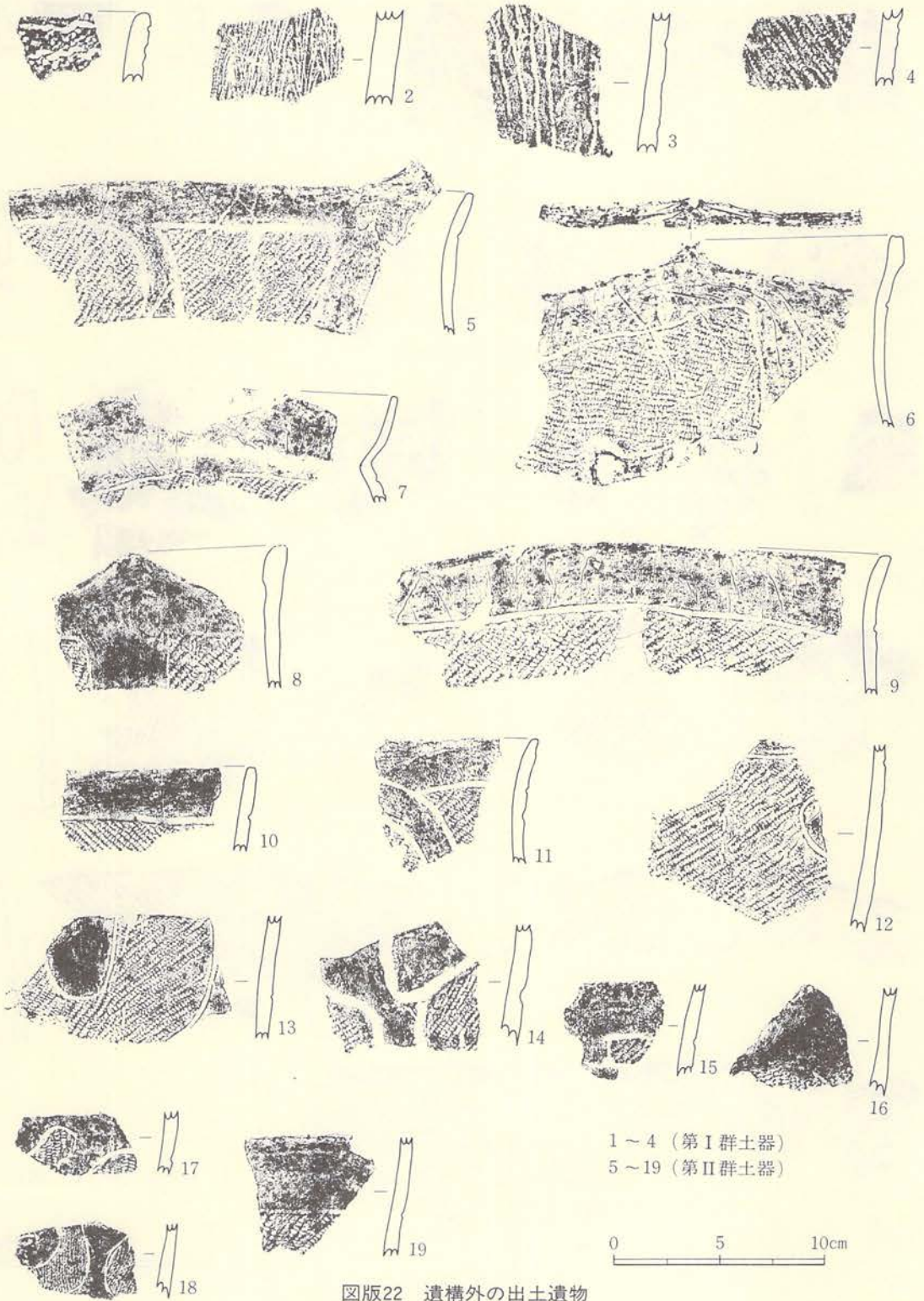


図版20 遺構外の出土遺物及び土壇出土遺物

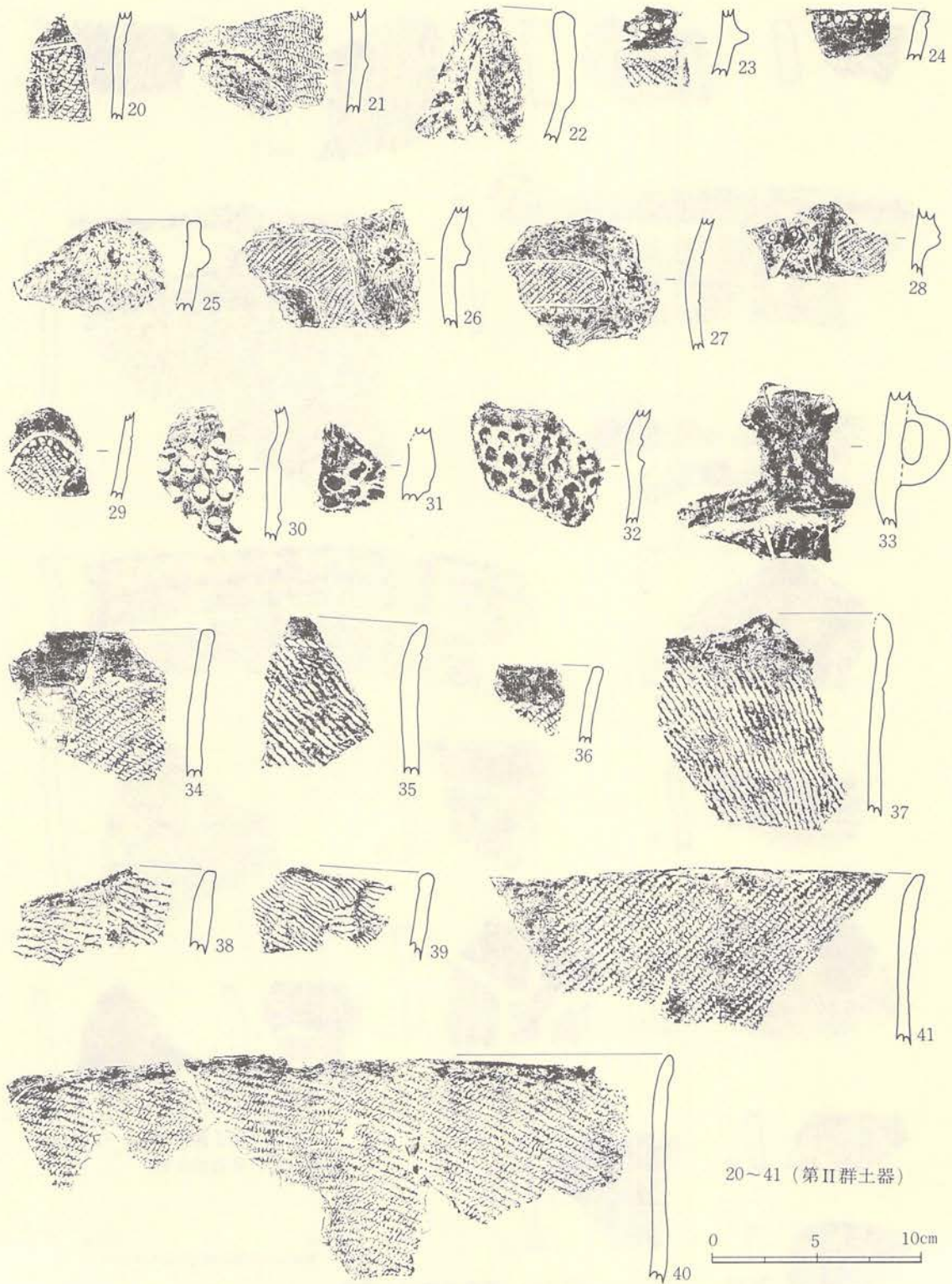


図版21 遺構外の出土遺物

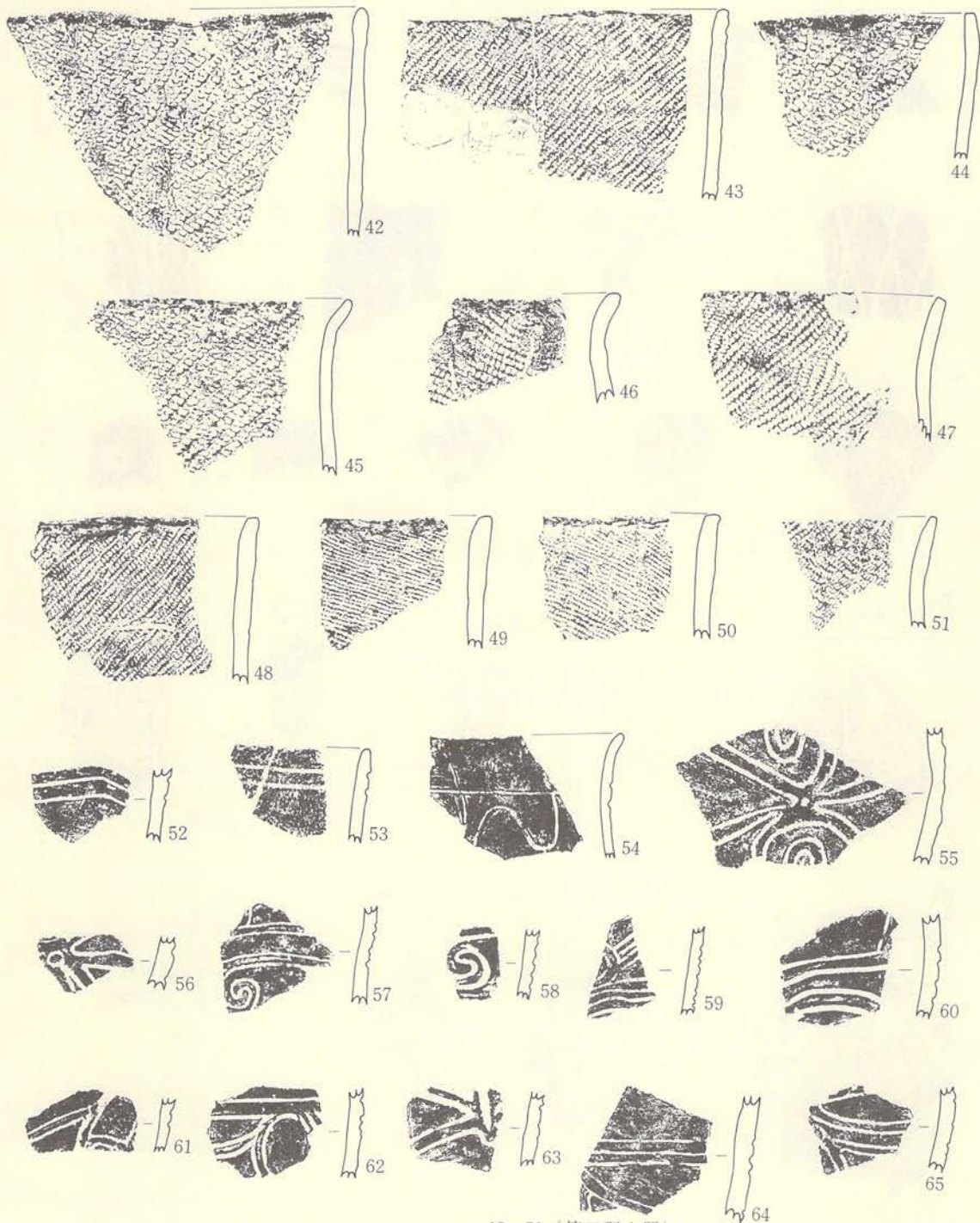
0 5 10cm



図版22 遺構外の出土遺物



図版23 遺構外の出土遺物

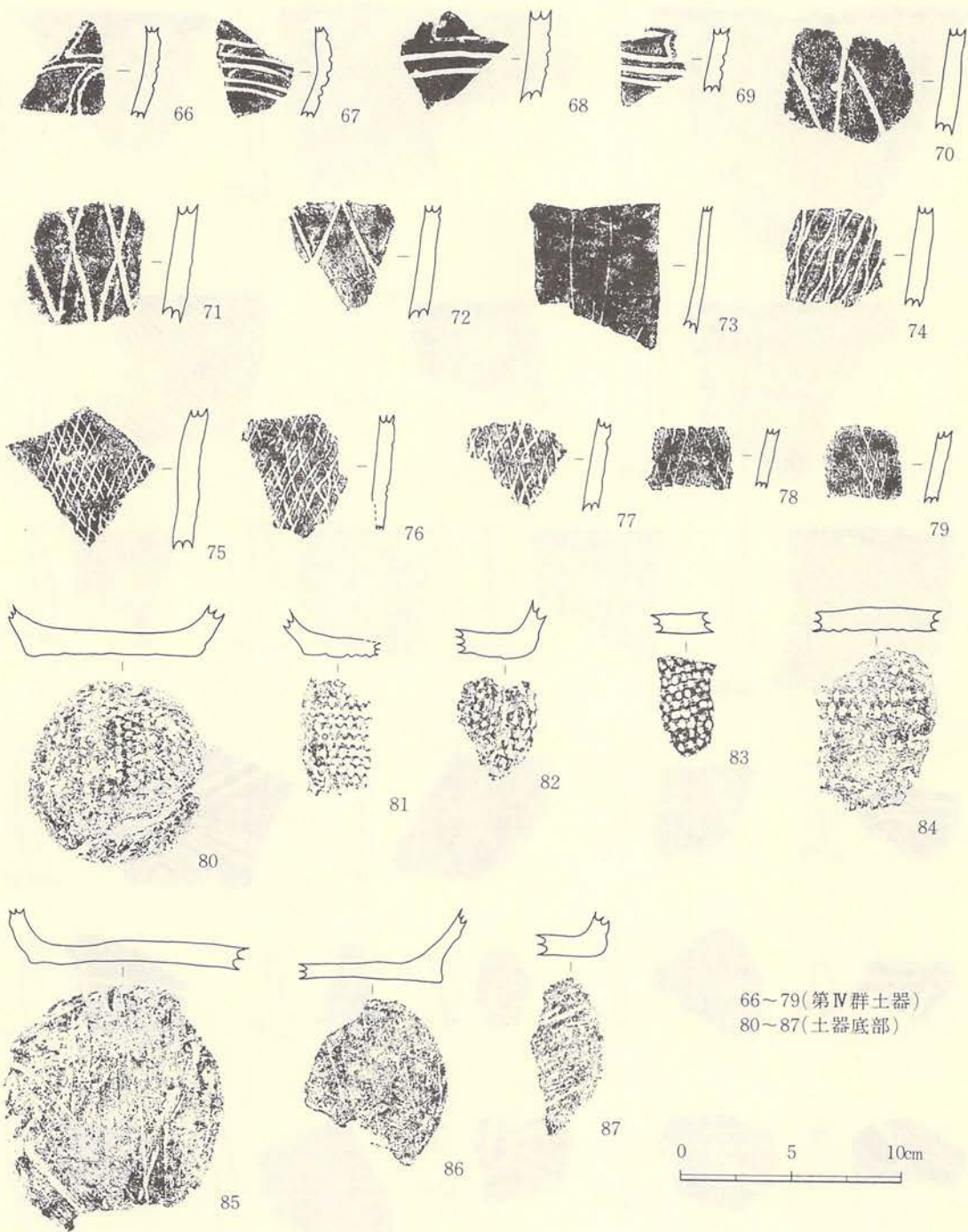


42~51 (第II群土器)

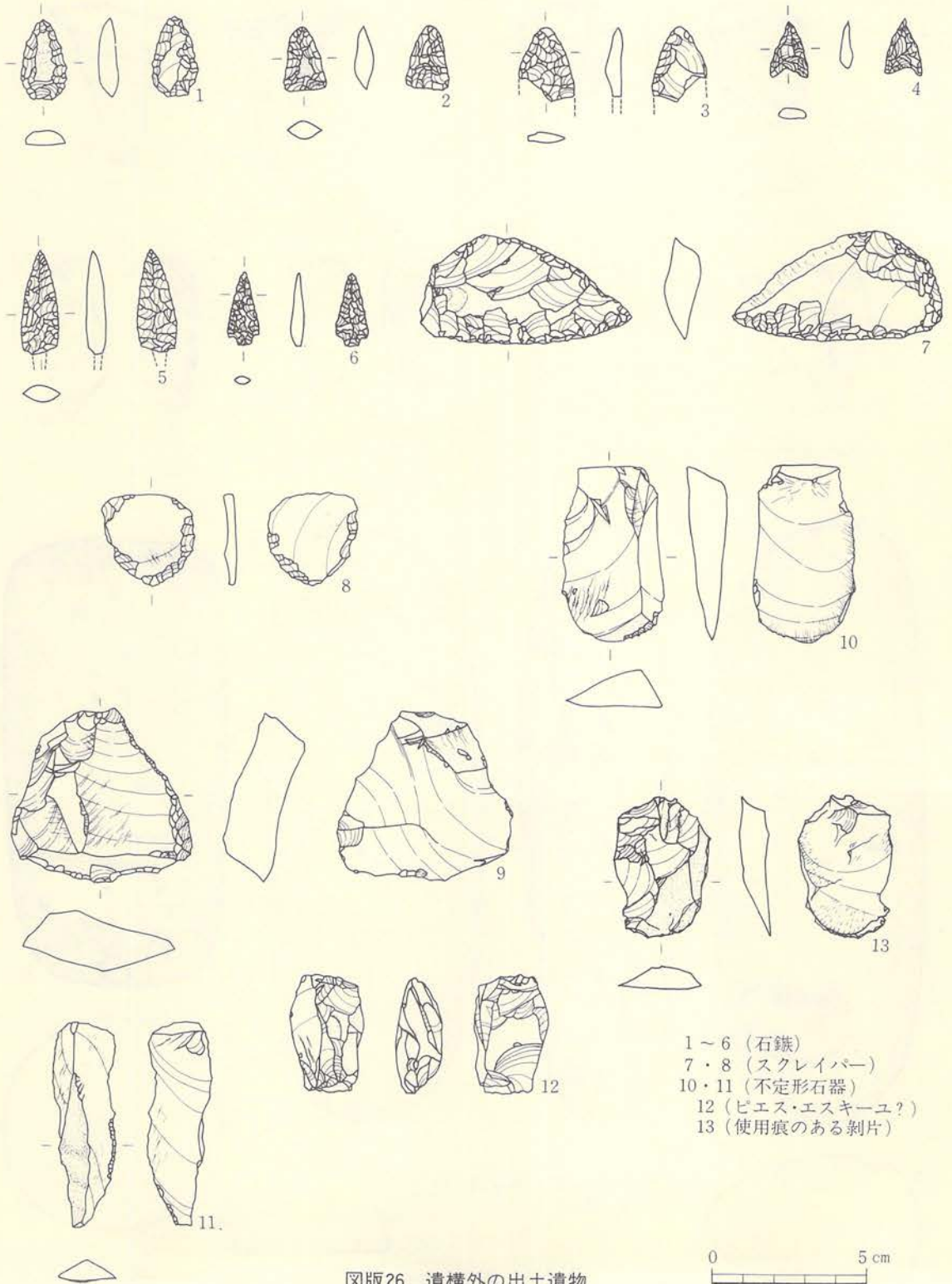
52~65 (第III群土器)

図版24遺構外の出土遺物

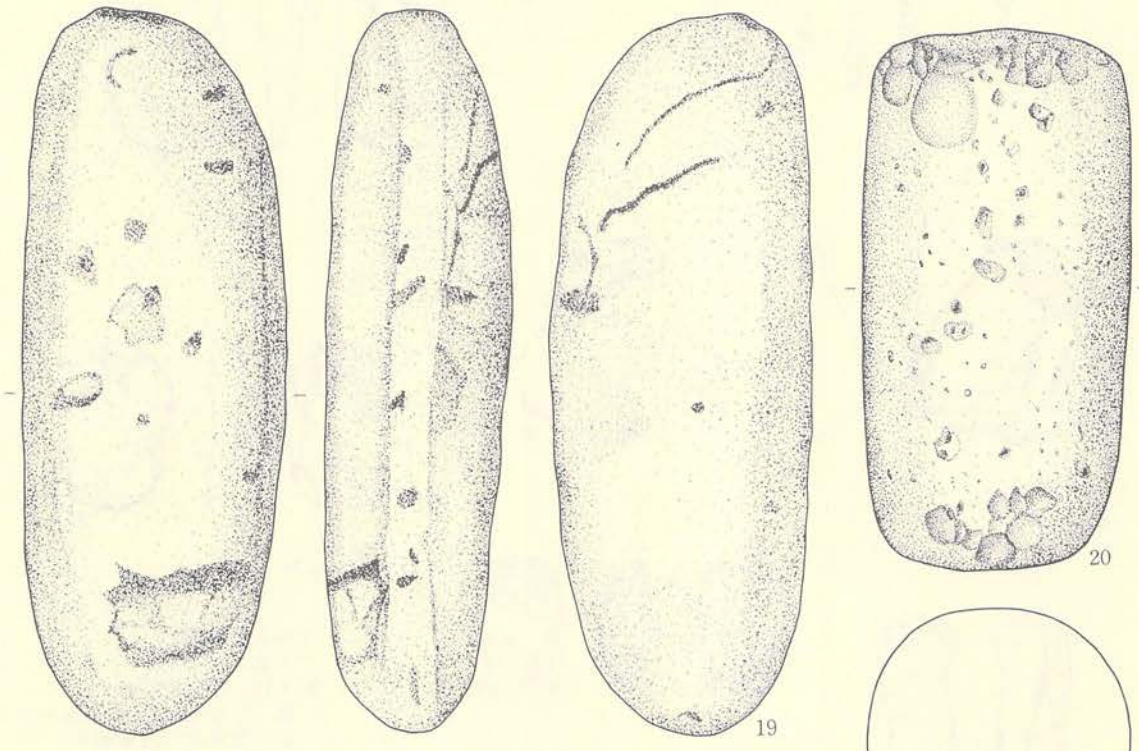
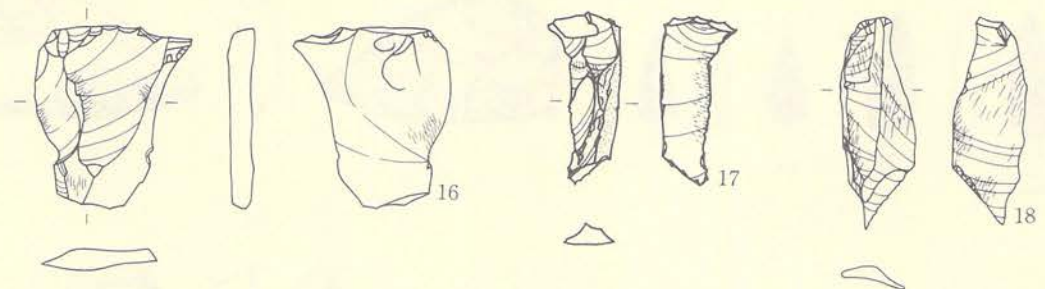
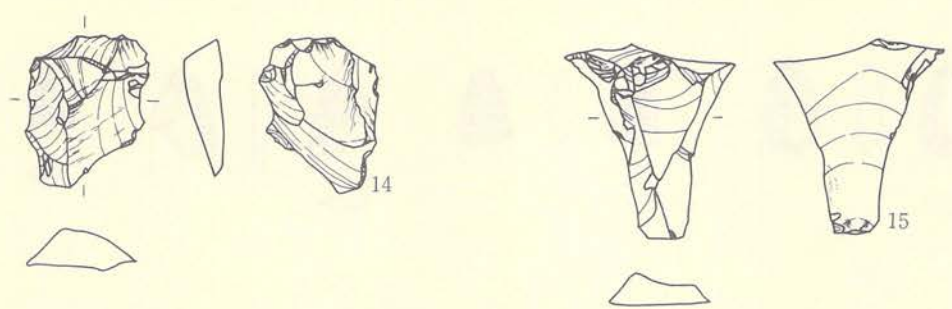
0 5 10cm



図版25 遺構外の出土遺物



図版26 遺構外の出土遺物



14~18 (使用痕のある剥片)
19・20 (磨石)

0 5 cm

図版27 遺構外の出土遺物

IV まとめ

本遺跡は縄文時代中期末葉を主体とする集落であり、今回の調査の結果検出された遺構には住居址、竪穴状遺構、炉址、土器埋設遺構、土壇などがある。前項では個々の遺構と遺物について報告を行ってきた訳であるが、ここでは遺跡の概略を簡単に総括し、若干の考察を加えた。

1. 遺構

今回の調査は二戸バイパス建設工事に伴う遺跡発掘調査であった。このため、当然のことながら調査の範囲はバイパス路線幅に限定されて、幅40m長さ650mの細長い調査区となった。従って遺跡全体の範囲及び様相は不明であるが、東西方向には幾分延びる余地がありそうである。(本遺跡北方の下村A遺跡には関連遺構は発見されず、南方は馬淵川の蛇行によって侵食された断崖となっている。)

住居址は、平面形が円形を呈するものから、隅丸長方形のものまであり各様である。このうち楕円形乃至隅丸長方形の住居址(C d 65、C e 68、D c 03住居址)は炉の構築方法や、「出入口状施設」等の共通点を持つ。炉は大きな割石を使用して方形に囲んだものであるが、規模が大きく堅牢な造りをしている。また「出入口」状施設と呼称したものは、住居の一隅に並置された2個の礫である。この礫は置いたものではなく、埋めこまれたものである。炉はこの礫が埋めこまれた壁の方向に片寄っている。このような礫の並置の存在を「出入口」状施設と想定した遺跡としては昭和52年に当センターが調査を行った都南村湯沢遺跡がある。報告中で「出入口」状施設の諸事例として次の様な例を挙げている。多くの例として、長大な礫を2個壁に直交させて並置する。立石を伴う礫間に窪みを伴うなどの例も見られるようである。住居1棟に1施設を原則としており、炉に近い壁際に位置する。この様な事例は、本遺跡の3棟にも酷似している。また、九戸郡軽米町の吠屋敷Ⅲ遺跡のC-I-1住居址、C-Ⅲ-1住居址でも同様の施設が検出された。二戸郡九戸村江刺家V遺跡Z I 01-1住居址壁際に並ぶ礫も同様の施設であろうか。湯沢遺跡・吠屋敷Ⅲ遺跡・江刺家V遺跡の各住居址は共に、縄文時代中期末葉に位置付けられており、本遺跡とも合致する。このことから、壁際に礫を配置した施設はこの時期の住居址構造における一つのタイプと考えられる。この様な施設を「出入口」と考えた場合、住居内部の空間利用に一つの共通事項が見出される。炉址がこの「出入口」状施設に近い方向に傾っていることから、炉は出入口に近い位置に構築され、炉の奥に広い空間を持たせたということである。

ある。

この施設が出入口であると断言するには、まだ各種の資料の増加等を待たねばならないが、縄文中期末葉の一例として可能性を提示しておく。

2. 遺物

遺物はあまり多くなく、復元土器23点、石器32点、(剥片を含めて図示した石器数である)の他、コンテナ10箱に相当する遺物が得られた。

土器は前項の記述中でも触れてきたが、縄文時代中期末葉を主体とし、後期初頭土器を少量含むものである。遺構に伴う土器は前者で占められる。他に少数の中期初頭土器片が出土している。前項「遺構外出土土器」の項で、土器群を第Ⅰ～Ⅱ群に分類して記述したが、本項では上村遺跡の主体をなす第Ⅱ群土器を中心に、その編年的位置付けなどを中心として総括しておきたい。

第Ⅱ群土器類について

この群に含めた土器はC e 68住居址、D c 03住居址、D f 03住居址等から出土する土器群を指標とした。しかし、床面密着の遺物が少なく、共伴関係は成立していない。深鉢が主体を占めているが、全体量が少ないこともあって完全な土器組成は把握できなかった。器形、文様帯、モチーフ等の特徴から以下の様に整理・細分した。

深鉢A 胴部中半に脹らみを持ち、頸部～口縁部を外反させる深鉢群のうち、口縁部外面を無文帯とする土器群である。図版7-4に代表される。胴部文様帯の有無により、A₁、A₂に細分される。

A、胴上部に文様帯を持つ土器群である。口縁形は波状口縁、平口縁の別がある。波状口縁の頂部裏面には「鱗」状突起を貼付しているのが通例で、平口縁においてもその例は見られる。

胴部文様は沈線区画文によって、無文部と地文部とに区画される。この場合地文技法は擦消縄文、充填縄文とが見られるが、前者が多いようである。沈線区画文の一部は「鱗」状突起に転化する土器が多い。これらの施文手法で描かれた文様は、「コ」字状地文部、「S」字状、「U」字地文部を形成する。胴部文様の下限は波状沈線文で仕切られ、下部は地文帯とする。波状沈線文はやはり、一部に「鱗」状突起を貼付する例が多い。また主たる文様が、この境界線に代わるもの(図版20-2)も見られる。少数例であるが、「鱗」状突起を貼付しない土器類、「鱗」状突起発生以前の土器も見られるが、破片のため、詳細は不明である(図版15-1、22-11等)。

とした土器類は後述するいわゆる粗製土器に含まれる土器グループだが、深鉢A₁に類似した器形で、口縁部外面を無文帯とし、内面に肥厚帯+「鱗」状突起を付す点からA₂とした。

深鉢B A₁に類似する深鉢のうち、口縁部文様帯を持つ土器である。僅少出土。図版7-1の他破片が1点出土している。口縁部の波形の単位数などに前項とは異なる様相が見られる。

深鉢C 前2類に見られた頸部のくびれがなく、内屈して口縁が幾分反るものである。頸部の屈曲部に隆帯+刺突帯が見られる。これらの文様は上昇して口縁で突起を形成する。胴部文様は前2類と共通する。(図版8-9)。他に同様の口縁部文様帯を持ちながら、頸部以下を地文帯とする土器(図版12-2)も見られる(C₂)。

深鉢D 以上に伴ういわゆる粗製土器類である。復元土器が少なく全容は把握し得ない。

壺形土器 厳密にはこの呼称が妥当かどうかかわからないが、胴部径に比して口縁がすぼむものをこれに当てた。図版19、20-5等が含まれる。

以上の第Ⅱ群土器は中期末葉の大木10式土器に相当しよう。深鉢A、Cにおいて特徴視される点は、「鱗」状突起の貼付、あるいは口頸部の隆起線+刺突帯にあり、岩手県内では江刺五十瀬神社前遺跡、北上市鬼柳遺跡、一戸町田中4遺跡などの出土土器類に類示例が求められる。これらの土器群は宮城県西の浜見塚第4層出土土器を指標とする大木10後半の土器群に比定されるものである。大木10は従前より、2、3の段階に区分される傾向にあったが、近年円羽氏はこれを四段階に細分されている。(円羽：1981) 本遺跡第2群土器の大半は円羽氏の言われる第Ⅲ段階に含められよう。先に述べた少数例の土器群(「鱗」状突起の見られない土器群)は第Ⅱ段階に可能性がある。

深鉢Bは、口縁部文様帯の形成に上記土器群との相異点がある。胴部文様のモチーフは大木10のそれから脱脚するものではなく、大木10の範疇に含めて考えたものであるが、前述の四段階区分の中には類例が認められない。口縁文様帯の形成は第Ⅲ段階に起り、以後後期初頭土器へ移行する間隙を埋める土器群として第Ⅳ段階を設定したものと思われるが、まだ詳細は明らかではない様である。本遺跡深鉢Bは第Ⅲ段階以後の土器群の一つの在り方を示すものと考えた。東北北半は円筒土器以降、大木式土器の分布が広く及んでいるものの、やはり根強く独自の(と思われる)土器型式の系譜を保っている。それは榎林式、最花式などの土器型式名が繰り返して提唱されてきた経緯にも窮われる。さらに大木10の末葉の土器群を考えることは、次の後期初頭土器の発生を認識することでもある。この点からB類深鉢を再考するならば、口縁の波状に見られる8単位は十腰内Ⅰ式の系統土器への関連が推察される。また隆帯の貼付及び隆帯上の縄文などは、やはり十腰内Ⅰ式系統土器の口縁部文様帯に連がる施文要素であろうと考えた。十腰内Ⅰ式は近年先学によって細分化が行われており、蜚沢式などの前型式も認識されつつある。本遺跡第Ⅱ群B類深鉢は蜚沢式よりもさらに大木10式土器の色濃く、また、蜚沢式土器の口縁部肥厚帯への関連が考えられるものとして、円羽氏の大木10Ⅲ段階以降の土器と扱えた。し

かし、出土状況からはⅢ段階土器との新旧を裏付ける状況は得ておらず、あるいはⅢ段階中にすでに上記への関連性が始まっているかもしれない。尚、胴部破片中には、大木10式土器以降の土器片を混同した恐れがある。これは破片のため、直後の土器と明白に識別できなかったことによる。

第Ⅲ群土器

少数例であり、全体像は把握できなかったので詳述は避けた。後期初頭の沈線文を主体とする土器群である。しかし、隆線+沈線によって描かれた文様もあることから、すべてが十腰内Ⅰ式(Ⅰa式)に含まれるものではなく、その前型式の土器群も混在している可能性がある。

遺構の時期

各遺構は前述に示した出土遺物によって、大概大木10式土器の後半(円羽第Ⅲ段階)に相当するものである。しかし、詳細はやや異なるものも見られ、Dc 03住居址は第Ⅱ段階に、Cd 65住居址は大木10以降の可能性も否定できない。全体としては中期末大木10式後半期を中心として形成された小集落が把握される。

(引用、参考文献)

- | | | |
|------------------|-----------------------------------|-------|
| ①高橋文夫・三浦謙一 | 都南村湯沢遺跡 (財) 岩手県埋蔵文化センター | 1977年 |
| ②高田和徳 | 田中4遺跡 (一戸バイパス関連報告書Ⅰ) 一戸町教委 | 1981年 |
| ③丹羽茂 | 「大木式土器」 縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 雄山閣 | 1981年 |
| ④成田滋彦 | 「青森県の土器」 | 〃 |
| ⑤葛西励 | 「十腰内Ⅰ式の編年的細分」 北奥古代文化11号 | 1979年 |
| ⑥ 〃 他 | 「蛭沢遺跡」 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 | 1979年 |
| ⑦今井富士雄・磯崎正彦 | 「十腰内遺跡」 『岩木山』 | 1968年 |
| ⑧鈴木隆史 | 北上市奥柳遺跡 (岩手県新幹線関連遺跡調査報告書Ⅳ) 岩手県教委 | 1979年 |
| ⑨鈴木優子 | 石鳥町高畑遺跡 (〃 V) 〃 | 〃 |
| ⑩(財)岩手県埋蔵文化財センター | 「吠屋敷Ⅰb遺跡」「江刺家Ⅴ遺跡」(岩手県埋蔵文化財発掘調査略報) | 1982年 |

した^{した}村^{むら} A 遺 跡

1. 遺跡所在地 岩手県二戸市米沢字下村
2. 調査担当者 四井謙吉
3. 調査補助員 高田和徳・坂川 進
4. 調査期間 昭和49年8月12日～9月9日
5. 調査対象面積 3450㎡
6. 発掘面積 9910㎡
7. 遺跡記号 SM-A74

I 住置と立地

本遺跡は東北本線北福岡駅から直線距離で約2,400m北北東に、遺跡の西約60mを東北本線が走っている。また本遺跡の南端は二戸バイパス関連の上村遺跡北端から約80m北に、北端は下村B遺跡南端から約230mを測る距離にある。

遺跡からみて馬淵川をはさんだ東方対岸に二戸市街が望まれる。遺跡の現状は畑地として利用されていた。

遺跡の東方約200mで北流する馬淵川左岸に達する。この間に形成された米沢段丘（段丘についてはⅡ項の二戸地区の概観を参照）上に本遺跡は立地する。段丘面はほぼ平坦で、標高103m～105mほどであり、隣接する下村B遺跡・上村遺跡もこの段丘面に乗っている。

Ⅱ 基本層序

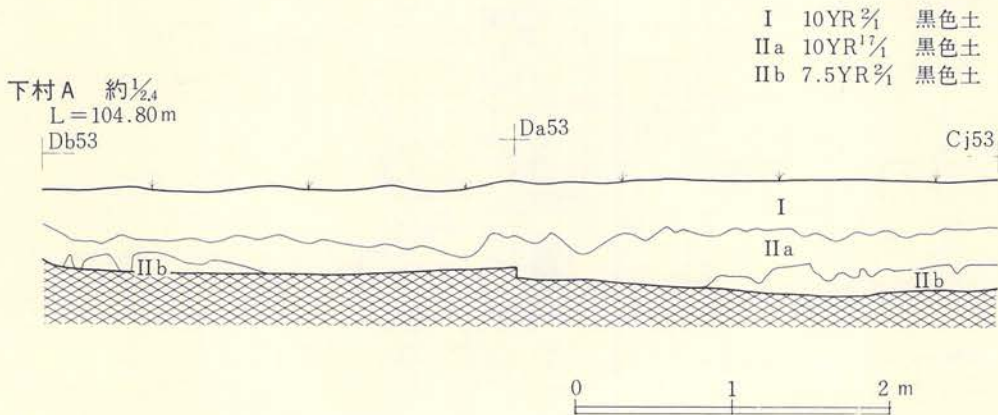
本遺跡の土層観察は Db 53地点から Cj 53地点（図版1・2、写真図版4）で行ない地山面までである。上位から順に述べると、

I 層 10YR2/1 黒色土 指痕がはっきりつき粘性に乏しい、層厚15cm±～40cm±(表土)

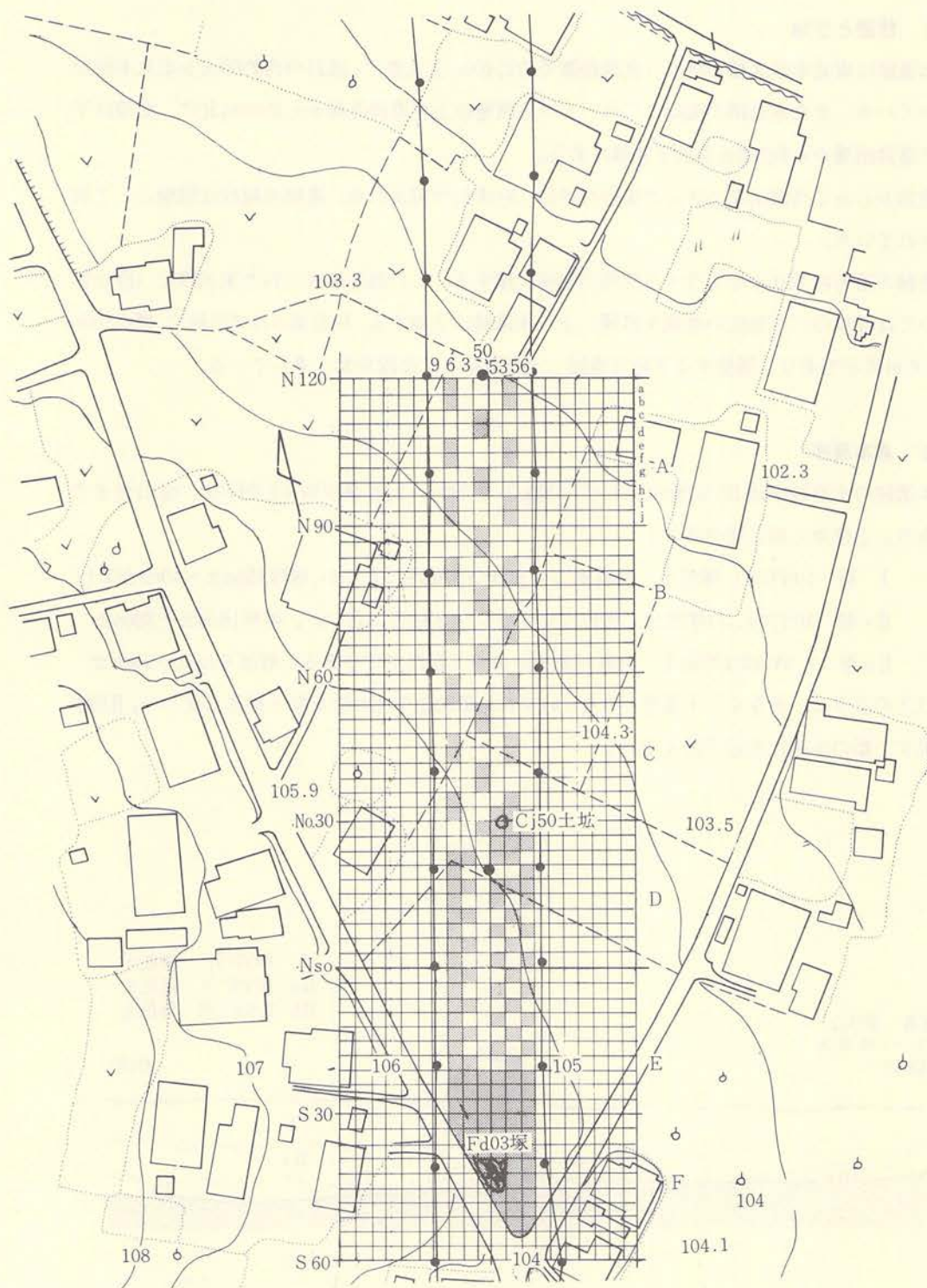
Ⅱa層 10YR1.7/1黒色土 指痕がかずかにつき粘性に乏しい、層厚16cm±～38cm±

Ⅱb層 7.5YR2/1黒色土 指痕がかずかにつき粘性がややある、層厚6cm±～18cm±

以上のように、大きくⅠ・Ⅱ層となり、いずれも黒色土でⅡb層を除き粘性に乏しい。Ⅱ層中に縄文土器の小破片を若干含んでいる。



図版 I 基本層序



図版 2 地形図、グリッド遺構配置図 1 : 100

Ⅲ 発見遺構と出土遺物

遺構は塚1基と土杭1基であり、遺物は縄文土器の小破片18点、フレイク1点、短刀とみられる刀身部の断片1点が出土した。

1 塚

d03塚

遺構（図版3 写真図版3）

調査区域の南端に位置し、遺構のすぐ南でY字状に分岐した道路に挟まれている。

平面は楕円状を呈し、東西4.80m・南北6.00m、西側を除き三方を囲む弧状の溝があり、幅1.20m～0.60m・深さ0.40mである。この溝は発掘前の表面観察では確認できなかった。

断面土層は（図版3 A-A'・B-B'）は色調、土性、含有物などにより10層に細分されるが、盛土とみられるのは、 a_1 ・ b_1 ・ b_2 の褐灰色・黒褐色・黒色土であるが、 a_1 は5cm～10cmほどの丸味をおびた礫を含み、木根（松・桜）や草根が多量に入りこみ攪乱が著しく、塚の頂部は削剥または下方へ流れ層厚は非常に薄く、本来的な盛土のみではなく、周辺からの上げ土と現表土も含んでいる。 b_1 ・ b_2 層は黒褐色土・黒色土とともに粘性に乏しいが、 b_2 層が b_1 層よりやや粘性がある。盛土の層厚は塚最頂部で a_1 層が8cm・ b_1 層が50cmである。

塚の周囲にある s_3 ・ a_4 層の黒褐色土は礫をまばらに含み、非常にかたく、攪乱がある。溝の埋土 b_3 ・ b_4 の黒褐色土は色調に若干の差違はあるが、粘性に乏しく小礫を含むなど類似する。C・D層の黒褐色土は基本層序のⅡa・Ⅱb層に相当する。

断面の観察から、塚は表土のC層上に b_1 ・ b_2 層および a_1 層を盛土して構築し、表土面から溝を掘りこんでいる。

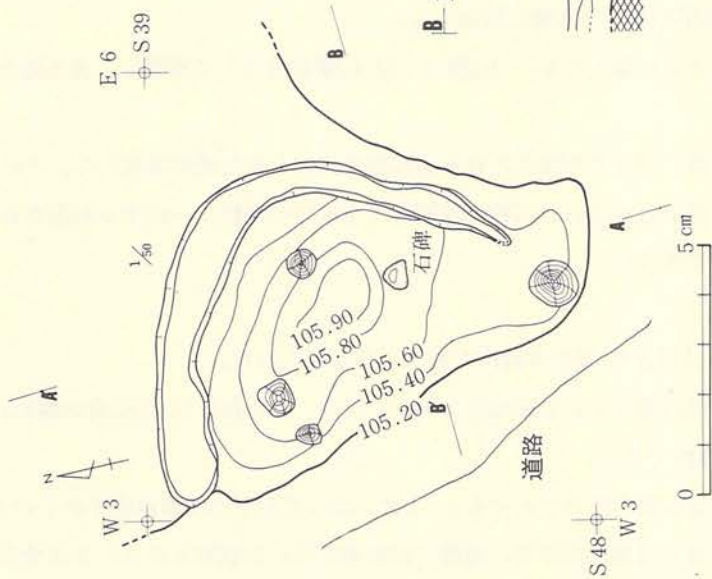
塚の最頂部南ろくに「天保」の年号が読みとれる馬頭観音碑と小さな社やしろが現存した。それ以外は塚に伴う施設は全く検出されない。石碑の設置年代が年号の時期に一致するか否かも不明であり、塚の年代は特定できない。

遺物（図版4 写真図版5）

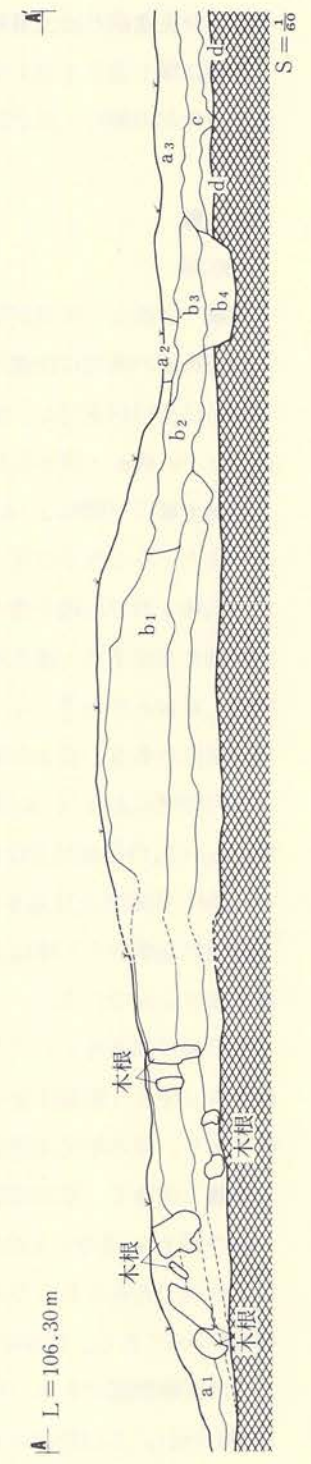
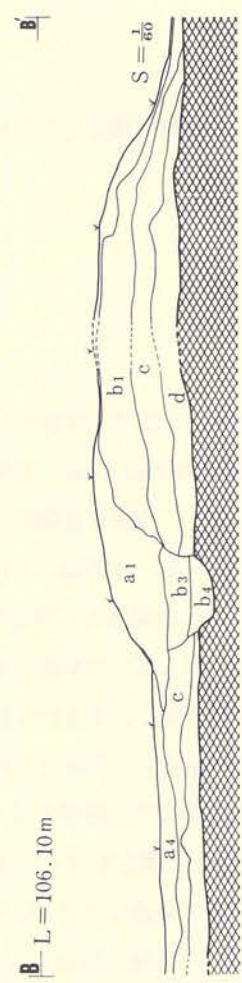
塚の盛土 a_1 層から1点の鉄器と b_1 層から数片の縄文土器が得られた。

1は短刀とみられる刀身部の断片である先端部を欠いており、現存長は13.4cm、身の幅2.1cm棟幅0.3cmである。遺存は良好である。

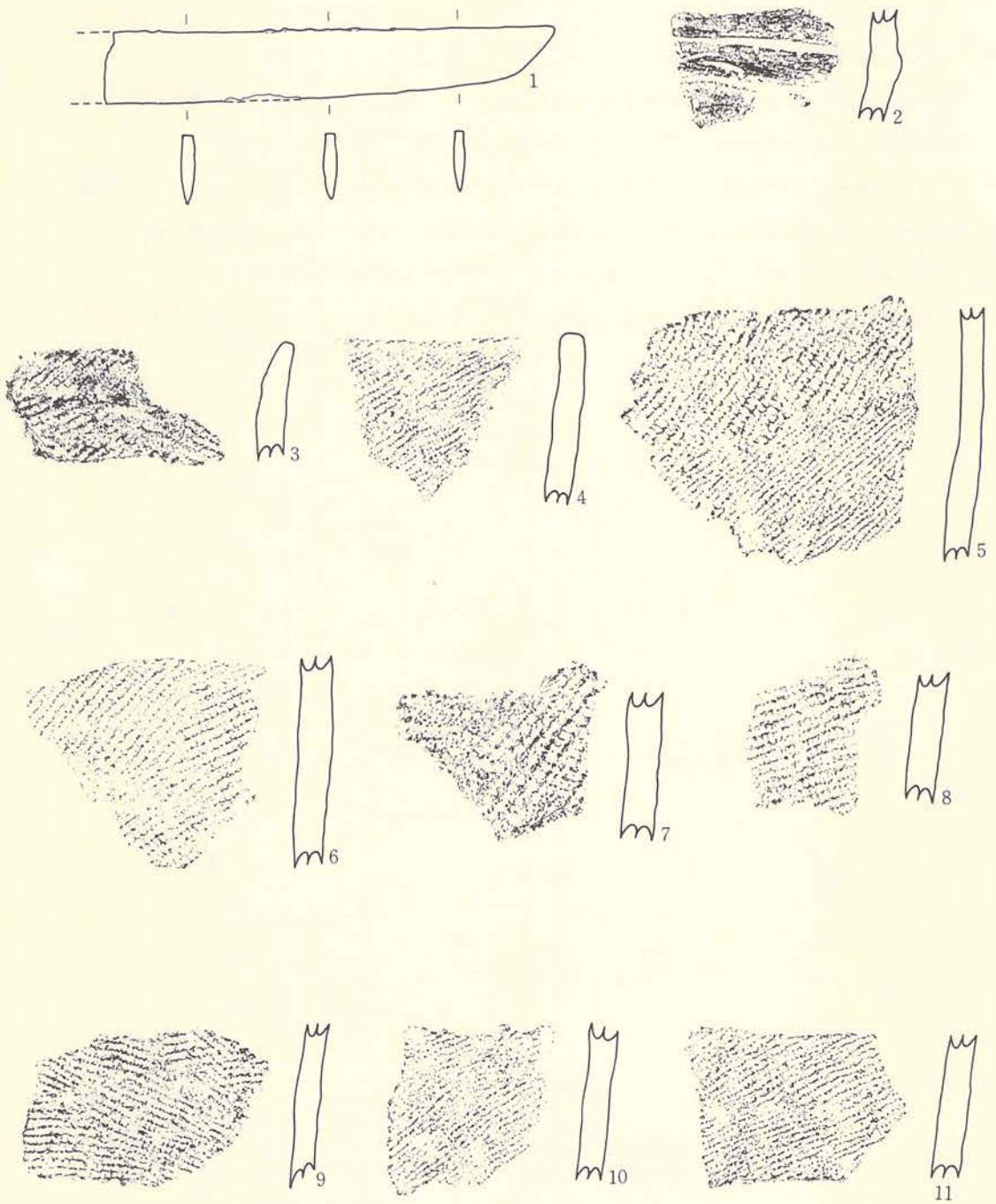
2は深鉢胴部である。約1cm幅の隆帯をめぐらし、これに沿って上下に沈線が施されている。（時期不明）。3以降はいわゆる粗製土器片で、器面に回転縄文のみが観察される。3はやや外反する口縁部片で、地文はLR（単節縄文）横回転。4の口縁部は幾分内湾気味で、口唇は直角にナデられている。5～11は胴部片である。



- a1. 10YR 4/1 褐灰色土層
- a2. 10YR 2/1 黑褐色土層
- a3. 10YR 2/2 黑褐色土層
- a4. 7.5YR 2/2 黑褐色土層
- b5. 7.5YR 3/1 黑褐色土層
- b6. 10YR 2/1 黑色土層
- b3. 7.5YR 2/1 黑色土層
- b4. 7.5YR 1/1 黑色土層
- c. 10YR 1/1 黑色土層
- d. 7.5YR 2/2 黑褐色土層(含礫)



図版 3 F d 03 塚平断面図



0 5 cm

图版 4 F d 03 塚出土遺物

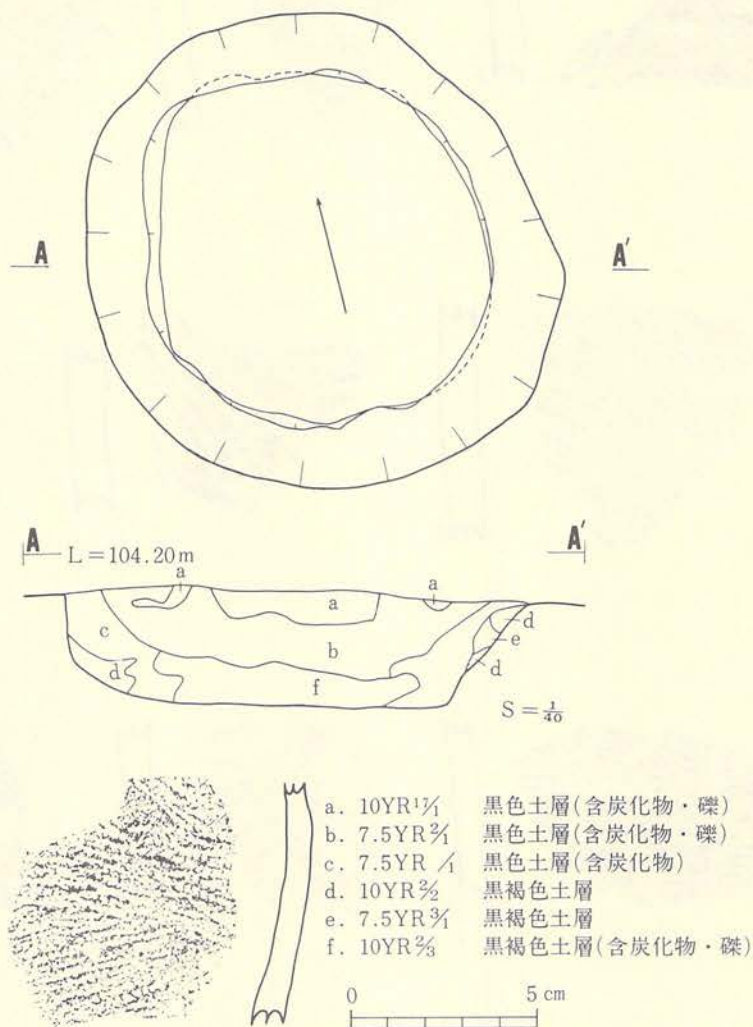
2. 土 塚

Cj50土塚（図版5 写真図版4）

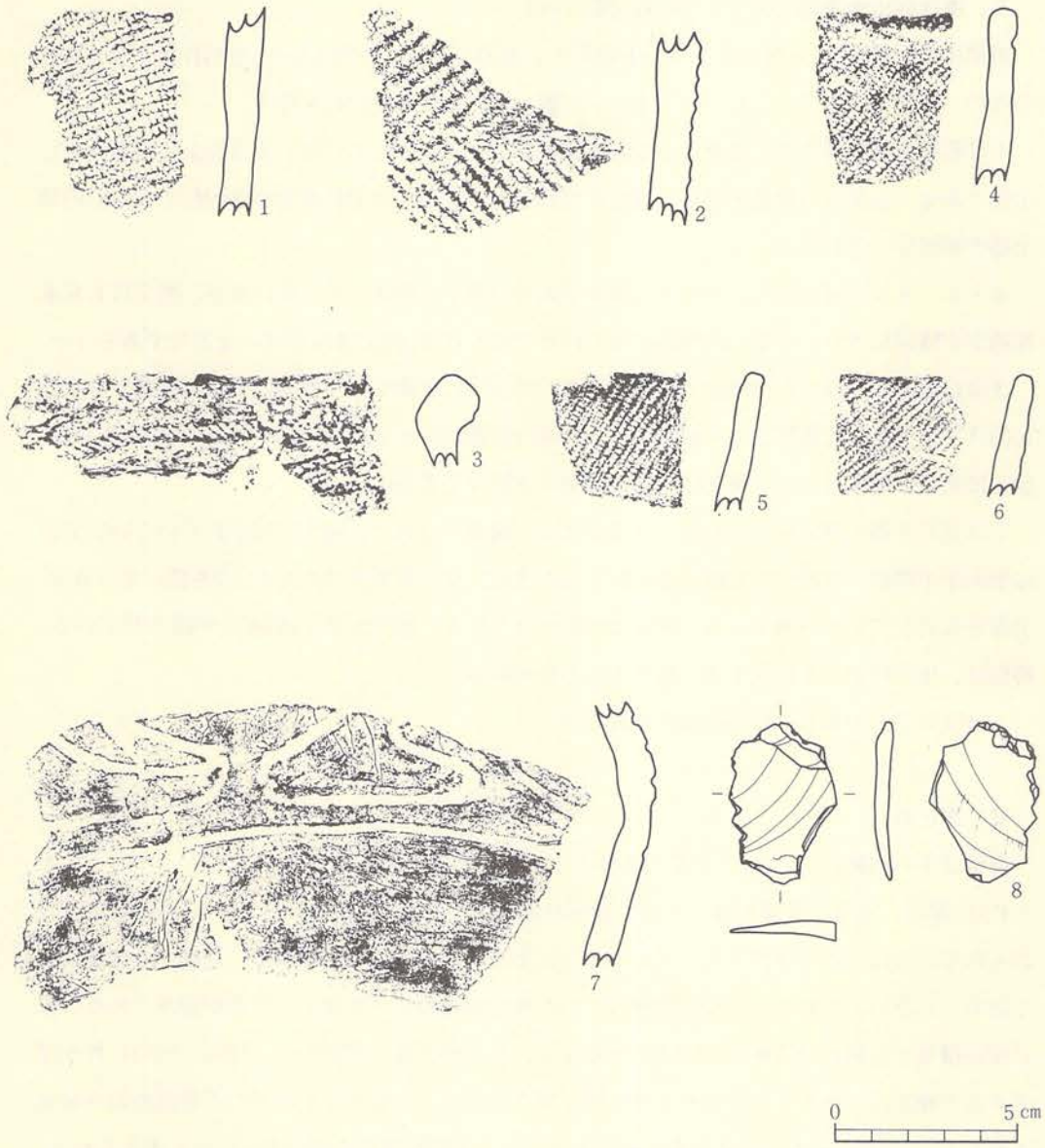
平面はほぼ円形で、口径が東西2.50m・南北2.60m、底径は東西1.74m・南北1.80mあり、検出面からの深さは0.60mを測る。壁は外傾する立ち上がりである。

埋土は黒色土と黒褐色土からなるが、土性と含有物などでa～fに細分される。a・b層の黒色土とf層の黒褐色土は、ともに炭化物和小礫を含み、C層の黒色土も炭化物を含む。これらは埋土の主体をなす。壁ぎわに流れ込むd・e層の黒褐色土は炭化物を含まない。

土塚内からの遺物は、埋土から縄文土器片が一片のみであり、当土塚の時期は不明である。



図版5 C j 50土塚平断面図と出土



図版 6 遺構外の出土遺物

3、遺構外出土遺物 (図版6 写真図版5・6)

遺構検出作業中のⅡa層から7点の土器片と1点のフレイクが出土した。土器片はすべて細片のため、時期を識別できるものは少ない。図版6に従って順次記述を行う。

1は粗製深鉢胴部片で、器面にはLR単節縄文で縦回転されている。2は胎土に繊維を含む土器である。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。地文は羽状縄文の横回転である。円筒土器の胴部片と思われる。

4・5・6は口縁が僅かに内湾する深鉢である。薄手で焼成・胎土共に良好。地文はLR単節縄文が横回転されている。内外面に煤の付着が見られる。縄文後期以降の土器片であろうか。

3は口縁部が肥厚した深鉢片で内面は「く」の字状に屈曲する。外面の口縁部隆帯から下方に向けて貼付された隆帯が見られるが、これらの隆帯に沿って縄文の原体が押捺されている。胎土は粗く、焼成は甘い。縄文時代中期前葉の土器片である。

7は壺形土器の胴部片と思われる。器面はナデ調整が行われ、縄文は施されていない。文様は胴部前半の横位沈線文で終結する。胴上部の沈線文はフラスコ状のモチーフを描いているが、上部を欠失していて不明である。時期は明瞭ではないが、無文土器に沈線文が描かれている。特徴は、後期初頭の十腰内I式に相当すると思われる。

8はフレイクである。使用痕はみられない。

VI まとめ

遺構はFd03塚とCj50壇の発見である。

Fd03塚は、盛土と西側を除く三方に弧状の溝をめぐらし構築したものである。西側に溝が認められないのは、直接道路に面していることによる可能性もある。塚本体に付属する施設は全く認められない。頂部南ろくに設置されていた馬頭観音碑に「天保」の年号が読みとれた。仮に塚の構築と石碑の設置年代を同時とするなら、江戸時代末の天保年代(1830～1843)に比定できるが確証はできない。石碑や小さな社えいしやが現存したこと、盛土から短刀の刀身部先端が発見されたこと、松や桜の木が植えられてあったことなど信仰的施設の場であったかと考えられる。

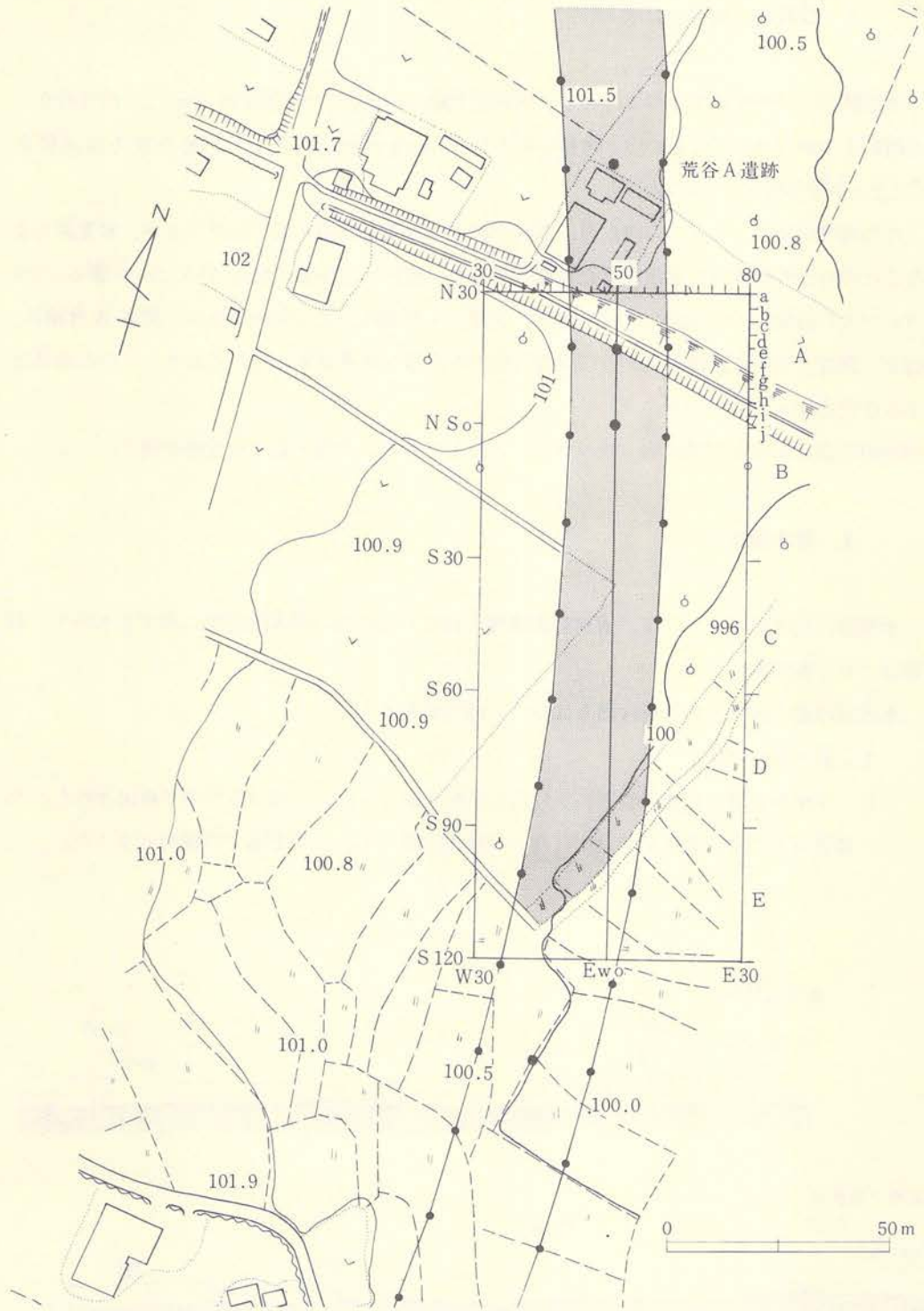
Cj50の土壇については、埋土から出土した縄文土器片が1点のみで年代を特定できず、土壇の性格も不明である。

土器はいずれも破片のみであり出土数も少ない。時期的には縄文早期の円筒下層の繊維を含む土器、中期前葉の土器、後期初頭の十腰内I式相当の土器などが認められるが、ほとんどは時期不明の縄文土器の破片である。

本遺跡の調査範囲での結果は述べてきたとおりであるが、基本層序Ⅱa層に土器片の包含がみられることから、調査範囲外、つまり路線巾外に遺構を含む地域が存在する可能性もある。

したむら 下村 B 遺跡

1. 遺跡所在地 岩手県二戸市米沢字下村
2. 調査担当者 第1次 四井謙吉
第2次 四井謙吉・高橋信雄
3. 調査補助員 第1次 高田和徳・坂川 進
第2次 高田和徳・坂川 進・洪屋英保
4. 調査期間 第1次 昭和49年9月2日～9月14日
第2次 昭和50年5月15日～11月7日
5. 調査対象面積 3270㎡
6. 発掘面積 第1次 180㎡
第2次 3090㎡
7. 遺跡記号 SM-B74・75



図版 I 下村 B 遺跡地形及びグリッド配置図

I 位置と立地

本遺跡は二戸市米沢字下村に所在し、国鉄東北線「斗米駅」の東南約0.5km、二戸市役所から北西約1.4kmの地点に位置する。遺跡の東方約0.3kmを馬淵川が北上し、また東方には標高852.2mの折爪岳が望まれる。

この馬淵川によって多くの段丘面が形成されていることは前々項で記述したが、本遺跡もまたこれらのうちの中位の米沢段丘面に載っており、遺跡の主体部の標高は100.5mを測る。二戸バイパスの路線上では周囲に家の上遺跡、下村A・B遺跡、上村遺跡が並ぶ。荒谷A遺跡は、前文、調査の方法で記載したように調査当初から密接な関連が考えられており、二つの遺跡は小さな沢を挟んで隣接する。

周囲の現況は水田及び果樹園（リンゴ園）となっており、大概平坦な段丘面が続く。

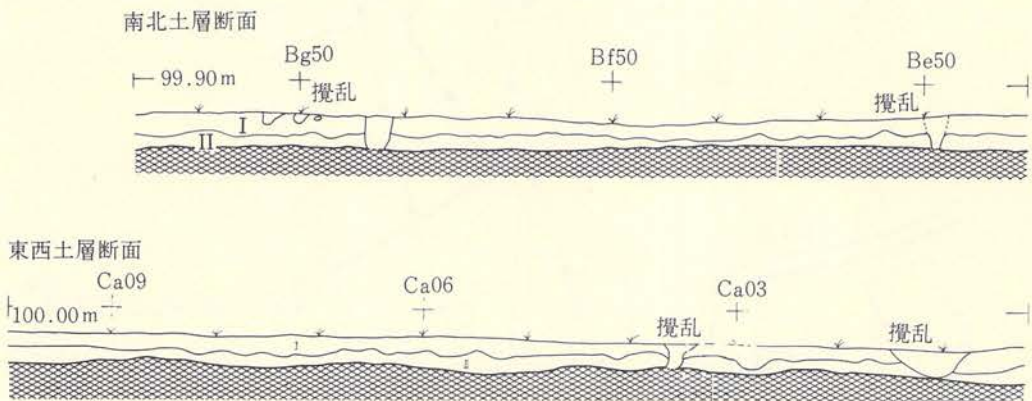
II 基本層序

本遺跡の基本層序は、前文、**遺跡群の環境**に記述した周囲の基本的層序に準ずるもので、詳細はこれを参照されたい。

本遺跡の基本層序及び遺構検出面は以下の通りである。

I. 表土層。黒色土

II. 黒色砂質層。白色の軽石粒子を含む。配石群と一部の土塊はII層中で検出された。土塊群の多くは、II層中で遺構プランの検出が難しく、二層下面での検出となった。



図版2 土層断面図

Ⅲ 発見遺構と出土遺物

調査の結果、検出した主な遺構には縄文時代の竪穴住所址5棟、炉址2基、配石遺構群、土壙群、溝址、土器埋設遺構、中世と思われる住居址2棟等がある。遺物は、遺構及び遺構外から得られた縄文式土器（縄文時代中期末～後期初頭を中心とする）及び石器類が主体で、総数は約25箱である。

1. 縄文時代

(1) 竪穴住居址

A h 0 9 住居址

遺構（図版3、写真図版2）

隅丸方形を呈し、規模は3.5m×3.6mを測る。検出面から床面までの深さは20cmで、壁は幾分の傾斜を持って立ちあがる。埋土は、2層に大別される。すなわち床面上を覆う薄い黒色土層（e層）と、その上層に堆積した黒色、黒褐色土層とである。上層はa～d層が入り組んだ堆積状況を示し、焼土・木炭を含有していることから、人為堆積による土層と思われる。

床面上には僅かな炭化物が散布しており、南西、北東隅に比較的多く見られる。しかし、炉の施設、あるいは炉と思われる焼土の集中部分等は検出されていない。壁際には、小穴を伴う溝が検出された。この周溝は隋所で、小穴状の窪みを形成し、また途切れるものである。

柱穴はこの周溝内から検出された柱穴状のピットがこれにあたると思われる。これによりP₁～P₈の8本柱による配置が得られた。

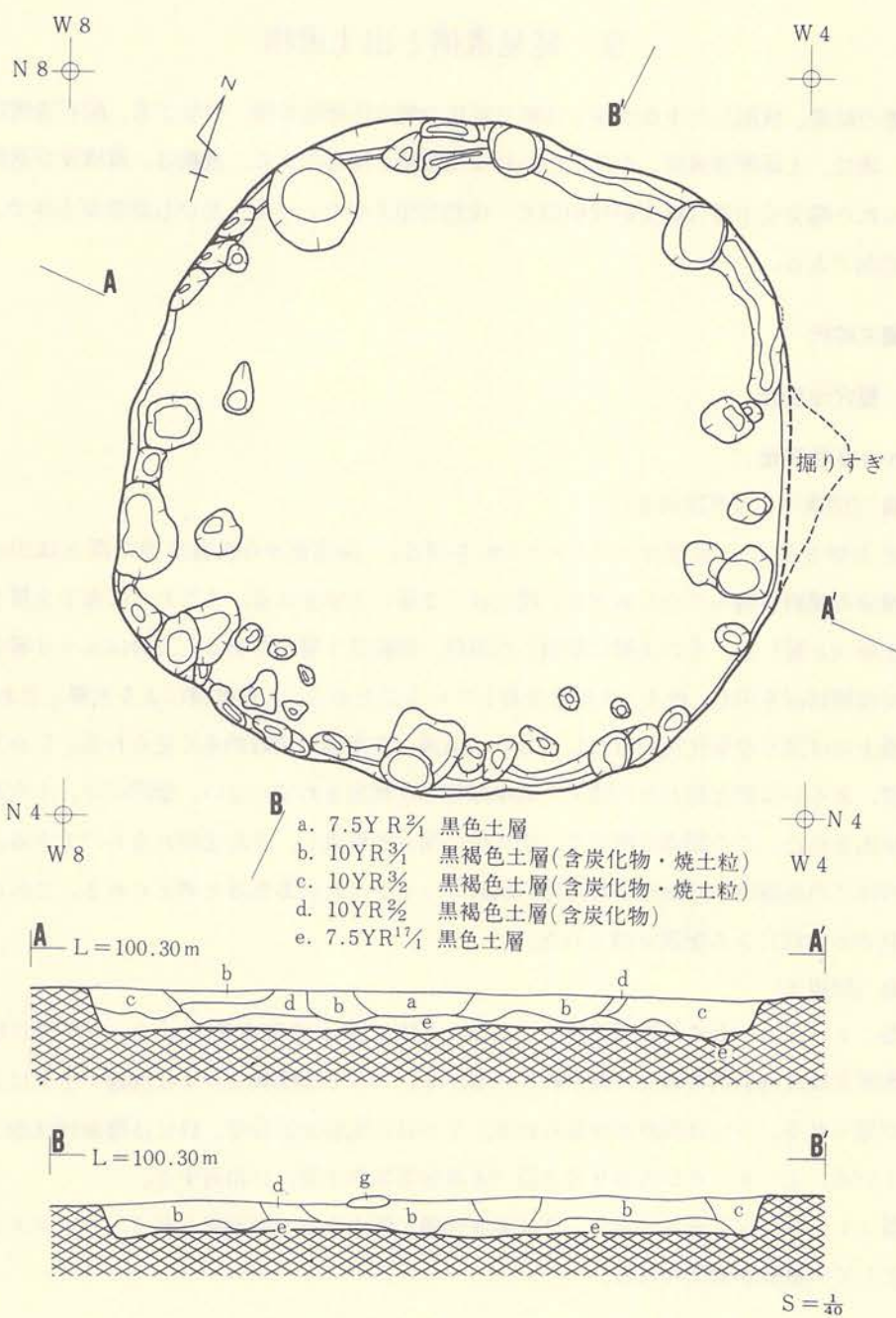
遺物（図版4）

土器：1～6はいわゆる精製深鉢片である。1は口縁が波形をなし、「く」の字状に屈曲する。胴部文様は□字状沈線文が施されている。2、3、6は隆線文、4は沈線+ナデによる懸垂文が見られる。5には渦巻文が見られる。7～11は粗製土器片で、11には櫛歯状沈線文が施されている。1～4、6は大木9式土器（本遺跡第Ⅲ群4類）に相当する。

石器：1～3はフレイクである。2は裏面側縁に僅かな加工痕が見られる。サイドスクレーパーとしての機能が考えられる。

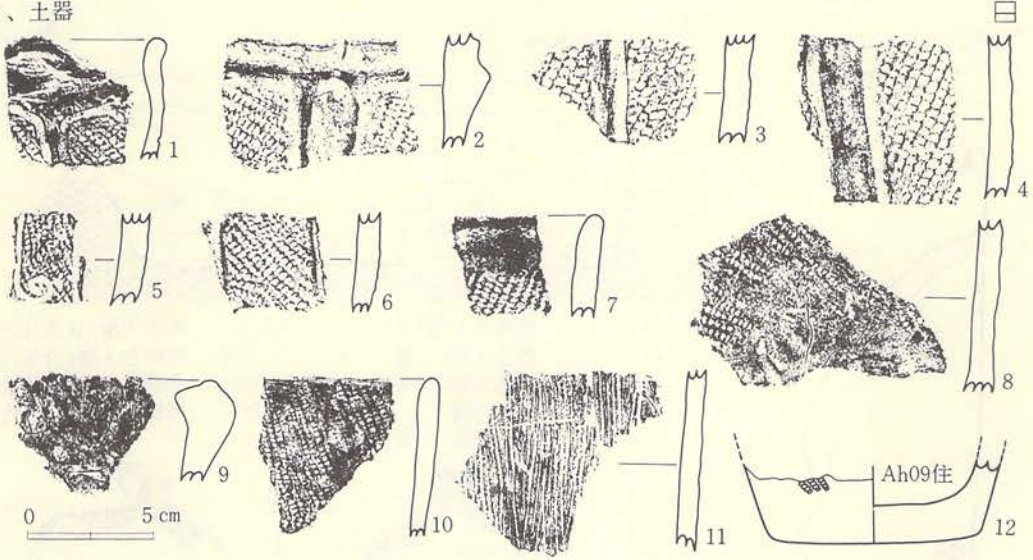
第1表 柱穴規模計測表

P _{no.}	径	深さ	備考	P _{no.}	径	深さ	備考	P _{no.}	径	深さ	備考	P _{no.}	径	深さ	備考
P ₁	31×25cm	32cm		P ₂	48×57cm	29cm		P ₃	29×28cm	20cm		P ₄	22×34cm	25cm	
P ₅	32×22cm	37cm		P ₆	29×28cm	39cm		P ₇	23×28cm	15cm		P ₈	31×35cm	25cm	

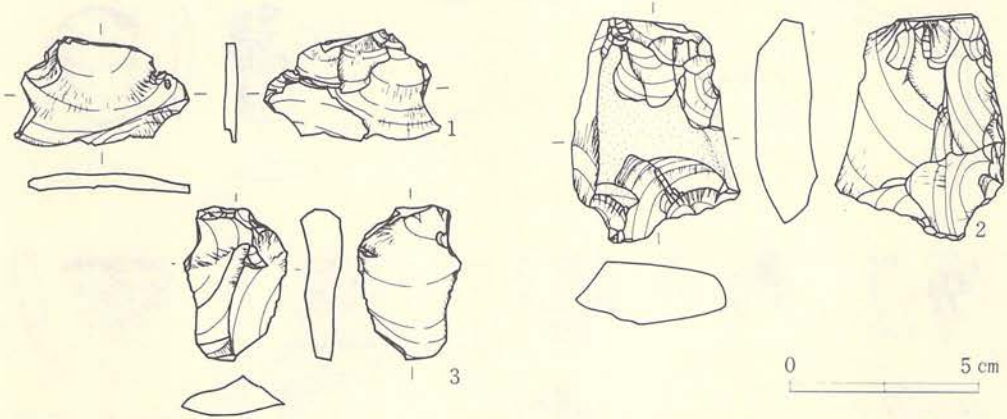


図版3 Ah 09住居址平面断面図

a、土器



b、石器



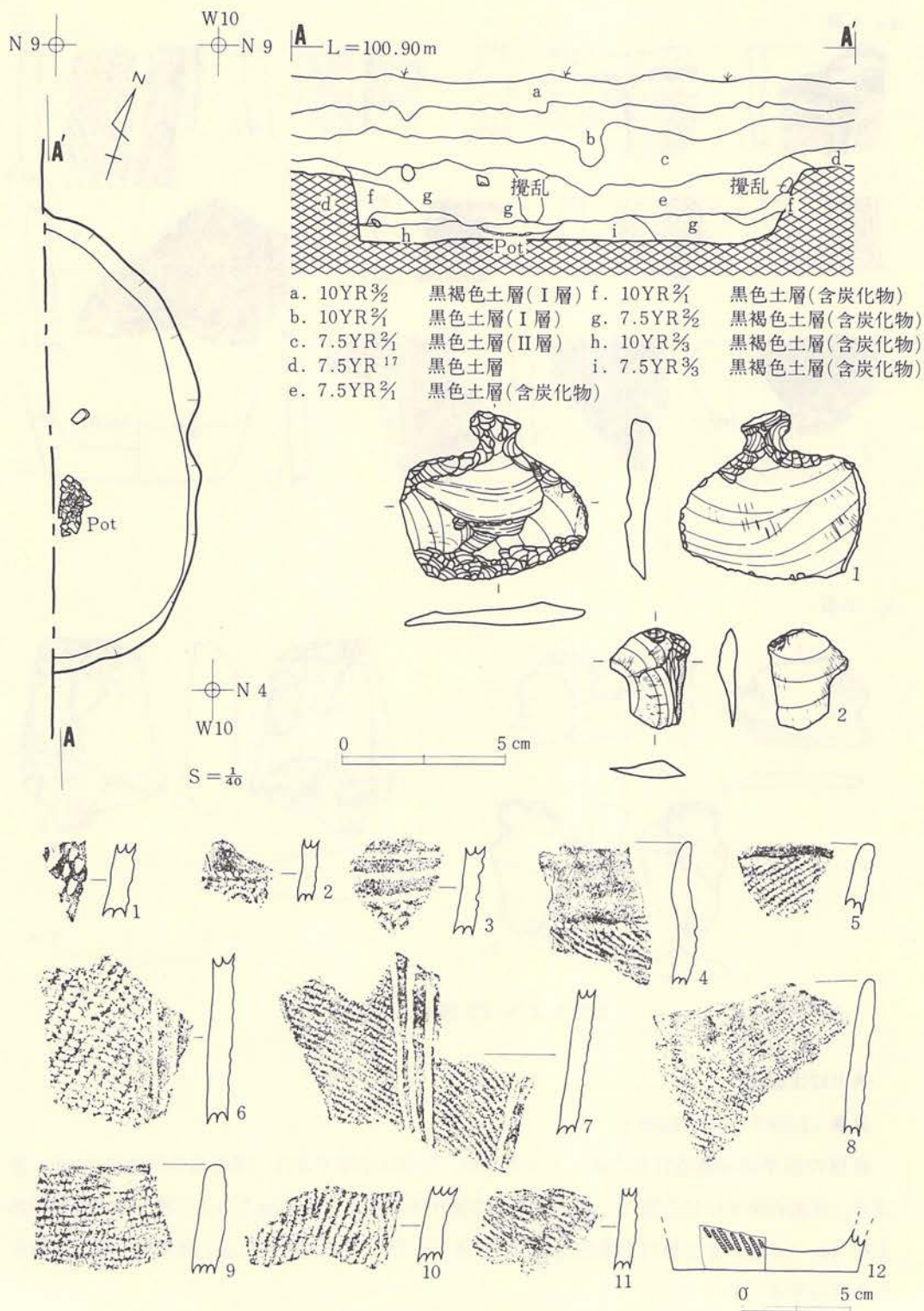
図版4、A h 12住居址出土遺物

A h 12住居址

遺構 (図版5、写真図版3)

遺構の西半部が調査区外に延びているため、全容は不明である。残存部の南北長は1.9mを測る。床面の深さは検出面から38cm、遺構の掘り込み面から約50cmである。埋土は上層の黒色土層 (e・f層) と下層の黒褐色土層 (g・h・i層) とに大別される。炭化物・礫・土器片等を包含する。

遺構の残存部からは柱穴、炉址等の施設は発見されていない。

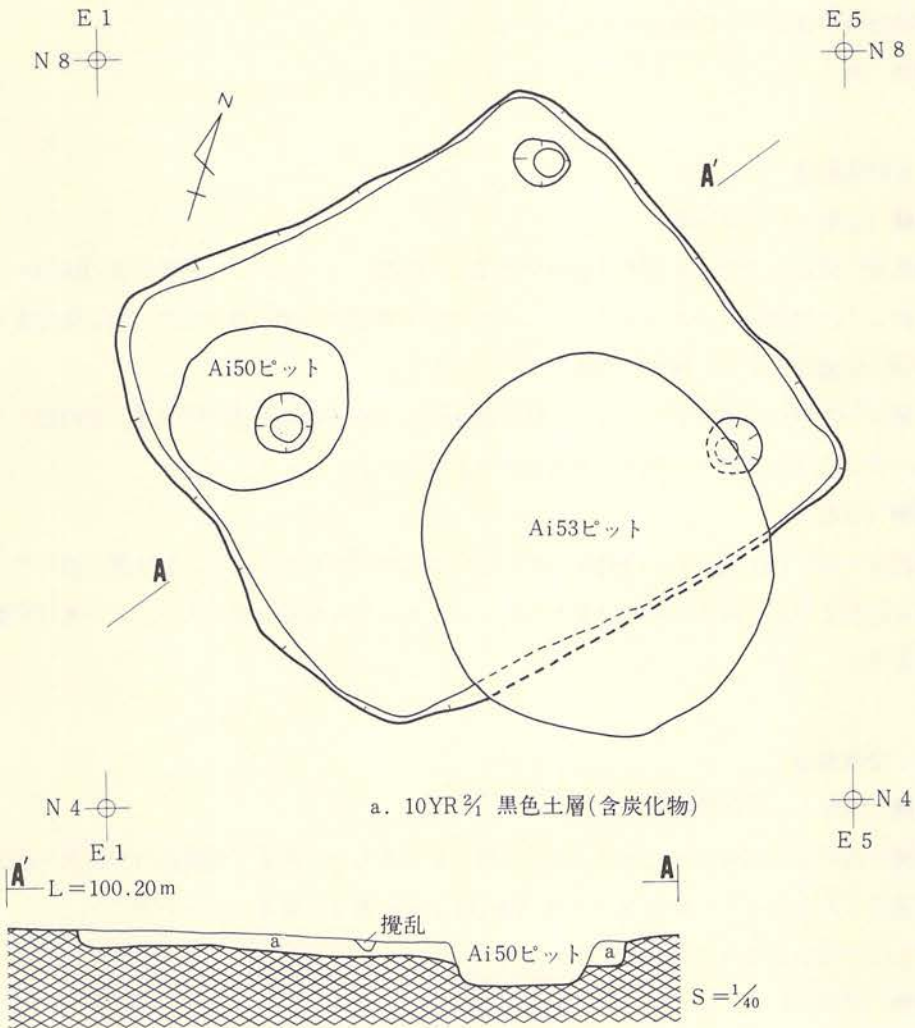


图版5 Ah12住居址平断面图及び出土遺物

遺物 (図版5)

土器：1は沈線区画された無文部に刺突文が見られる。2は口縁部を無文帯とし、頸部に刺突帯を施したものである。胴部は∏字状区画文が観察される（大木9式併行）。3は隆+沈線文が観察される。4は口縁部を無文帯とし、頸部に縄文原体押圧文、胴部は地文回転が施されている。6・7は沈線+ナデによる懸垂文が施された胴下部片である。8～11は粗製土器片。いずれも埋土下部出土土器で、床面密着の土器は見られない。

石器：1は横形の石ヒである。器軸に直交する形で片面からの刃部調整がなされている。



図版6 A h 50住居址平断面図

A h 50住居址

遺構 (図版 6、写真図版 4)

不整な方形の住居址である。東南壁及び床面の一部が土壇と重複し、消失している。床面の深さは約10cmと浅い。埋土は黒色土の単層で占められる。

柱穴は床面上から検出されたP₁・P₂があたると思われ、他にA:50土壇の底面から検出されたP₃も柱穴状を呈していることから、これに含まれる可能性がある。この場合配置形態は不整なものとなる。

A~50土壇と重複し、床面の一部をこれに破壊されている。

炉跡は残存部分からは検出されなかった。

遺物：無し。

B b 03住居址

遺構 (図版 7、写真図版 5)

南北長1.53mと非常に小型の住居址である。。Bb03-1・2土壇と重複する。Bb03-2土壇より新しく、Bb03-1土壇より古い。これによって東壁の一部を消失している。床面までの深さ16cm。床面は平坦で、柱穴、周溝は認められない。

炉跡は南北寄りに検出されている。24×30cmの小さな方形の石囲炉である。炉内部には厚さ13cmで黒褐色土が堆積し、焼土・木炭が含まれていた。

遺物 (図版 7)

少数の土器片が出土した。時期を決定するには不鮮明のものが多い。1は胴下部片で、沈線による懸垂文がみられる。中期中葉大木8b~9式に見られる文様である。2~8は粗製土器片である。

B d 12住居址

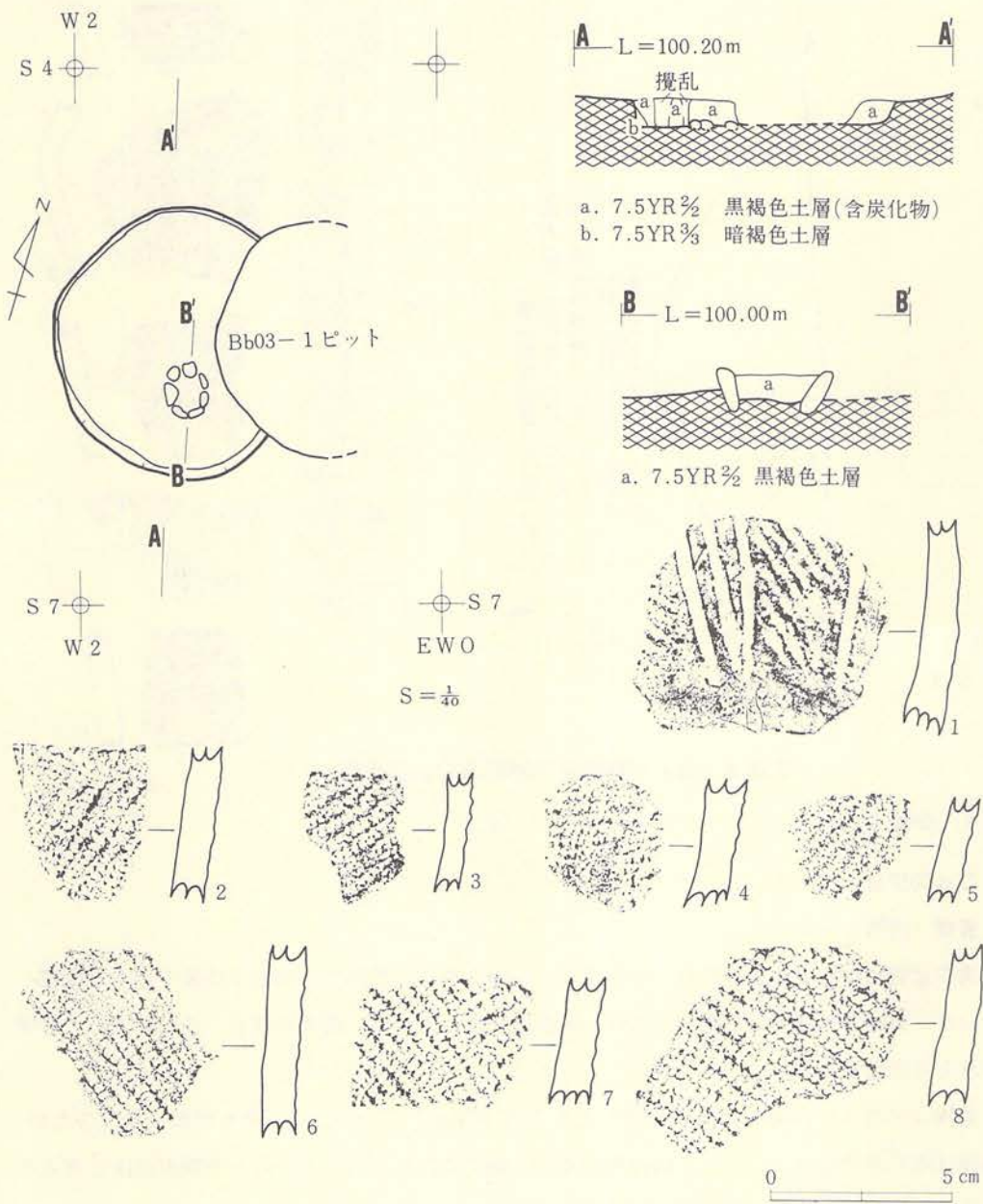
遺構 (図版 8、写真図版 3)

遺構の西半部が調査区外に延びていて不明となったものである。調査区内で柱穴・炉等の施設は確認されなかった。検出部での最大長は2.6mである。深さは18cmと浅い。

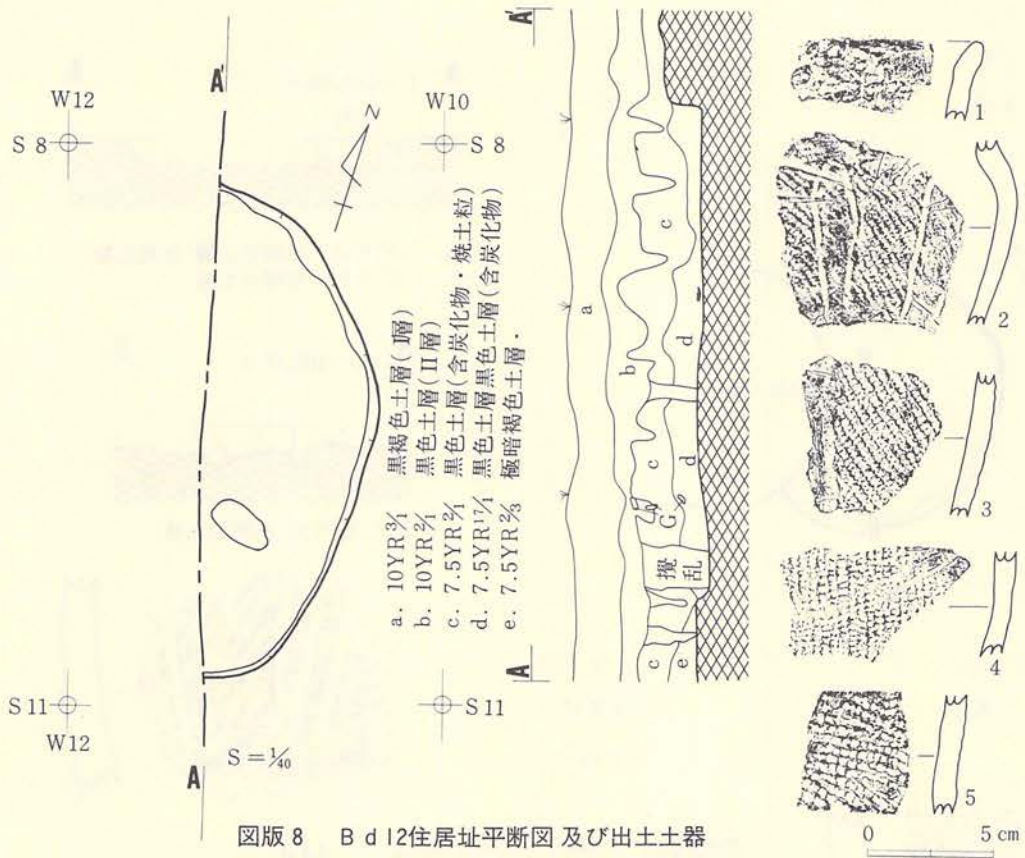
埋土は黒褐色土層の単層である。

遺物 (図版 8)

遺物の出土は大変少ない。1~3は深鉢片である。2は口頸部を無文帯とし、胴部には沈線文を施している。∩字状区画文が見られる(大木9式土器)。3は類似した土器片である。1・4・5は粗製土器片。



図版 7 Bb03住居址平断面図及び出土遺物



図版 8 B d 12住居址平断面図 及び出土土器

(2) 炉址

C g 50炉址

遺構 (図版 9 - a)

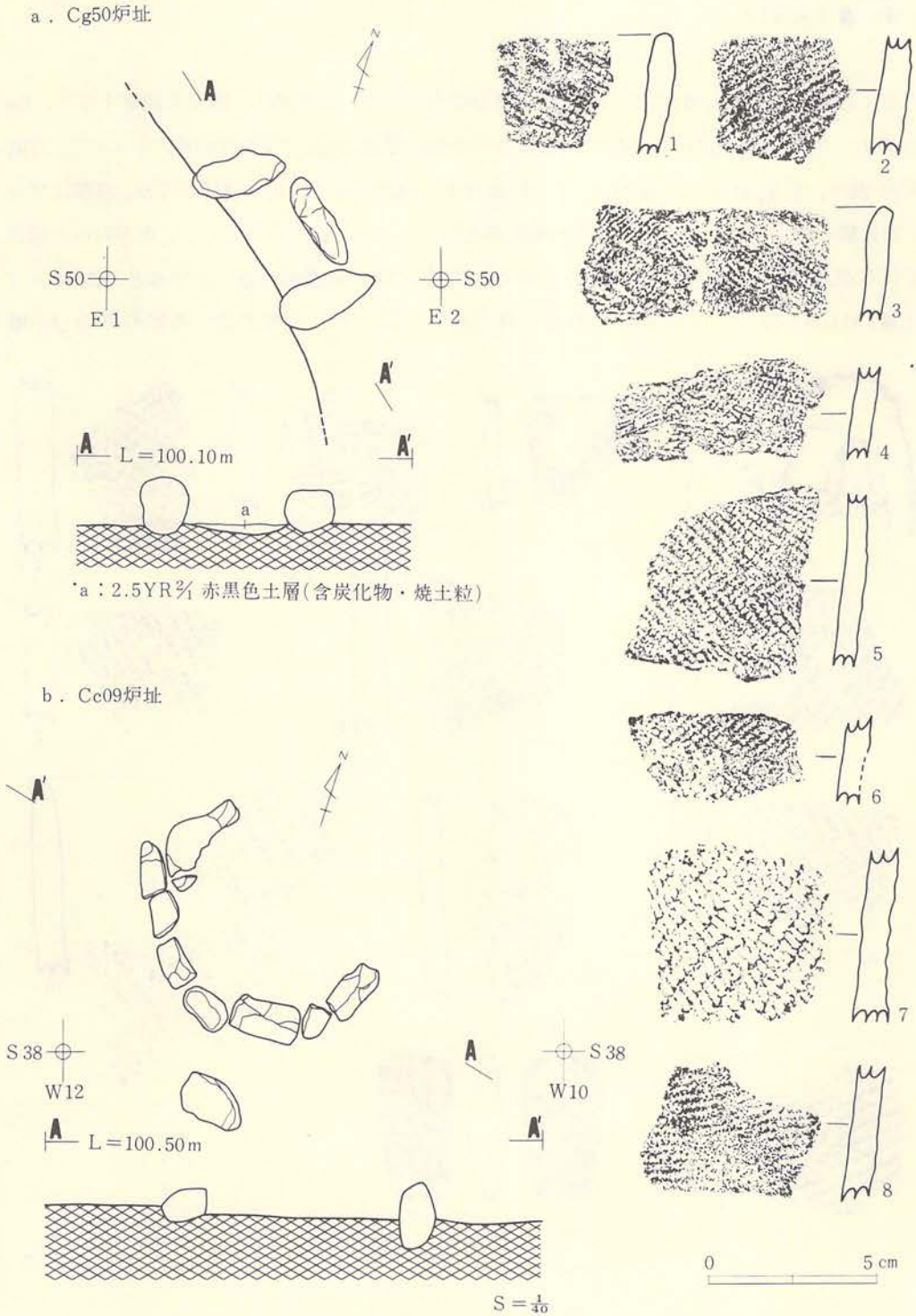
溝の北側に接して検出された。「コ」の字に石囲いされた炉跡で、内部には薄く焼土が堆積していた。溝址との関係は不明であるが、残存の状況から見て、溝より古く、これによって破壊された可能性もある。

遺物は図版 9 - 右図の拓影図に示した土器片が出土している。いずれも粗製土器片のため、時期は明らかでない。しかし、口縁形態及び、縄文の回転方向などから、中期末以後と考えられる土器片が出土している。

C c 09炉址

遺構 (図版 9 - b、写真図版12)

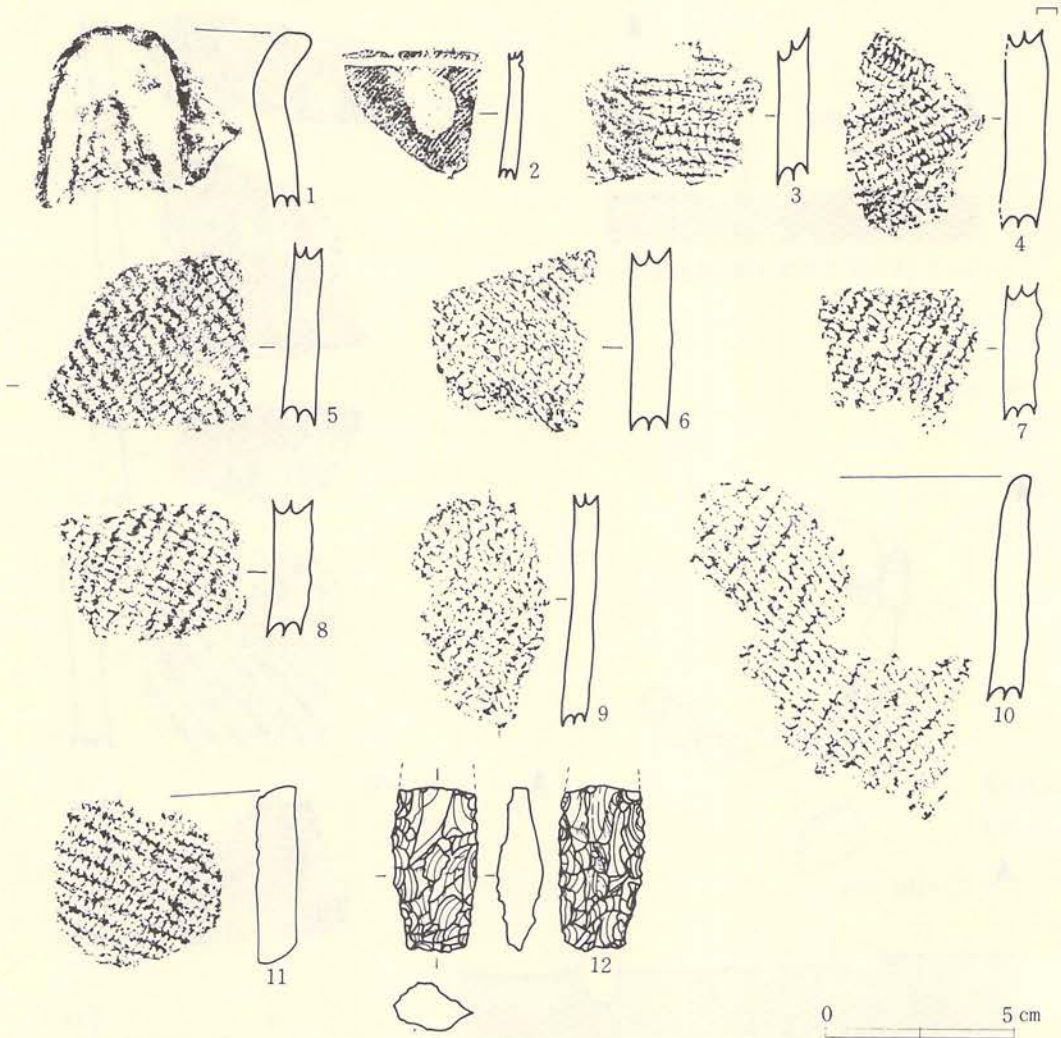
半円形に石囲いされた炉跡で半径は154 cmを測る。石は割石を使用、石の内面が赤変した観があるため、炉址として把んだが、焼土の堆積などは見られず、尚不明である。



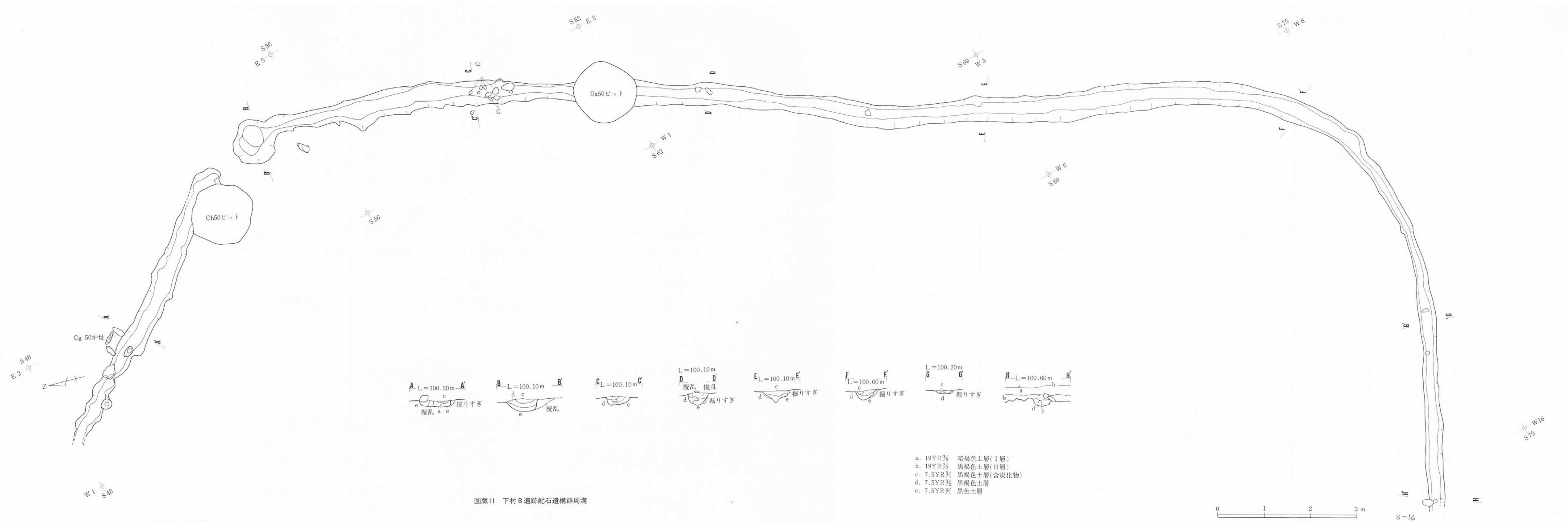
図版9 C g 50炉址 C c 09炉址平断面図及び出土遺物

(3) 溝 (図版11)

C・D区のほぼ中央を縦断する細長い溝が検出された。この溝は、南から観察すると、De 15グリッド付近で調査区に表出し、ほぼ東方向を向いて延びる。この後Df 09グリッドで、方向を90°曲げ、北方向に向って延びる。この屈曲点から約22.5mの付近で途切れるが、端部はピット状に脹らむ。一端途切れた溝は約50cm離れた地点からまた掘り込まれて、北東方向へと延びているが、途中で浅くなり消滅するものである。この溝の延長線を追いかけると、Cd03-2土壌、Cd06土壌、Cc09土壌などの南を通るものと思われ、次項で述べる配石群及び土壌



図版10 溝状遺構出土遺物



図版II 下村B遺跡配石遺構群周溝

- a. 19YR_{3/2} 暗褐色土層(Ⅰ層)
- b. 19YR_{3/2} 黒褐色土層(Ⅱ層)
- c. 7.5YR_{3/2} 黒褐色土層(含炭化物)
- d. 7.5YR_{3/2} 黒褐色土層
- e. 7.5YR_{3/2} 黒色土層

群の多くはこの溝と溝延長線で囲まれた圏内に納まることになる。

溝幅は52cm～23cmで深さ18cm～29cmを測る。埋土は黒褐色土、黒色土が堆積しており、一部に石の集まりも見られる。これは埋土中に混入したものである。Ch50土壇、Da50土壇と重複する。Da50土壇は溝より新しく、これを切ったものである。

出土遺物は比較的少ない。埋土中から図版10の出土遺物が出土している。1は深鉢口縁で、 \cap 字状区画文による突起部を形成している（大木9）。2は薄手の鉢型土器か？（晩期か？）3～10はいずれも粗製土器である。11は土製円盤で、周縁は擦られている。12は石槍またはスクレーパーの一部であろうと考えた。先端を欠損しているが、基部は直状の平坦基で、身は平細長く加工されている。土器の出土状況からは、溝の時期決定は明らかにし得なかった。

(4) 配石及び土壇群

配石群には一定のまとまりを持つもの、あるいはまとまりを持たずに散乱した状態で検出されたもの、さらには下部構造として土壇を持つものなど各様である。また、これらの配石遺構及び土壇の分布は、一つに前項に記した溝状土壇との関連も見のがせない問題である。本項では、初めに分布の概観を述べ、個々の遺構の記述は、配石及び土壇群を分類することなく、北側の遺構から順次行うこととする。

a. 配石及び土壇群の分布

配石及び土壇群の分布はその密度から大きく2つの地区に区分される。1つはA・B区にかけてのまばらな地区と、C・D区にかけての密な地区である。A・B区で検出された土壇群は総数11、特に集中することなく、また形状も多様である。このうち配石を伴う配石土壇は1基である。他に石の集中分布が見られる箇所が数箇所見られるが、調査時に配石遺構として登録された部分は3箇所である。

註. 石の分布は調査区内に多数、また広範に確認されているが、1個または2個が点々と散在しているものについては特に遺構としての登録番号は与えていない。原則として、調査時の対応を重視し、遺構登録されているものを次項の記述の対象とした。全体の分布については全体図（付図. 1）他を参照されたい。また遺構名の与え方として、特に面となって集中するもの、一定の形に組まれているものを配石とし、その他点々と分布するものは集石と呼称した。次項の記述は主に前者に限られる。配石の下部に明らかに土壇を伴うものは配石土壇としたが、この関係は明らかでないものが多いため、多くは重複した記述となる。土壇内部まで石組みを行った遺構は他と区別して、調査時の登録名の「石室」状遺構を使用した。

C・D区は前項で記したように東側に溝が走っており、この溝の西側に土壇及び配石・集石が集中している。このうち土壇は、溝の西側に広く分布するが、配石群はやや西側の西畔よりに集中する。配石群の東端には南北に走る長い配石列（Ch12列石遺構）が見られる。この地区で検出された土壇は58個であるが、溝の枠外、または溝と重複して検出された土壇はこのうち3個である。これによっても溝が土壇及び配石群と密接な関係を持つことが想定される。これら土壇群のうち石室状遺構が1基、配石土壇として明瞭な土壇が2基、また上部に配石があるものの明確には対応関係を追えないものが多数であった。

配石群が検出された層位は基本土層のⅡ層中層にあたり、土壇群はⅡ層下面での検出のため、その高低差は約30cmである。従ってこれらの遺構群が確実に対応し合うと断定することはできないが、上下の遺構の配置について関連性を探るために、平面図を二重の形態に作成した。

b. A・B区の土壇及び配石群

A i 03土壇（図版12、写真図版6）

円形の土壇で、規模は直径1.3m、深さ26cmと浅い。壁はほぼ直立する。北壁にはりついた形の立石が見られる。この立石の上端は土壇上部に頭を出すものである。底面には数個の石や土器片が散在していた。埋土は黒色土層で占められるが、上層は炭化物・焼土粒を含んでいる。

遺物 底面及び埋土から数片の土器片が出土した。すべて粗製土器片であり、時期決定資料を欠く。

A i 50土壇（図版12、写真図版6）

平面は不整な円形（？）を呈する。規模は1.1m×1.0、深さ23cmである。壁は幾分傾斜をする。底面は平坦でなく、凹凸が認められる。埋土は黒褐色土層の単層で占められる。Ah50住居址と重複し、これを切り込んで作られたものである。

遺物 埋土中から数片の土器片とフレーク1点が出土した。2～4は粗製土器口縁部、5・8・9は胴部片である。6は沈線文が見られる土器片、7は隆+沈線文による渦巻状の文様が観察される。大木8bか？

A i 53土壇（図版13、写真図版6）

やはりAh50住居址に重複する土壇で、住居址より新しいものである。円形の土壇で、壁はやや傾斜している。規模は直径1.8m、深さ70cmである。

遺物 埋土中から数片の土器片が出土。1・2は沈線による区画文が施された土器片で、 Π 字状文の一部と思われる。3は口縁部が無文帯となり、頸部に刺突文を施した土器である。以上大木9式土器と考えられる。

A i 56土壇 (図版13、写真図版8)

不整な形状を示す。不整円形土壇の北西の一隅が張り出し、小ピットとなっている。小ピットの底面には焼土、木炭等が見られる。規模は直径1.3m、小ピットの径43cmで、深さ10cmを計る。

遺物 少量の土器片を得たが、いずれも粗製土器のため時期は不明である。

B b 03-1 土壇 (図版14、写真図版7)

浅い円形の土壇である。直径1.2m、底面の深さは23cmである。埋土は下層の黒色土層と上層の黒褐色土とに大別される。

B b 03住居址と重複する。

遺物 1は沈線による区画線が施された土器片で、中期後半の土器片か？ 2～8は粗製土器片である。

B b 03-2 土壇 (図版14、写真図版7)

円形土壇で、壁はオーバーハングしている。B b 03住居址と重複し、これに切られている。規模は開口部径94cm、底径91cm、深さは40cmを計る。埋土は下層に黒褐色土層が堆積し、上層は焼土粒を含む暗褐色土層が占める。人為体積層と思われる。

遺物 フレーク一点が出土。

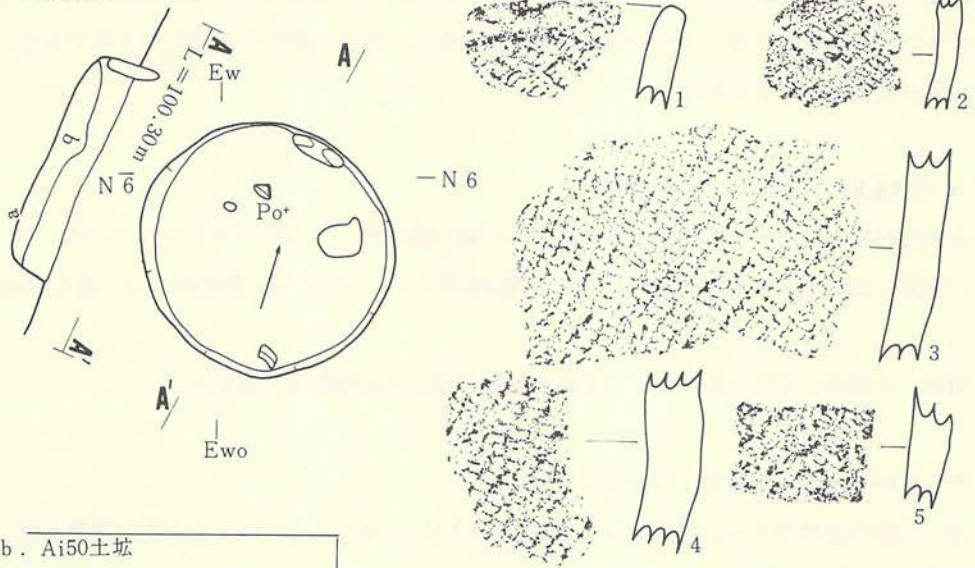
B b 09 土壇 (図版14、写真図版8)

不整な長方形土壇である。規模は110cm×62cm、深さは48cmと比較的深いものである。西壁隅には小ピットが見られる。小ピットの径は23cm、深さは18cmである。

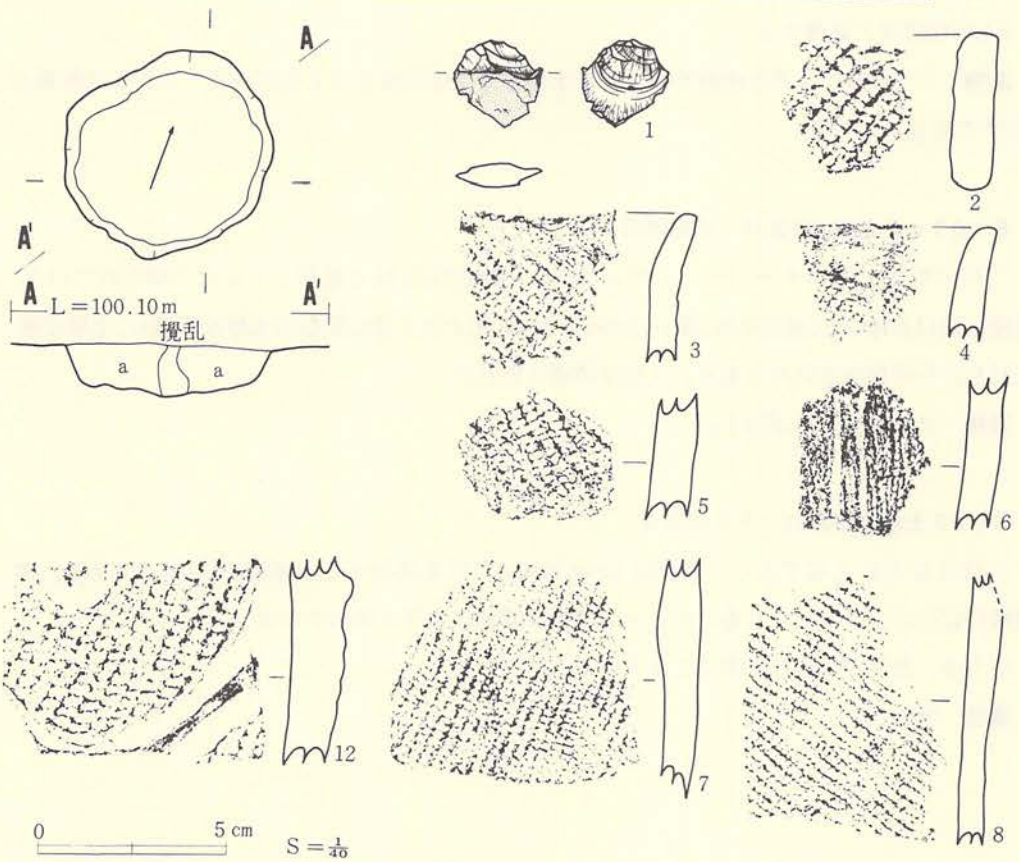
埋土中、及び底面に石が混りこんでいる。

遺物 無し。

a. Ai03土坑

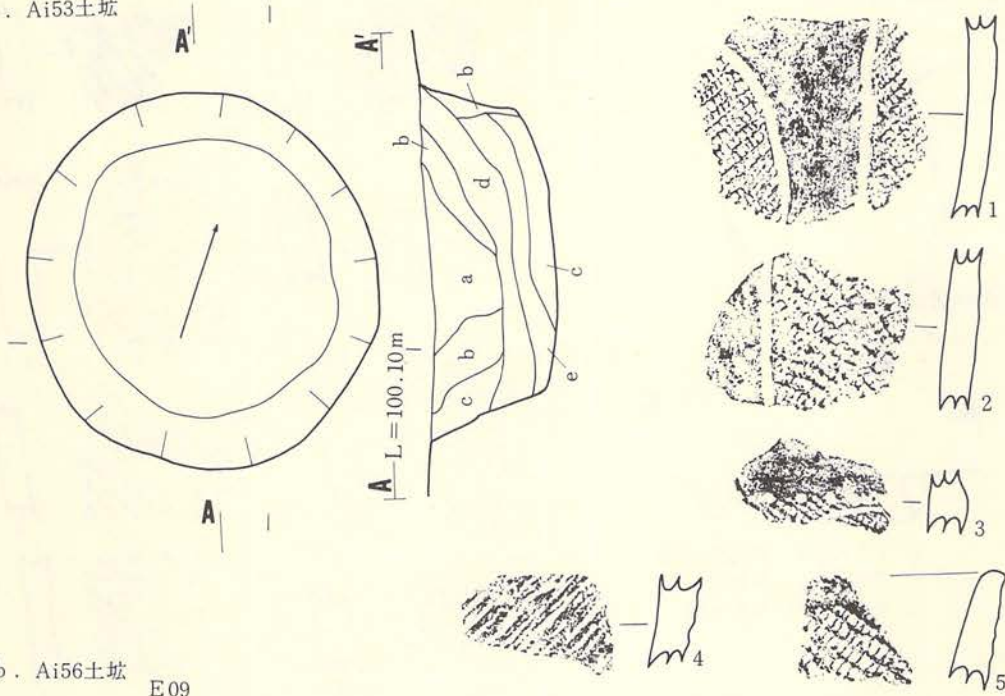


b. Ai50土坑

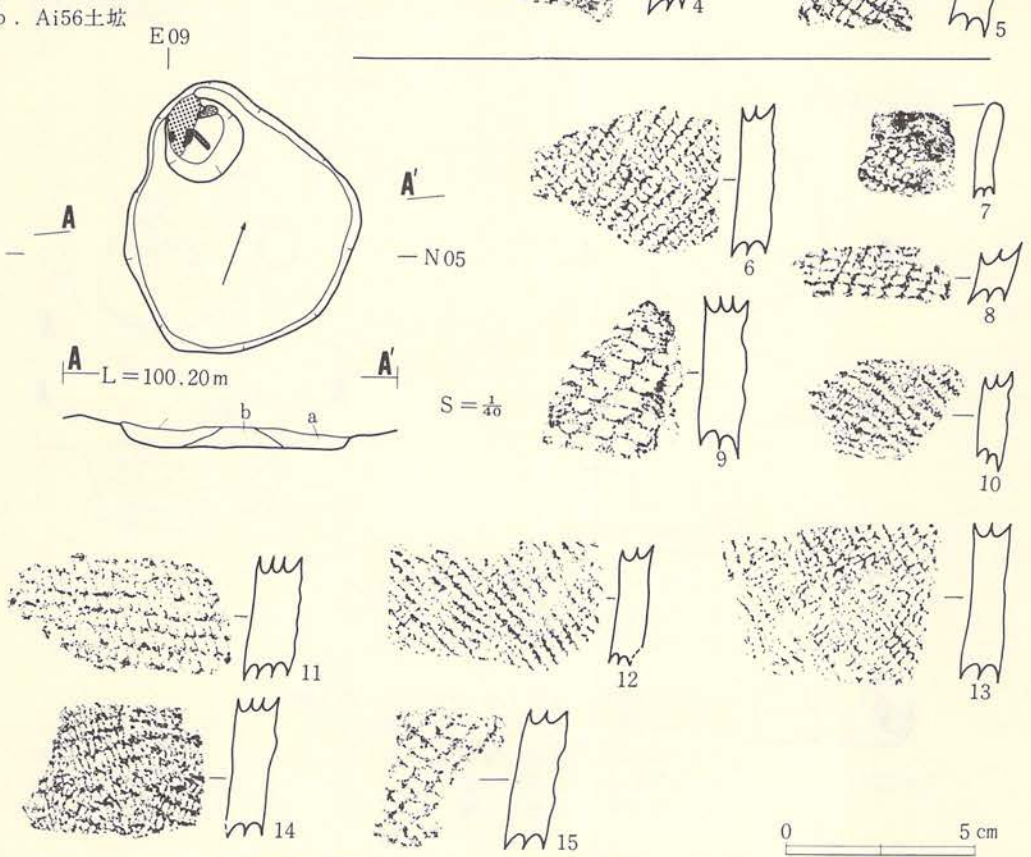


图版12 A i 03·A i 50土坑平断面图及び出土遺物

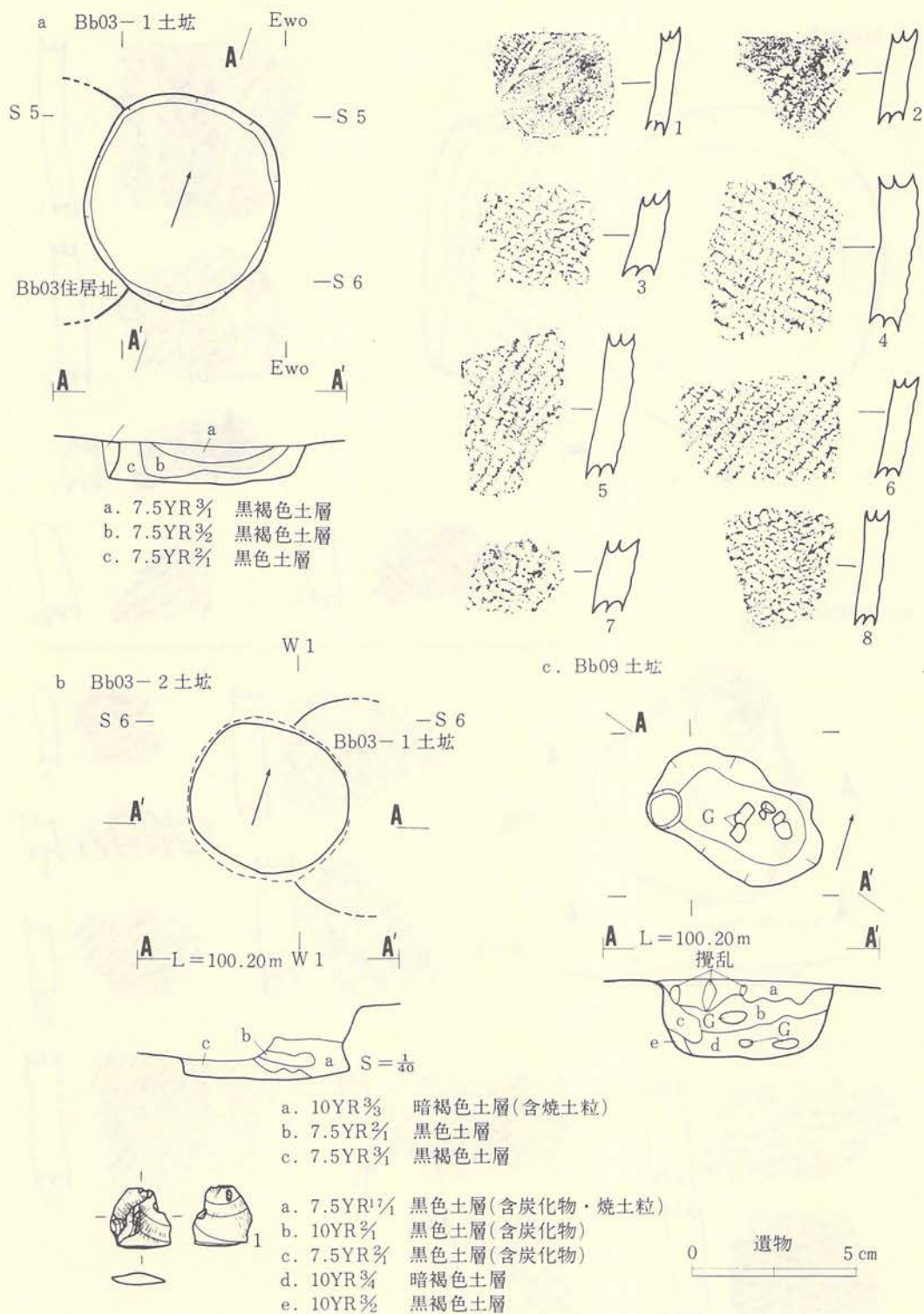
a. Ai53土坑



b. Ai56土坑



図版13 A i 53・A i 56土坑平断面図及び出土遺物



圖版14 B b 03-1·2、B b 09土坑平断面圖

B e 09 土壇 (図版15-a、写真図版8)

不整な卵形の土壇である。壁は幾分傾斜する。規模は開口部径111 cm×95 cm、底径85 cm×60 cmを測る。埋土は黒褐色土層と黒色土層とに大別され深さは23 cm程である。遺物は図示した土器片が出土。小片のため時期は不明である。

B e 50 土壇 (図版15-b、写真図版9)

不整な方形の土壇である。東西147 cm、南北118 cmの規模を有し、深さ17 cmと浅い。遺物はやはり小片で、不明瞭であった。

B e 56 土壇 (図版15-c、写真図版9)

遺構の東半分が調査外に延びているため、全容は不明である。検出部の長さ約140 cm、深さ27 cmを測る。埋土は黒褐色土で充填される。

A j 53 配石遺構 (図版16-a、写真図版11)

僅か一個の石の検出であり、配石と呼ぶにはあたらない感があるが、大きさ63 cm×90 cmの規模の石を据えたことに何らかの意図を感じるものであり、ここに含めた。基本土層のⅡ層上にあるものである。

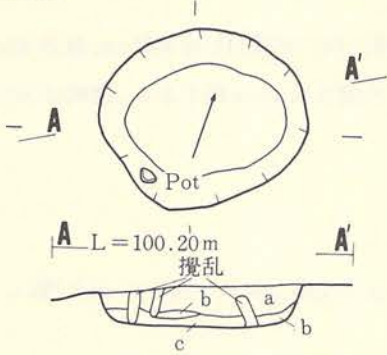
B b 56 配石遺構 (図版16-b 写真図版10)

7個の石が弧状に配置されたものであり、周囲に散る2・3の石を含めた。弧状配石のうち一個は長さ73 cmと規模の大きい石が使用されている。下部に土壇は見られない。

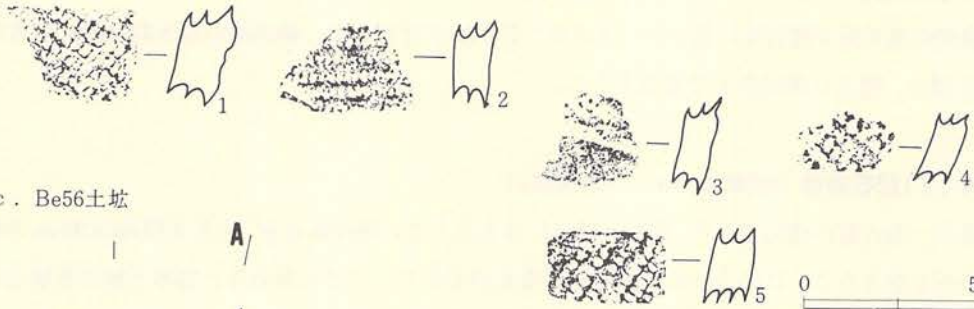
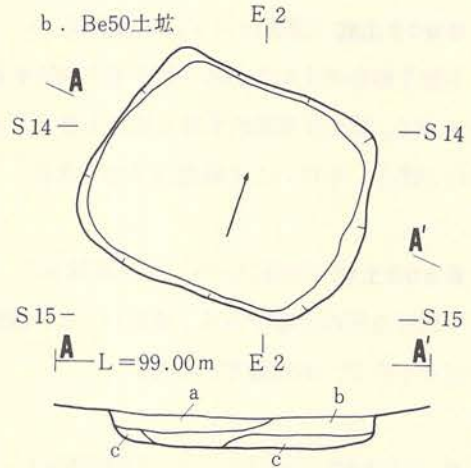
B c 56 集石 (図版16-c、写真図版10・11)

B区東端際に数個の石の集まりが見られた。意図ある配石か否かは不明である。

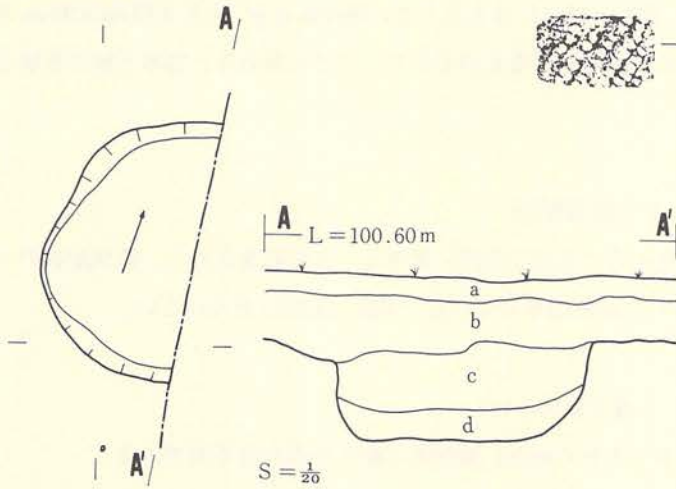
a. Be09土坛



b. Be50土坛

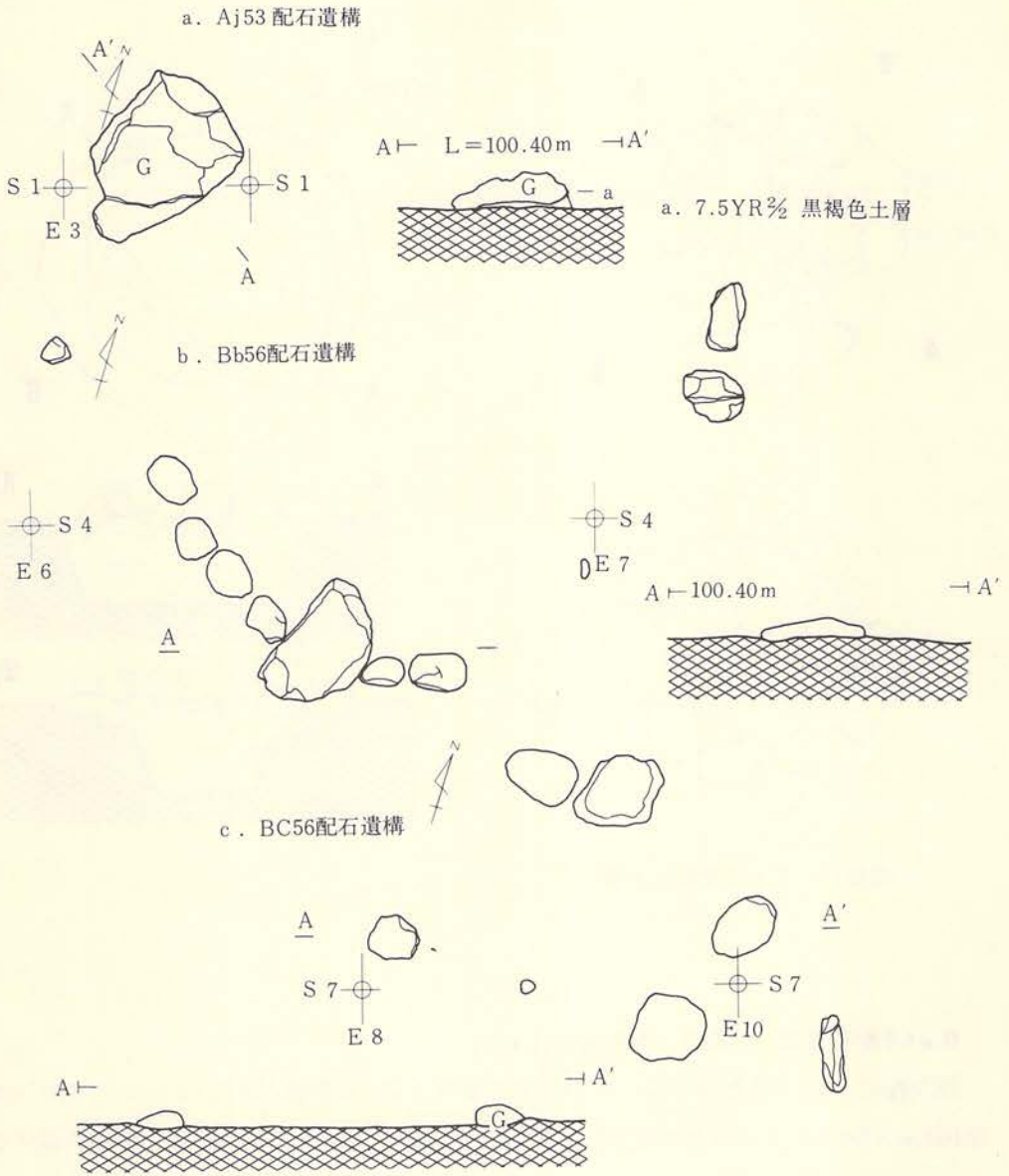


c. Be56土坛

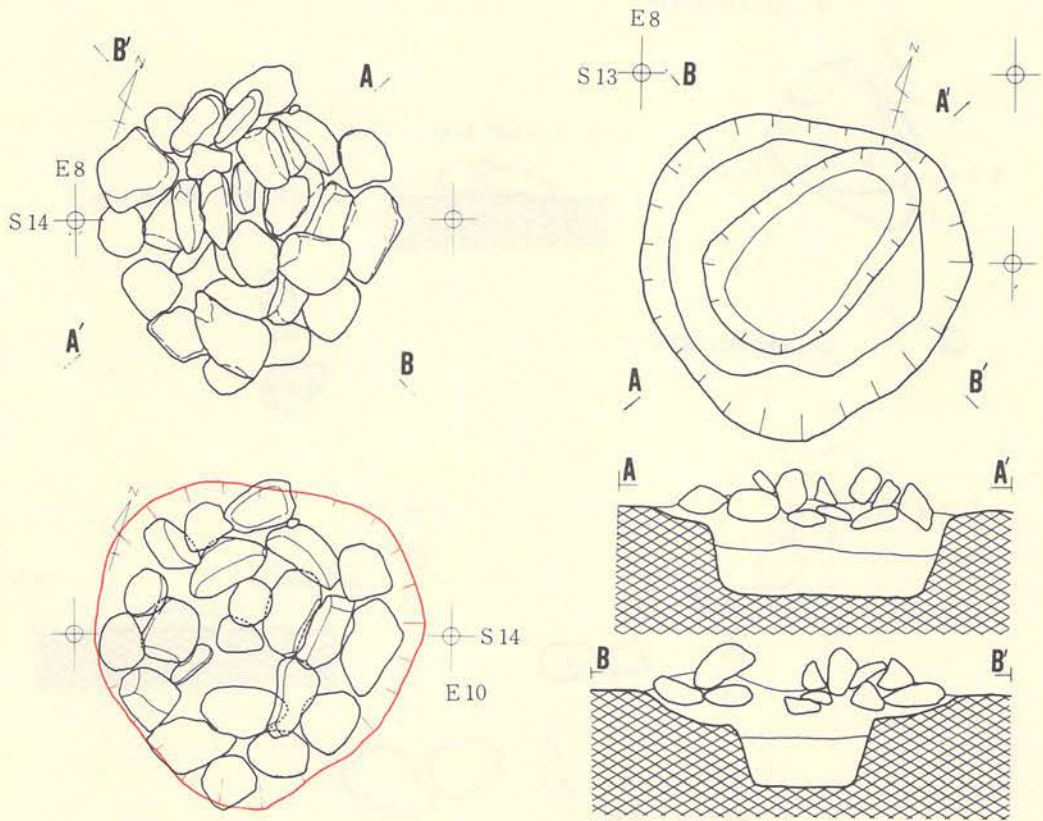


- a. 7.5YR $\frac{2}{2}$ 黑褐色土層(含炭化物)
- b. 10YR $\frac{3}{3}$ 暗褐色土層
- c. 7.5YR $\frac{1}{1}$ 黑色土層
- a. 10YR $\frac{2}{1}$ 黑色土層(含炭化物)
- b. 10YR $\frac{1}{1}$ 黑色土層
- c. 7.5YR $\frac{1}{1}$ 黑色土層
- a. 10YR $\frac{3}{2}$ 黑褐色土層(I層)
- b. 10YR $\frac{2}{1}$ 黑色土層(II層)
- c. 10YR $\frac{3}{1}$ 黑褐色土層
- d. 10YR $\frac{3}{2}$ 黑褐色土層

図版15 B e 09 · 50 · 56土坛平面図及び出土遺物



図版16 A j 53 · B b 56 · B c 56配石遺構平断面図



図版17 B e 56配石土壌

B e 56 配石土壇 (図版17・写真図版11・12)

Bb56配石、Bc56集石等の南に円形のまとまりを持った石群が検出された。この配石は直径160 cm×180 cmで、中央部が幾分盛り上っていた。構築方法は、まず20 cm～40 cmの扁平な礫を並べ、その内側に石を組み込んだ二重の構造といえる。上方の礫は斜め及び縦に組みこまれこまれているが、「立石」と名づける程の礫は見受けられない。配石の間は黒色土が埋めていた。

配石を除去した底面は浅く皿状に窪み、凹凸が見られる(写真図版12。)この皿状の窪みの下に楕円形の土壇が検出された。土壇の長軸は北東—南西を向く。規模は129 cm×78 cm、深さは配石検出面から45 cm、配石底面から35 cmである。完掘した土壇の形状は二段あるいは二重構造に見受けられるが、この場合上部の円形皿形土壇は石組みを埋めるためのいわゆる据え方か、石の重みによる落ちこみかは机上では判断できなかった。

遺物 無し。遺構の時期は決定できなかった。

c. C・D区配石及び土壇群

C c09-1 土壇 (図版19、写真図版13)

C・D区の土壇集中区域の中で最も北に位置し、溝状遺構の延長線外にある。以下 Cd03-2 土壇まで溝状遺構の圏外(北側は延長線を枠として)である。Cc09-2土壇に接して発見された。

不整な円形土壇で、幾分東西軸が長い。直径は140 cm×130 cmである。壁はほぼ直立し、底面までの深さは35 cmを測る。埋土は黒色土層、黒褐色土層で占められるが、不整な堆積状況を示している。

遺物 無し。

C c09-2 土壇 (図版19、写真図版13)

Cc09-1土壇に隣接する。南北にやや長い不整楕円形の土壇である。長軸長160 cm、短軸長120 cmで、深さ58 cmと09-1土壇より深い。埋土はやはり、入り組んだ堆積状況となっている。

遺物 極少量の遺物が得られた。1は深鉢胴部片で、撚系回転文が見られる。2は石鏃である。

C d06土壇 (図版19、写真図版13)

東西に長い楕円形土壇である。長軸長106 cm、短軸長82 cmを測る。深さは22 cmと浅い。

遺物 1～3の土器片及び土錘2個が出土した。1は沈線区画文が見受けられる。中期後半の土器と考えた。2・3は粗製土器である。4・5は有溝土錘である。楕円形の長軸に貫通孔があり、周縁を溝がめぐる。無文でナデ調整されており、焼成不良のため脆いものである。

C d03-1 土壇 (図版20、写真図版13)

小型の円形土壇である。直径は60 cm、深さ20 cmを測る。

C d03-2 土壇 (図版20、写真図版12)

幾分南北に長い大型の土壇である。浅い大型の掘り込み内部をさらに一段深く掘り込んだもので、二重構造となる。外部径200 cm、内部径170 cmで、外円は浅く16 cm、底面までの深さは52 cmであった。

遺物 1～3の粗製土器片と4のフレークが得られただけであり、時期は不明である。

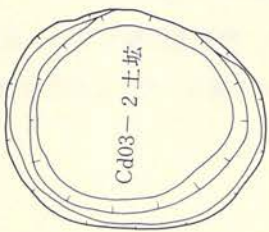
E·wo
S 37



Cd03-1 土壇



Cd06土壇

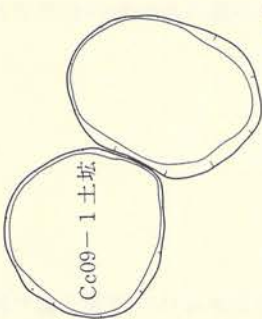


Cd03-2 土壇

S 42
E·wo

S = 1/60

W10
S 37

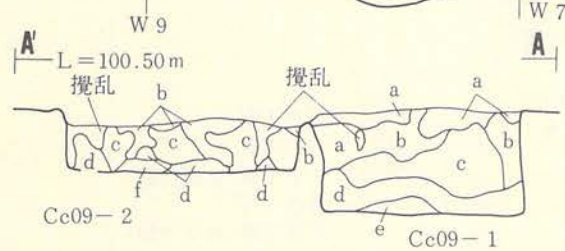
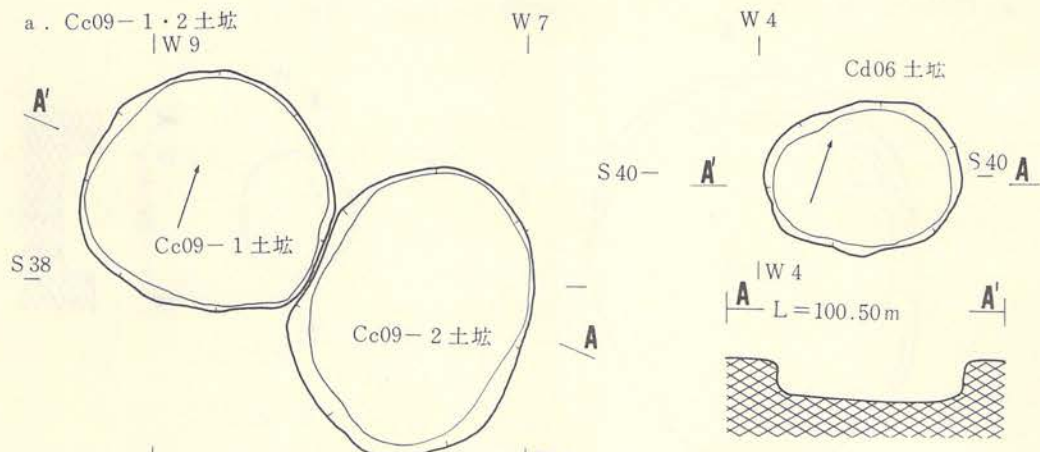


Cc09-1 土壇

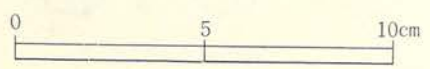
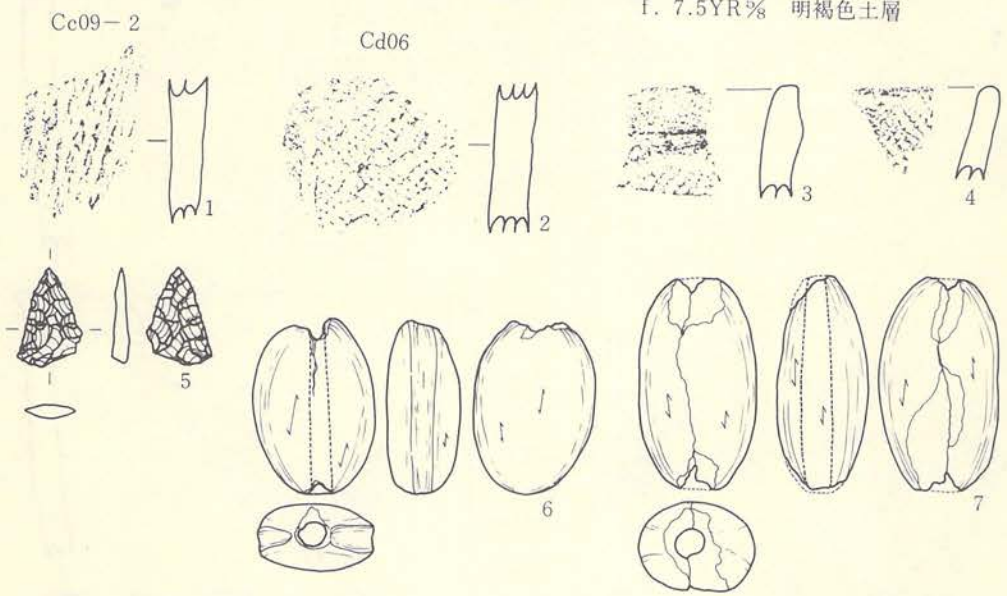
Cc09-2 土壇

S 42
W10

図版18 配石遺構群(1)-土壇



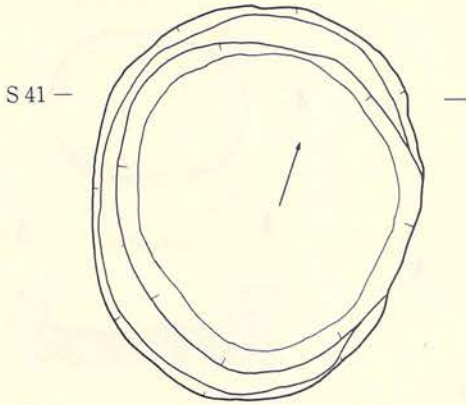
- a. 10YR $\frac{1}{1}$ 黑色土層
- b. 10YR $\frac{2}{2}$ 黑色土層
- c. 7.5YR $\frac{2}{4}$ 黑色土層(含炭化物)
- d. 10YR $\frac{2}{2}$ 黑褐色土層
- e. 10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土層
- f. 7.5YR $\frac{2}{4}$ 明褐色土層



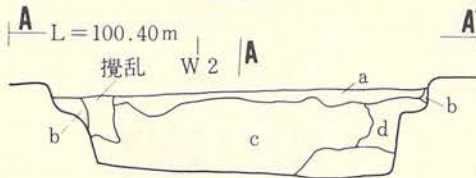
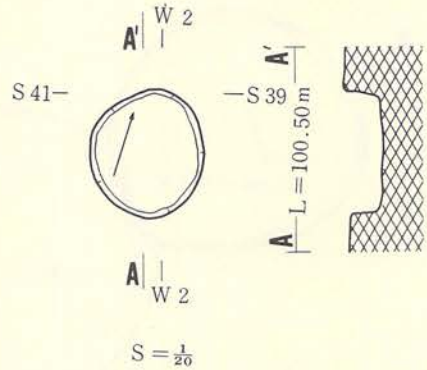
1·5 : Cc09-2 土坑出土
2~4·6·7 : Cd06 土坑出土

图19 C c 09-1·2、C d 06土坑平断面图

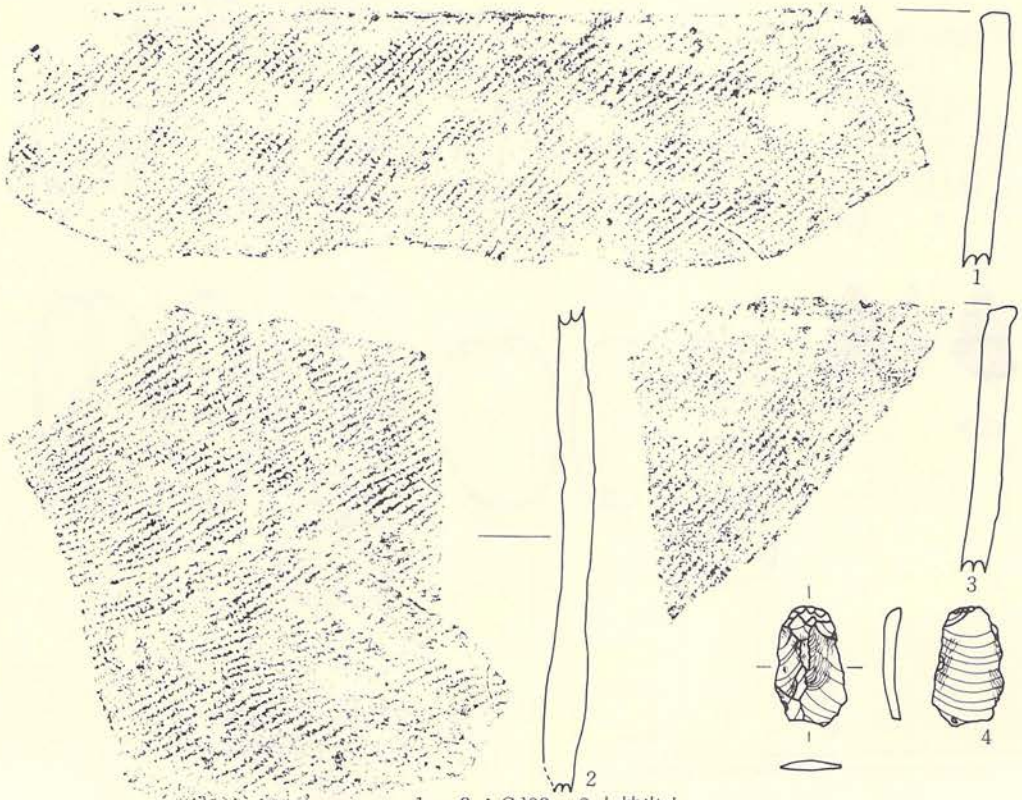
a. Cd03-2 土坡 W 2 | A'



b. Cd03-1 土坡



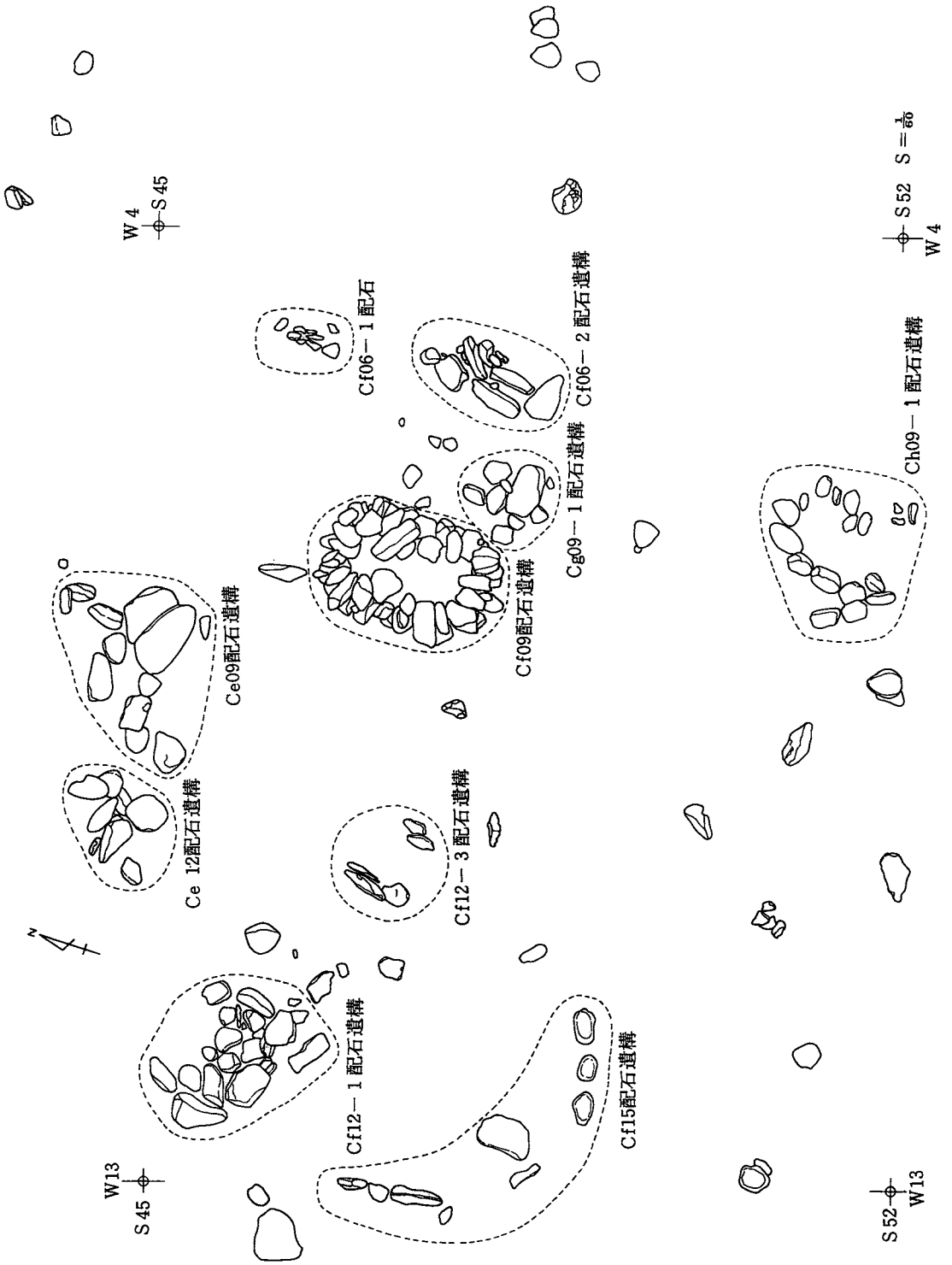
- a. 10YR¹/₄ 黑色土層
- b. 10YR¹/₄ 黑色土層
- c. 7.5YR²/₄ 黑色土層(含炭化物)
- d. 7.5YR¹/₄ 黑色土層
- e. 10YR¹/₄ 黑色土層(含炭化物)



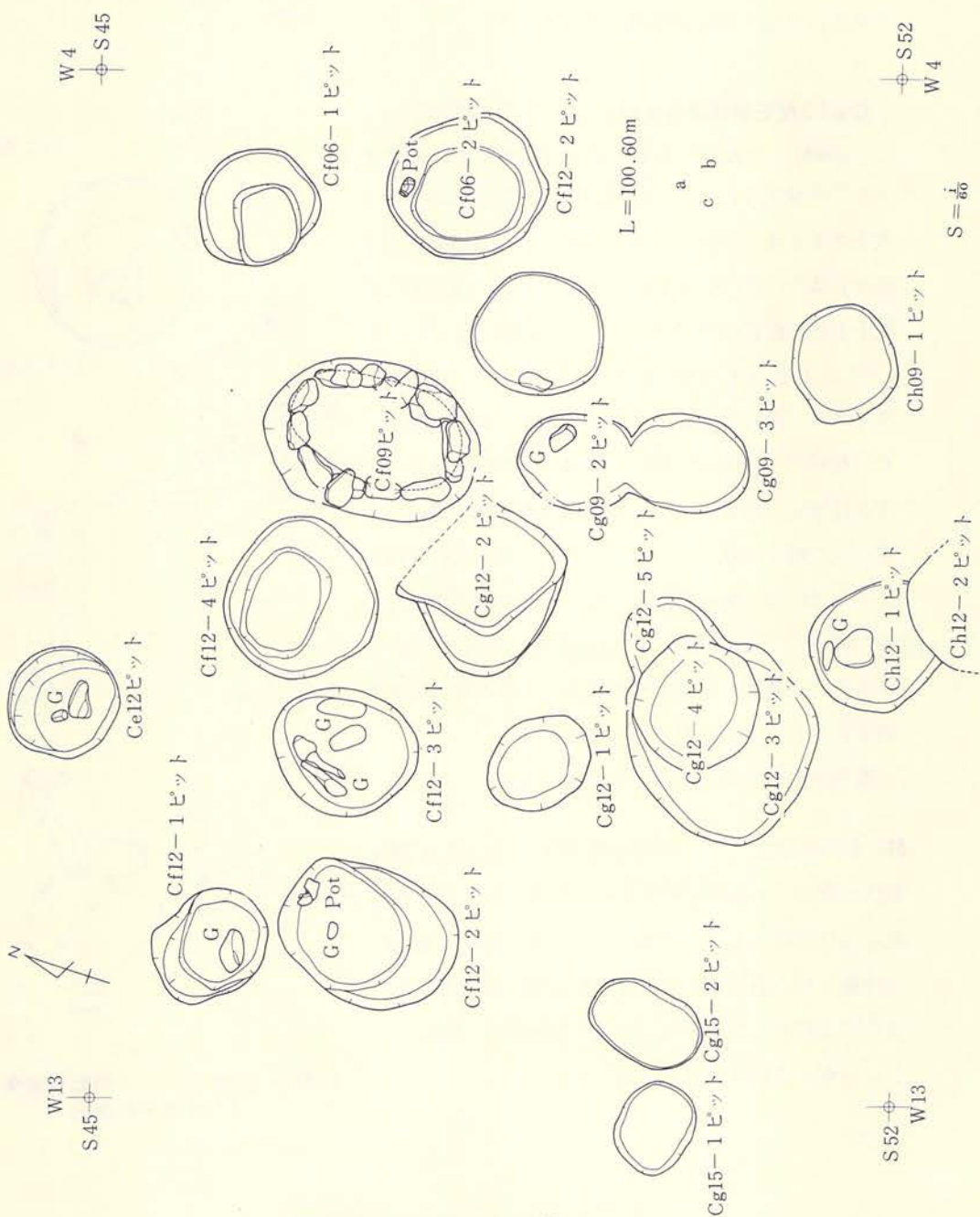
1 ~ 3 : Cd03-2 土坡出土
4 : Cd03-1 土坡出土

0 5 cm

図版20 Cd03-1・2 土坡平断面図及び出土遺物



図版21 配石遺構群(2)一配石



図版22配石遺構群(6)一土坑

C e 09 配石遺構 (図版23、写真図版20)

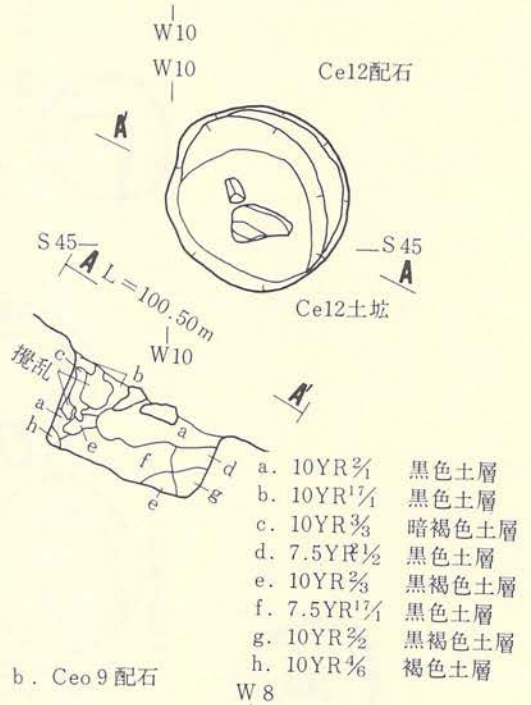
大小10数個の礫のまとまりである。礫の大きさは70cm~20cmと多様であるが、平置されたもの、斜めに重なり合うもの等が見られる。配石の規模は170cm×140cmである。下部に土壇は検出されなかった。



C e 12 配石遺構及び土壇 (図版23、写真図版20)

Ce09配石の西側に隣接して、約10個程度の礫のまとまりを検出したため、Ce12配石と登録した。礫は大小さまざま一部重なり合っている。この配石の下部からはCe12土壇が検出されているが、この土壇の埋土上部に配石の一部がくいこんだ状態となっている。

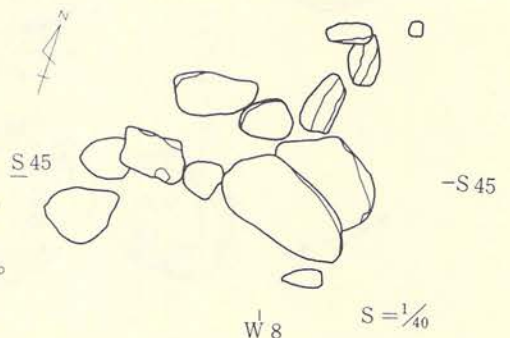
Ce12土壇は上面形は円形を呈するが、一段下った所でさらに深い土壇を掘りこんでいる。内部土壇はやや不整形で、100cm×98cmを測る。土壇検出面からの深さは50cmと比較的深い。埋土は黒色土層、黒褐色土層が入り組んで埋っており、人為的に埋められた様相を示している。配石遺構と土壇の関係は断言できないが、埋土が一気に埋められ、配石がそこにくいこんでいるという状態からは、やはり土壇上部を覆う目的で組まれたものという想定が可能であろう。



b. Ce09配石

遺物は出土せず、時期は不明である。

註. Be 56土壇、C d 03-2土壇のように上部が浅い皿状に窪み、その内部をさらに一段深く掘り下げた土壇について便宜上「二重構造」の土壇または二重土壇と呼称した。適切さを欠く感があるが、容赦されたい。さらにこの土壇の上部の一段下った分部を「内部」としたが、これも同様である。



図版23 C e 12・C e 09配石遺構及び土壇平断面図

C f 06-1 配石遺構及び土壇 (図版24、写真図版20・26)

Cf06-1 配石は、小さなまとまりであり 配石とするには微量とも思われる。南北に長く(65 cm) 小さな石を並べたものである。配石の長軸方向は北北西—南南東を向く。石の長軸もまた長軸方向に向けて配置されている。下部からCf06-1 土壇が検出された。

Cf06-1 土壇はやはり二重構造の土壇である。外部土壇は直径105 cmの不整円形を呈し深さは15 cmである。内部土壇底面はそれよりさらに15 cm下がる。後者は長方形の土壇で、規模は70 cm×55 cmを測る。内部土壇底面は黒色土と壁の崩落土と思われる明褐色土で覆われるが、その上方は黒色土層で占められる。

配石遺構と土壇との関連は必ずしも明らかではない。土壇上部に配置した石が一部を残して、後日に抜き取られてしまったという見方と、この南方に検出されたCh06-2 配石へと続くものとの二つの見方が可能だからである。

C f 06-2 配石遺構及び土壇 (図版24、写真図版20・26)

上記配石同様に南北に長いまとまりとなっている。長軸長140 cm、幅70 cmで、組まれた石もまた細長い形状を呈し、石の長軸が配石の長軸を向くものが多い。西側に隣接してCg09配石が検出された。

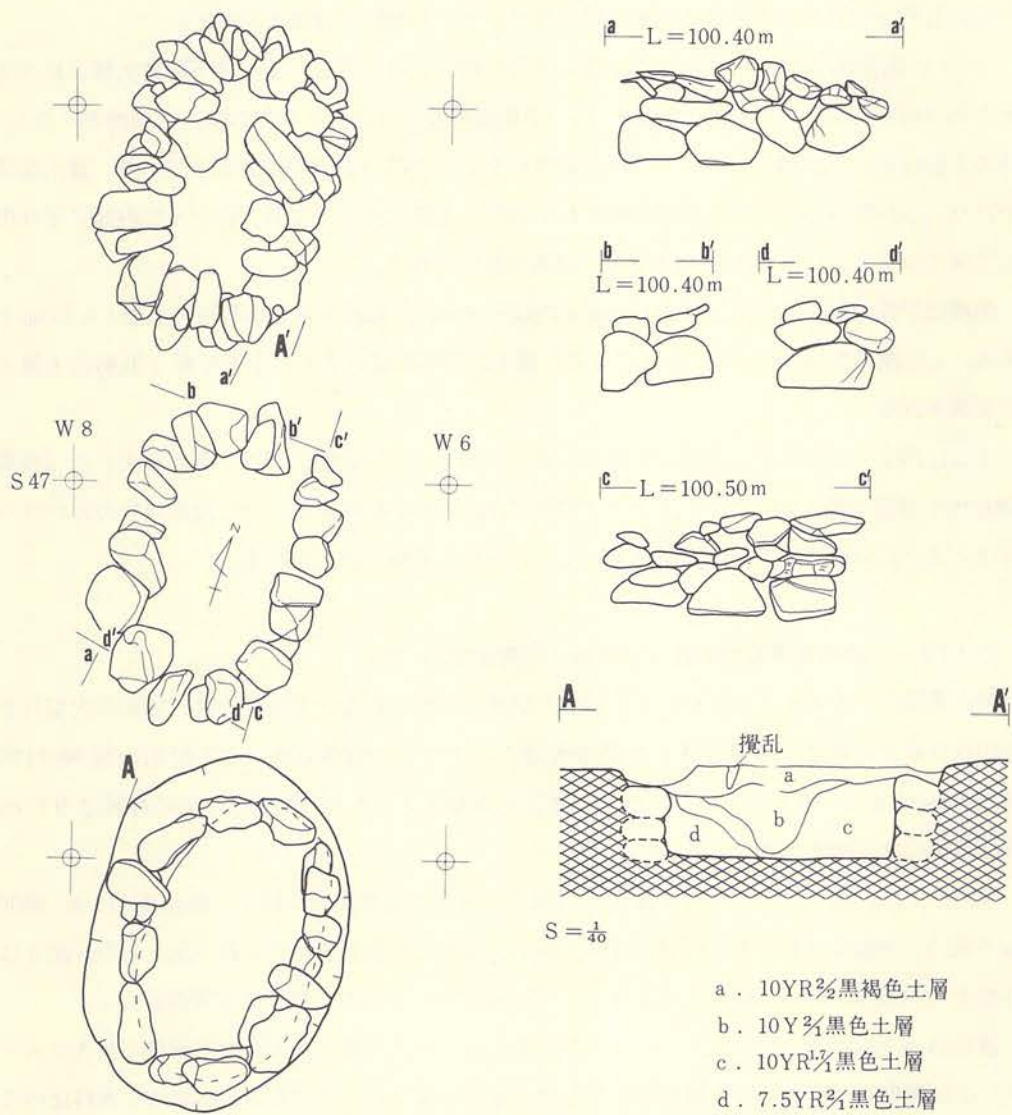
下部に検出されたCf06-2 土壇は、円形の二重土壇である。外部土壇径122 cm、内部土壇径80 cmを測る。深さは外部土壇が14 cm、内部土壇はそれよりさらに8 cm下がる。浅めの土壇である。外部土壇の底面から図24-1の完形土器が出土した。底径が広く、口縁がややすぼむ壺形の土器である。口縁部を無文帯とし、頸部に1本の沈線を施したもので、胴部はLr無節縄文を縦回転している。時期は明言できないが、器形から上村遺跡第Ⅱ群土器(中期終末期)に類似すると考えた。他に数片の土器片が出土したが、いずれも少片である。2はやはり中期後半の土器片と思われる。

配石の位置が土壇の西辺に集中しており、配石と土壇の関係はやはり明言できなかった。

C g 09配石遺構及びC g 09-1 土壇 (図版24、写真図版20・26)

この配石遺構は大・小10数個の石のまとまりである。離れて数個の小石が散在する。下部の土壇とは位置がずれているため、関係は積極的でない。配石のすぐ西北に隣接してCf09石室状遺構が構築されていることから、石が抜かれて動いた可能性も考えられる。

Cg09-1 土壇は、非常に浅い円形土壇である。直径約115 cm、深さ15 cmを測る。西壁に貼りついた形の礫が見られる。



图版25 C f 09配石土坑平断面图

C f 09 石室 (図版25、写真図版23～25)

土壇の側壁に沿って石を積みあげたもので「石室」のような形状を作りあげていることから上記の名称を用いた。土壇は楕円形に掘られていて、長軸はほぼ南北に向く。

a～cの側面図を観察すると、石は概ね三段に積み上げられている。最下部は上部に比べて大きめの河原石を使用しており、内部に石の平坦面を向けて並べたものである（図版25-左）。その上部は石を小口積みにし、より小さめの石などで下段の石の間隙を埋めている。最上部はやはり、小口積みで大小の石が密に積まれていた。上段に行くにつれ、石が土壇内部にせり出して来ていることは土壇内部の沈下との関係が考えられる。

規模は下部の石積み部分で長さ124 cm×75幅 cmを測る。底面の深さは石積最上部から58 cmである。土壇開口部は195 cm×133 cmである。埋土は下層の黒色土と、上層を覆う黒褐色土層とに大別される。

土器は出土しておらず、時期は不明である。底面から2・3個のコハク玉が出土した（写真図版25）。非常に脆くなっており、くだけて原形を留めないものが多いが、最も残りのよいコハクは、僅かに面取り加工の痕が観察されることから、玉類と考えられる。

C f 12-1 配石遺構及び土壇 (図版26、写真図版20・27)

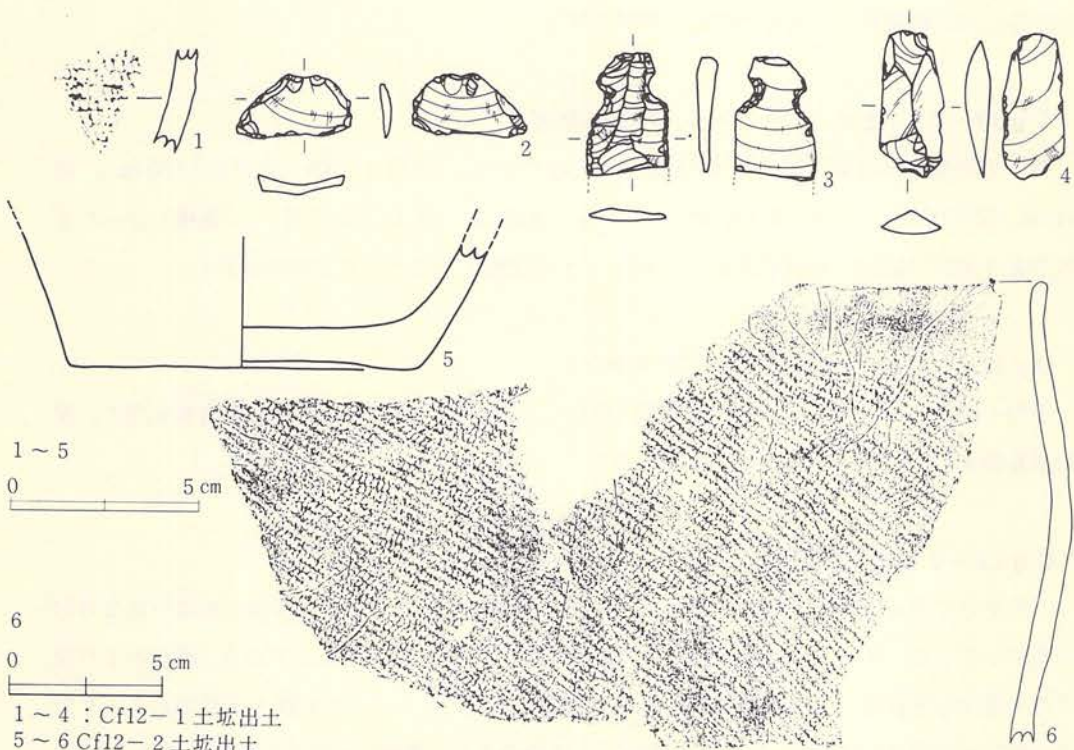
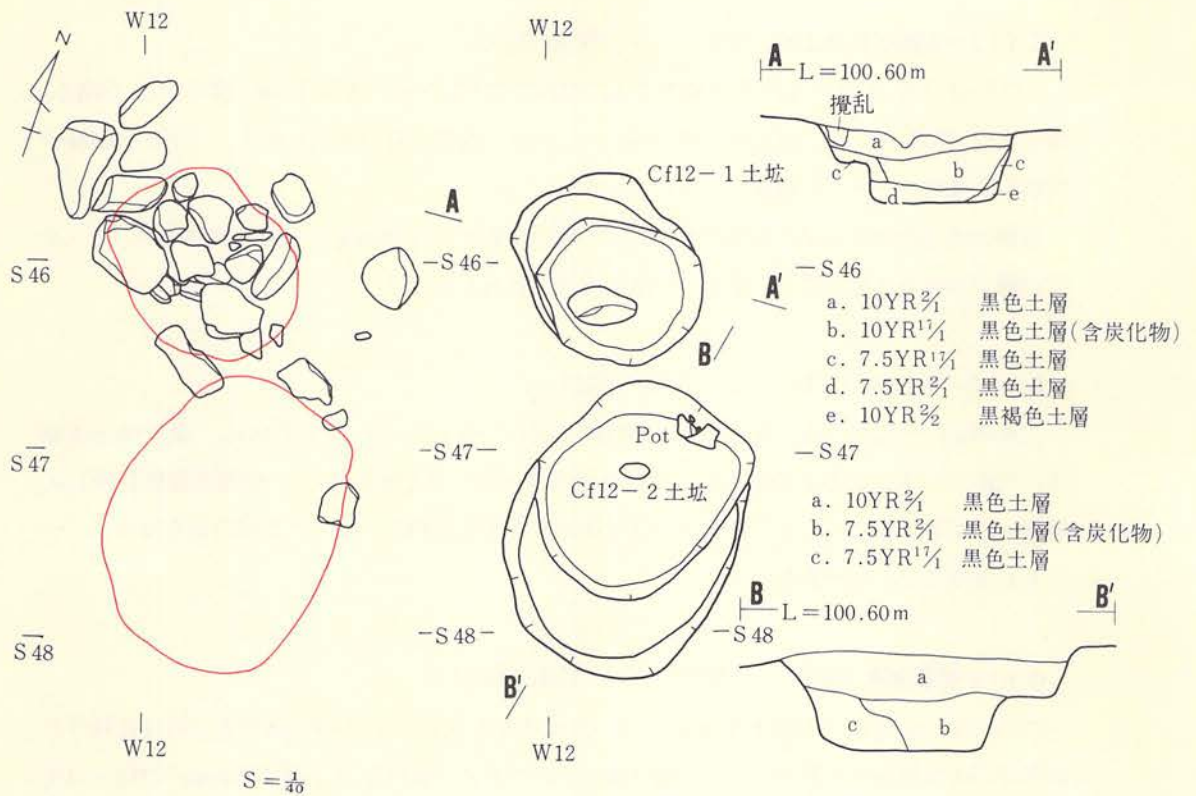
配石遺構は一定のまとまりを示すものの、形状は不整である。大まかには、周囲に大型石を半円状にめぐらせて、内部に細かな石を配置したものと観察される。この配石の規模は170 cm×85 cmである。配石の下部にはCf12-1土壇が検出されたが、配石は土壇の範囲より1 cm程北西部にはみ出す。

Cf12-1土壇は、不整形の二重土壇である。外部土壇は東西に長く、長軸長110 cm 幅90 cmを測る。内部は不整ながら円形に近い土壇で、落ちこんだと思われる石が出土した。深さは外部土壇が25 cm、内部土壇はそれよりさらに22 cm深い。土壇の長軸はほぼ東西を向く。

遺物は土器小片の他石器、フレイクが出土した。2は周縁に細かな加工が見られるフレイク。3は縦形石ヒであるが先端部を欠失している。4はフレイクである。時期決定資料は得られなかった。

C f 12-2 土壇 (図版26、写真図版27)

土壇開口部の縁辺に僅かな石は見られるものの、配石と考えるには至らなかった。南北に長い二重構造の土壇である。外部土壇は長軸長160 cm、幅120 cm、深さ25 cm、内部土壇は長軸長115 cm、幅100 cm、深さは外部土壇よりさらに30 cm深い。土壇の長軸はほぼ南北を向く。北壁際に粗製深鉢片（図版26下-6）が出土した。埋土は黒色土層で占められる。



图版26 Cf12-1·2 土塚平断面图、出土遺物

C f 12-3 配石及び土壇 (図版27- a、写真図版27)

Cf12-3 土壇は不整な円形土壇である。規模は南北130 cm、東西110 cm、深さ26 cmを測る。埋土上面 (図左) から、埋土中下部 (図右) にかけて数個の石が検出された。いずれも細長い河原石を使用して土壇の輪郭に沿った形に並ぶ。

遺物は埋土中から少量の土器片を得たが、細片であり、時期決定には積極的でない。2・3は沈線文の見られる土器で、中期の中後半土器と思われる。

C f 12-4 土壇 (図版27- b、写真図版27)

二重構造の土壇である。外部土壇は不整形を呈し、南北140 cm、東西140 cm。深さ18 cmを測る。内部土壇は隅丸長方形を呈し、その長軸は西南西-東北東を向く。規模は長軸長100 cm、幅70 cm、深さは外部土壇より12 cm下がる。検出面で土壇の輪郭に沿った2個の石を検出しているが対応関係は不明である。

C f 15 配石遺構 (列石) (図版27- c、写真図版20)

Cf12-2 土壇を取り囲むような形で、弧状に巡らされた列石が検出された。石は長軸の方向弧の円周に沿わせる形で、立てて配されたものである。弧の推定半径は150 cm、Cf12-4 土壇からは30 cm程離れる。両者の関係は即断できない。

C g 09-2・3 土壇 (図版28- a、写真図版26)

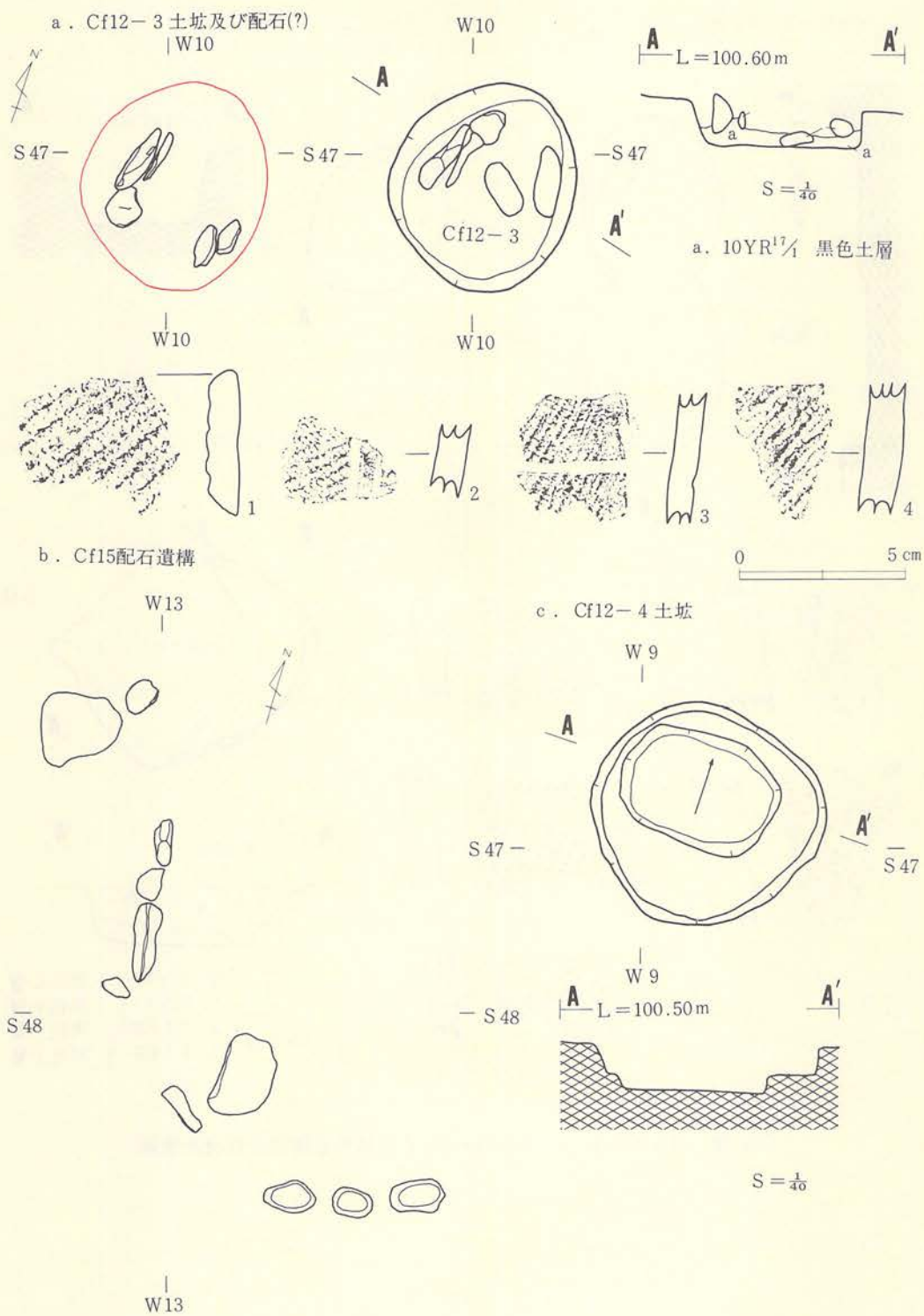
共に北北西-南南東に僅かに長い楕円形土壇である。規模はCg09-2 が長さ100 cm、幅84 cm、深さ16 cm、Cg09-3 土壇が長さ110 cm、幅84 cm、深さ19 cmと浅い。重複し合った土壇であるが新旧関係は不明である。Cg09-2 土壇は埋土下部から石が検出された。

C g 12-1 土壇 (図版28- b、写真図版26)

小型・深めの土壇である。平面形は楕円形を呈しており、長軸は西北西-東南東を向く。開口部長軸長100 cm、幅78 cm、深さ44 cmを測る。

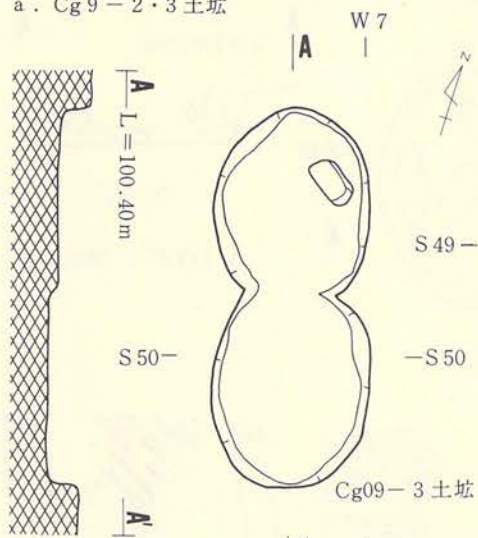
C g 12-2 土壇 (図版28- c)

二重土壇であるが、北壁が判然とせず、形状・規模共に明瞭でない。内部土壇は不整な方形状を示している。外部土壇は深さ22 cm、内部土壇はそれよりさらに12 cm下がる。埋土中より図示の土器片等を得た。1は沈線区画文及び擦消縄文が観察される。中期後半土器である。2以下は粗製土器体部片である。いずれも埋土混入遺物であり、遺構の時期決定には積極的でない。

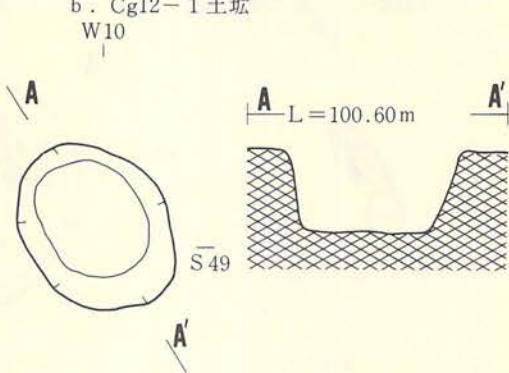


図版27 平断面図及び出土遺物

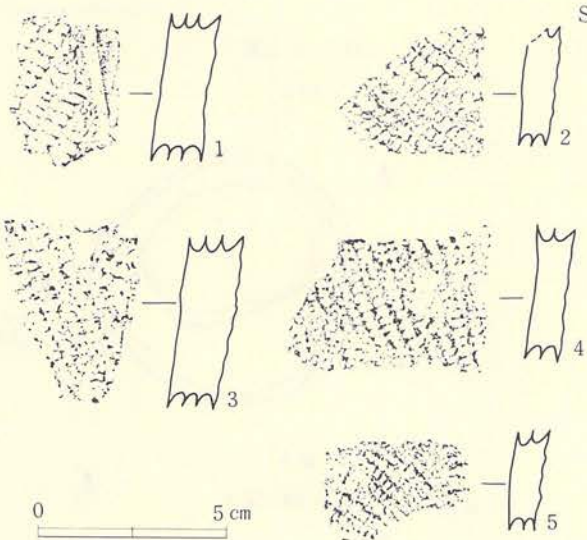
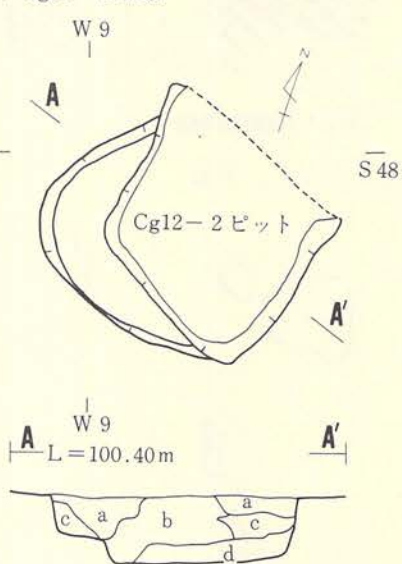
a. Cg9-2・3土坑



b. Cg12-1土坑

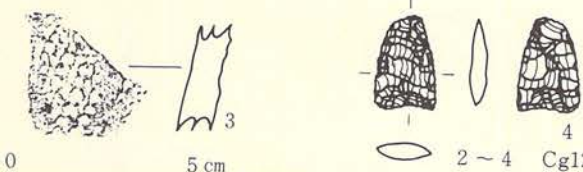
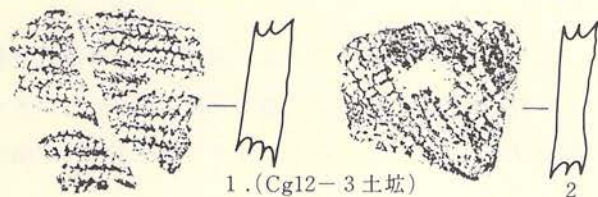
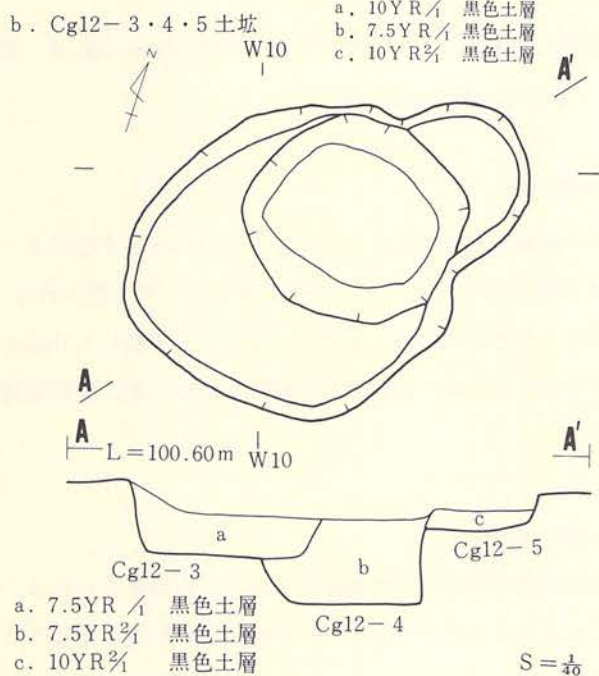
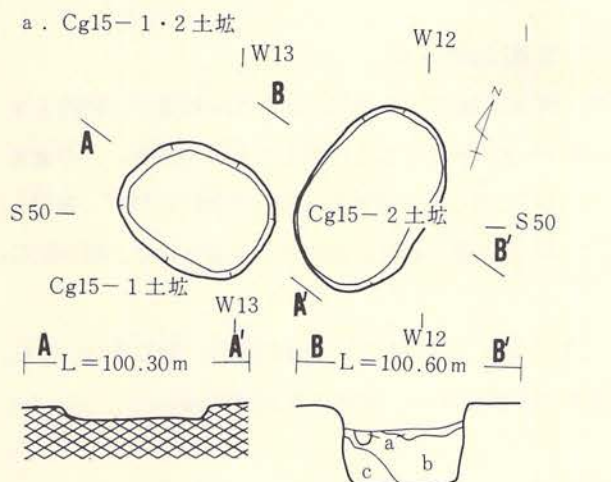


c. Cg12-2土坑



- a. 10YR $\frac{2}{1}$ 黑色土層
 - b. 10YR $\frac{1}{1}$ 黑色土層
 - c. 7.5YR $\frac{2}{1}$ 黑色土層
 - d. 7.5YR $\frac{1}{1}$ 黑色土層
- S = $\frac{1}{46}$

図版28 Cg09-2・3、Cg12-1・2土坑平断面図及び出土遺物



Cg15-1・2土壇

(図版29-a)

隣接して検出された小型土壇である。平面形は共に小伴形を呈し、その長軸は東西(15-1土壇)、南北(15-2土壇)とほぼ直交する。15-1土壇は極めて浅く深さ8cm、15-2土壇は深く42cmを測る。開口径は15-1土壇で80cm×65cm、15-2土壇で100cm×68cmを測る。

Cg12-3・4・5土壇

(図版29-b)

重複し合った土壇である。埋土は共に黒色土層で占められており、明瞭な差は認められないが、Cg12-5が古く、12-4土壇に切られたものである。12-3・4土壇の新旧関係は12-3が新か?あるいは12-3に付随する外部土壇の可能性も考えられる。

出土遺物は12-3土壇から図-1の土器片が、12-4土壇から2・3の土器片と石鏃1点が出土している。しかし、いずれも時期は不明である。

図版29 Cg12-3・4・5土壇、Cg15-1・2土壇平断面図及び出土遺物

Ch09-1 配石及び土壇 (図版30-a、写真図版21・28)

Ch09-1 配石は、弧状にめぐる列石で、西側弧部分は長さ150 cm×65 cm程度の比較的大きめの河原石を使用し東側は100 cm×50 cm程の小さい平らな石を使用したものである。この東側の石列はやや寸断されるものの、Ch09-2 列石に連なる可能性もある(図版37、付図 参照)。また弧状列石の西側に3個の石が連なっているが、弧状列石に重なる部分もあって、同一配石かどうかは判断できなかった。

配石の下方からCh09-1 土壇が検出されたが、土壇と配石の主体位置は一致しない。土壇は不整形円形を呈していて浅い。開口部径100 cm、底径86 cm、深さは17 cmである。

Ch09-2 土壇 (図版34-b、写真図版28)

不整形円形の二重土壇である。長軸は南北方向を向く。規模は外部土壇が102 cm×86 cm、深さ6 cm、内部土壇で63 cm×46 cm深さは外部土壇より7 cm深い。

Ch12-1 土壇 (図版30-b、写真図版27)

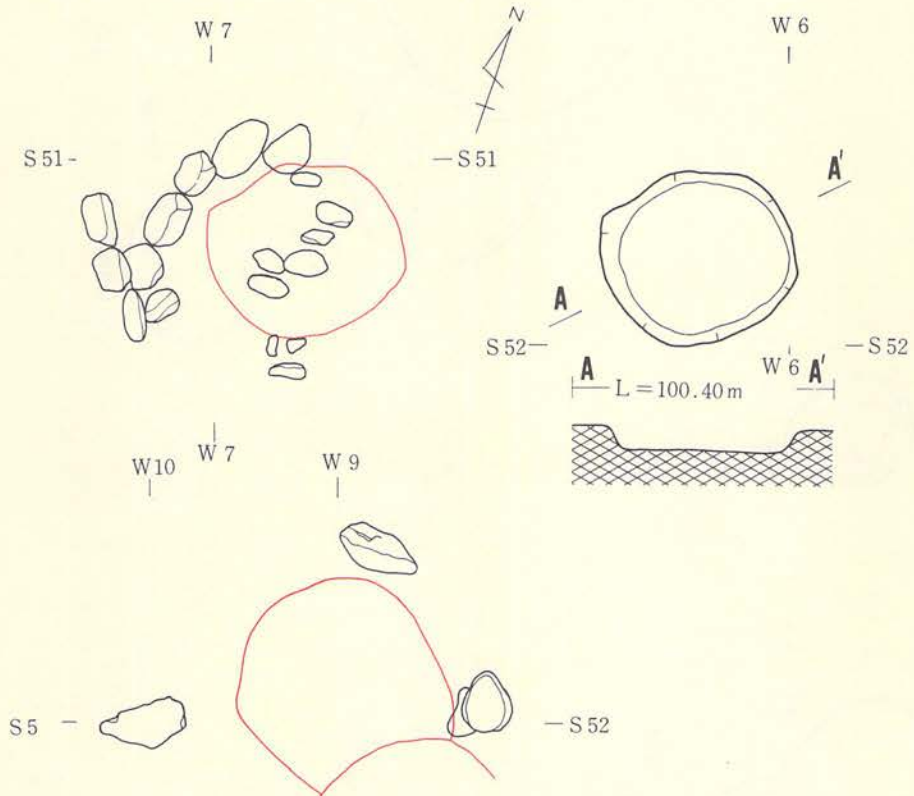
Ch09-1 土壇に隣接、Ch12-2 土壇に重複して検出された土壇である。12-2 土壇によって東南壁を破壊されているため、全容は不明だが、円形に近い平面形をとるものと思われる。残存開口部径は110 cm、深さは22 cmを測る。埋土は黒褐色土を主体とするが、不整に入り組んだ堆積状況を示す。土壇検出面上方、あるいは埋土中で数個の石を検出しているが、配石を認められる状況にはなかった。

Ch12-2 配石及び土壇 (図版30、写真図版21・27)

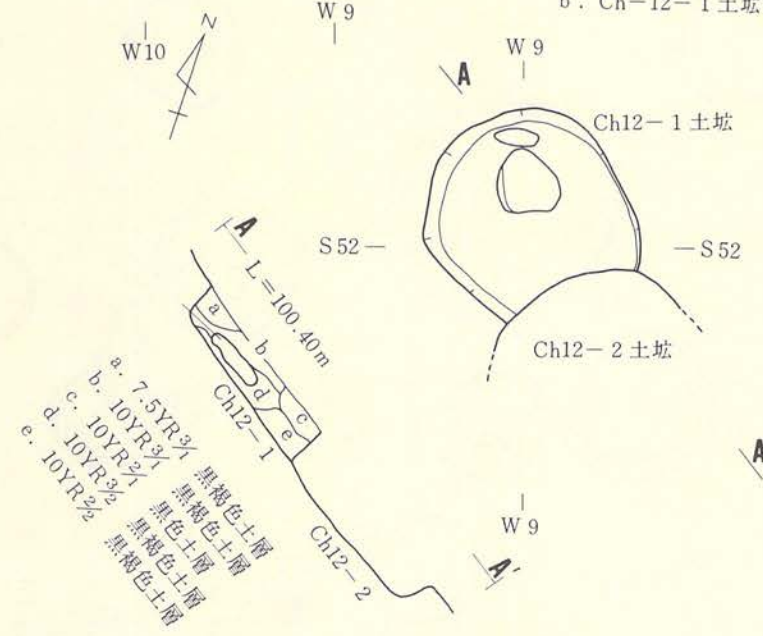
Ch12-2 配石遺構としたものは大小10数個の平らな石の集まりである。石の集まりには一定の形状は認められなかった。石は平らな石を伏せて(一部重ね合いながら)配置したものである。

Ch12-2 土壇は配石除去後の精査によって検出された土壇である。Ch12-1・3 土壇と重複し、12-1 土壇より新しく12-3 土壇より古いものである。不整形円形の土壇と推定される。残存開口部径120 cm、深さ20 cm、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中から図示土器片が出土した。

a. Ch09-1 配石及び土壇

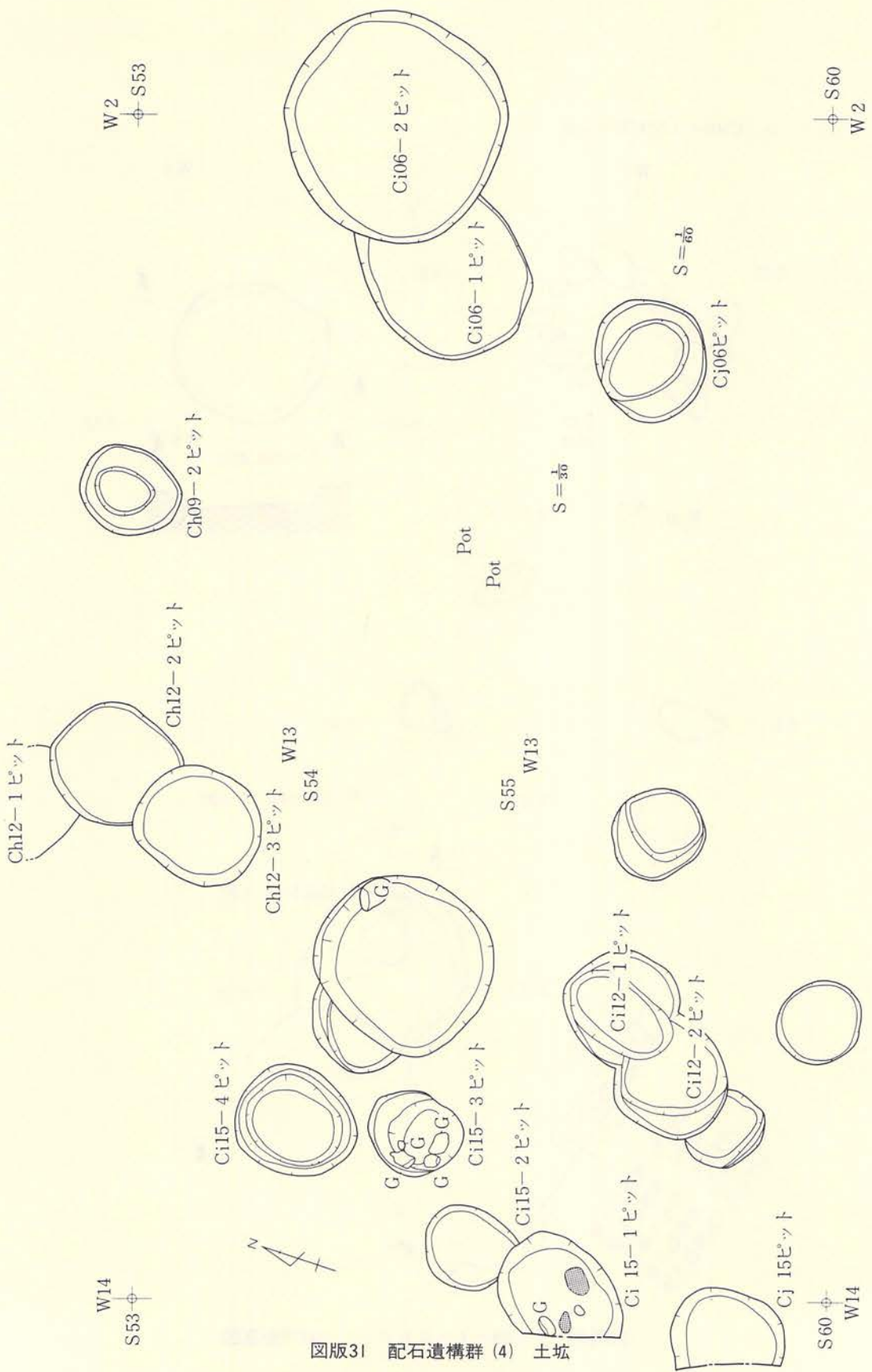


b. Ch-12-1 土壇

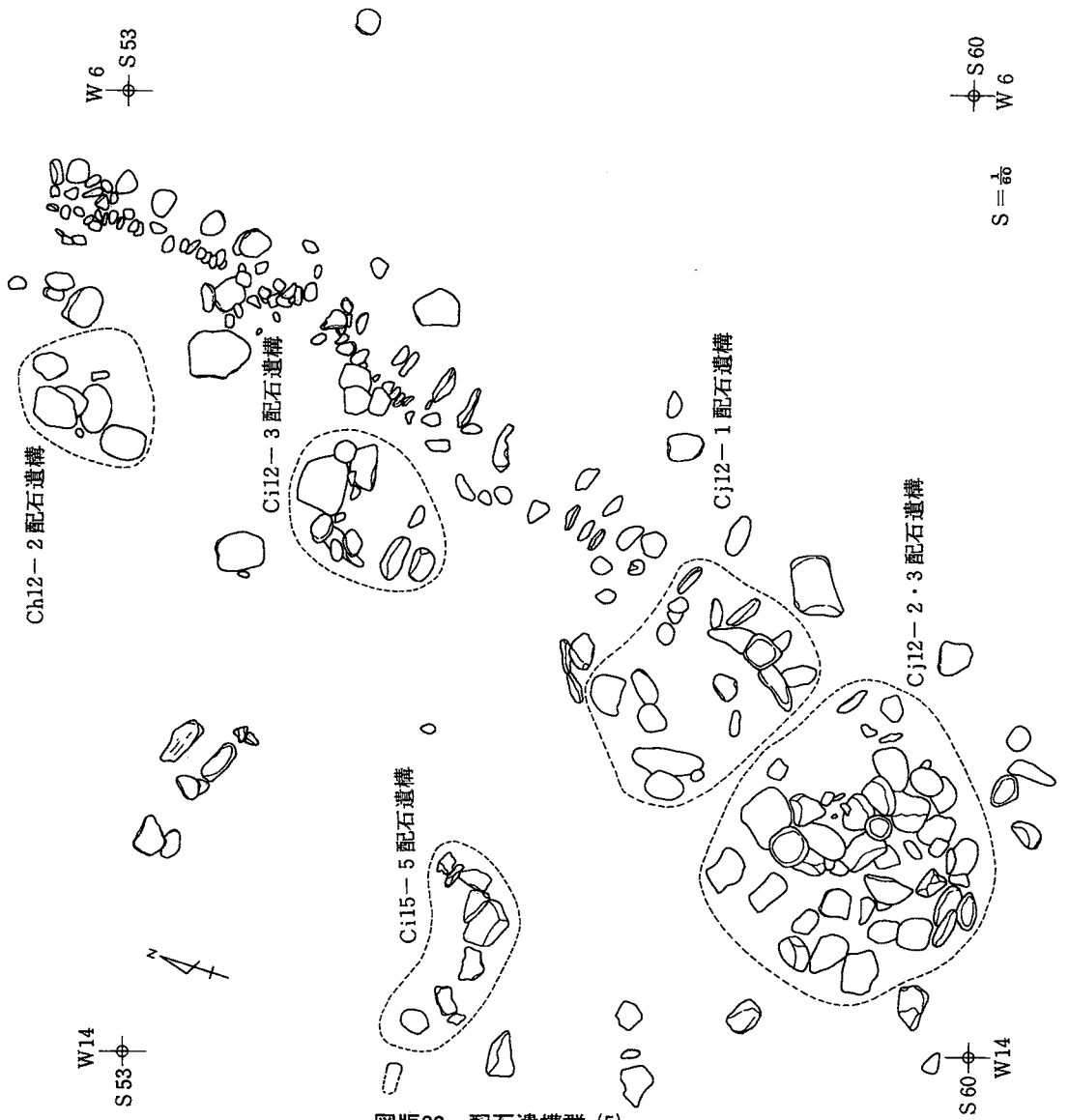


- a. 7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土層
- b. 10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土層
- c. 10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土層
- d. 10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土層
- e. 10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土層

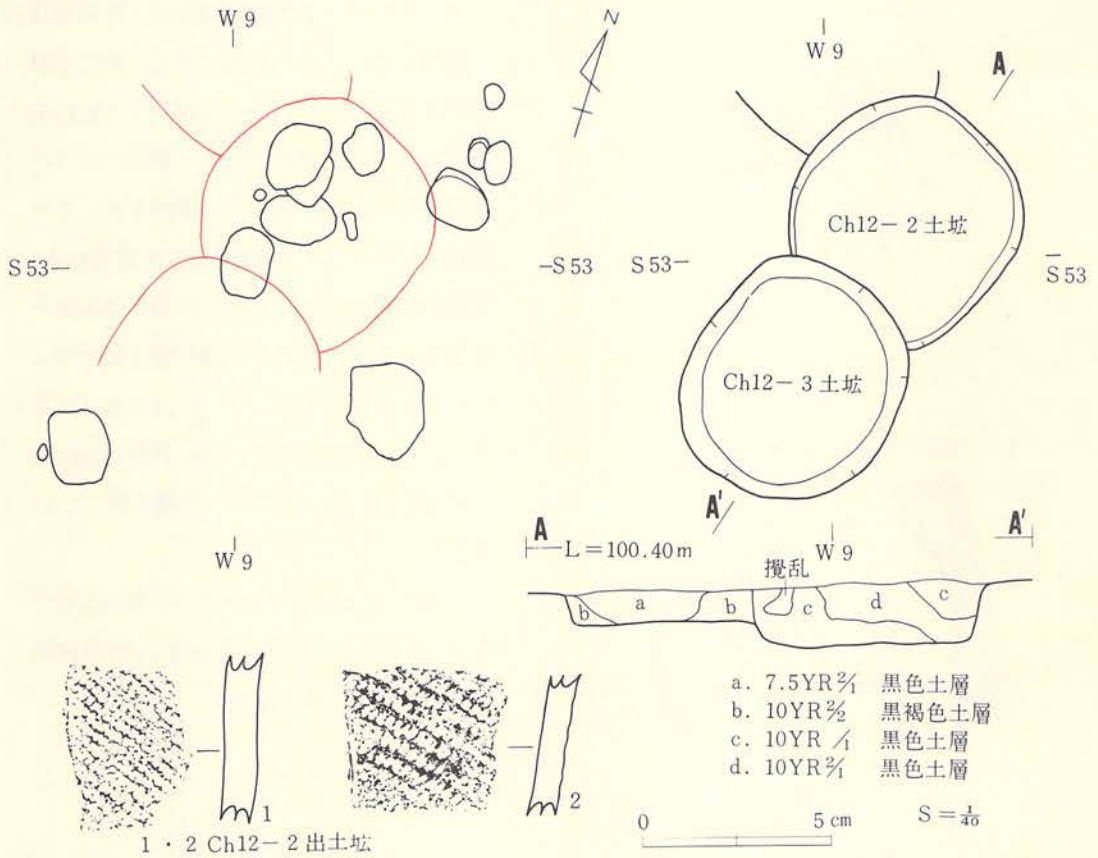
図版30 Ch09-1・Ch12-1 土壇平断面図



図版31 配石遺構群 (4) 土坂



図版32 配石遺構群 (5)



図版33 Ch12-2・3土壇、平断面図及び出土土器

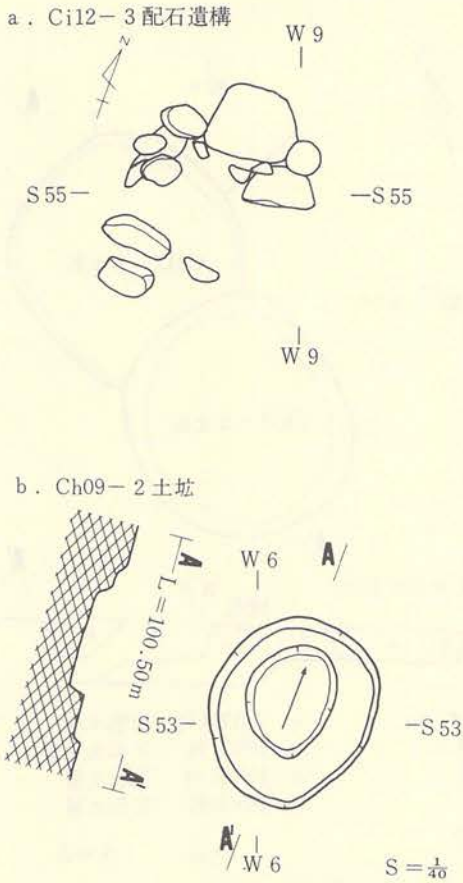
□ Ch12-3 土壇 (図版33、写真図版27)

不整な円形の土壇である。Ch12-2土壇と重複し、南壁を破壊している。開口部径128cm、底径110cm、深さ34cmを測る。埋土は黒色土層で占められるが、一方向からの堆積となっている。土壇検出面の上方で土壇輪郭外に載る2個の石が検出されているが対応関係は不明である。

□ Ci12-3 配石遺構 (図版34-a、写真図版21)

大小10数個の石の集まりで、Ch12-3、Ci12-1土壇の中間に位置する。大きな石(50~30cm)の間隙を小石で埋めたように見受けられる。下部に土壇は検出されなかった。

幾分離れた南側の石はCi12-1土壇の壁に重なり、それとの関連も考えられた。



図版34 Ci12-3配石、Ch09-2
土壇平断面図

Ci12-1・2土壇 (図版35、写真図版29)

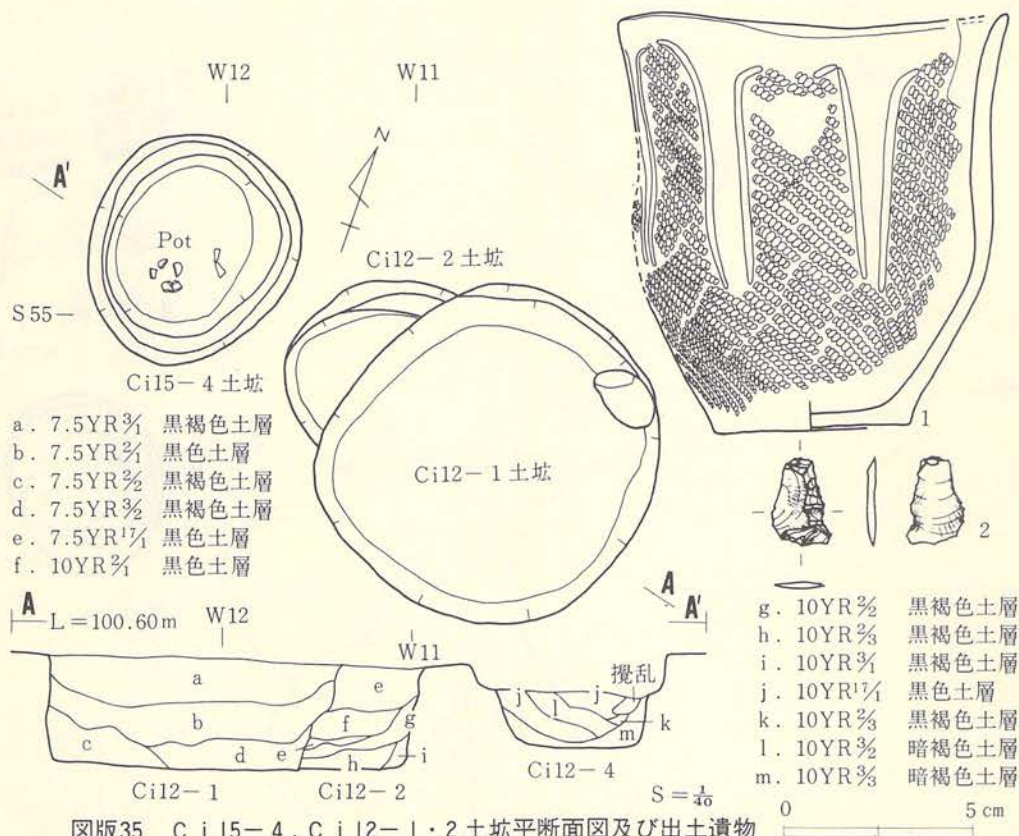
重複し合う大小の土壇である。配石面精査中に検出されている。Ci12-1土壇は大型で深さ56cmと深めである。前述のように北東壁の上面に数個の石が検出され、また壁際にころげ落ちた状態の石も見られる。直接の関連性は不明である。埋土は上層から黒褐色土層・黒色土・黒褐色土層で埋っている。中層以上はレンズ状の堆積状況を示す。規模は開口部径166cm、底径141cm、深さ59cmを測る。Ci12-2土壇を切っている。

Ci12-2土壇は深いやや小型の土壇である。Ci12-1土壇によって大半を破壊されている。二重土壇か？

Ci15-4土壇 (図版35、写真図版29)

楕円形の二重土壇である。二重の土壇は一方に傾らず、同心円状を呈す。外部土壇の底面レベルで、図示土器が検出された。小型の深鉢で、口径10.4cm、底径5.2cm、器高11.4cmを測る。器面には沈線により「 \square 」字区画文を描き、擦消縄文を施したものである(大木9)。他にフレーク1点を得た。

土壇の規模は外部土壇で126cm×110cm、深さ22cm、内部土壇は100cm×82cm、深さ48cmである。埋土は黒色土層、暗褐色土層が互層になっている。



図版35 Ci15-4、Ci12-1・2土坑平断面図及び出土遺物

Ci15-1 土坑 (図版36、写真図版29)

平面形が小判形を呈する土坑であるが、西南壁は調査区外に僅かに延びる。土坑の長軸は北北東—南南西を向き、開口部の長軸長118 cm + α 、幅109 cm、深さは50 cmを測る。埋土は上層の黒色土層と下の黒褐色土層とに大別される。土坑底面には焼土、礫が見られた。15-2 土坑に重複し、これを切りこんでいる。

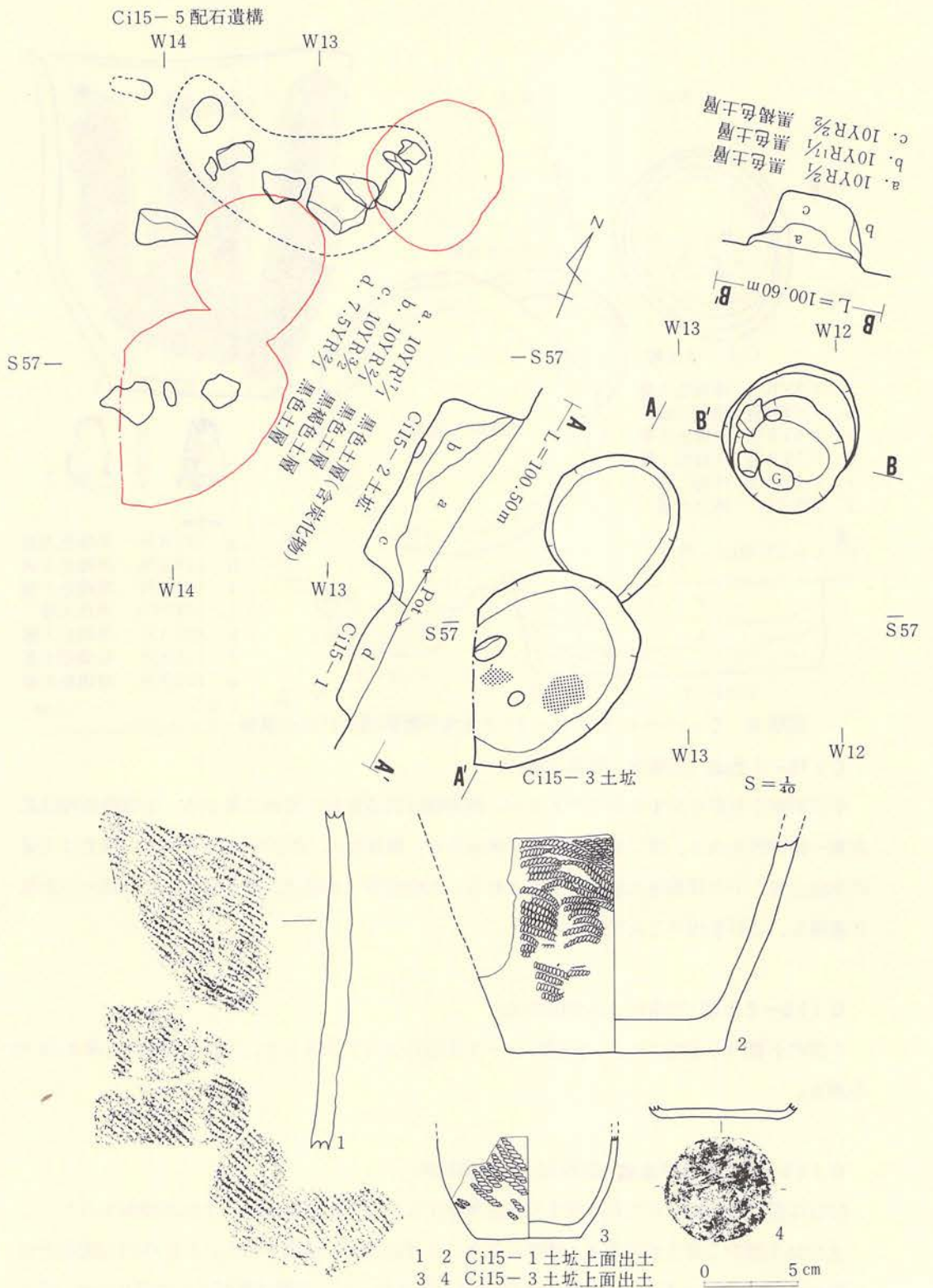
Ci15-2 土坑 (図版36、写真図版30)

小型の不整形土坑である。南壁は15-1 土坑によって消失した。100 cm × 86 cm、深さ 18 cm を測る。

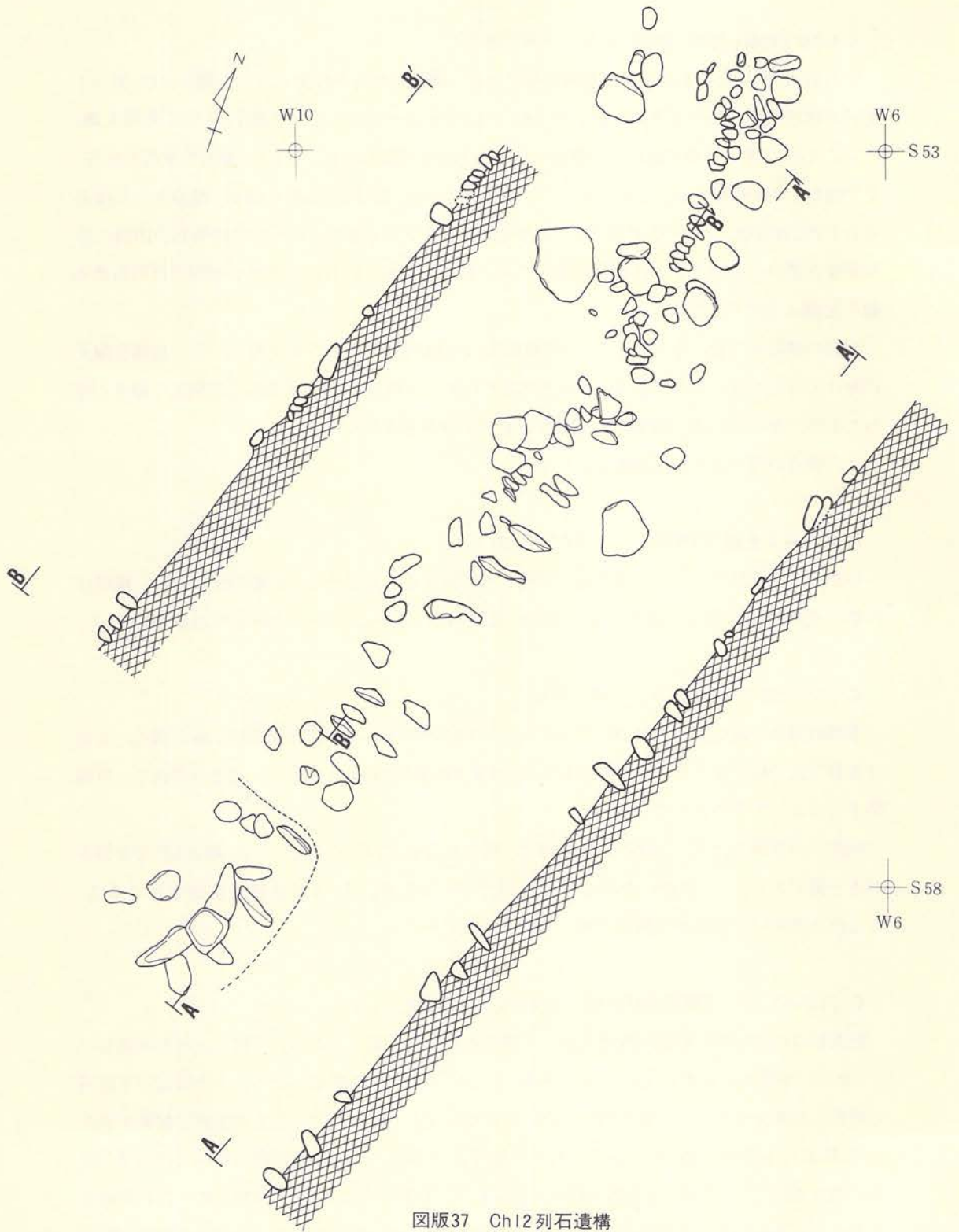
Ci15-3 配石及び土坑 (図版36、写真図版30)

配石は弧状に配置された石の集まりを主体とする。この配石除去後に土坑が検出された。

土坑は小型の二重土坑である。壁際に落ちこんだ形の石が検出された。上方のCi15配石とは位置がずれていることもあって、関連性は決定し得なかった。規模は外部土坑で径100 cm、深さ14 cm、内部土坑は開口部75 cm × 70 cm、底面56 cm × 30 cm、深さは外部土坑より32 cm下がる。



図版36 Ci15-1・2・3土坑、Ci15-5配石遺構
 平断面図及び出土遺物



图版37 Ch12列石遺構

C h 09 (列石) 遺構 (図版32・37、写真図版21)

配石群が集中分布する区域の東側に南北に走る細長い列石が検出された。列石はCh09-1配石遺構の南(あるいはその一部)から始まり、Ch12-2、Ci12-3配石のすぐ東側を通過してCj12-1配石遺構の北側まで確認される。しかし南限はCj12-1・2配石の東側の配石まで連なる可能性もある。これによって、全長は770cm、幅は85cm程を測る。幾分出入りはあるもののほぼ直状に連なった列石であり、方向はN-6-Eを測る。配石はこの列石の西側に分布密度が濃い。土壇はやはり列石の西側に多く分布するが、列石が途切れる南側では列石延長線の東側にも分布は濃い。

列石の構造は二重になっており、列の東側は25cm大の主に平たい石を使用し、石の長軸を南北に向けて並列させたものである。この西側はそれより小規模の15cm大の石を使用して細かく連ねたものとなっている。溝址の南北部分ともほぼ方向を同じくする。

この列石の直下から土壇は検出されなかった。

C j 12-4 土壇 (図版38-a、写真図版30)

小型の二重土壇である。内部土壇は不整な方形に近く、外部土壇は不整円形に近い。規模は外部土壇が98cm×89cm、深さ11cm、内部土壇が76cm×70cm、深さはそれより14cm深い。

C j 15 土壇 (図版38-b、写真図版30)

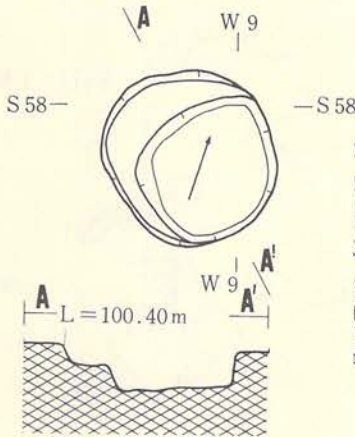
遺構の西側が調査区外に延びているため、形状不明である。検出部長は115cmを測る。土壇はⅡ層下面で検出されており、検出面から底面までの深さは約40cmである。埋土は黒色土、黒褐色土によって埋められている。

38図下の遺物を得た。1は深鉢口縁部で、外面に隆線文が見られる。2は沈線区画文が施された土器であり、1・2共に中期後半の土器片と思われる。3・4は粗製土器胴部片である。5は自然礫の一部に僅かな擦面が観察されるものである。

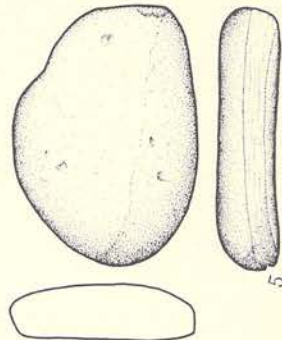
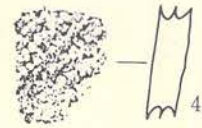
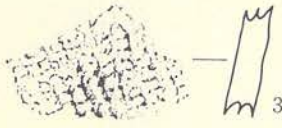
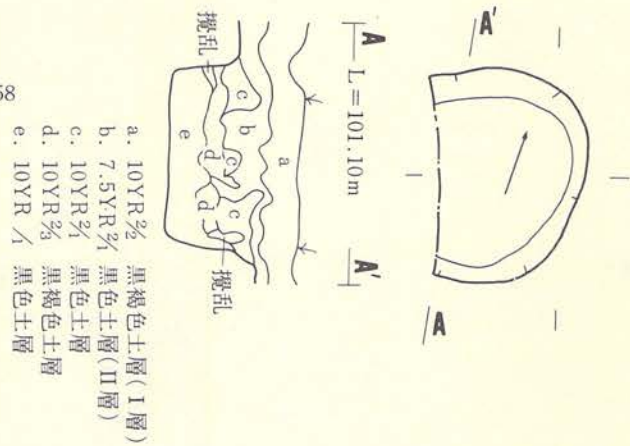
C j 12-1・2・3 配石及び土壇 (図版39、写真図版20・30)

配石群はCh09列石南端の西側に接して発見された石の集合である。下部の土壇を考慮して1・2・3の別に区分されているが、大きくは2つの集合に分断されよう。一つは12-1配石と呼称した部分である。一定の形状は認められないが、1個の石の左右に羽根状に配置された石の集まりと西側に散在する石の集まり部分とからなる。また東側の羽根状(弧状?)配石の東に接して、並列する4個の石列が見られる。前記したようにCh09列石の一部の可能性が考えられるものだがこの場合羽根状配石は列石の一部に載っており、Cj12-1配石が新規

a. Ci12-4 土壇



b. Cj15土壇



0 5 cm

1~5 Cj土壇出土

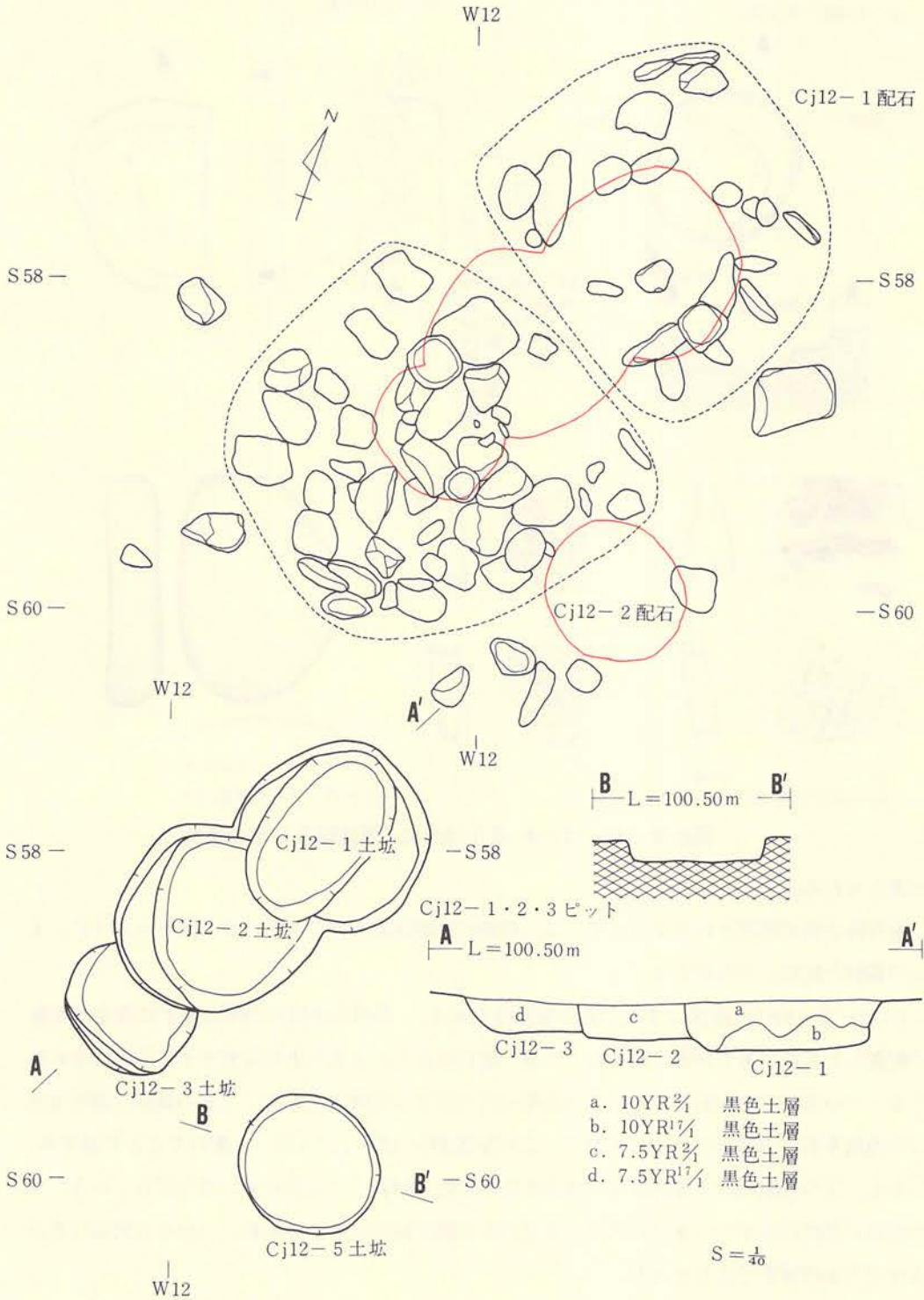
図版38 C j 12-4、C j 15土壇断面図及び出土遺物

と考えられる。

配石除去後に確認された下部土壇とは、直接的な関連は断言できないが、図上のように、土壇の輪郭と配石とが合致する。

Cj12-2・3 配石遺構は多数の石の集合体である。規模40cm程の河原石を主に寝せた状態で配置したものであるが密に組まれている。配石はほとんど盛り上りを見せず、平面的なものとなっている。この配石はさらに2つの配石に分化する可能性がある。二重の弧状に巡らせた石の内部を石で埋めていったもので、この方法はCf 12-1、Da15-1 配石などと共通する。しかし、2つの配石の主体部は下に検出された土壇の輪郭とは合致せず、南にずれている。また配石の西側にはやや大きめの河原石が並列の状態で見出されているが、いわゆる列石にあたるかどうかは断定できなかった。

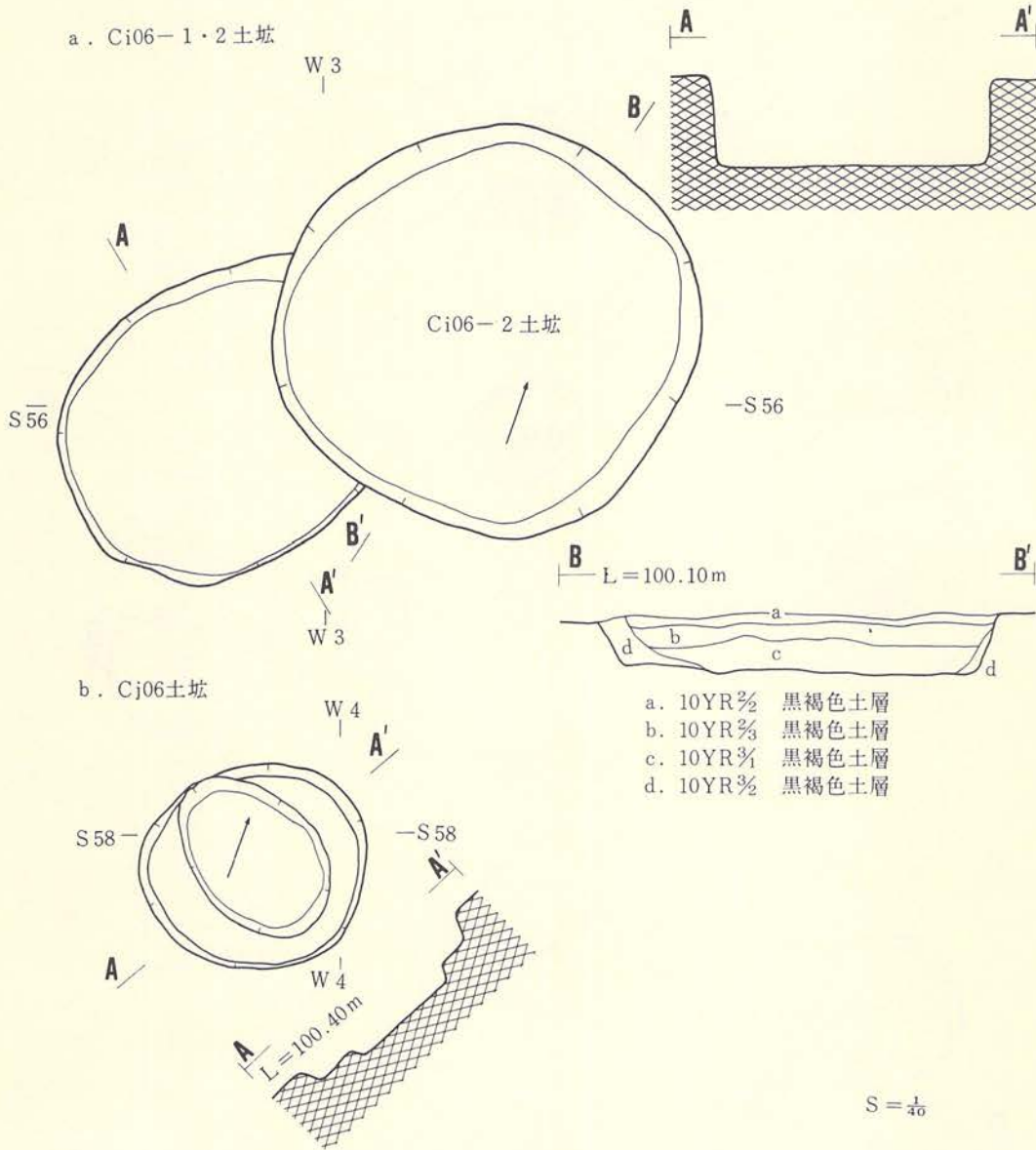
上記の配石下から発見された土壇は、二重構造を持つ重複土壇である。切り合い関係は北から順に新しい。Cj12-1 土壇は外部土壇がほぼ円形を呈し、内部土壇は細長い小判形の土壇



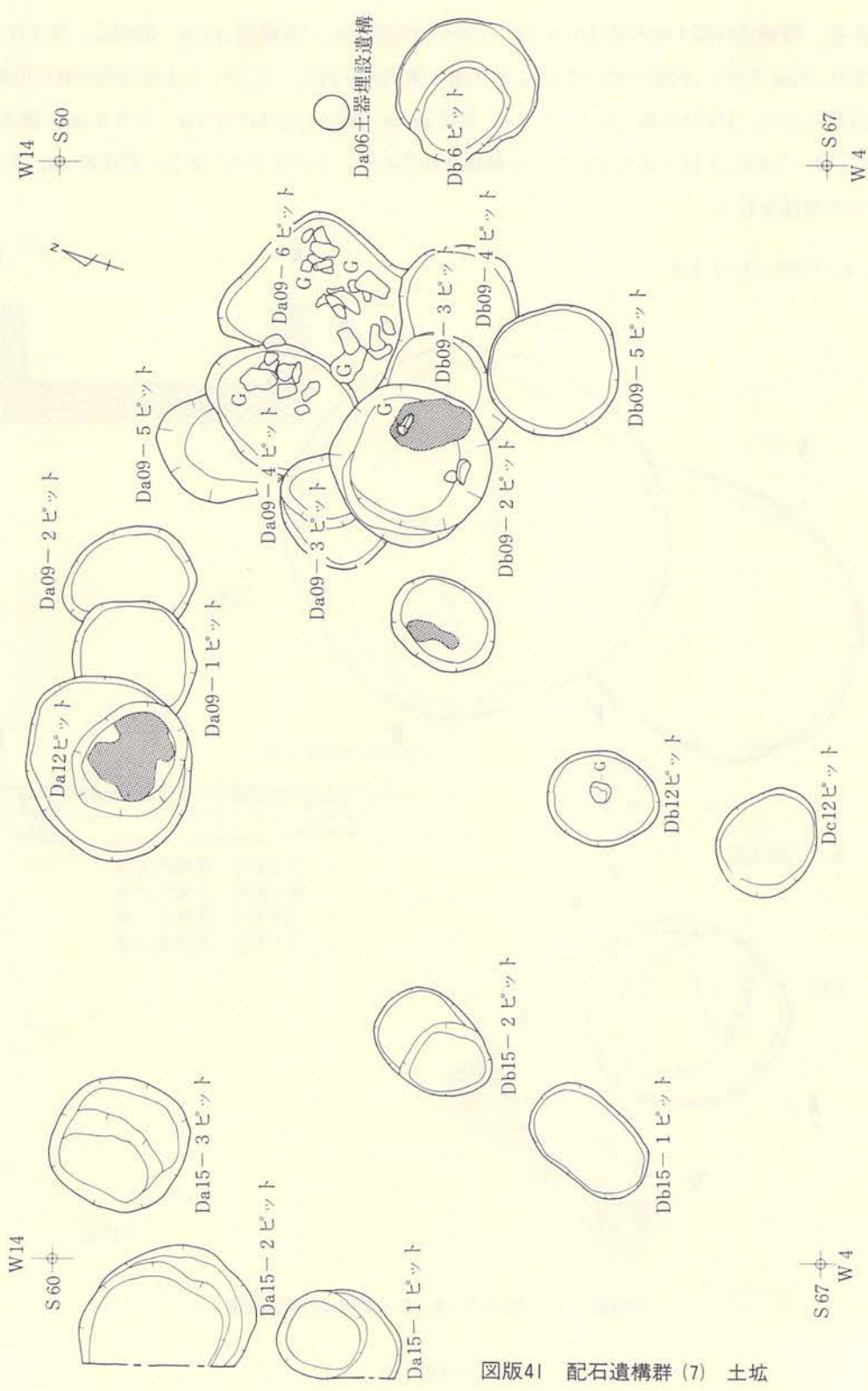
図版39 C j 12-1・2・3・5 配石及び土塚平断面図

である。規模は外部土壇が径116 cm、深さ22 cm、内部土壇が長軸長112 cm、幅66 cm、深さはそれより、7 cm 下がる。内部土壇の長軸は北北東-南南西を向く。Cj12-2 土壇は内外共に不整な円形に近い。規模は外部土壇が径114 cm、深さ96 cm、内部土壇は径100 cm 深さ4 cmを測る。

Cj12-3 土壇は12-2 土壇によって破壊されており、全容は不明である。直径82 cm、深さ20 cmの規模を有す。



図版40 Ci06-1・2、Ci06土壇平断面図



図版41 配石遺構群 (7) 土坑

W14
S60

Pit

S67
W14

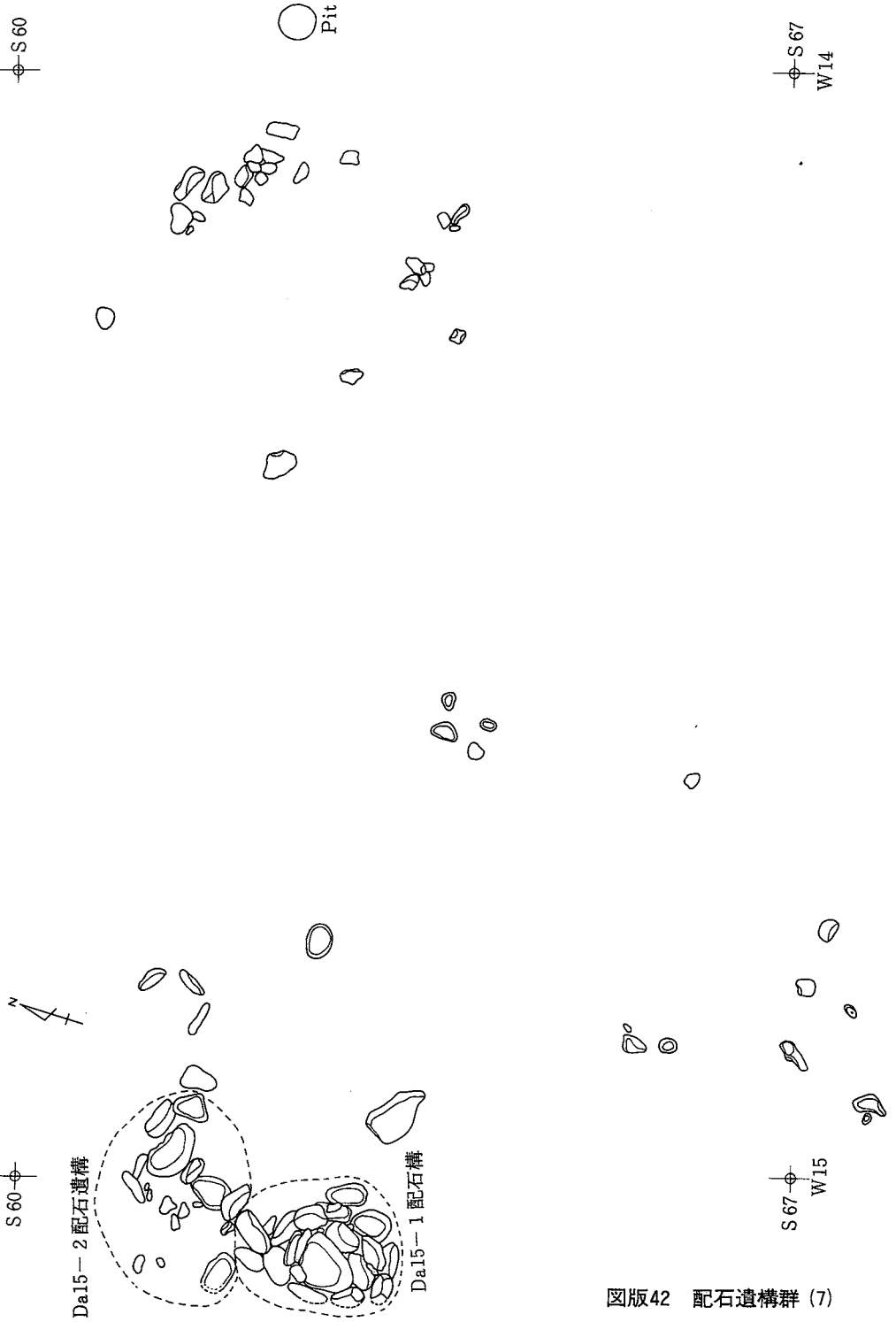
W14
S60

Da15-2 配石遺構

Da15-1 配石構

S67
W15

図版42 配石遺構群 (7)



C j 12-5 土壇 (図版39)

小型の円形土壇である。開口部径87 cm、底径78 cm、深さ14 cmを測る。壁はほぼ直立する。

C i 06-1・2 土壇 (図版40-a)

前述のCh 09列石から4 m程東に離れた位置で検出された。Ci 06-1 土壇は深めの円形土壇である。直径156 cm、深さ52 cmを測り、壁はほぼ直立する。Ci 06-2 土壇は直径224 cmの大型土壇である。埋土は黒褐色土層である。深さは34 cmを測る。新旧関係は不明である。

C j 06土壇 (図版40-b、写真図版30)

浅い二重土壇である。外部土壇は不整形、内部土壇は卵形を呈する。内部土壇の長軸は東西方向に近い。規模は外部土壇で径126 cm、深さ14 cm、内部土壇は長軸長100 cm、深さは外部土壇より7 cm下がる。Ci 06土壇同様にCh 09列石の東側に位置する。

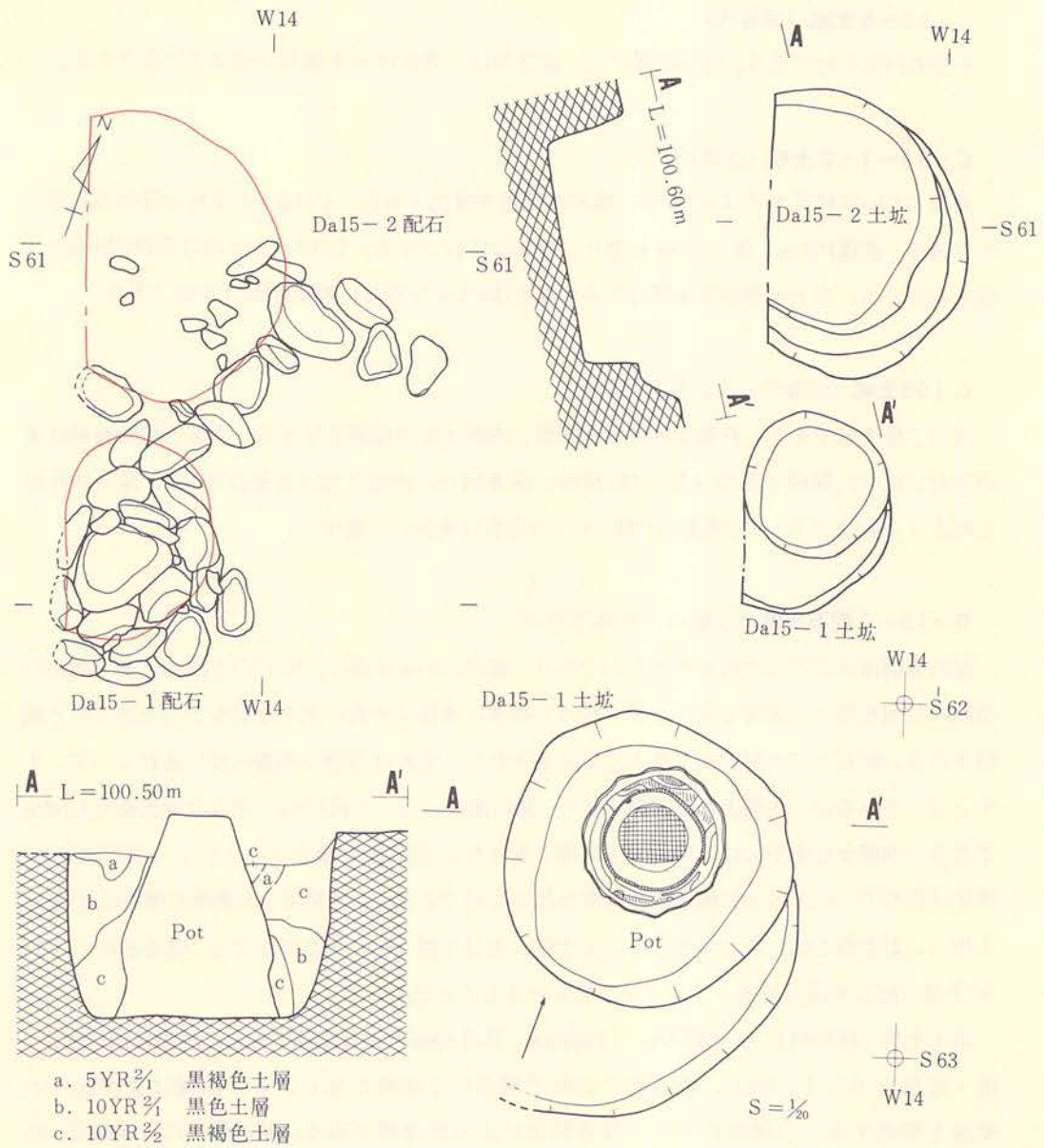
D a 15-1 配石土壇 (図版43、写真図版32)

配石遺構はほぼ円形に組まれたものであり、直径120 cmを測る。配石の方法は、まず周囲に環状の石列を巡らせ内部を大小の石で埋めてゆき、最後に中央に大きな石をかぶせたものと観察される。配石下には図右の二重土壇が発見された。土壇は西壁が調査区外に延びていて、不明となっているが、内部土壇は円形を呈し、開口部径80 cm、底径70 cm、深さは検出面から52 cmである。内部土壇中からは、口縁を下に倒立させた大型深鉢が検出されている(図版43-下)。深鉢は完形で、底部は土壇検出面上に突き出るものである。この結果、本遺構の構築は①土壇を掘る。②土器を倒立させて埋める。③土壇、土器を覆うべく土盛りをする 確認されていない④上部に配石を巡らせる。のような手順をとるものと思われる。

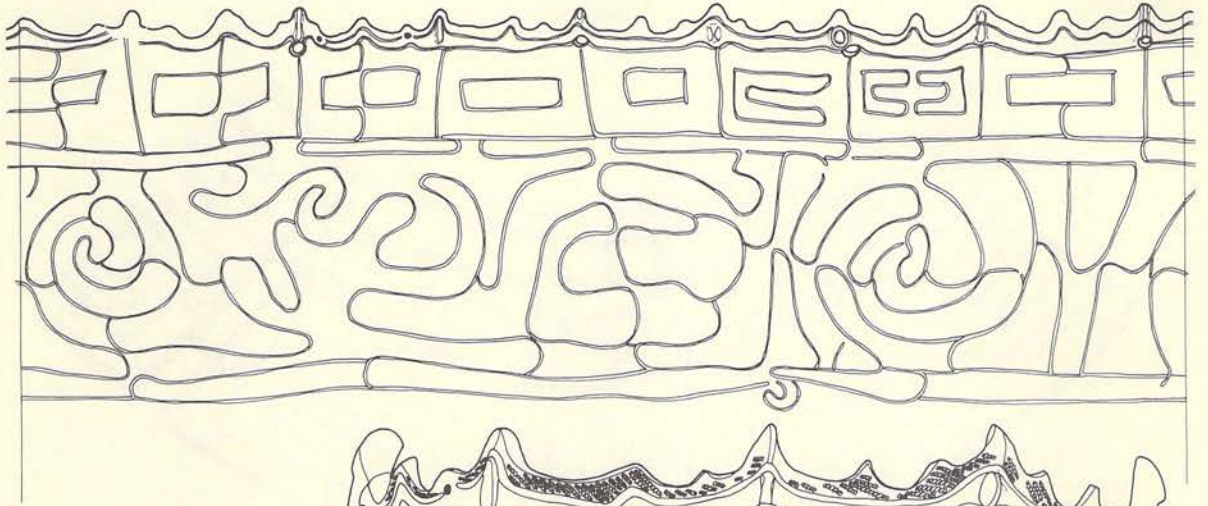
出土土器(図版44)は器高61 cm、口径40 cm、底径19 cmの大型深鉢である。色調は淡い赤橙色～褐色を示して、胎土、焼成共に良好で胴部には黒斑が見られる。口縁は大突起・小突起を形成する。口縁形に沿って隆帯貼付による肥厚帯が巡る。肥厚帯上には沈線文、貼付文を施し、地文を回転する。4個の主突起下にそれぞれ貫通孔が穿たれている。文様帯は頸部・胴部とに二分され、すべて沈線文によって施文される。地文はLR単節縄文の充填である。(後期初頭土器)

D a 15-2 土壇 (図版43、写真図版31)

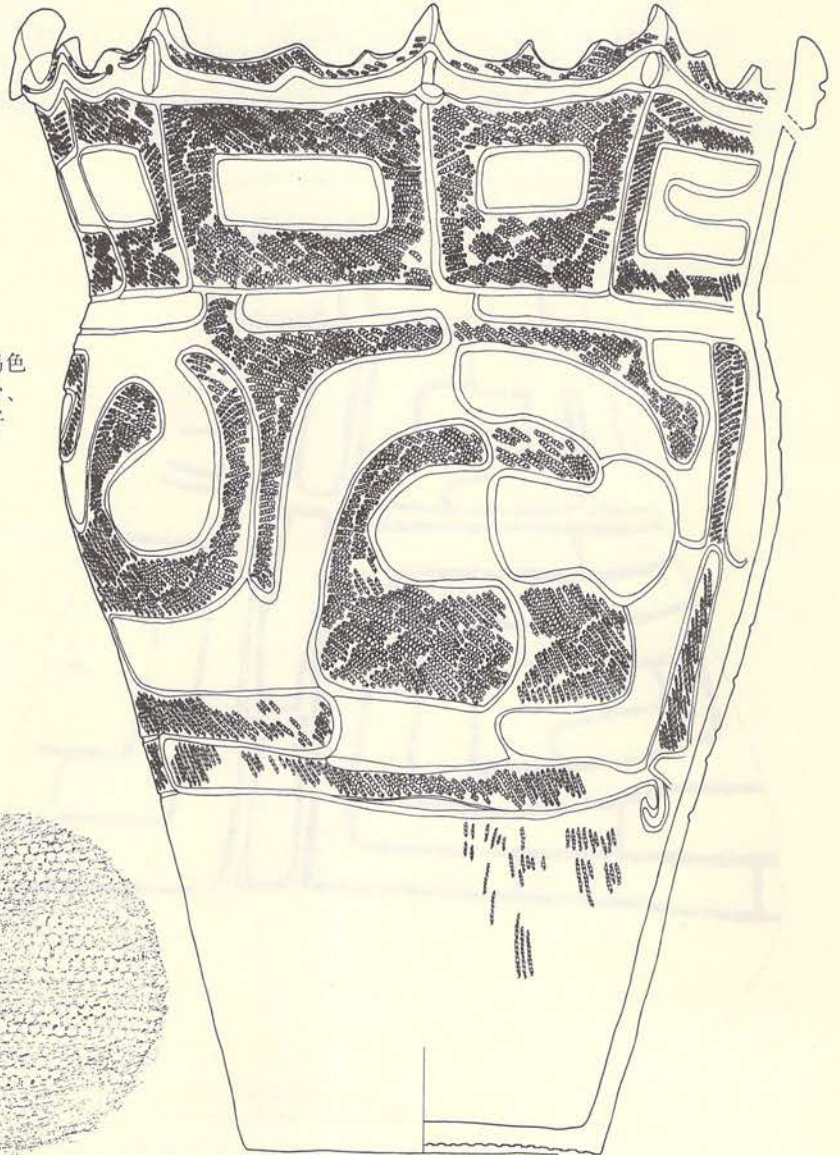
15-1 土壇と同様に配石下に土壇を伴う遺構であるが、上部の配石は数少なく、また形状も一定でない。土壇はやはり二重土壇で、西半分を調査区外に延ばす。検出部長は外部土壇162



図版43 Da15-1・2 配石及び土坑平面断面図



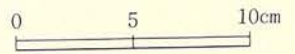
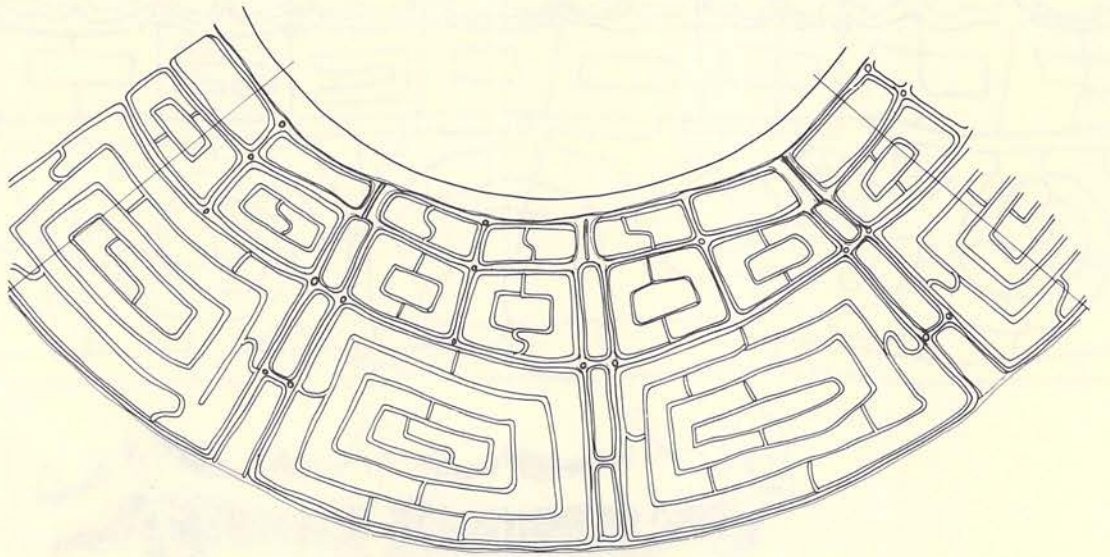
口径：40cm
 底径：19cm
 器高：61cm
 色调：淡赤橙色～白褐色
 胎土、烧成：砂土含砂、
 密。良好



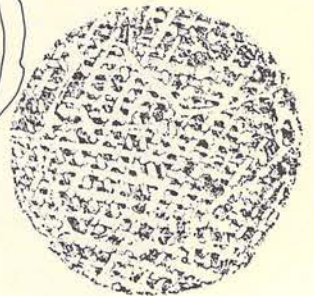
0 5 10m



图版44 D a 15-1 土坛内出土土器



底部網代痕 約 $\frac{1}{4}$



図版45 D a 15-2 土坑出土土器

cm、内部土壇139 cm程で、深さは外部土壇21 cm、内部土壇はそれより30cm下がるものである。内部土壇の底面から押しつぶれた形の壺形土器が検出された。復元の結果ほぼ完形の壺であることが知られた。土中に埋没していた経緯の中で、損壊したものと考えられる。

出土土器（図版45）は胴が大きく脹らむ形の壺で、頸部にブリッジ状の把手3個が取り付けられたものである。口径17cm、底径18cm、胴部最大径34cmを測る。器面は研磨調整が綿密に行われ、縄文の回転は見られない。胴部文様は、文様単位を区分する区画文にのみ隆沈線が用いられて、区画内部の文様は沈線手法によっている。色調は赤橙色を呈す。（後期初頭）

D a 15- 3 土壇（図版46- a、写真図版33）

上記のDa15- 1 土壇の北東に隣接して検出された土壇である。配石は伴わない。二重土壇である。内部土壇は小判形を呈するもので、長軸方向は南北方向に近い。外部土壇は開口部径120 cm×120 cm、深さ20 cm、内部土壇は116 cm×80 cm、深さは検出面より42 cmである。埋土は黒色土が大半を占める。

D b 15- 1 土壇（図版46- b、写真図版33）

平面形が小判形を呈する浅い土壇である。土壇の長軸は北北東-南南西を向く。規模は開口部で120 cm×72 cm、深さは26 cmを測り、壁はほぼ垂直に立つ。

D b 15- 2 土壇（図版46- c、写真図版33）

小型で浅い二重土壇である。内部土壇は不整形で、開口部径70 cm、深さ18 cmを測る。外部土壇は120 cm×84 cmの規模を有し、深さは10 cmである。

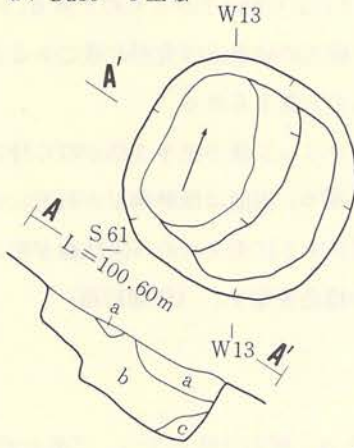
D a 12・D a 09- 1・2 土壇（図版46- d、写真図版33）

重複し合う土壇である。埋土観察の結果、中央のDa09- 1が新しく両隣の土壇を切っている。Da09- 1 土壇は円形土壇で、開口部径119 cm、底径100 cm、深さは22 cmである。黒色土、黒褐色土が入り乱れて堆積している。人為堆積と思われる。

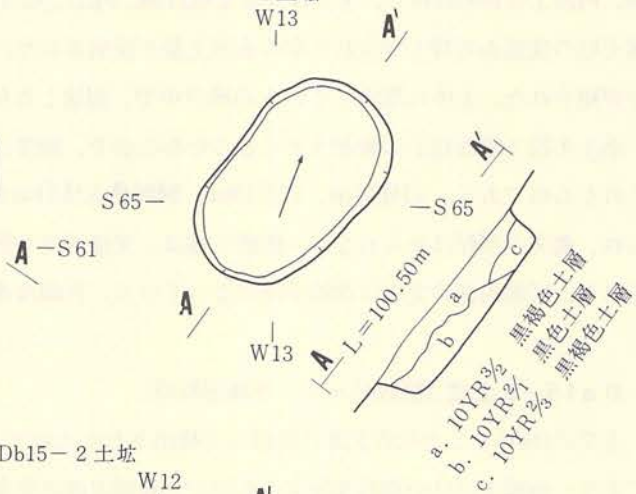
Da09- 2 土壇は不整形の土壇で、残存部径は124 cm、深さ20 cmを測る。

Da12土壇は二重土壇である。外部土壇はやや広く直径は176 cm、深さ22 cm程である。内部土壇は不整形の土壇で、長軸は東西方向に近い。規模は開口部で120 cm×95 cm、深さは外部土壇より18 cm深い。内部土壇の底面には焼土の堆積が見られる。

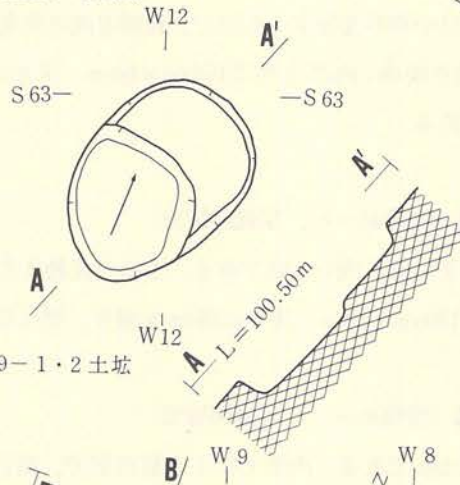
a. Da15-3 土坑



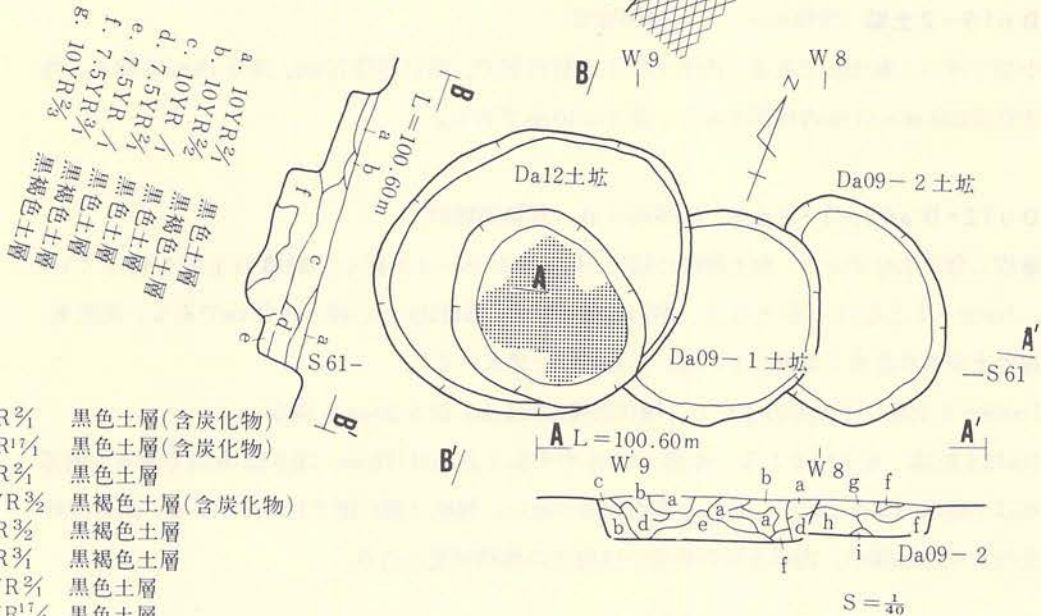
b. Db15-1 土坑



c. Db15-2 土坑



d. Da12, Da09-1·2 土坑



- a. 10YR²/₂ 黑色土層(含炭化物)
- b. 10YR¹/₄ 黑色土層(含炭化物)
- c. 10YR²/₂ 黑色土層
- d. 7.5YR³/₂ 黑褐色土層(含炭化物)
- e. 10YR³/₂ 黑褐色土層
- f. 10YR³/₂ 黑褐色土層
- g. 7.5YR²/₂ 黑色土層
- h. 7.5YR¹/₄ 黑色土層
- i. 7.5YR⁵/₈ 明褐色土層

图版46 Da09-1·2、Da12、Da15、Db15-1·2 土坑平断面图

Da09-3~6、Db09-2~5 土壇群 (図版47)

8個の土壇群が重複し合って検出されたものである。検出面の上方に、散乱する石類が見られたが一定の形状は保っておらず、配石とは認定し得なかった。各土壇は相互に切り合っているため、原形を留めるものは少ない。

Da09-3 土壇は二重土壇である。しかし他の二重土壇と比較して、内外の土壇の区別が明らかでなく、底面の緩い傾斜で区別された。Da09-4 土壇を切った新規遺構と考えられるが判然としない。Da09-4 土壇は不整な楕円形土壇と思われる。埋土中及び底面直上まで石の混入が見られる。埋土の状況から、Da09-6 土壇より新しくこれを切っていると考えられるが、明瞭ではない。Da09-5 土壇は不整な楕円形土壇のように見受けられるが、大半を欠失したため不明である。Da09-6 土壇は規模の大きい方形土壇かと思われる。残存幅143cm、深さ34cmを測る。埋土中に多量の石の混入が見られた。

Db09-2 土壇は二重土壇と思われるが、他の例に比して内部土壇の比率が大きく、外部土壇の痕跡は僅かとなっている。口径127cm±底径100cm±深さは48cm±と比較的深い。壁際～底面上まで焼土の堆積や数個の石が検出された。Db09-3 土壇は原形をほとんど留めない。深さは28cmを測る。Db09-4 土壇も同様であるが、楕円形に近い土壇であろうか 深さ32cmを測る。Db09-5 土壇は円形土壇である。底面は平坦ではなく、南方向に傾斜している。

Db09-1 土壇 (図版48)

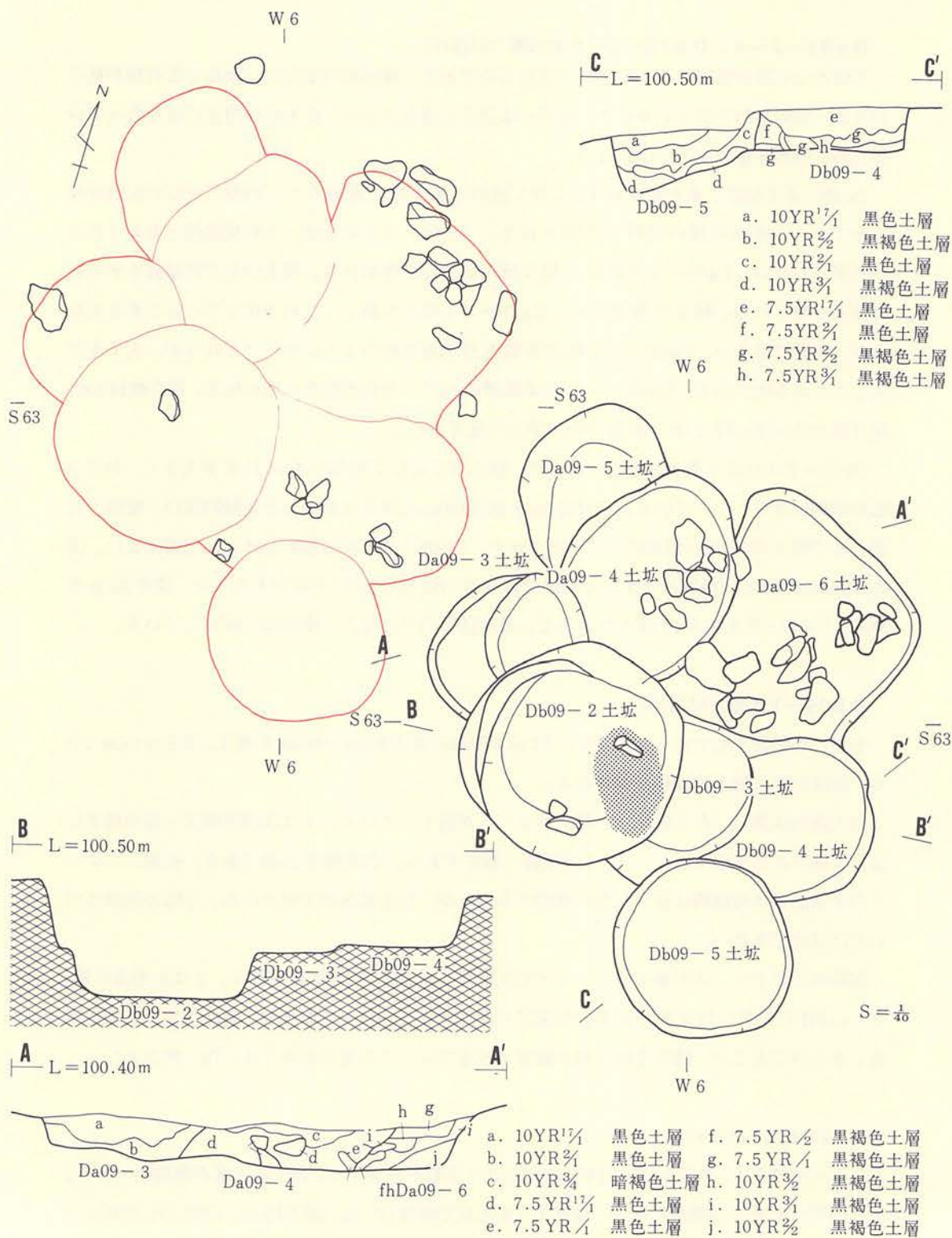
小型の小判形土壇である。開口部で102cm×76cm、底径83cm×66cmを測る。深さは16cmである。底面付近に焼土の堆積が見られる。

出土遺物は図示した土器片、石器、フレイクが出土している。1は沈線区画文+擦消縄文によって施された文様を有し、2・3は粗製土器片である。中期後半土器である。石器、フレイクの多量出土は他遺構に見られない様相であったが、出土状況が不明のため、土壇の性格については言及できない。

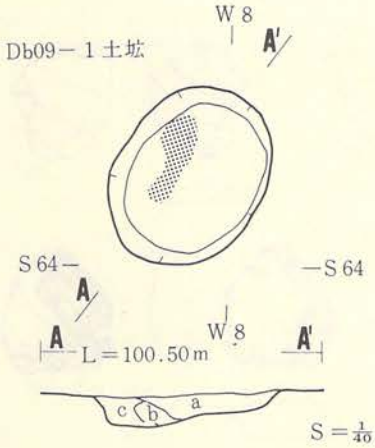
図版48下の1~4は石鏃である。1・3は無茎・円基の楕円形鏃である。3は先端部欠損。2・4は作りの甘い剥片鏃である。49図21・22はスクレーパーであろう。他はフレイク類と見做したものであるが、僅かな加工痕が観察されるフレイクも見られる(6、10、20など)。

Db06土壇 (図版49)

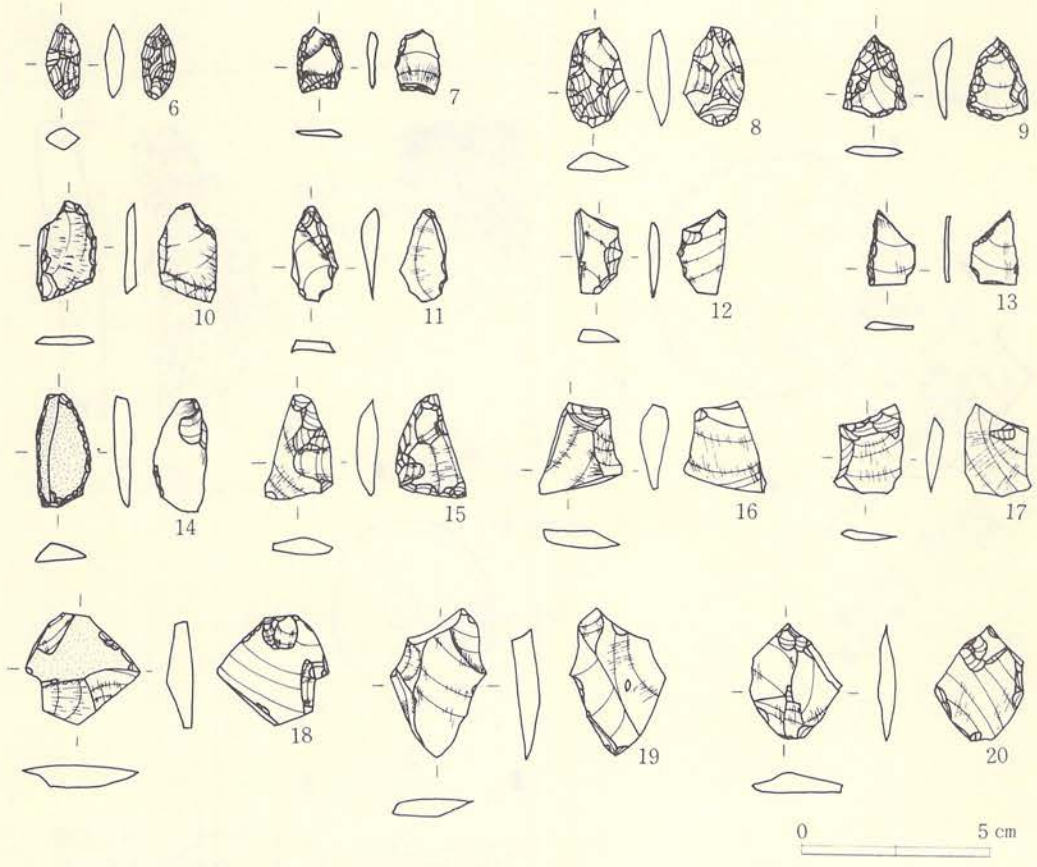
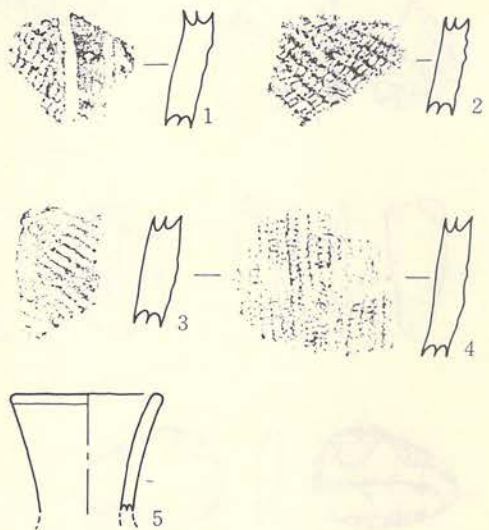
二重土壇である。外部土壇は円形、内部土壇は小判形を呈する。埋土は下部の黒褐色土層と、上部の黒色土層とで構成される。規模は外部土壇で直径125cm、深さ10cm、内部土壇で96cm×74cm、深さは外部土壇より16cm下がる。



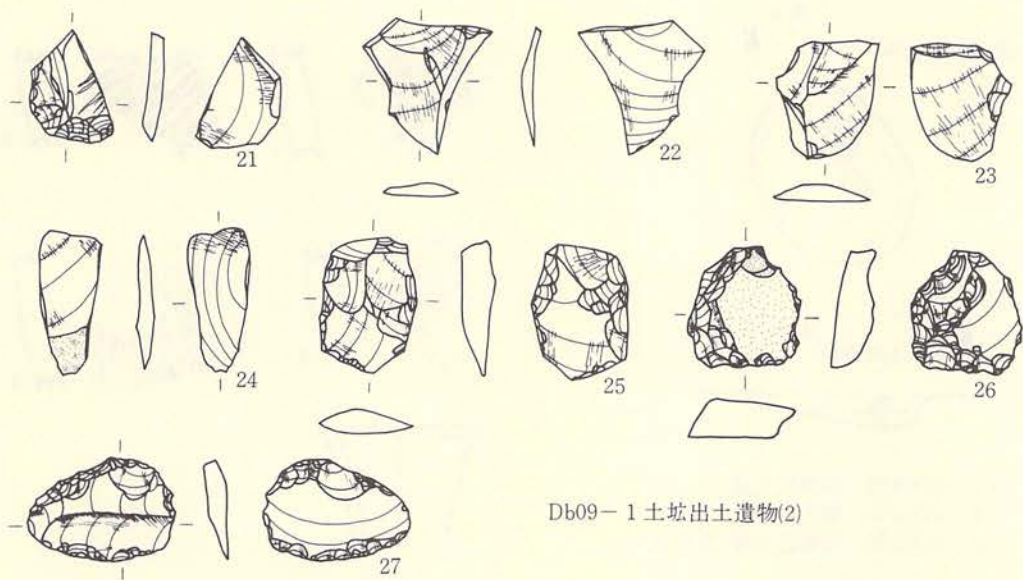
图版47 D a 09-3 ~ 6、D b 09-2 ~ 5 土坛平面断面图



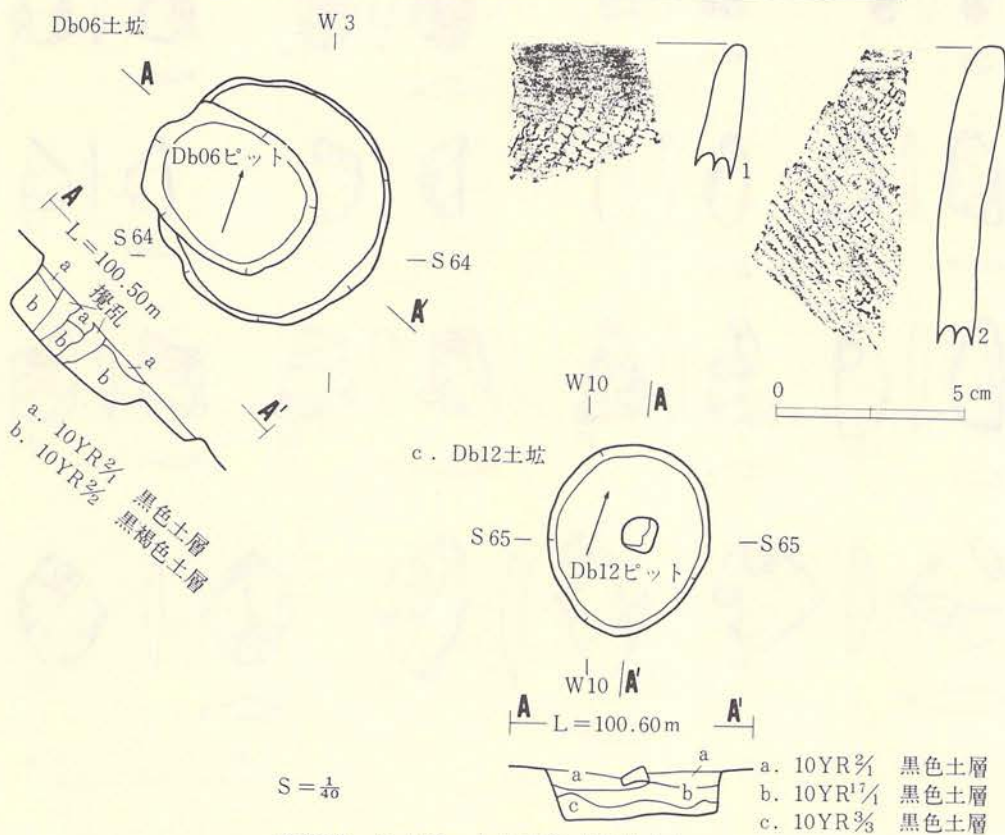
- a. 10YR $\frac{3}{3}$ 暗褐色土層
- b. 10YR $\frac{4}{6}$ 褐色土層(含燒土)
- c. 10YR $\frac{4}{4}$ 暗褐色土層(含燒土)



図版48 D b 09-1 土坛平断面図及び出土遺物 (1)



Db09-1 土壇出土遺物(2)



図版49 D b 09-1 土壇出土遺物 (2)
及び D b 06、D b 12土壇平断面図

D b12土坛 (図版49)

小型の円形土坛である。開口部径100 cm、底径90 cm、深さは28 cmを測る。埋土は3層に細分されるが、いずれも黒色土層である。検出面の上面で石が1個確認されている。

D c12土坛 (図版50-a)

小型の楕円形土坛である。規模は開口部で102 cm×87 cm、底部が88 cm×73 cmを測る。深さは18 cmで、埋土は黒色土である。

出土遺物としては図示した土器片及び、石製品が見られる。石製品は平板な短ざく型を呈して上下両端に孔が穿たれている。全面に調整時の擦痕が観察されるが、一端の磨滅が著しい。

D a06土器埋設遺構 (図版50-b、写真図版34)

溝状遺構の西側約2.5m土の地点に土器埋設遺構が検出された。地面を掘りこんで、土器を埋置したものである。周囲に焼土の堆積が見られ、火熱を使用したことが想定される。土器は粗製の深鉢で、胴下部約48 cmを土中に埋没させ上半分を露出させたものである。この埋設土器は強い火熱を受けて脆弱化し、復元不能であった。図示土器は埋設土器中、また周囲の焼土中から出土した土器片である。沈線区画文及びそのモチーフから、中期末葉(大木10)に比定される。

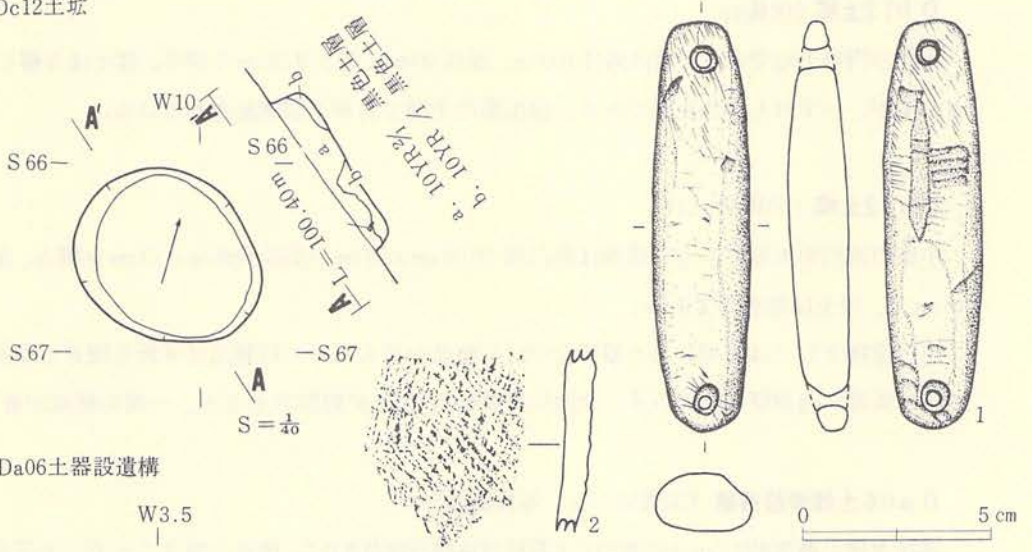
C h50土坛 (図版51-a)

溝址と重複する土坛である。新旧関係は不明。やや角ばった形の円形土坛で、開口部径130 cm 底径120 cm 深さ36 cmを測る。

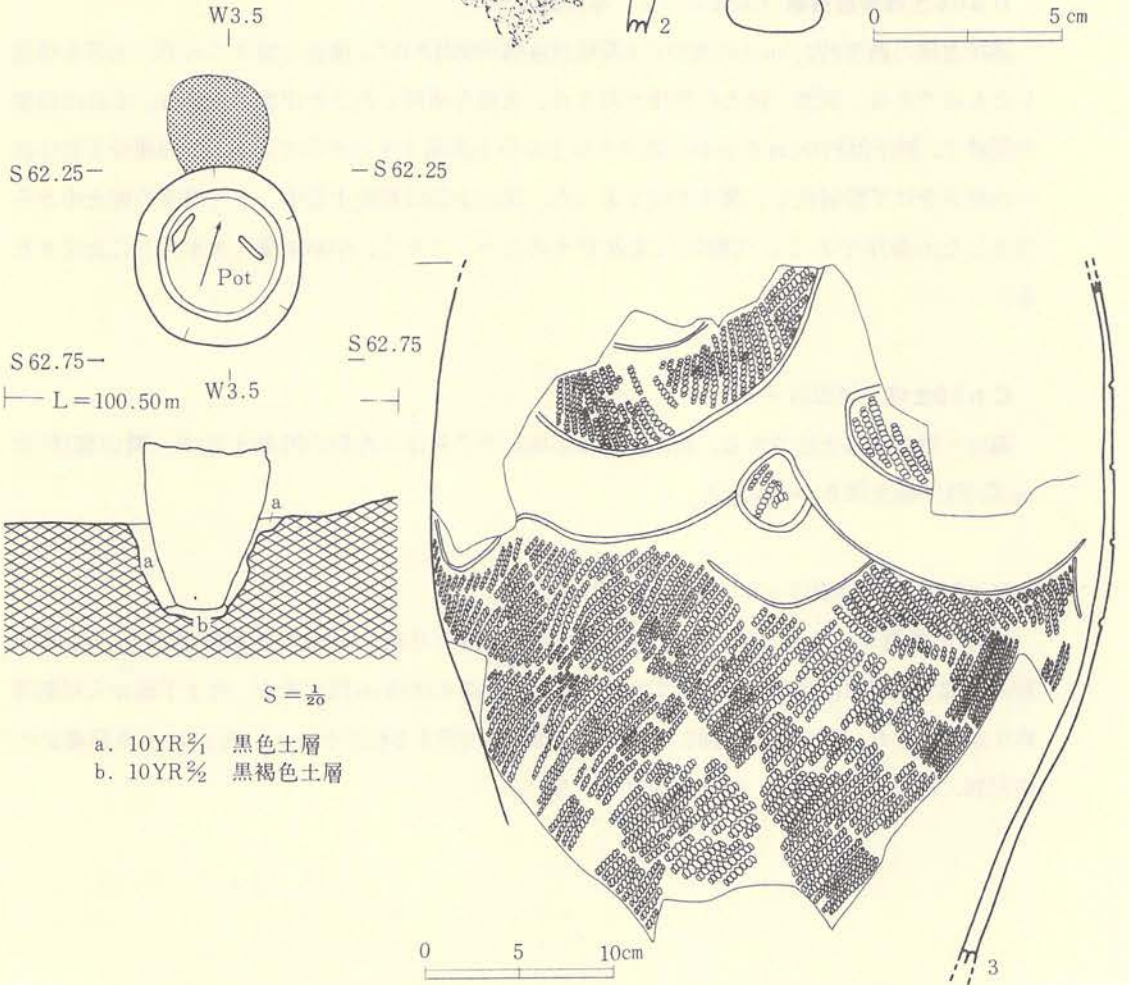
D a50土坛 (図版51-b、写真図版34)

溝址と重複する土坛であるが、埋土状況から溝より新しいものと判断された。ほぼ円形の土坛で、開口部径134 cm、壁は垂直に降りる。深さは46 cm程である。埋土下部から精製深鉢片が出土した。胴部が直線的に外傾し、口縁が内湾するものである。地文はLR単節縄文の横回転、斜め回転である。時期は断定できない。

a. Dc12土坑



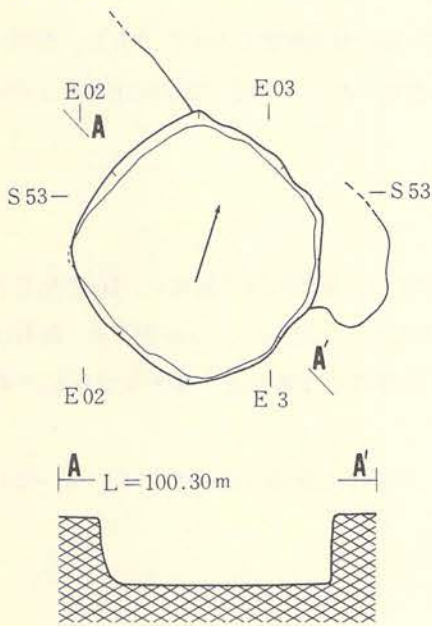
b. Da06土器設遺構



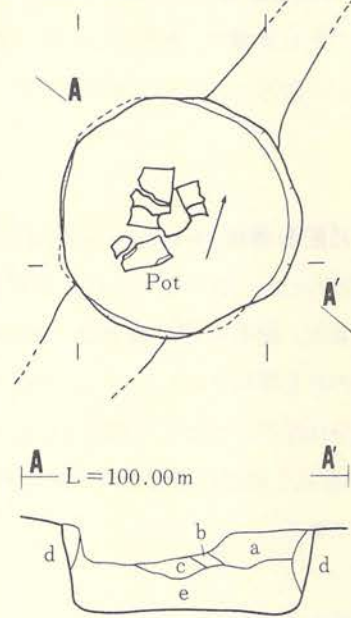
a. 10YR $\frac{2}{1}$ 黒色土層
b. 10YR $\frac{2}{1}$ 黒褐色土層

図版50 Da06土器埋設遺構、Dc12土坑平断両面図及び出土遺物

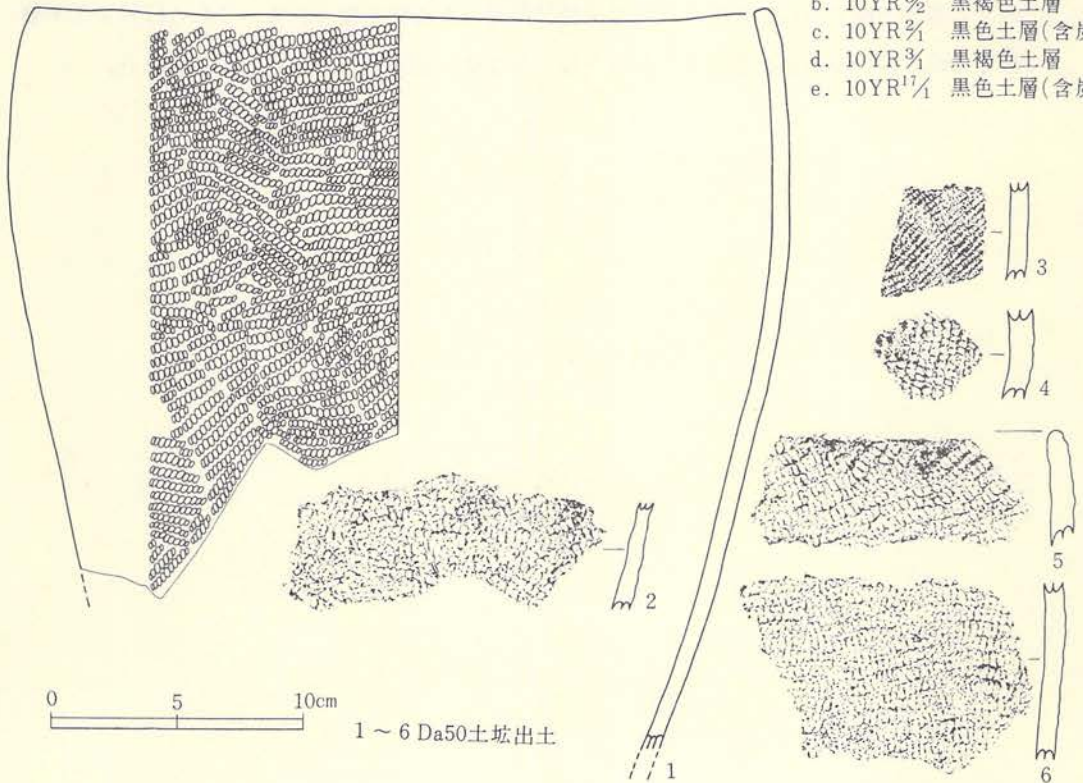
a. Ch50土塚



b. Da50土塚



- a. 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色土層
- b. 10YR $\frac{3}{2}$ 黒褐色土層
- c. 10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土層(含炭化物)
- d. 10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土層
- e. 10YR $\frac{17}{4}$ 黒色土層(含炭化物)



1 ~ 6 Da50土塚出土

図版51 Ch50、Da50土塚平断面図及び出土遺物

D c 15 配石遺構 (図版52)

小型の配石遺構で、直径58 cmの環に石を並べ中央に一個の石を配置したものである。周囲に数個の石が散ることから、さらに大きい規模の配石も想定される。下部土壇は検出されなかった。

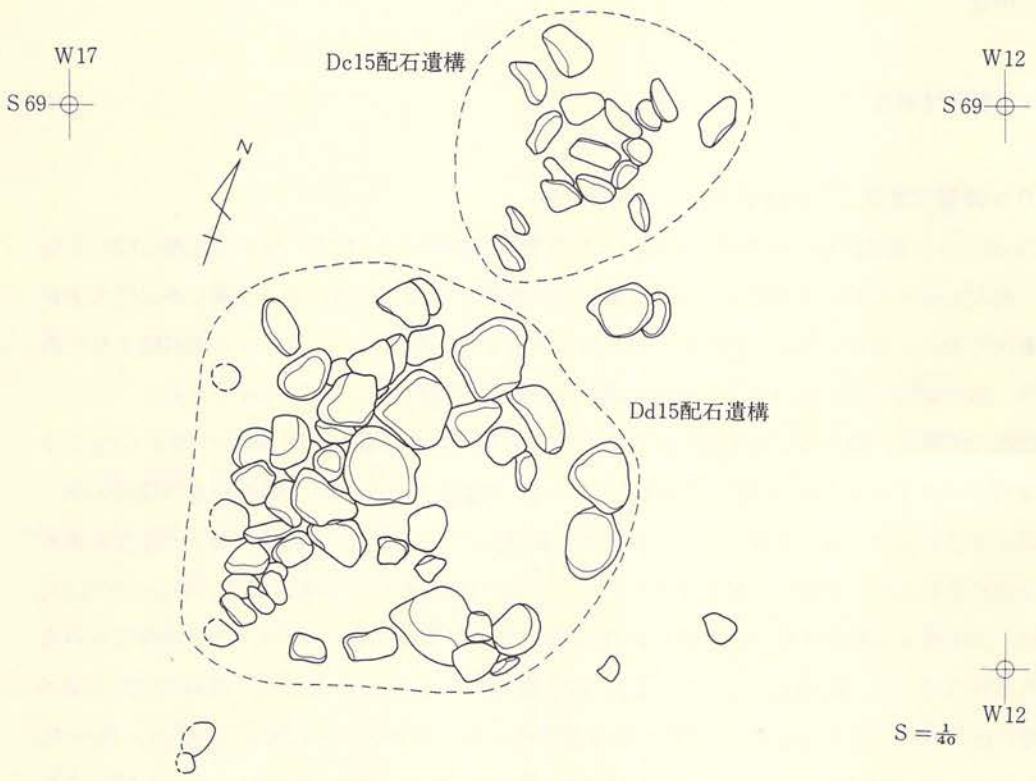
D d 15 配石遺構(図版52、写真図版21)

検出された配石群のうち、最も南に位置する遺構である。南側の溝に側近く、Dc15配石と南北に並ぶ。配石の形状はあまり明瞭でないが、その広がりには220 cm×210 cm程ある。配石は大きめの石を環状に巡らした(かのような)部分と、東側の密な部分との集まりである。その環状部分は配石がまばらで明瞭とは言えない。

Dcl5配石と同様に下部土壇は検出されなかった。このような遺構も本遺跡における一つのタイプである。

その他の集石群 (付図他参照)

以上の報告で明らかにした配石の他に広範に散在した石群が見られる。これらは点々と不整に散るものが多いが数個が並列するもの「コ」の字状に組まれたものなども見られた。



图版52 D c 15配石遺構平面图

2. 中世

(1) 竪穴住居址

B b 09 竪穴遺構 (第54図第2表 写真図版36)

Bb 09ピット東側に地山面を切って検出される竪穴遺構である。竪穴の規模は東西2.87~2.98m、南北2.80~2.86mで方形をなし、南東隅には南壁より僅かに東に寄って緩やかに立ち上がる東西0.70m、南北1.10mの矩形の、張り出しを有する。壁面の立ち上がりは南西隅よりの西壁の一部や東壁でやや強いほか、全体に緩やかである。壁高は0.10~0.16mである。

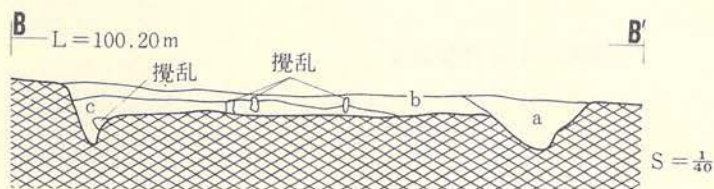
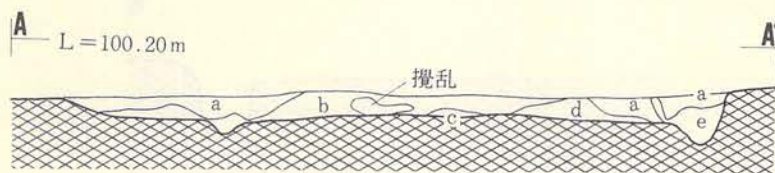
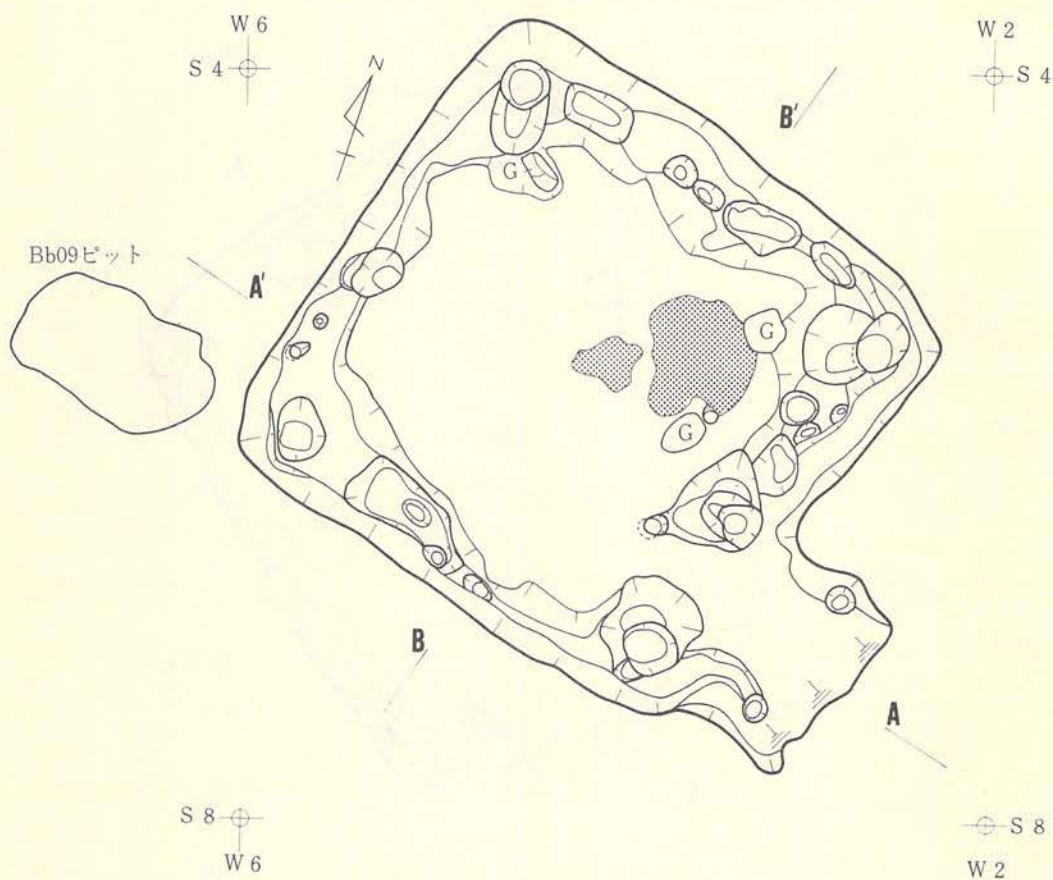
壁際の周溝は、張り出しの南西に位置するP₂₀から西・北面に認められ、東面のP₂からP_Dまでは東壁から0.10m 0.15mをおいて連続している。溝幅0.12~0.40m、底面からの深さ0.08~0.13mほどで共に不整である。また、東隅から東壁に沿って幅0.12m前後の緩やかな立ちあがり認められるが、東壁の一部をなすものか、あるいは重複する周溝の痕跡が明らかでない。

柱穴は床面上に検出され、張り出しのP₁₉を除いてすべて周溝中に認められる。主柱穴とみなされる柱穴は、P₁、P₄、P₅、P₁₂、P₁₇、P₂₁、の6柱穴である。その配置は東・西面に対応し、さらに張り出しのP₁₉、P₂₀が対応する。主柱穴間は西面P₁-P₄-P₅が0.98-1.26m、東面P₂₁-P₁₇-P₁₂が0.82-1.16m、張り出しのP₂₀-P₁₉では1.84mである。また、東西方向では2.18~2.32mであり、張り出しのP₂₁-P₂₀、P₁₇-P₁₉ではそれぞれ0.68、0.70mである。張り出しを含むP₁-P₂₀、P₄-P₁₉はそれぞれ2.86、2.95mとなる。主柱穴は径0.21~0.33mの円形、またはやや不整な楕円形をなし、深さは0.34~0.43mで底面の高さもほとんど一定である。柱穴の断面形は円筒状をなすが、P₂₁の隅柱穴で内傾している。張り出しの柱穴では、径0.12~0.16mでやや小さく浅い。埋土は黒色土層であり、他と比較して特に相違は認められない。

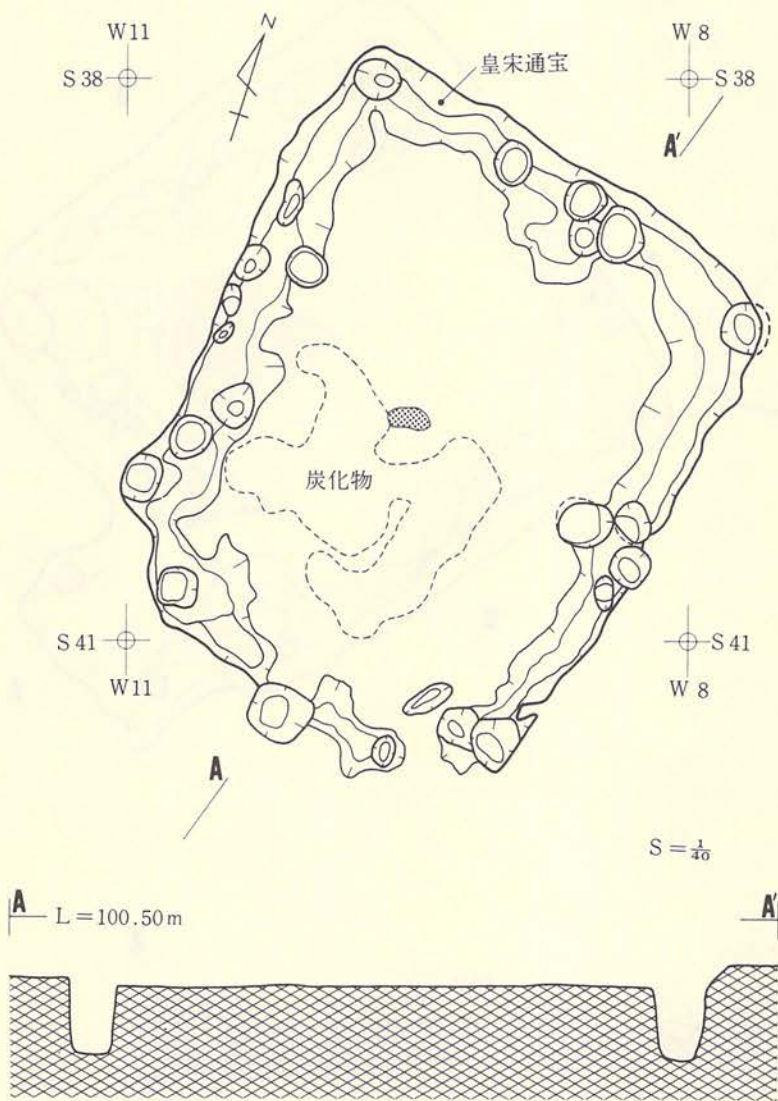
その他の柱穴では、P₁を除いた主柱穴に重複する大きく浅い柱穴があり、改築されている可能性もあるが、明確でない。他は全体に小さく浅い不整なものが多く、P₅、P₂₀等間柱穴とみられる柱穴も含まれるが、不明である。

床面はほとんど平坦をなし、中央部から東よりにかけて炭化物をともなう焼土が分布する。中央部の焼土は径0.30×0.38m、東よりでは0.64×0.52mの不整形をなす。全体に薄く、後者の中央部がもっとも厚く0.02mを測り、掘り込みは認められない。焼土に接して一對の扁平な礫が認められ、焼土面からの高さは0.10mであるが、焼土にともなうものか明らかでない。

竪穴の覆土は、黒色土が主体であり、焼土付近で焼土粒を含み暗褐色土となるほか、混入物による相違は判然としなない。遺物は覆土中を含めて皆無である。



図版53 B b 06住居址



图版54 C c 12住居址

C c12 竪穴遺構（第54図第 表写真図版36）

C c09 炉址の南側に同一面で検出された竪穴遺構である。南面は0.50mほど張り出し、南東隅に不明となるが、東西2.54～2.75m、南北3.25～3.42mのほぼ矩形となる。壁高は0.12m前後である。

周溝は南東隅を除いて壁際に認められ、幅0.28～0.32m、床面からの深さ0.04～0.23mを測り、極めて不整である。

柱穴は壁際や周溝内に認められ、支柱穴とみられるのは四隅のP₄、P₁₂、P₁₇、P₂₄のほか、P₁₀、P₁₅～P₁₆、P₁₈～P₂₀等の間柱穴に含まれると推測されるが、規則性も認められない。また、南面のP₂、P₃は隅柱穴に比してやや浅くなるが、配置を除いて特に相違が認められず、張り出しにともなうものかも明らかでない。さらに重複する。柱穴によっては改築も想定されるが明確でない。

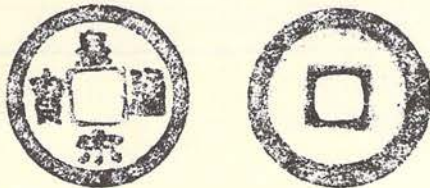
隅柱間は南北方向のP₄—P₁₂、P₂₄—P₁₇がそれぞれ2.48、2.59m、東西方向のP₄—P₂₄、P₁₂—P₁₇がそれぞれ2.32、2.34mとなり、対応する配置とみなされる。

柱穴規模は隅柱や間柱とみられる柱穴では径0.20～0.30mの円形、または楕円状を呈し深さ0.40～0.50cmほどである。断面形はP₁₂が底面で狭くなるほか、ほとんど円筒形をなす。しかし、底面における柱脚等の痕跡は明らかでない。他の柱穴ではこれより浅いものが多い。規則性も認められない。柱穴の埋土は一様の黒色土である。

床面は周溝に近い部分で若干低くなるが、全体に平坦をなす。床面上には中央部から西よりに0.12×0.22mの焼土とこれより南にかけて0.90×1.30mにわたる炭化物の分布が認められる。共に厚さ0.02m前後であり、微粒となって形成を推定できるものはない。

遺物はP₁₂～P₁₃にかかる壁面に出土した北字銭「皇字通寶」（初鑄1039年）1点がある。外縁の径2.45cm、内部の径0.70cm、厚さ0.10cm、重さ2760mgである。文字面のうち、「皇」、「通」が磨滅しているほか、遺存は良好である。しかし、出土の状況や層位等不明であり、竪穴遺構にともなう遺物が判然としない。

覆土は炭化物や焼土粒を含む黒色であり、柱穴の周溝等で著しく相違する状況は確認されていない



図版55 C c12住居址出土古銭

Bb09 住居址柱穴等計測表

No	検出面 の直径	深 さ	検出面 の高さ	底 面 の高さ	備 考	No	検出面 の直径	深 さ	検出面 の高さ	底 面 の高さ	備 考
1	25×33 ^{cm}	40 ^{cm}	99.90 ^m	99.50 ^m		13	7×11 ^{cm}	15 ^{cm}	99.86 ^m	99.71 ^m	
2	7×12	6	99.98	99.92		14	19×19	9	99.89	99.80	
3	8×9	4	99.96	99.92		15	8×15	10	99.84	99.74	
4	21×30	37	99.83	99.46	重複か？	16	35×	7	99.81	99.74	
5	26×25	43	99.94	99.51	〃	17	24×22	34	99.84	99.50	重複か？
6	39×21	12	99.92	99.80		18	10×12	9	99.83	99.74	
7	18×14	10	99.88	99.78		19	15×16	22	99.80	99.58	
8	19×12	12	99.88	99.76		20	12×15	23	99.80	99.57	
9	43×28	10	99.88	99.78		21	32×28	43	99.88	99.45	重複か？
10	31×16	7	99.84	99.77		22	19×8	22	99.82	99.60	
11	×43	8	99.89	99.97	P12に重複	23	15×10	7	99.79	99.72	
12	24×33	43	99.82	99.39		24	18×10	4	99.77	99.73	

Cc12 竪穴遺構柱穴等計測表

No	検出面 の直径	深 さ	検出面 の高さ	底 面 の高さ	備 考	No	検出面 の直径	深 さ	検出面 の高さ	底 面 の高さ	備 考
1	14×16 ^{cm}	41 ^{cm}	99.88 ^m	99.47 ^m		13	19×24 ^{cm}	40 ^{cm}	99.75 ^m	99.35 ^m	
2	34×28	34	99.90	99.56		14	21×19	47	99.84	99.37	
3	26×23	30	99.83	99.53		15	×20	40	99.84	99.44	P16に重複
4	20×27	40	99.88	99.48		16	26×29	37	99.84	99.47	
5	21×25	32	99.84	99.52		17	26×28	50	99.83	99.33	
6	23×24	17	99.84	99.67		18	30×25	48	99.89	99.41	
7	8×13	20	99.98	99.78		19	20×20	48	99.86	99.38	
8	9×14	35	99.89	99.54		20	21×21	39	99.91	99.52	
9	16×20	26	99.89	99.63		21	11×18	38	99.91	99.53	
10	23×19	34	99.89	99.53		22	12×28	?			柱穴？ 不明
11	10×25	14	99.86	99.72		23	×20	28	99.88	99.62	P24に重複
12	24×22	45	99.85	99.40		24	25×29	44	99.90	99.46	

第2表 B b09住居址柱穴等計測表

第2表 C c12竪穴遺構柱穴等計測表

3. 遺構外出土遺物

遺構外から得られた出土品は総数コンテナ18箱である。A～D区に渡りほぼ均一に出土しているが、その層位はⅡ a層中からの出土が多い。

1. 土 器

土器の出土量は多くはないが、その時期にはバラエティが見られる。しかし各時期の土器群と出土地区・層位との間に明らかな相関関係は認められないため、本項では土器の形式学的な分類を先行させ、これに基づいて記述を行う。分類にあたり大まかに第Ⅰ群土器は縄文時代早期土器をあて、以下第Ⅱ群—前期、第Ⅲ群—中期、第Ⅳ群—後期、第Ⅴ群—晩期の区分を設定した。

第Ⅰ群土器（図版56—1）

本遺跡出土土器中確認された唯一片の土器である。深鉢の口縁部片で、口縁は平縁。器外面は口縁直下より、半截竹管による連続刺突文が施されている。刺突の方法には二種が見られ、刺突を断続的に行った列と押し引きにより沈線状に施した列とが交互に並び、これにより横方向、斜め方向の刺突列が描かれたものである。土器の胎土には砂礫・繊維を含み、焼成はやや甘い。この土器片は北海道春日町遺跡出土土器群の第2群土器に類似し、春日町式土器と命名された土器群に相当するものと思われる。早期末葉。二戸市周辺の最近の出土例では上里遺跡に多数見られる。

第Ⅱ群土器（図版56—2～4）

円筒下層式土器をまとめた。2は円筒土器の口縁部片である。口縁直下から頸部を絡状体圧痕文がめぐり、頸部は刺突帯が見られる。これら口縁部文様帯は幅約1.5cmを測る。胴部は木目状の捺糸文が回転する。胎土中には砂粒が多く含まれ、繊維を含有している。円筒下層式土器の胴部片である。3は粗い木目状捺糸文、4は羽状縄文をいずれも縦回転したものである。胎土中には繊維が含まれる。

第Ⅲ群土器（図版56—5～21）

1類 5は円筒土器の胴上部片である。無文の器面に粘土紐が貼付され、空間部には刺突が施される。円筒上層C式にあたる。

2類 6・7は共に円筒形深鉢の口縁突起である。器外面に縄文を回転させたのち粘土紐を貼付し、貼付文上に縄文を回転したものである。円筒上層d式に含まれる。

3類（8～12） いずれも深鉢口縁部である。口縁部には二重の隆線がめぐり、突起部に渦文が付加されたもの（8）、輪文が付加されたもの（10）が見られ、胴部は沈線文が施されて

いる。大木8b式、榎林式土器に相当するグループを一括した。

4類(9~11、14) 大木9式土器に併行する土器群を一括した。9は有孔把手が取り付け深鉢の頸部であるが、胴部文様が楕円文を構成する可能性が見られたため、この類に含めた。10は胴部に屈曲点を持つ胴脹らみの深鉢である。胴下部の地文帯には沈線が施され、無文部との境に円形の押圧文帯を配する。いわゆる最花式と呼ばれる土器片である。11・14は共に胴部に沈線による楕円区画文を施した土器群で、大木9式土器に相当する。この他、18・21の押圧文帯を持つ粗製土器片はこの類に共伴する可能性がある。

5類(15、16、19、20) いわゆる大木10式土器の範疇に含まれる土器群である。12・13は施された隆線がナデにより断面三角形に造り出されたタイプである。15・16は同一個体片であるが、頸部に二重の隆線を持ち一部には円文が付加されている。胴部には沈線文の一部に貼付された鱗状突起が見られる。大木10式土器のうち新式のグループに含まれよう。

第Ⅳ群土器

1類(図版57-1~3) 1は浅鉢である。無文の器面に沈線文が施されている。3は沈線文によって区画された帯縄文が特徴である。6はこれに伴う土器片の体部であろうか。いずれも後期初頭の十腰内Ⅰ式に含まれるものである。

2類(4・5・7) 沈線文によって区画された縄文帯の周縁部に刺突文が連続して施文された土器群である。いずれも無文部が入念に研磨された土器群で、十腰内Ⅲ式土器、加曾利B₂式にあたる。

第Ⅴ群土器(図版57-8~10)

晩期の土器片を一括した。いずれも小破片で全体形は想定できないが、浮文状の縄文帯を形成しており、大洞C₂式に相当する。

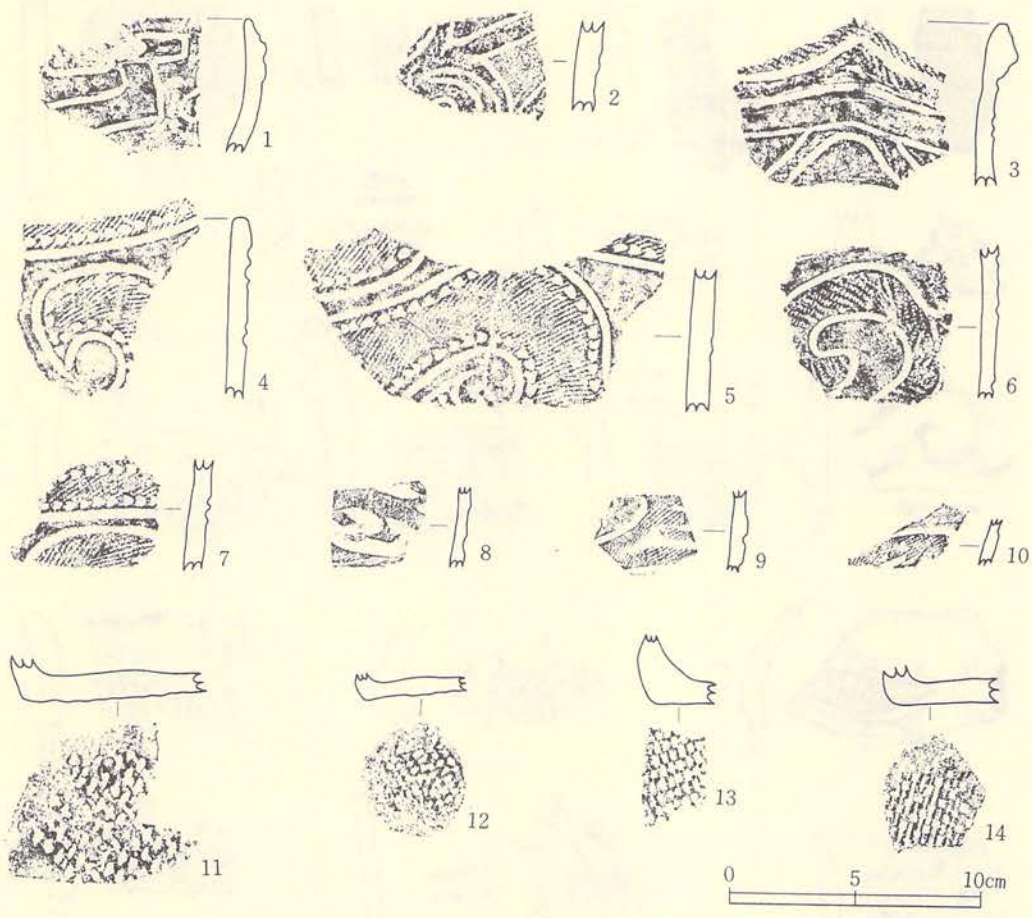
11~14は、土器底部片に見られる網代痕である。底部の形態から見て、第Ⅳ群土器に伴うものと思われる。編み型式は11~13が一本超え一本潜り、14が一本超え二本潜りである。

3. 円盤状土製品

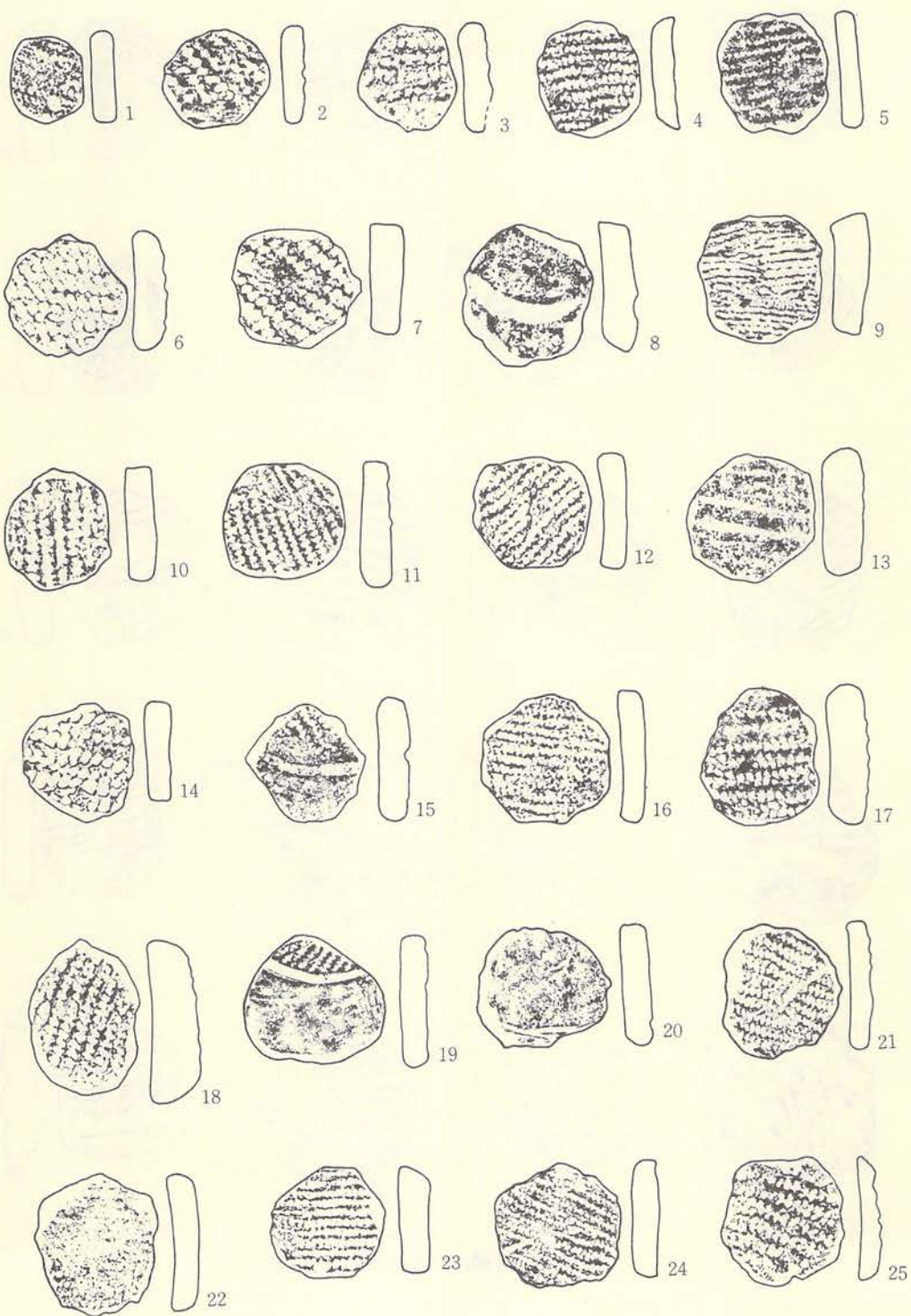
土器の破片を利用して円盤状に再加工したものであるが、加工法には打ち割きと研磨とが見られる。



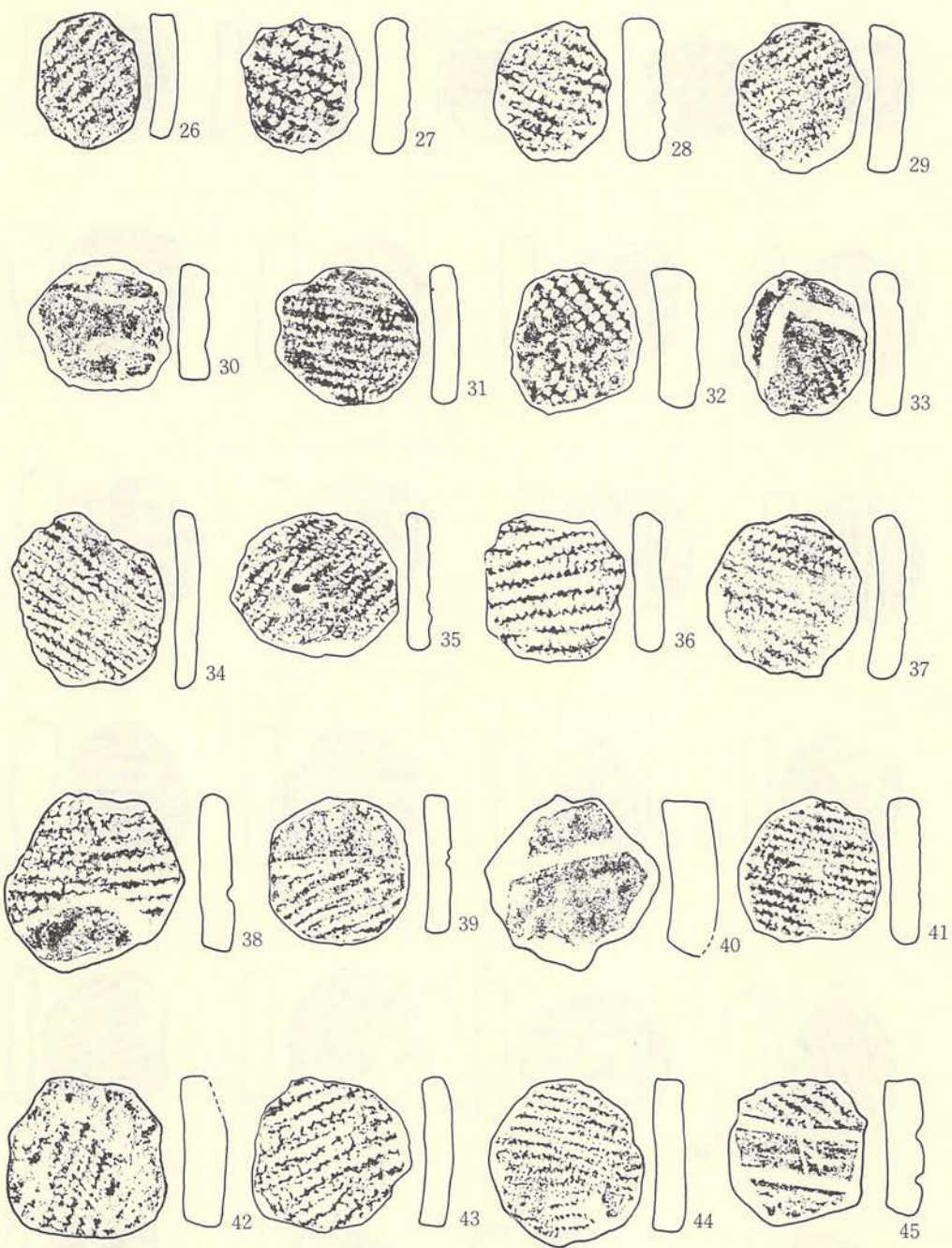
图版56 遺構外出土土器 (I)



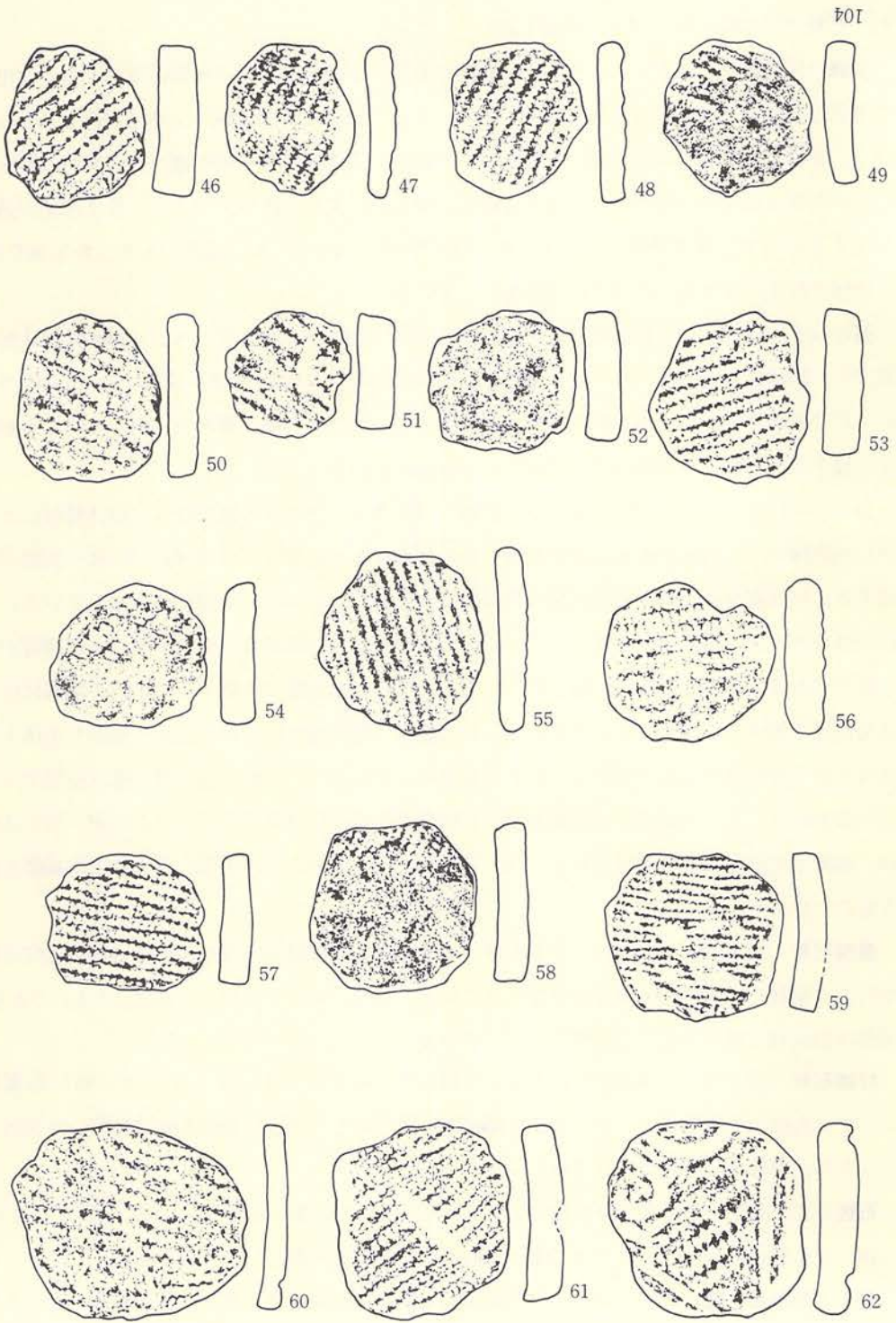
图版57 遺構外出土土器 (2)



图版58 遺構外出土円盤状土製品 (I)



図版59 遺構外出土円盤状土製品 (2)



図版60 遺構外出土円盤状製品 (3)

3. 石器 (図版61～65・写真図版38～40)

石鏃 (図版61-1～6) 1・2は有茎鏃である。1は小型で、三角形の身部と長く突出した茎部とからなる。加工は入念で薄手である。2は二等辺三角形の鏃で、基部が返しとなっている。3は三角形鏃で基部平坦。尖頭部はやや鈍い。4はやはり三角形鏃だが、素材の形を残したいいわゆる剥片鏃と思われる。加工は縁辺に限られ、主に片面加工である。5は基部が弧状を呈するもので、基部付近にアスファルトの付着が見られる。6は基部平坦の三角形鏃だが、一側縁の加工が撤せず、弓なりの状況を呈している。

石ヒ (9～12) 9・10は横形石ヒ、11・12は縦形石ヒである。このうち9は軸線と刃部が斜交し、10は直交する。10のツマミ部分は小作りである。刃部加工はいずれも片面に集中する。11は弧状にカーブする刃部を持ち、先端を欠く。12は薄い剥片素材を使用、ツマミを形成する加工は行われているものの、刃部加工は施されていない。

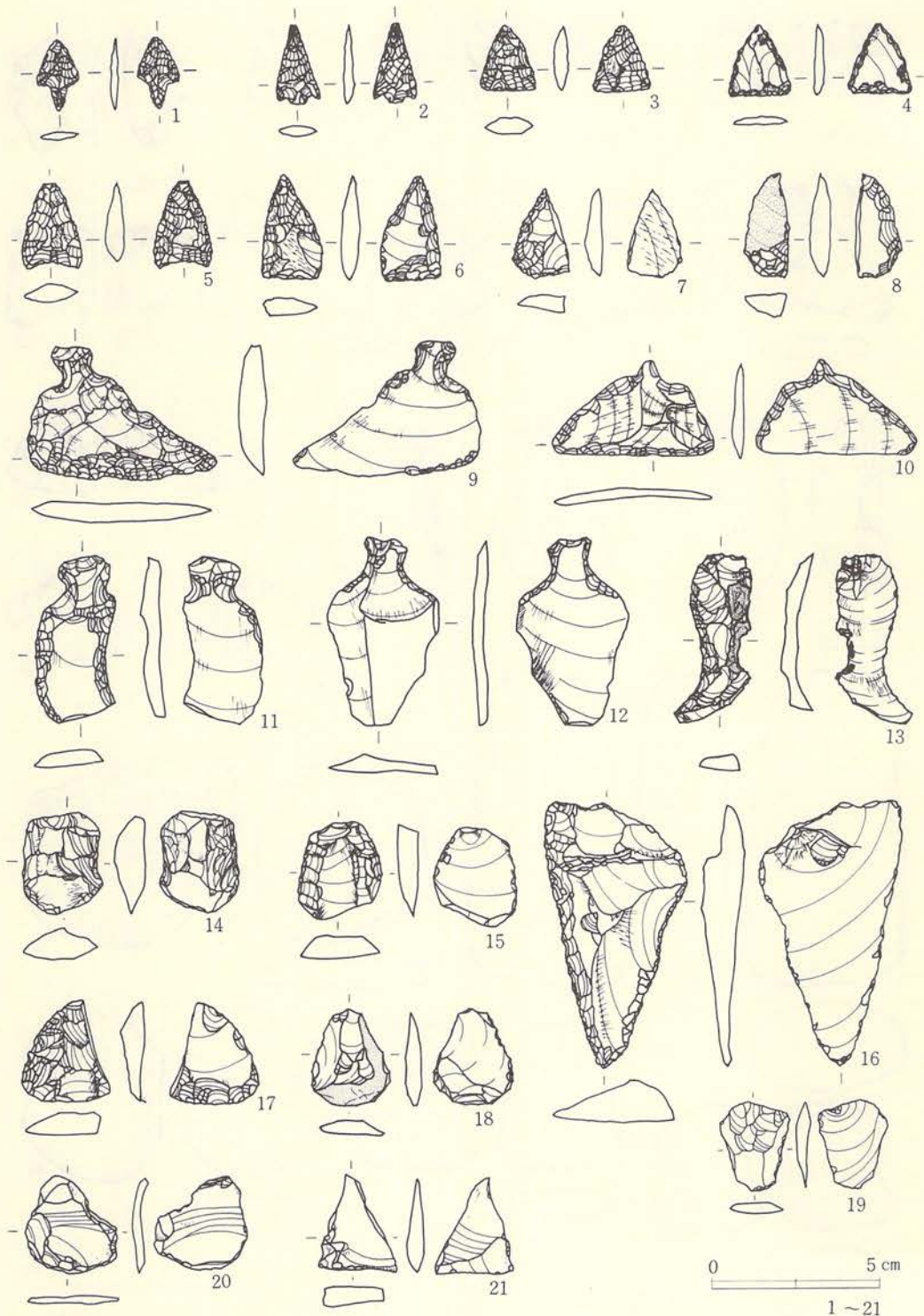
13・15～17はスクレーパーであるが、形態、刃部の在り方等は一様でない。13は弧状にカーブした側縁のうち内側に細かな調整剥離が見られる。また先端及び外側縁辺には微小剥離が連続する。15は剥片の両サイドに直状の刃部調整が行われたもので、先端部は欠損している。16はやはりサイドに刃部加工を施したスクレーパーである。左側縁は刃部角が厚く、右側縁がやや薄手である。また、右側縁上部はややコンケーブした小剥離が連続する。尖端の尖部付近には搔器様の短いがぶ厚い刃部も見られる。17は表面に粗い調整加工が裏面は先端部を主体とする刃部加工が行われたものである。右半分を欠失しているが、刃部形態は緩い弧状を呈するものと思われる。7・8は同様の石器欠損品と推定される。14は両面加工品であるが、加工は粗い。側縁に刃部様の加工が見られる。18～32はフレークである。使用痕と目される小剥離を伴うものも含めた。

磨製石斧 33・34・44がこれに含まれる。33は全面に調整時の擦痕を留めている。刃部は使用により損耗し、さらに二次使用が行われている。34は、基部・刃部共に破損したものである。刃部は33同様に損耗の後、二次使用を受けている。

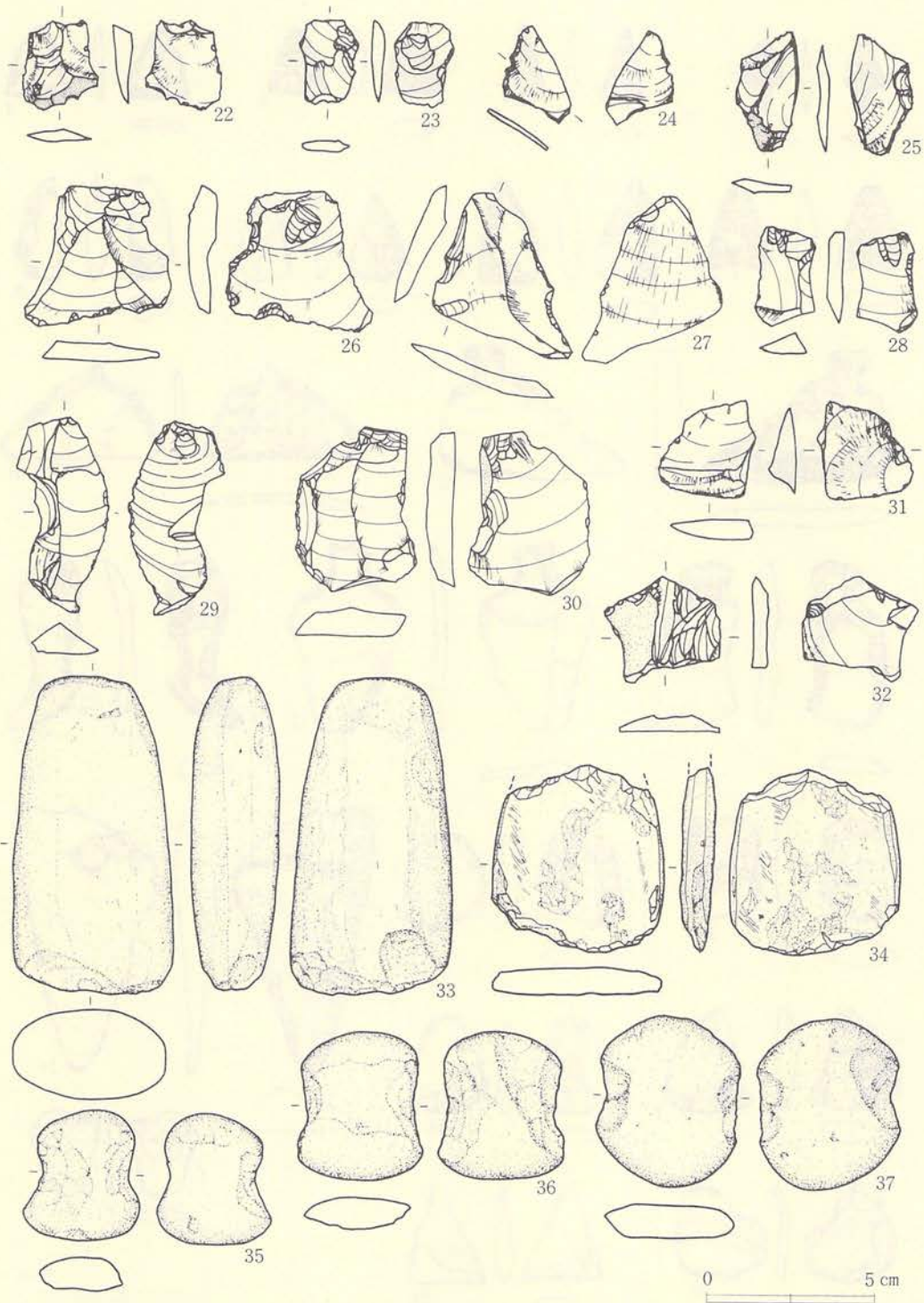
打製石斧 (39・42) 39は基部を大きく欠損しているため全容は窮えないが、粗い剥離によって、刃部を作り出している。42は石鋏状の石器である。細長い基部と直状に開いた刃部とからなり、刃部の一方角は欠いている。

石錘 (35～38) 扁平な河原の両端を打ち割いたもので、35・36の袂入は広く深めである。40・41は礫器としたが、自然礫に僅かな加工を加えて、刃器としたものである。

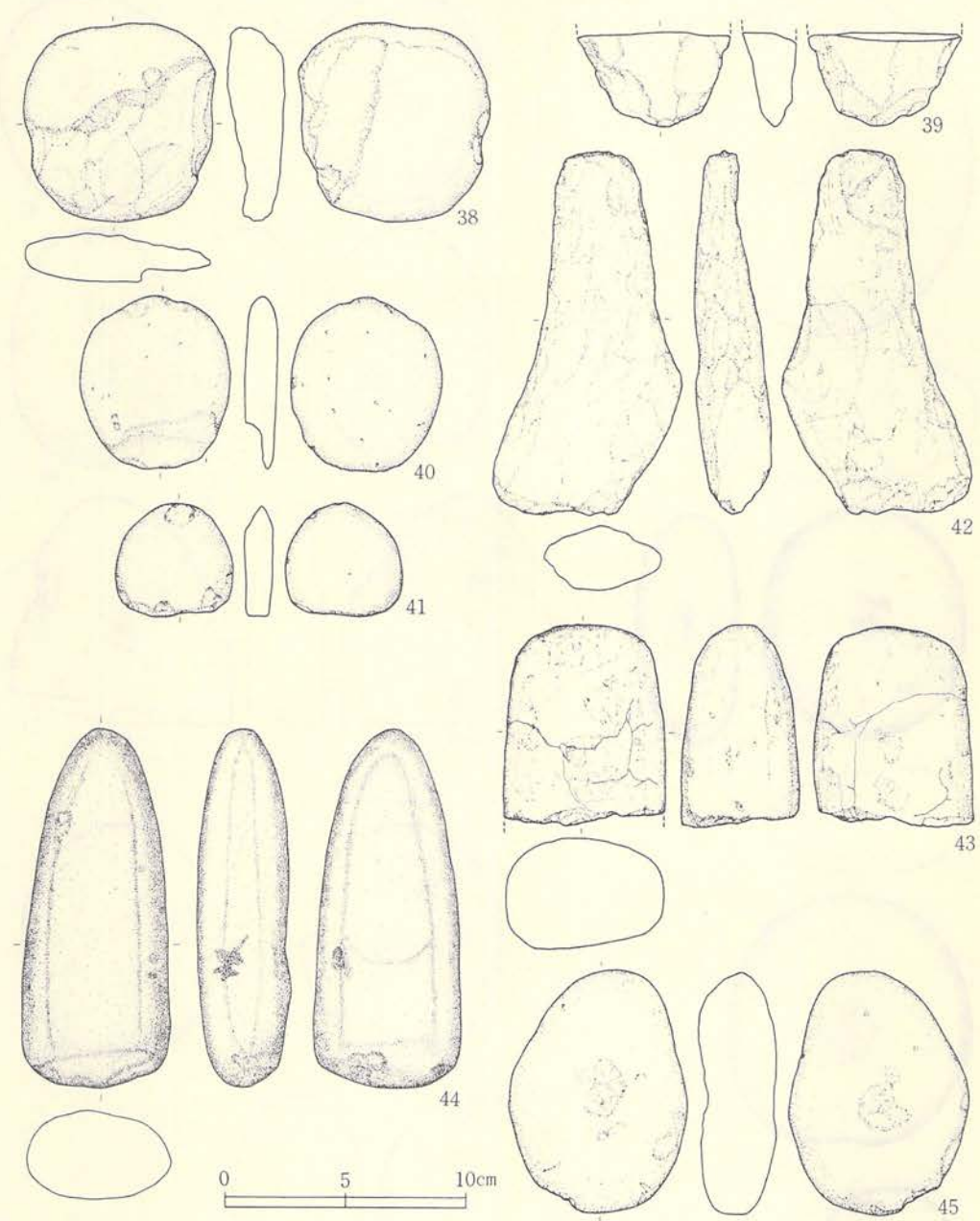
磨石・凹み石・敲石 (43、45) 43は表裏面に粗い擦痕が観察され、凹みが形成されたものである。側面には磨面が見られる。45～49・51は凹みが顕著に見られる石器類である。円錐形の凹みと共に敲打による痕跡も観察される。(49)



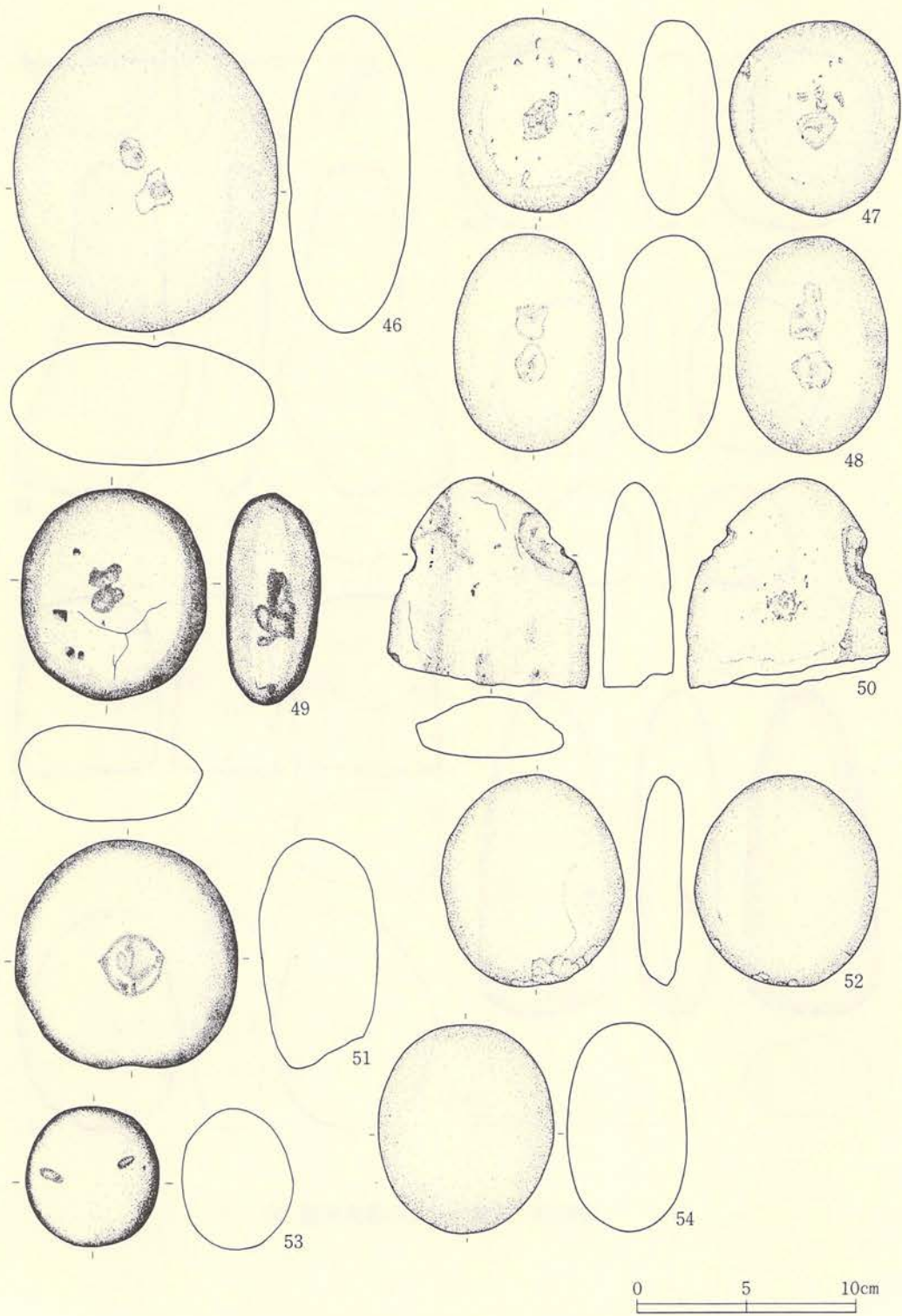
图版61 遺構外出土石器実測図(1)



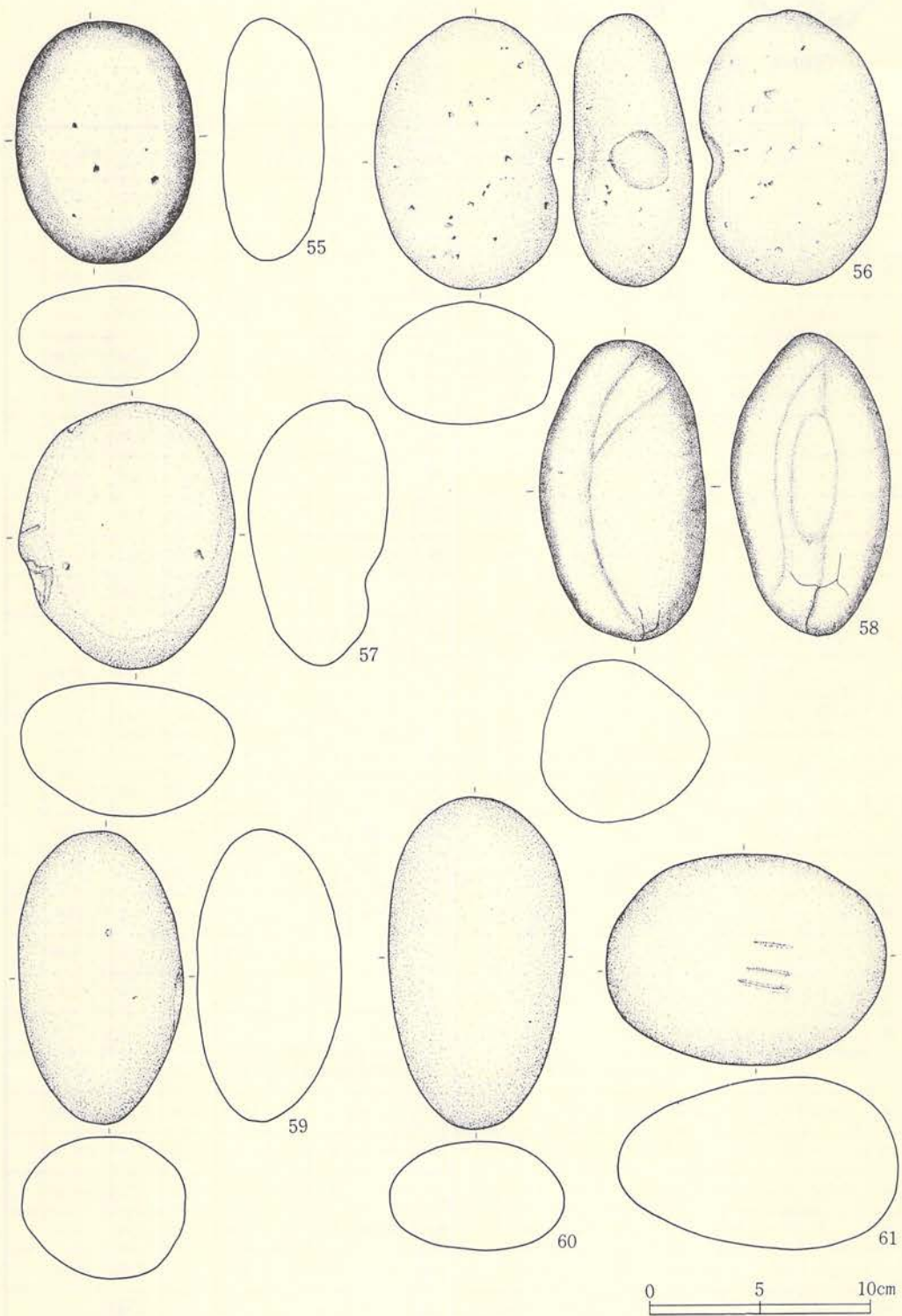
图版62 遺構外出土石器、出土石器実測図(2)



図版63 遺構外出土石器実測図(3)



図版64 遺構外出土石器実測図(4)



図版65 遺構外出土石器実測図 (5)



図版66 遺構外出土古銭

第3表 土製品計測表

図版 番号	出土地点	出土 層位	残存 状況	最大値 (cm)			重量(g)	写真 図版	図版 番号	出土地点	出土 層位	残存 状況	最大値 (cm)			重量(g)
				たて	よこ	あつき							たて	よこ	あつき	
1				2.50	2.28	0.69	4.49		32	B d 09	II a		3.99	3.61	1.03	18.99
2	B y 56	II a		2.76	3.18	0.74	7.04		33	C h 03	II a		4.00	3.52	0.84	14.65
3	A j 53	II a		3.09	2.94	0.68	7.12		34				4.78	4.11	0.62	15.06
4	B a 50	II a		3.38	3.11	0.78	8.61		35	D d 53	II a		4.00	4.73	0.72	14.73
5				3.47	3.20	0.58	8.24		36	A j 03	II a		4.12	4.08	0.82	15.42
6	B a 06	II a		3.48	3.62	0.95	13.84		37	B b 03	II a		4.43	4.33	0.99	19.10
7				3.49	3.92	0.90	14.96		38	E g 50	I		4.68	5.12	0.83	23.80
8	B j 03	II a		4.14	3.96	0.95	16.92		39	A j 12	II a		4.08	4.01	0.78	14.54
9	B b 12	II a		3.79	3.77	1.08	17.24		40	B b 53	II a		4.88	4.87	1.51	29.01
10	D a 12	II a		3.57	3.24	0.82	10.62		41	B c 03	II a		4.05	4.06	0.82	15.50
11				3.39	3.68	0.95	14.92		42				4.50	4.63	1.09	22.67
12	B b 53	II a		3.46	3.21	0.78	11.49		43	A j 03	II a		4.36	4.32	0.72	16.99
13		Q I		3.72	3.89	1.08	16.28		44	C d 53	II a		4.62	4.44	0.80	20.49
14	B b 09	II a		3.52	3.40	0.79	10.16		45	A i 50	II a		4.05	3.88	1.00	19.30
15				3.50	3.52	0.82	10.66		46	B b 12	II a		4.62	4.05	1.06	23.07
16				3.82	3.82	0.72	13.04		47	D a 09	I		4.39	3.82	0.80	14.72
17	B h 50	II a		3.98	3.39	1.17	19.04		48	B i 06	II a		4.53	4.02	0.78	15.44
18				4.62	3.40	1.34	24.06		49	B a 56	II a		4.40	4.38	0.93	19.77
19	B b 06	II a		3.80	4.23	0.73	14.41		50	B a 12	II a		4.78	4.34	0.91	25.31
20	O f 53	II a		3.51	3.90	0.82	14.12		51				3.78	3.52	0.99	16.45
21	05	II a		3.96	3.38	0.62	10.49		52				4.16	4.39	0.90	18.69
22	D d 15	II a		4.12	3.71	0.74	14.11		53	B a 12	II a		4.90	4.73	0.99	27.16
23				3.27	3.34	0.89	11.98		54	D f 06	II a		4.07	4.49	0.90	20.29
24	C d 53	II a		3.63	3.82	0.84	13.17		55				5.14	4.85	0.80	23.03
25		Q 5		3.70	3.62	0.67	9.19		56	D d 53	II a		4.72	5.18	1.07	27.32
26	B d 56	II a		3.72	3.01	0.78	9.01		57	A j 12	II a		4.02	4.58	0.90	20.48
27	06			3.75	3.30	0.89	12.66		58	B i 06	II a		4.86	4.81	0.91	27.36
28	B a 50	II a		3.78	3.29	1.09	16.85		59	B c 53	II a		4.78	5.72	0.85	23.68
29	B f 50	I		4.22	3.63	0.91	15.29		60	A j 03	II a		5.65	6.58	0.64	33.37
30	B c 03	II a		3.61	4.03	0.83	15.95		61	D f 15	II a		5.52	5.22	1.07	39.14
31	B a 50	II A		3.81	4.10	0.78	12.36		62	B c 06	II a		5.83	5.88	1.03	40.83

第4表 石器計測一覧表 ①

図版 番号	出土地点	出土層位	種別	残存 状況	最大値 (cm)			重量 (g)	石質	備考
					たて	よこ	あつき			
1	A h 09住	埋 土	フレーク		2.88	4.24	0.40	5.15	凝灰質硬質泥岩、奥羽山地中新統	
2	A h 09住	＊	＊		5.92	4.42	1.59	44.90	チャート、北上山地、古生界	
3	A h 09住	＊	＊		4.02	2.71	1.04	10.15	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
1	A h 12住	床 面	石 ヒ	完	5.10	5.45	0.75	10	珪質泥岩、奥羽山地、中新統	
2	A h 12住	埋 土	フレーク		3.10	2.29	0.48	2.79	チャート、北上山地、古生界	
12	C 区 溝	3 層	腕状石器		4.28	2.30	1.26	13.65	チャート、北上山地、古生界	
6	A i 50P	埋 土	フレーク		2.14	1.99	0.58	2.05	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
9	B b 03房	＊	＊		1.79	1.68	0.35	1.10	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
5	C c 09Pa	＊	石 鐵		2.49	1.47	0.45	1.28	チャート、北上山地、古生界	
4	C d 03Pi	＊	フレーク		2.97	1.82	0.34	1.65	チャート、北上山地、古生界	
2	C f 12Pa	＊	＊		1.60	3.02	0.58	1.76	チャート、北上山地、古生界	
3	C f 12P	＊	石 ヒ		3.18	2.13	0.49	2.81	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
4	C f 12P ₁	＊	フレーク		3.78	1.61	0.62	3.72	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
4	C f 12P ₄	＊	石 鐵		2.37	1.51	0.45	1.73	チャート、北上山地、古生界	
2	C i 12P ₁	＊	フレーク		2.21	1.37	0.21	0.49	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
5	C j 15P	＊	磨石?		6.83	4.88	1.59	80	細粒凝灰岩、奥羽山地、中新統	
6	D b 09P	＊	石 鐵		2.05	0.97	0.57	0.95	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
7	D b 09P	＊	＊		1.72	1.26	0.27	0.63	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
8	D b 09P	＊	＊		2.54	1.72	0.60	2.05	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
9	D b 09P	＊	＊		2.19	1.68	0.42	1.53	チャート、北上山地、古生界	
10	C i 15P	＊	フレーク		2.31	1.52	0.23	1.25	チャート、北上山地、古生界	
11	D b 09P	＊	＊		2.53	1.24	0.53	1.28	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
12	D b 09P	＊	＊		2.17	1.22	0.38	0.87	＊ ＊ ＊	
13	D b 09P	＊	＊		1.92	1.29	0.22	0.65	＊ ＊ ＊	
14	D b 09P	＊	＊		3.11	1.43	0.54	2.46	＊ ＊ ＊	
15	D b 09P	埋 土	＊		2.68	1.60	0.54	2.75	＊ ＊ ＊	
16	D b 09P		＊		2.25	2.00	0.78	3.35	＊ ＊ ＊	
17	D b 09P		＊		2.00	1.76	0.25	1.10	凝灰質硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
18	D b 09P		＊		2.92	3.09	0.63	5.25	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
19	D b 09P		＊		3.67	2.21	0.65	5.47	凝灰質硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
20	D b 09P		＊		3.13	2.37	0.49	3.60	チャート、北上山地、古生界	
1	D b 09P		＊		2.88	1.97	0.41	3.55	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
2	D b 09P		＊		3.41	2.78	0.38	2.80	チャート、北上山地、古生界	
3	D b 09P		＊		3.06	2.62	0.60	4.32	＊ ＊ ＊	
4	D b 09P		＊		3.58	1.63	0.42	2.95	＊ ＊ ＊	
5	D b 09P		スクレーパー		3.60	2.52	0.93	7.43	＊ ＊ ＊	
6	D b 09P		＊		3.28	2.96	1.08	10.47	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
7	D b 09P		＊		2.78	4.08	0.70	7.05	＊ ＊ ＊	
1	D d 09	埋 土	有孔石製	完	10.73	2.50	1.53	46.31	流紋岩質細粒凝灰岩、奥羽山地、中新統	垂飾?副葬品か?
61-1	B c 12	I a 層	石 鐵	完	2.11	1.22	0.29	0.45	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
2	D a 12	II a	石 鐵	欠	2.36	1.20	0.38	0.77	玻璃質流紋岩、奥羽山地、中新統	
3	B b 56	II a	＊		1.94	1.68	0.44	1.20	チャート、北上山地、古生界	
4	D f 12	II a	＊		2.08	1.81	0.32	1.20	凝灰質硬質泥岩、奥羽山地、中新統	剥片鐵
5	A h 06	II a	＊	欠	2.31	1.70	0.54	1.94	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	基部-アスファルト付着
6	D b 09	II a			3.10	1.73	0.54	2.68	＊ ＊ ＊	
7	不 明				2.55	1.62	0.54	2.01	＊ ＊ ＊	
8	D b 09	II a			3.09	1.28	0.75	2.96	＊ ＊ ＊	
9	D h 53	II a	石 ヒ		3.88	5.70	0.72	13.11	玻璃質流紋岩、奥羽山地、中新統	
10	C h 09	I	＊		4.82	2.88	0.42	5.90	＊ ＊ ＊	
11	D f 12	II a	＊		4.75	2.10	0.70	9.57	チャート、北上山地、古生界	

第5表 石器計測一覧表 ②

図版 番号	出土地点	出土層位	種別	残存 状況	最大値 (cm)			重量 (g)	石 質	備 考
					た て	よ こ	あ つ き			
12	D c 12	II a	石 ヒ		5.69	3.28	0.58	7.32	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
13	D d 15	II a	スクレーパー		4.67	1.61	0.50	4.74	チャート、北上山地、古生界	
14	D b 12	II	＊		2.95	2.33	1.03	7.54	＊ ＊ ＊	
15	A j 50	II a	＊		2.70	2.48	0.71	5.49	凝灰質硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
16	B d 12	II a	＊		7.88	3.99	1.48	33.79	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
17	D b 06	II a	＊		3.00	2.26	0.69	4.50	＊ ＊ ＊	
18	D a 06	II a	フレーク		2.80	2.28	0.48	3.10	玻璃質流紋岩、奥羽山地、中新統	
19	A h 09住	＊	＊		2.64	2.05	0.36	1.80	チャート、北上山地、古生界	
20	D h 50	II a	＊		2.85	2.70	0.31	2.32	＊ ＊ ＊	
21	B g 53	II a	＊		2.88	1.97	0.70	3.45	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
22	A i 59	II a	＊		2.38	2.22	0.50	2.24	＊ ＊ ＊	
23	A f 09	II a	＊		2.40	1.71	0.36	1.50	玻璃質流紋岩、奥羽山地、中新統	
24	D 区		＊		2.22	1.72	0.22	1.01	チャート、北上山地、古生界	
25	D f 06	II a	＊		3.62	1.76	0.40	2.33	凝灰質硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
26	D d 06	II a	＊		4.00	3.72	0.72	11.77	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
27	D f 53	II a	＊		4.02	3.60	0.92	11.94	凝灰質硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
28	D h 15	II a	＊		2.85	1.78	0.65	2.95	玻璃質流紋岩、奥羽山地、中新統	
29	B c 03	II a	＊		5.50	2.15	0.86	4.90	硬質泥岩、奥羽山地、中新統	
30	C f 06	II a	＊		4.59	3.57	0.90	17.54	＊ ＊ ＊	
31	D 区		＊		2.89	2.62	0.82	5.36	＊ ＊ ＊	
32	A i 09	II a	＊		2.64	3.40	0.48	4.53	＊ ＊ ＊	
33	B h 06	II a	磨製石斧		9.20	4.68	2.60	20.00	角閃石珩岩、北上山地、中生代貫入岩	
34	C a 53	II a	＊		5.30	5.02	0.73	34.65	凝灰質千枚岩、北上山地、古生界	
35	C e 53	I	石 錘		3.90	3.38	1.00	20	石錘、輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
36	B i 03	II a	＊		4.35	3.12	1.02	20	粘板岩、北上山地、古生界	
37	C f 12	III a	＊		4.94	4.16	1.10	35	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
38	A g 12	II a	＊		8.12	7.87	2.32	190	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
39	B f 06	II a	打製石斧		3.80	6.36	2.52	50	粘板岩、北上山地、古生界	
40	D c 53	II a	＊		7.17	6.09	1.35	90	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
41	A i 50	II a	＊		4.60	4.79	1.23	30	＊ ＊ ＊	
42	B f 06	II a	＊		14.87	6.18	3.02	340	凝灰質千枚岩、北上山地、古生界	
43	C e f I	I	＊		7.95	6.68	4.90	400	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
44	B h 53	II a	＊		14.88	6.14	3.71	590	角閃石珩岩、北上山地、中生代貫入岩	
45	A j 06	II a	＊		10.12	7.22	3.41	320	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
46	C c 12-2		＊		10.98	8.12	4.63	620	凝灰質硬砂岩、北上山地、古生界	
47	B g 53	II a	＊		12.12	8.20	5.60	800	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
48	C f 15 P ₂		＊		12.01	9.56	6.22	1,030	＊ ＊ ＊	
49	炉灶状構		＊		13.56	7.06	7.31	925	＊ ＊ ＊	
50	A d 09住		＊		13.15	7.32	6.67	970	＊ ＊ ＊	
51	A i 50	II a	＊		14.97	7.83	5.02	855	＊ ＊ ＊	
52	B h 06	II a	＊		9.58	12.65	7.71	1,140	＊ ＊ ＊	
53	A h 50	II a	＊		14.38	12.00	5.21	1,110	＊ ＊ ＊	
54	C d 56	II a	＊		8.72	7.70	3.70	320	＊ ＊ ＊	
55	E a 09	II a	＊		9.71	6.91	4.77	460	＊ ＊ ＊	
56	B c 06	II a	＊		9.38	8.31	4.19	510	＊ ＊ ＊	
57	A j 12	II a	＊		9.16	9.23	3.11	370	スピライト質凝灰岩、北上山地、古生界	
58	C h 09	II a	＊		10.53	10.25	5.32	675	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	
59	B h 50	II a	＊		9.46	8.29	2.01	255	長石珩岩、北上山地、古生界	
60	A j 06	II a	＊		6.46	6.08	4.93	275	長石珩岩、北上山地、中生代貫入岩	
61	D f 12	II a	＊		9.47	7.92	5.62	560	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系	

IV まとめ

今回の調査の結果、本遺跡は縄文時代中期後半～後期初頭にかけて営まれた集落（の一部）であり、またその後の時代（中世？）にも生活の場として使用されていたことを知ることができた。本項では、まとめとして、調査結果の総括と若干の考察を付したい。

縄文時代

遺構 ・ 竪穴住居址及び竪穴状遺構

縄文時代の遺構としては竪穴住居址5棟（竪穴状遺構を含む）、土壇76基（配石土壇3基を含む）、石室状遺構1基、配石遺構23基、その他、列石、多数の集石、溝がある。これらの遺構は出土遺物が少なく、時期を決定する材料が乏しかったことにより、直接的な相関関係はなお明らかではない。特に配石遺構、石室状遺構などは、出土遺物から時期を知ることは困難であった。このことを踏まえて、本遺跡の構成をまとめると以下の点が挙げられる。

竪穴住居址および竪穴状遺構は5棟検出された。出土土器は中期後半の大名9式を主体とする遺構が多い。これらの遺構の時期に当該時期をあてはめて考えると、隣接の荒谷A遺跡（当埋文センター報告書第57集：鈴木）との関連が密接となろう。荒谷A遺跡は本遺跡と同一の米沢段丘面に立地し小谷を狭んで北側に隣接する遺跡である。縄文時代中期中葉の大名8b期を中心にその前後の時期にかけて営まれた集落であったことが判明しているが、（縄文時代における）集落の終末期は大名9の時期である。この時期の遺構は調査区内にまばらに分布する事が認められており、荒谷A遺跡と本遺跡は大名9の時期に於いて、一連の集落であった可能性がある。そして、同一地域内において8b期から9期にかけて、集落が幾分南へ移動した点にも可能性を指摘である。

しかし、上記のことはあくまで推定の域を出ないものである。それは前述したように確実に遺構の時期を断定し得る資料が出土していないことに起因する。

竪穴住居址及び竪穴状遺構は、5棟共に住居址としての要素が不完全であり、北側の荒谷A遺跡のそれとは様相が異なる。Ah09住、Ah50住は柱穴は認められるものの、炉址が明らかではなく、Bb03住居址は極めて小規模の住居址で、炉址は堅固であるが、柱穴は認められない。Ah12、Bd12住居址はその大半を未調査にしているため、明らかでないがやはり柱穴は検出されなかった。これらの事象がどのような要因によるものかは即断できない。

●土壇及び配石遺構群

土壇及び配石群と称する遺構は多種多様である。C・D区の溝状遺構に囲まれた区域に密集分布することは前項でも触れてきたが、A・B区にもまばらな分布は認められる。遺構は多種多様と述べたが、多様性の一つに出土土器の時期差があり、上部の配石と下部土壇の関連様相の相異や、また、配石及び土壇個々の形態のバラエティ、さらには付属する甕棺などの存在、土壇内部への焼土の堆積、分布の密度などもある。これらの各要素は多重に組み合わせられていて、単純に分化することはできなかった。前項では個々の遺構について記述を行ったので、ここではいくつかのタイプに分類し特色を挙げておきたい。

A. 石室状遺構

土壇の壁に積石を行った遺構である。Cf09石室状遺構が唯一の発見である。底面から副葬品とも考えられるコハク玉が出土している。上面を覆う蓋石の存在は認められない。時期は不明。

B. 配石土壇

下部に土壇を有し、その土壇上部に円形の配石を組んだものである。ただしこの二つの要素の直接的な関係は断定できない。土壇の掘り込み面と配石面との関係が明白でないためである。そまたDd15配石遺構などのように土壇を伴わない同様形態の遺構が存在することから、二度に渡り構築された。可能性は想定される点からである。しかし、状況証拠として土壇上面を覆う形で一定の形状に組みこんだ施設は、やはり下部土壇の存在を明示するものである。Be56配石土壇が顕著な遺構である。他にCj12・1～3、Cf12-1配石なども、この例に含まれる可能性がある。Cf12-1配石と土壇の位置のずれは、盛岡市萩内遺跡の配石遺構と土壇の関係でも認められており、必ずしも位置が一致するものでないことは言えそうである。類似資料としては大迫町立石遺跡がある。時期は一般に不明である。

C. 甕棺を埋納した土壇

Da15-1・2土壇に見られた。上部の配石は前記のBと同様である。Da15-1土壇で倒立の深鉢使用、Da15-2土壇で壺形土器を使用している。後期初頭。県内では類例が発見されていないが、青森県に広く分布する形態である。甕棺墓、再葬墓(葛西・1972)という扱え方が示されているが、この種の甕棺に使用される土器は一定の形態のものが多く、時期も限られる。本遺跡で発見された2例もこの範疇に含まれるものであり、東北北半における後期初頭(十腰内I式)の甕棺墓の分布に現在の所太平洋側の南限を示す資料となり得るであろう。

D. 土壇

土壇の形態、性状はさらに多種である。少量の、あるいは位置がずれて、上部配石が存在するものもある。遺構が重複して検出されていることから、かつて配石・配石土壇であったもの

が次の遺構の構築に伴い、破壊されたものや、あるいは破壊した際に埋土に石を混入したのも
あろうかと推察される。土壇の形状からは大きく次の様に区分される。①二重土壇と
仮称した土壇である。内部土壇は、楕円形及び隅丸方形のいわゆる小判形土壇と、円形の土壇
とがある。小判形土壇の長軸方向は一定の方向性が見られ、東-西及び南-北の方向に近いも
のが多い。すなわち磁北に近く向くものと、それに直交するものがある。二重土壇の場合、
外部土壇は浅いものが多い、土壇の主体は内部土壇にある。

②円形の大型土壇である。Cc06-1土壇などが挙げられる。深さは一定でない。

③円形の小型土壇である。

④小判型土壇である。小型のものが多い。

⑤その他方形の不明瞭な土壇などがある。

これらの土壇は、やはり出土遺物が乏しく、時期不明のものが多い。出土土器は多く上層部
で検出されており、確実に遺構の時期を決定づける資料は出土しなかった。Ci15-4土壇、
Cf06-2土壇で完形土器が出土しているが、いずれも二重土壇の上層部、あるいは外部土壇
底面から出土したものである。中期後半土器であるが、この資料によって遺構の時期決定を行
うのは疑問が残った。土壇に意図的に埋設した状況が認められないからである。土壇内出土土
器は、中期後半の太木9・10式土器が主体であるが、近接地点に当該時期の遺構が検出されて
おり、(下村B A・B区の住居址、荒谷A遺跡、上村遺跡の遺構など)、その時期の生活面を壊
して土壇群を形成した可能性は充分考えられる。従ってこれらの出土遺物は混入品であっ
た可能性もある。土壇群の時期としては、多くの時期不明土壇と共に、中期後半(太木9・
10)時期か、それ以降という扱え方が妥当と思われる。

E. 配石遺構

下部土壇を伴わず、配石のみが作られたものがある。遺構の形態は種々である。Dd15配石
遺構に見られるような組み石の遺構もあるが、不定形のものも多い。多様な配石遺構の中で、
注視されるのは環状、弧状に石を巡らせた列石である。Cf12、Cf5、ci15-5、Bb56配石の他、
小さな弧状あるいは「コ」の字状に石を連ねたものなどが見られる。このうちCf5配石では、
Cf12-2土壇を取り囲む様な位置に作られたものであったが、これも直接の関連は認められ
ないものである。遺物はほとんど検出されておらず、時期は不明である。

列石

Ch09列石遺構は長さ11mに渡って線状に連った列石である。土壇の密集部分に作られてい
るが、下部の土壇と重複はしないものである。配石はこの西側に集中する。列石の南限は他の
配石と混ざれるため明瞭ではない。Cj12-1配石が、この列石の一部に重なるように組みま

たものであったことから、まず列石を連ね、その後配石群が構築されていったものと想定される。

性格を即断することはできないが、配石及び、土壇の分布状態から見て、それに関わる目的が考えられる。すなわち一つの領域区画、あるいは指標などの意義づけを想定した。青森県十腰内遺跡の弧状列石などに類似するものであろうか。

溝

前項で記述したように配石及び土壇群は、周囲を巡る大溝と関りが濃いものと推察された。おそらく、配石及び土壇群の分布を規制する意図により作られたものと考えられる。時期は埋土中に含まれる土器が、重複するDa50土壇から推して中期末～後期前葉を考えた。

●概観

上記の観察事項を総合すると、配石及び土壇群は溝によって区画された一定の領域内に次々に作られていったものである。土壇の重複例が著しいことは、それだけ領域の規制が強かったことを裏づけるものであろう。しかし、Be 56配石土壇や、その周囲の僅かな配石群の存在規制を除外視する遺構の存在も窮わせる。時期的な相違は出土遺物がなかったことにより、検討できなかった。溝内部の土壇群の時期として中期末か、それ以降という極めて大まかな設定を行ったが、ある種の規制をうけて一定の領域内に形成された遺構群であることから、実際には限定された時期幅を想定してよいように思われる。溝の時期観、Da15-1・2土壇の出土土器などを総合して、中期末か、それ以降の後期初頭を中心とする限定された時期幅を可能性性として挙げておきたい。これによって、A・B区から荒谷A遺跡にかけての住居区域とは時期差が明瞭である。後期初頭の住居址発見例を他に求めるならば、現在の所荒谷B遺跡が挙げられる。荒谷B遺跡は荒谷A遺跡の北東に位置し、一段底い掘野段丘面に立地する。中期末の遺跡としては上村遺跡がある。しかし、荒谷A、上村、家の上（当埋文センター報告書第37集収録）の各遺跡で、遺構外出土土器中に後期初頭の十腰内I式土器が検出されており、米沢段丘面においても遺構の存在は推察されるが、この点は今後の資料が検出に待ちたい。

さて、本遺跡の主体である配石及び土壇群の性格であるが、前述した通り、科学的分析は行わなかったため、積極的根拠は挙げることができない。状況証左としての遺構の特徴、あるいは分布の状況から、また他遺跡での類例資料から推考を重ねるのみである。下部に土壇を持つ配石は、土壇の指標として石を積んだものと考えられよう。（これらの土壇は下二重構造の土壇である。この二重土壇について、一つの可能性としては配石を構築するための掘り方という把え方ができる。多くの場合外側の土壇は浅く広く、内部の土壇に主たる役割があると思われた。）このように土中の施設の位置を明示する指標を必要とするものとしては、やはり墓としての蓋

然性が高いものである。類例は県内では先に挙げた立石遺跡がある。石室状遺構は青森県に多く見られる石棺墓に似るが、石のスケール、積み方、蓋石の有無などはやや様相が異なる。また甕棺墓と思われる遺構・遺物の検出は、本遺跡においても再葬の存在を示唆するものである。このように墓地と推される遺構は多種多様な在り方をして、一定の領域に繰り返しくつられたようである。土壇はそれ自体では性格を推定することができなかったが、この限定された領域に作られた施設である以上、やはりそこに作られる必然性のある施設であった可能性は強いものと思われる。

遺物

出土遺物は極めて少ない。土器は凶化可能土器としては、土壇検出の甕棺や、土器埋設遺構の埋設土器の他は土壇から若干出土したにすぎず、他はほとんど小片である。個この出土遺物の詳述は前項で行ったのでここでは省略し、遺構に関連しての概観に触れるに留めたい。

遺構内から出土した土器群は本遺跡の第Ⅲ群4類、5類、第Ⅳ群土器1類を主体とする。第Ⅲ群4類土器は中期後半の大大9式土器を比定した土器群である。出土遺構としては、A h 09住居址、A h 12住居址 B b 03住居址？、B b 12住居址などの各住居址の他いくつかの土壇な、最も多くの遺構から出土した。しかし多くの場合、埋土中出土、小片出土などのように遺構の時期決定には消極的な状況のものが多かった。第Ⅳ群5類土器は中期末の大大10式に比定した土器群で、これが検出された遺構としてはD a 09土器設遺構がある。

第Ⅳ群1類土器は後期初頭土器をまとめたものだが、近年東北地方北半の後期初頭土器—I腰内I式はいくつかに分類される傾向にあり、その前型式の設定も進んでいるようである。本遺跡ではD a 15-1、2土壇出土の土器がこの系統に位置付けられる土器であるが、沈線文主体、沈線文+充填縄文主体と施文手法の相異や器形の相異があるにせよ、施文手法の中に隆十沈線を併用させた点はI腰内Ia式というよりは、それ以前に位置づけるべきであろうか？

石器類もまた土器同様に出土量は少なく、生活痕跡を留めて出土した例は少ない。A h 12住居址出土の石ヒなど僅かな例以外は、遺構外、または土壇中の埋土に混入して発見された。土壇の底面出土品としてはD c 15土壇の有る石製品がある。

以上、簡単に本遺跡の特徴をのべてきたが、調査の結果として次の点を挙げておきたい。

①住居址城と配石、土壇域との別がある。これらは相互に時期差が認められる。

②溝に囲まれた土壇、配石群がある。溝によって囲まれた領域内で、各遺構は重複しながら形成されていったものである。遺構の様相は多様である。時期は明示できない遺構が多かったが、中期終末～後期初頭にかけて形成された遺構群であろうと可能性が得られた。

③上記の遺構群を墓、墓域を設定する溝と考えた場合、副葬品の習慣はこの時期にはまだ定着していないと考えられた。副葬品としての可能性を挙げるならば、C f 09石室状土製品、C d 09土壇出土の土錘状土製品、D c 15土壇の有孔石製品がある。

最後に、本報告をまとめるにあたり、多大な御指導を頂いた旧調査員他、多数の方々へここに謝意を表したい。

〈引用・参考文献〉

- | | | |
|------------|------------------------------|-------|
| ①中村良幸 | 立石遺跡 大迫町教委 | 1979年 |
| ②磯崎正彦他 | 十腰内遺跡 『岩木山』 | 1968年 |
| ③葛西励 | 平賀町堀合Ⅱ号遺跡 平賀町教委 | 1972年 |
| ④ 〃 | 「十腰内Ⅰ式の編年的細分」『北奥古代文化11号』 | 1979年 |
| ⑤本堂寿一 | 八天遺跡 北上市教委 | 1978年 |
| ⑥林謙作 | 「縄文文化の発展と地域性マン東北一」『日本の考古学Ⅱ』 | 1965年 |
| ⑦ 〃 | 「縄文期の葬制 第Ⅰ部」『考古学雑誌62-4』 | 1977年 |
| ⑧ 〃 | 「 〃 第Ⅱ部」『考古学雑誌63-3』 | 1978年 |
| ⑨鈴木保彦他 | 下北原遺跡 神奈川県教育委員会 | 1977年 |
| ⑩ 〃 | 「縄文時代の土壙墓・石棺墓」『考古学ジャーナル№208』 | 1982年 |
| ⑪葛西励他 | 堀合Ⅰ遺跡 平賀町教育委員会 | 1981年 |
| ⑫駒井和愛 | 日本の巨石文化 学生社 | 1973年 |
| ⑬佐々木勝・鈴木優子 | 西田遺跡 岩手県教育委員会 | 1979年 |
| ⑭成田滋彦 | 「青森県の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣 | 1981年 |
| ⑮葛西励 | 「十腰内Ⅰ式の編年的細分」『北奥古代文化11号』 | 1979年 |
| ⑯葛西励 | 蛭沢遺跡 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 | 1979年 |
| ⑰工藤利幸 | 肴内遺跡 (財)岩手県埋蔵文化財センター | 1982年 |

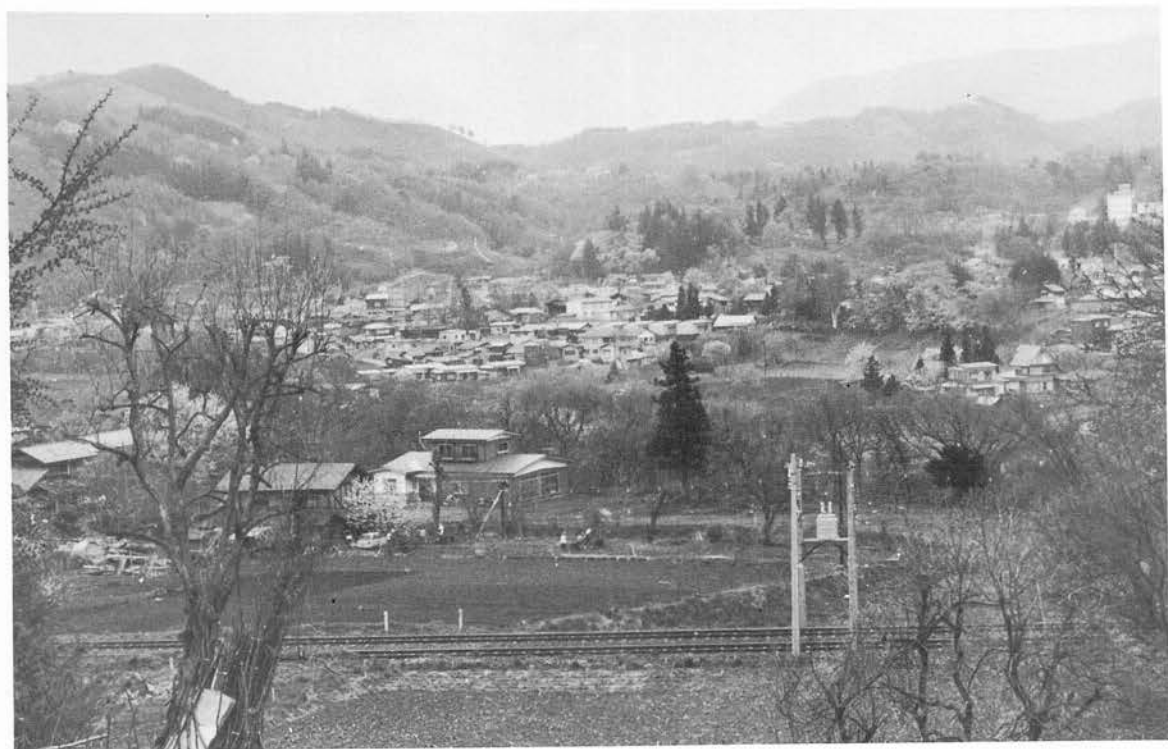
第6表 土壇一覽表 ①

遺構名	分類	平面形	規模計測表			上部構造物	備考
			開口部径	底径	深さ		
A i 03土壇		円形	136×136	123×129	26	—	壁面に立石。
A i 50土壇		不整形	110×107	96×90	23	—	
A i 53土壇		円形	187×200	138×149	70	—	
A i 56土壇		不整形+張り出し状小穴	126×139 小穴部 44×43	117×130 39×31	10	—	
Bb03-1土壇		円形	116×129	110×116	23	—	
Bb03-2土壇		不整円形	97×89	97×98	42	—	
B b 09土壇		不整長方形+張り出し状小穴	110×62 小穴部21.5×23	80×40 18×18	48	—	
B e 09土壇		不整卵形	110×95	84×60	23	—	
B e 50土壇		不整方形	145×118	133×110	18	—	
B e 56土壇		—	138	124	27	—	
C c 09-1土壇		不整円形	131×129	124×119	28	—	
C c 09-2土壇		不整楕円形	116×157	107×148	55	—	
C d 06土壇		○	106×82	95×72	22	—	
Cd03-1土壇		小型円形	61×68	54.5×63	19	—	
Cd03-2土壇		不整円形・二重	外 173×207 内 162×174	200.5 139×156	17 33	—	
						配石	
C e 12土壇		不整円形	97×98 75×94	84×95 64×75	49	(配石)	
Cf06-1土壇		二重・外部—不整円形・内部—長方形	101×104 69×56	95 60×47	16 11.5	24	(配石)
Cf06-2土壇		不整円形・二重	123.5×141 81.5×100	117×130 77×89	11 8	18	(配石)
C f 09土壇		楕円形	135×190	91×153	50	コハク玉	石室遺構、掘り方
Cg09-1土壇		不整円形	107.5×116	100×108	17		
Cg09-2土壇		楕円形	83×107	74×96	16		
Cg09-3土壇		楕円形	84×112	75×105	18		
Cf12-1土壇		二重・不整形+不整形	88×103 85×83	75×94 65×70	20 21	36	
Cf12-2土壇		二重・不整形+不整形	119×153 96×115.5	107×134 84×84	27 29	52.5	
Cf12-3土壇		卵形	113×123.5	90×113	26		
Cf12-4土壇		二重・不整円形+小判形	133×130 95.5×68	122×120 86×56	20 8	29.5	
Cg12-1土壇		不整楕円形	77.5×97	52×66	43		
Cg12-2土壇		二重・不整形+不整形	? 107	? 97	21 13	35	
Cg12-3土壇		不整形	157	141	32		
Cg12-4土壇		不整方形	113×110	85×67	45		
Cg12-5土壇		?	77	63	11		
Cg15-1土壇		小判型	78.5×65	70×55	7		
Cg15-2土壇		小判型	65×100	57×95	30		
Ch09-1土壇		不整円形	104×92	90×81	12		
Ch09-2土壇		小型不整楕円形・二重	90×102 48×60	82×92.5 39×51	5 9	14	
Ch12-1土壇		不整円形	104	95	22		
Ch12-2土壇		不整円形	118	103	18		
Ch12-3土壇		不整円形	112.5×126	94×109	34		
C i 06-1土壇		大型楕円形	155	145	50		

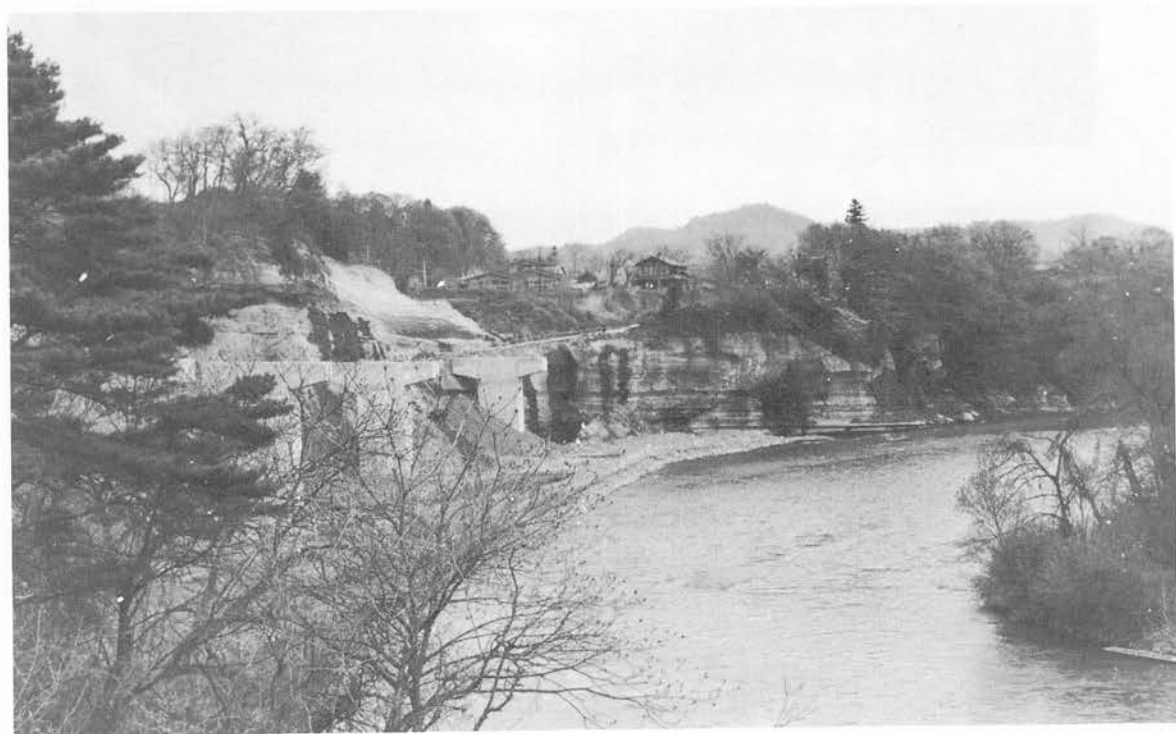
第7表 土壇一覽表 ②

遺構名	分類	平面形	規模計測表				上部構造遺物	備考
			開口部径	底径	深さ			
Ci06-2土壇		大型円形	235×221	215×203		33		
Ci12-1土壇		大型不整形	166×179	141×146		59		
Ci12-2土壇		?	?	?		55		
Ci15-1土壇		小判形?	140×107	112×83		49		
Ci15-2土壇		不整円形	84×90	65×80		18		
Ci15-3土壇		二重・円形	81×96	79×88	10	42		
			71×70	56×29	30			
Ci15-4土壇		二重楕円形	113×123	100×112	20	48		
			92×97	72×81	29			
Cj12-1土壇		二重・不整円形 +小判形	111	98	22	29		
			66×114	52×101	7			
Cj12-2土壇		二重・不整形 +不整形	113	96	16	21		
			100	85	4			
Cj12-3土壇		?	80	63		20		
Cj12-4土壇		二重・円形 +不整形	87×95	84×85	11	22		
			76×70	61×60	13			
Cj12-5土壇		小円形	80×88	76×78		14		
Cj15土壇		?	114	89		45		
Cj06土壇		二重・円形+ 小判形	115×122	103×111	14	22		
			98.5×68	83×59	7.5			
Da09-1土壇		円形?	112	95		23		
Da09-2土壇		楕円形?	100×119	83×102		19		
Da09-3土壇		二重	110	?	21	28		
			67	45	10			
Da09-4土壇		楕円形?	111	99		30		
Da09-5土壇		?	101	70		22		
Da09-6土壇		方形?	140	130		27		
Da12土壇		二重・不整円形 +小判形	172×150	158×134	13	37	配石 土器	甕棺墓?
			93.5×114	73×87	17			
Da15-1土壇		円形二重?	113	99	13	55	配石 土器	倒立深鉢
			81×82	61×68	41			
Da15-2土壇		円形二重?	160	136	18	48		
			136	119	28.5			
Da15-3土壇		二重・隅丸方形 +小判形	120×120	93×100	22	40		
			80×116	50×85	12			
Db09-1土壇		小判形	77×100	66×82		16		
Db09-2土壇		二重・円形	143×142	125×118	47	75		
			126×	96×105	33			
Db09-3土壇		?	119	84		44		
Db09-4土壇		?	109	96		30		
Db09-5土壇		不整円形	118×118	107×110		39		
Db06土壇		二重・円形+ 小判形	128×125	115×116	10	28		
			96×74	79×63	18			
Db12土壇		円形	86×102	77×90		26		
Dc12土壇		不整楕円形	87×103	75×90		18		
Ch50土壇		不整方形~円形	127×126	119×119		37		
Da50土壇		不整円形	129×127	120×124		43		
Db15-1土壇		不整楕円形	73×121	64×113		24		
Db15-2土壇		二重 不整楕円形	82×112	71×102	10	18		
			70×72	55×59	6			

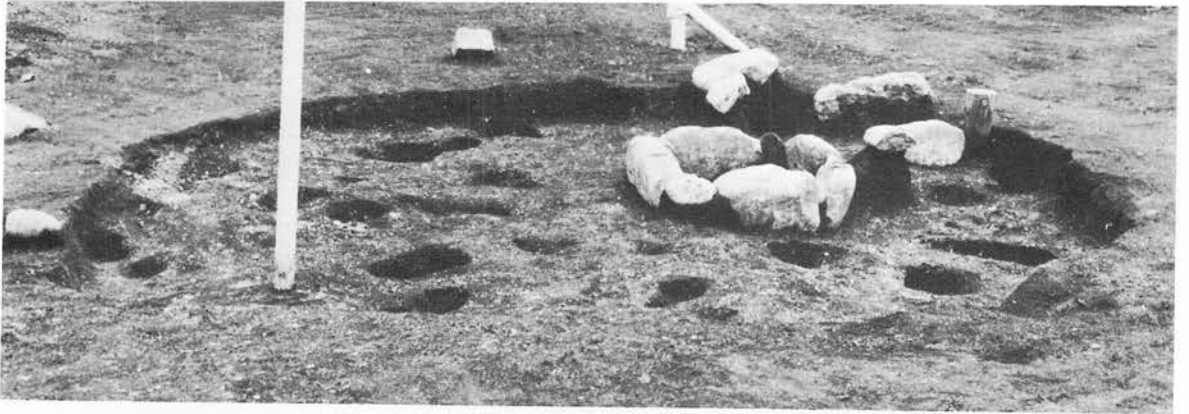
上 村 遺 跡



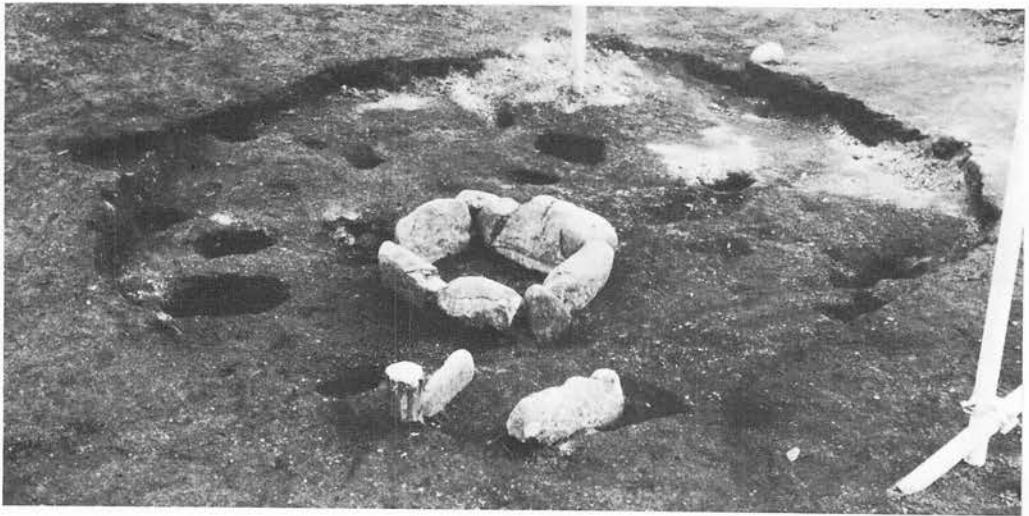
a : 遺跡遠景 (西より)



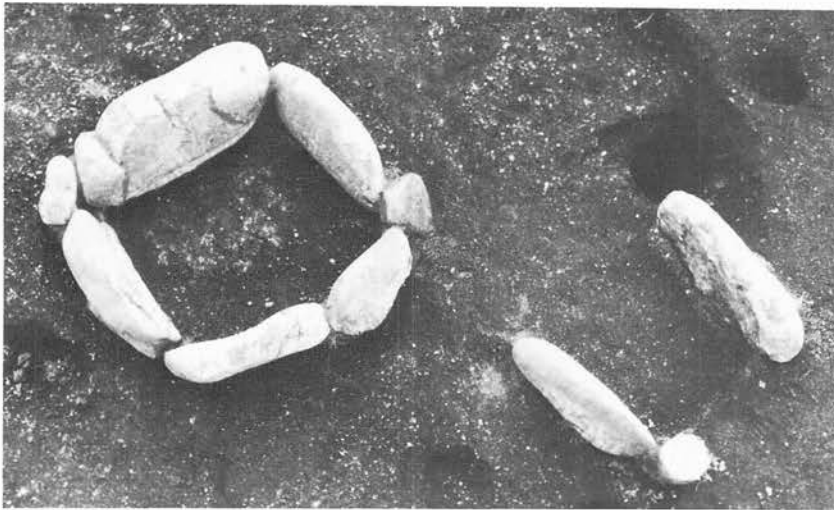
b : 遺跡遠景 (南より) 写真図版 I 上村遺跡全景



a



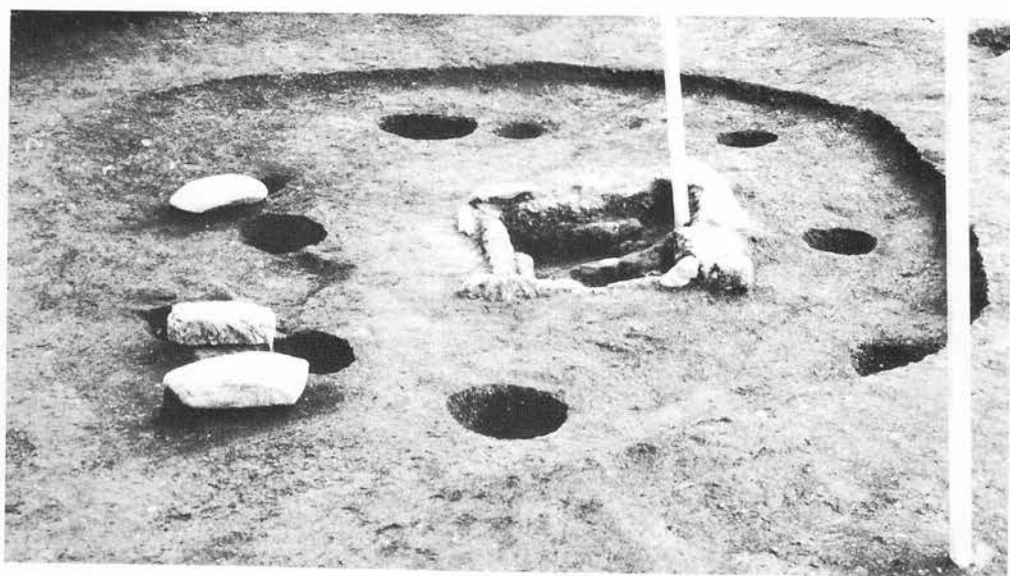
b



c

- a : 住居址全景
(南より)
- b : 住居址全景
(北より)
- c : 炉 址

写真図版 2 Cd65 住居址



a



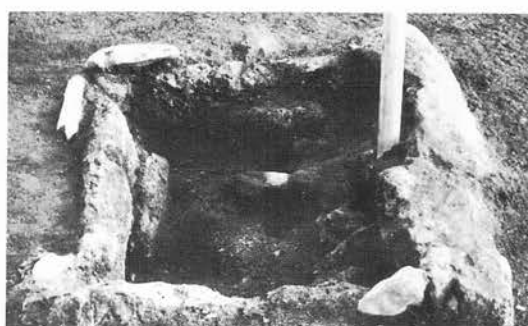
b



c



d



e



f

- a : 住居址全景（北より）
- b : 住居址全景（西より）
- c : 遺物出土状況（埋土）
- d、e : 炉址
- f : 炉土層断面

写真図版 3 Ce68 住居址



a : 住居址全景 (南より)

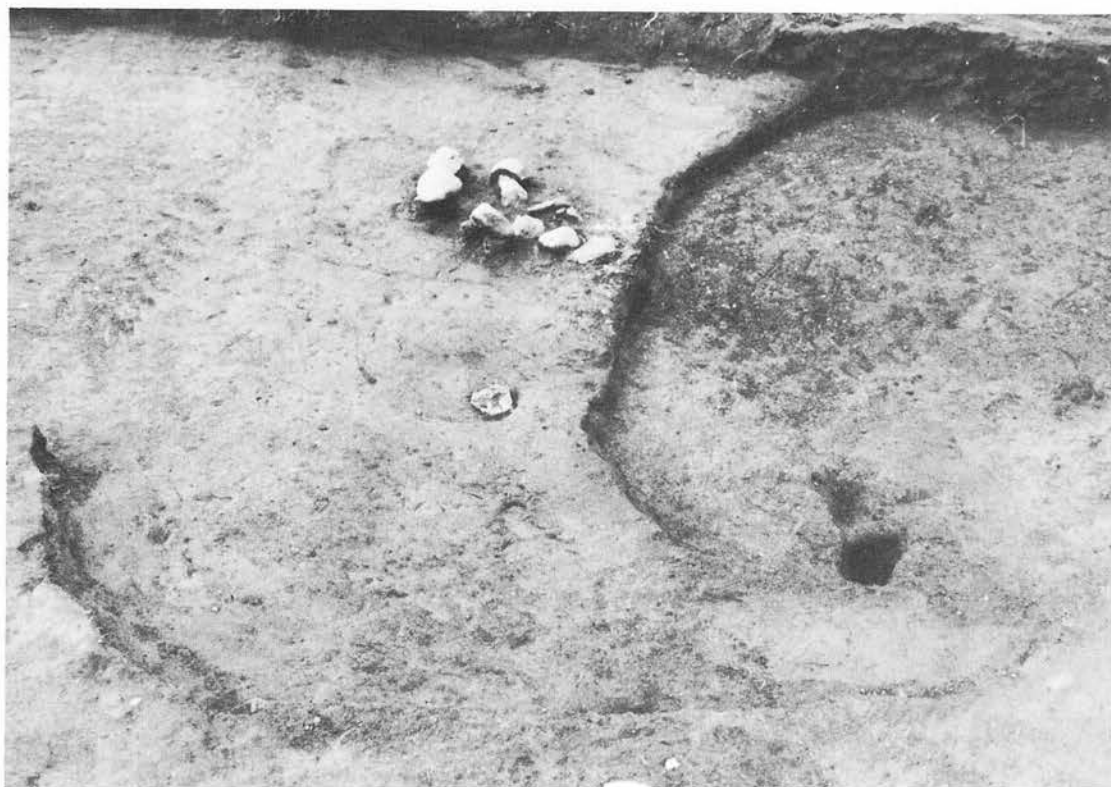


b : 住居址全景 (北より)

写真図版 4 C168 住居址



a : D b 71 竖穴状遺構全景 (東より)

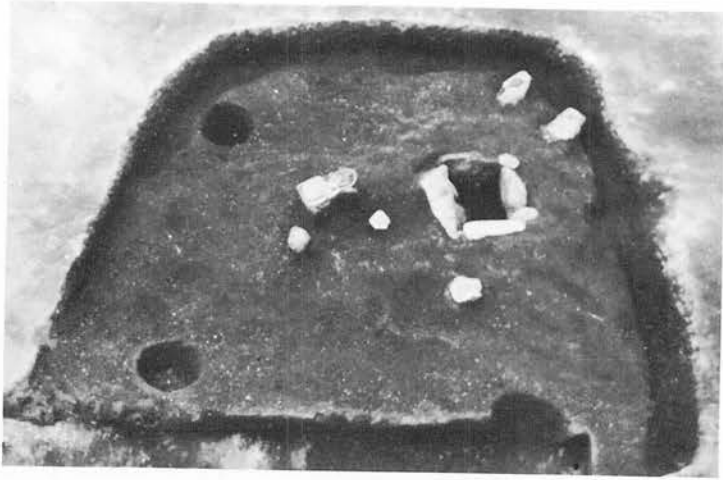


b : D c 71 竖穴状遺構 (東より)

写真図版 5 Db71, Dc71 竖穴状遺構



a



b



c



d

a : 住居址全景(東より) b : 住居址全景(南より) c、d : 炉 址
写真図版 6 DC03 住居址



a

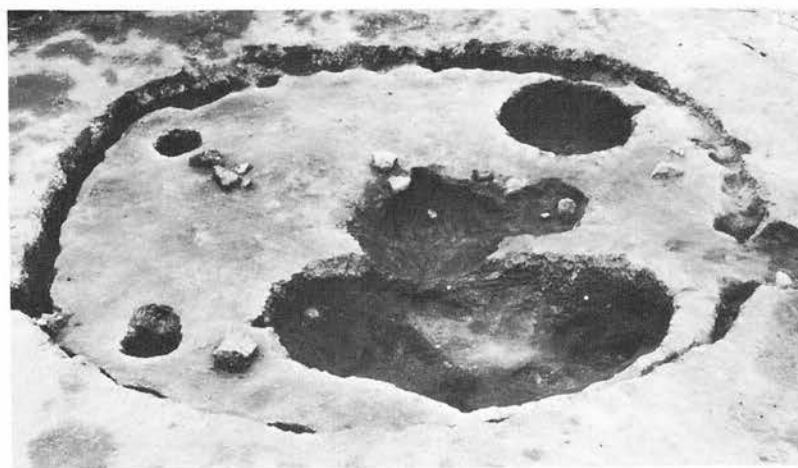


a : 土層断面

b : 住居址全景 (北より)

b

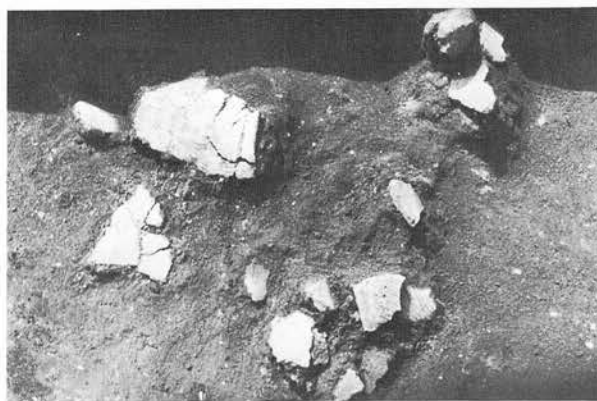
c : 住居址全景 (西より)
d、e : 遺物出土状況



c

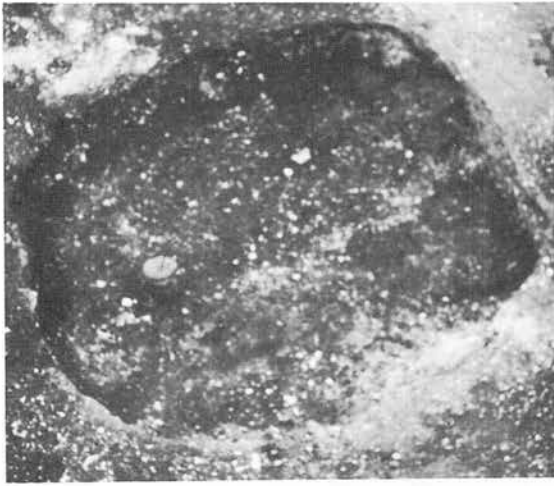


d

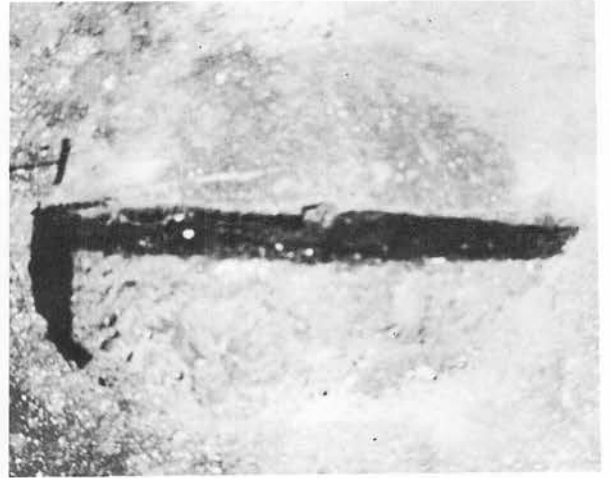


e

写真図版 7 Df03 住居址



a : B e 62土坑



b : 土層断面



c



e



d

c、d : C f 65土器埋設遺坑

e : 埋設土器

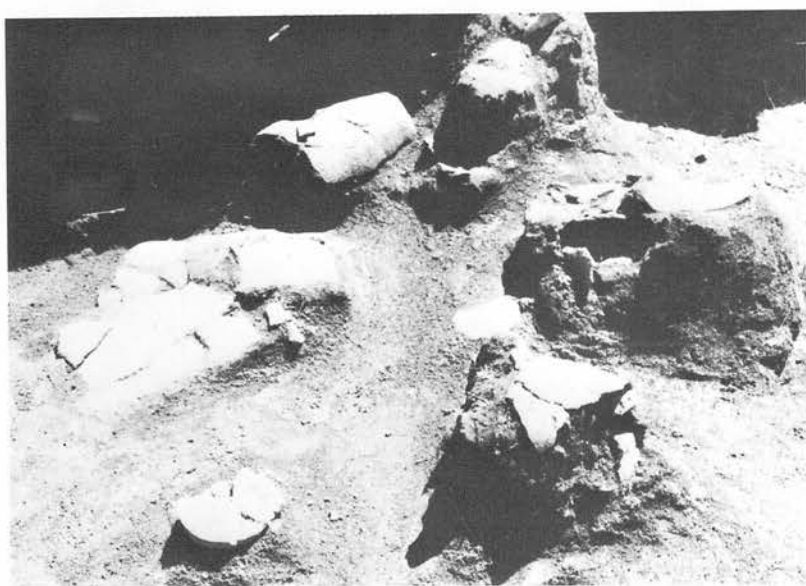
写真図版 8 Be62 土坑、Cf65 土器埋設土坑



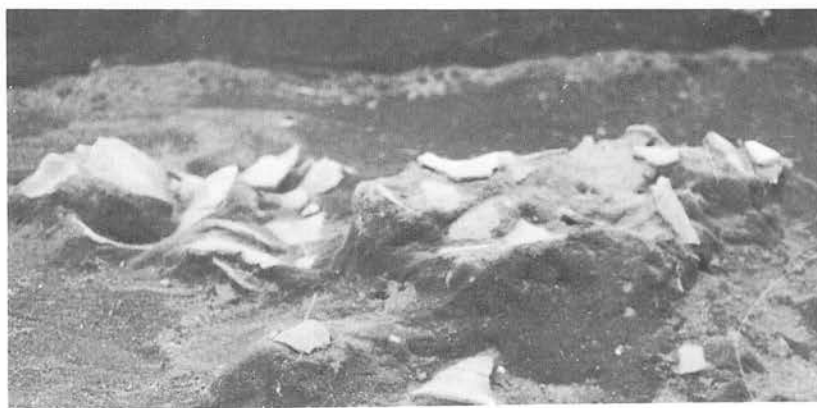
a



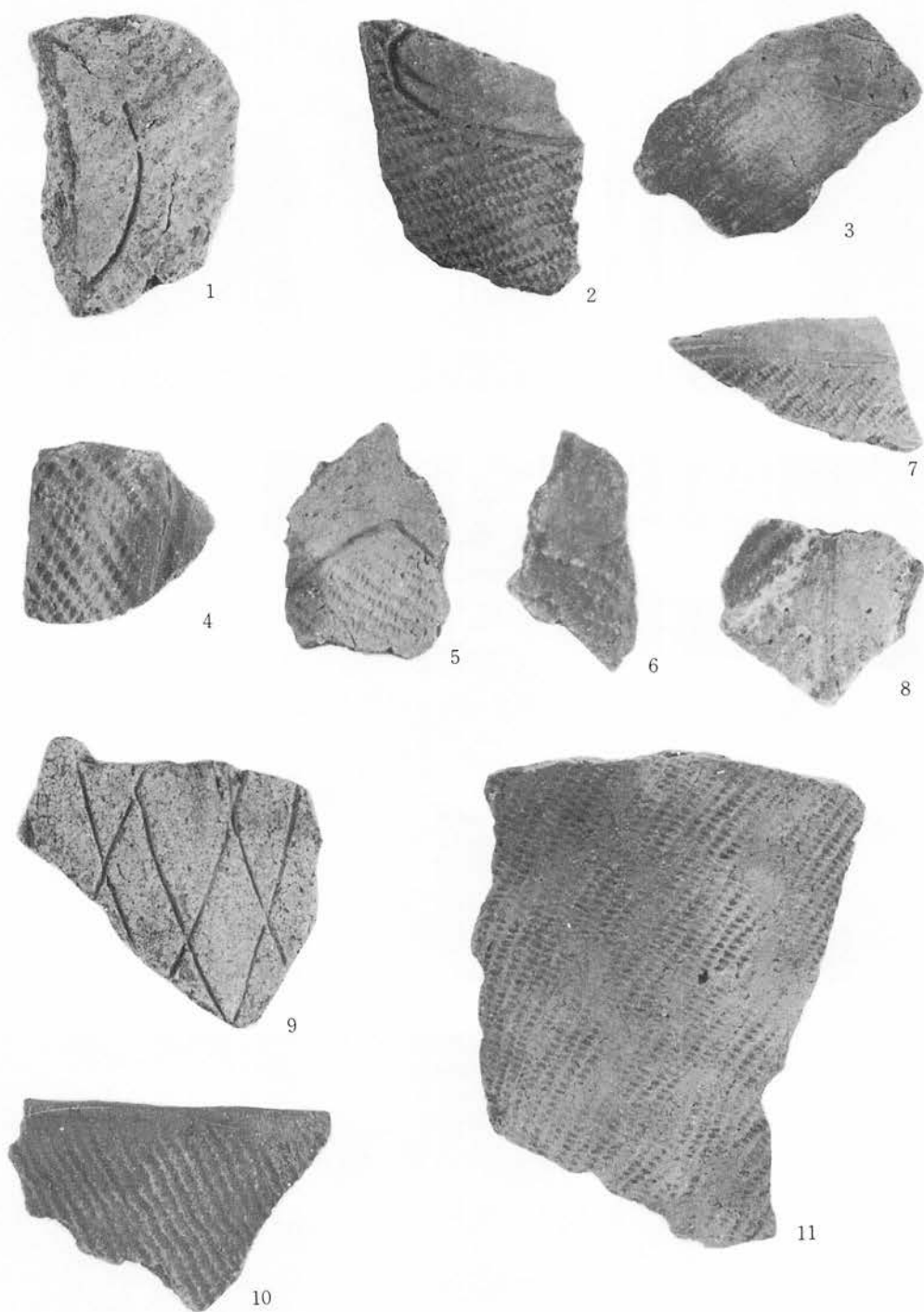
b



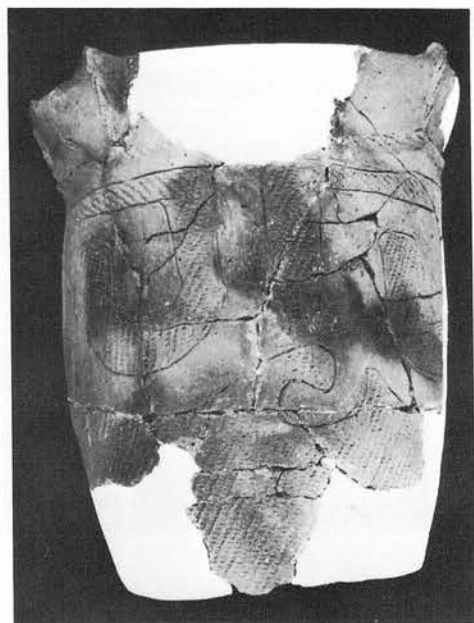
c



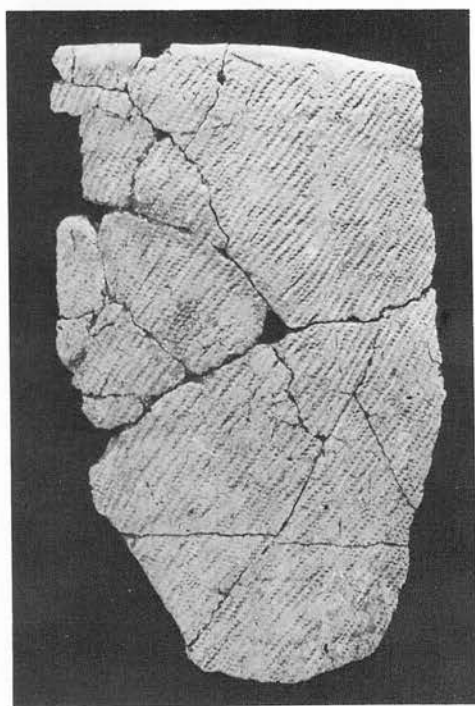
写真図版 9 C区遺物出土状況



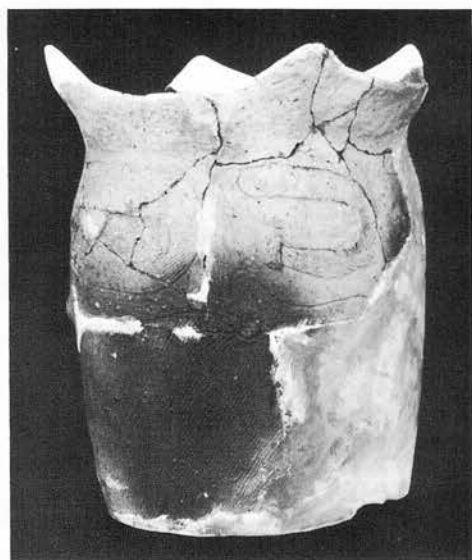
写真図版10 Cd65 住居址出土土器



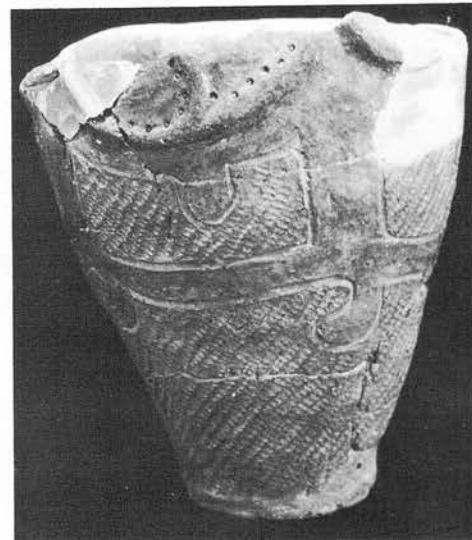
1



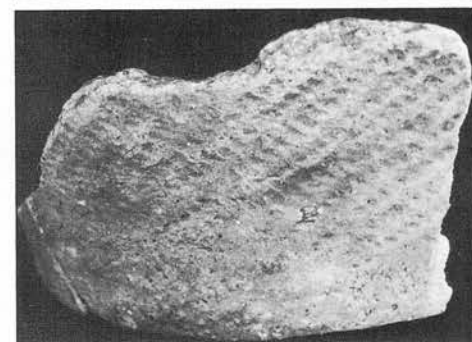
2



3



4

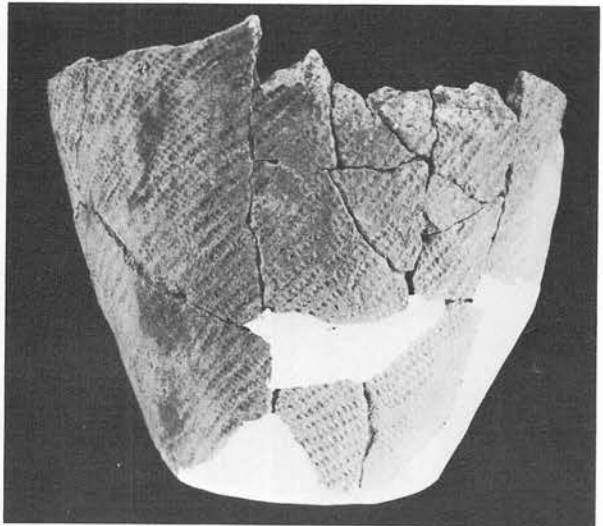


5

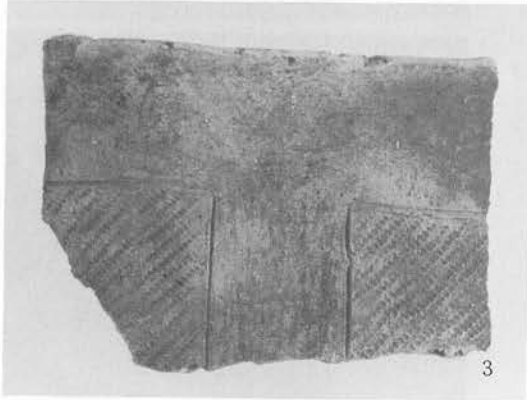
写真図版II Ce68 住居址出土土器



1



2



3



4



6



5



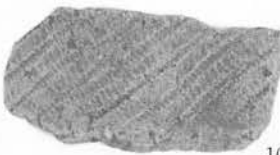
9



7



8



10

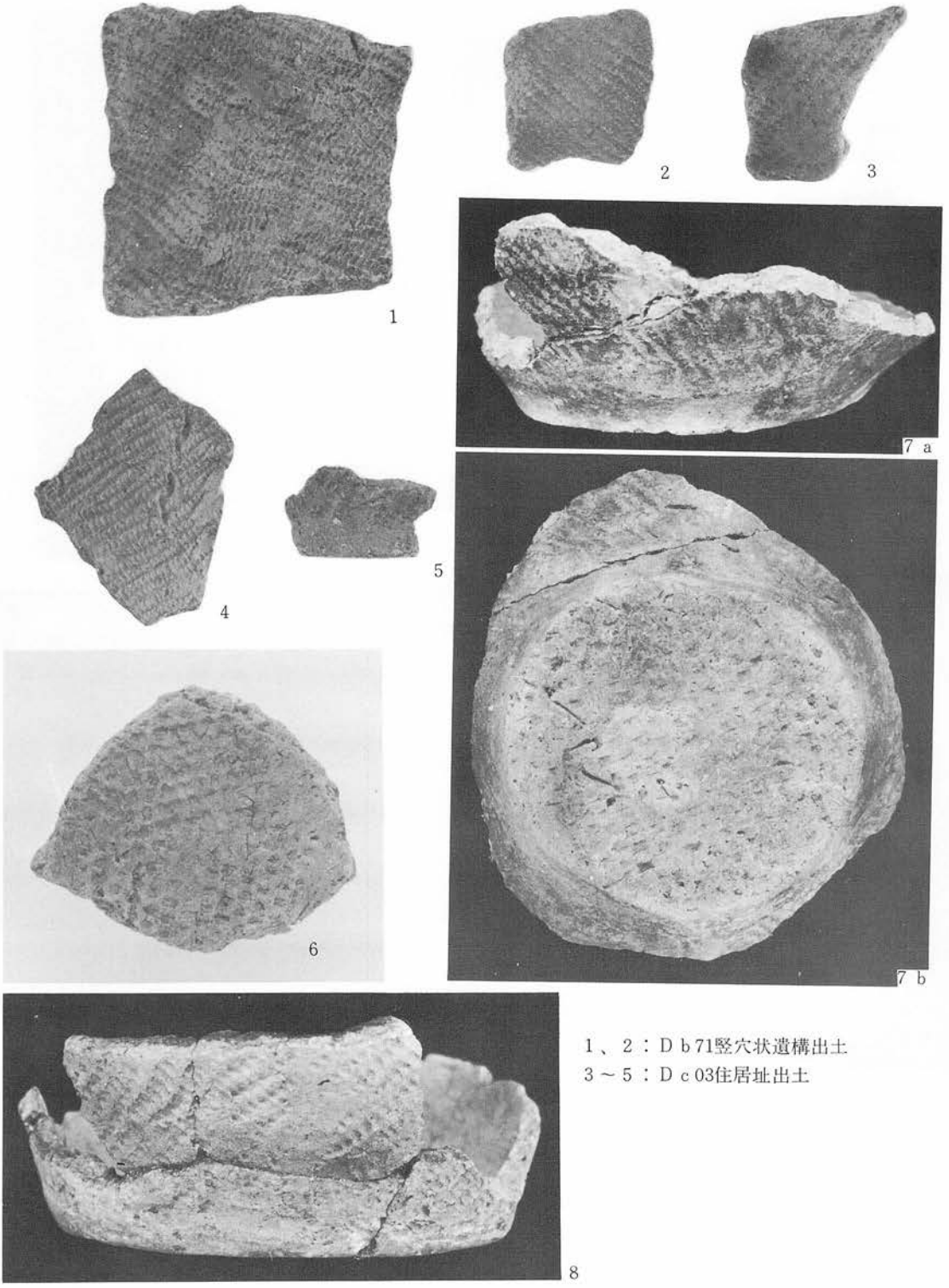


11



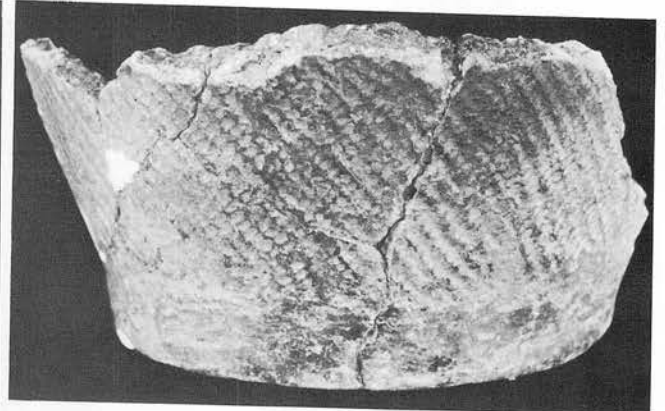
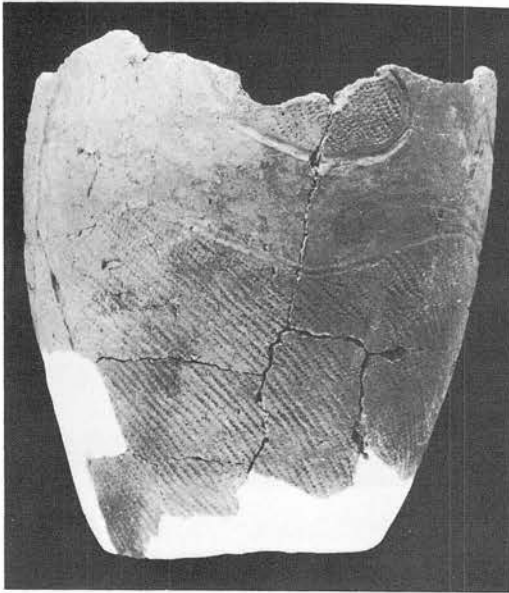
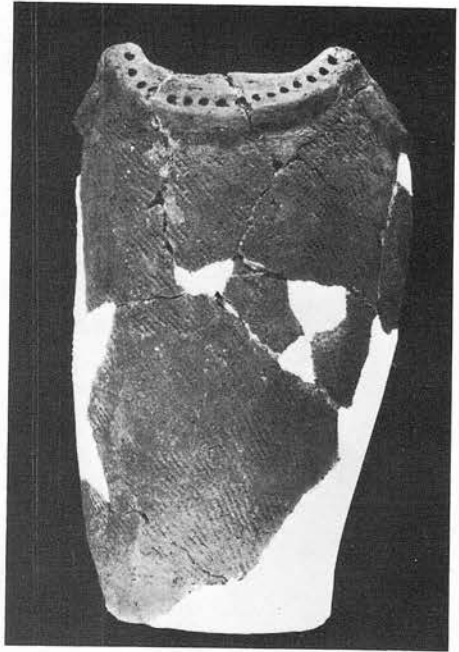
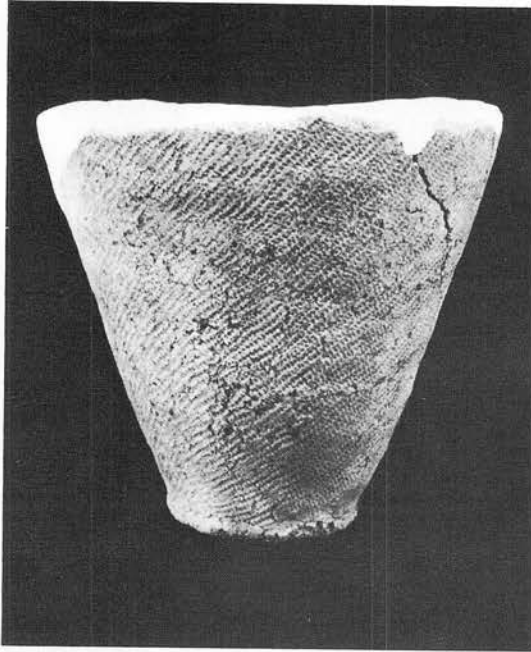
12

写真図版12 Cd68 住居址出土土器



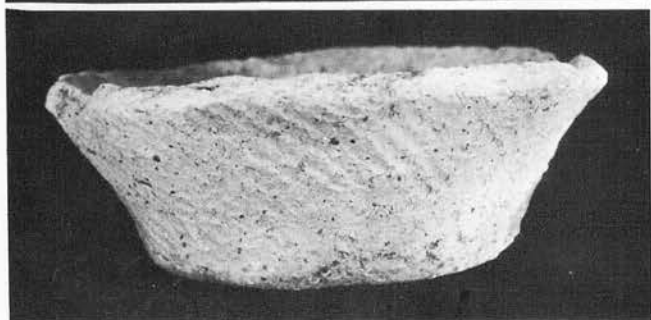
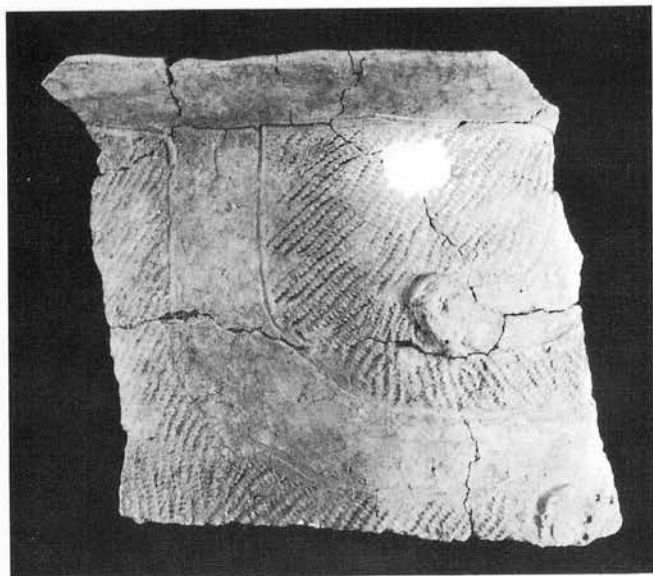
1、2：D b 71 竖穴状遺構出土
 3～5：D c 03 住居址出土

写真図版13 Ce68、Cf68 住居址出土土器

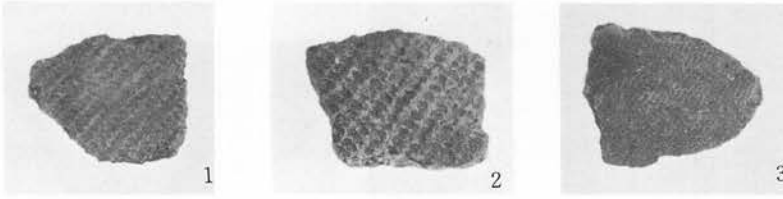


1, 2 : Db71 豎穴状遺構出土土器
3~5 : Dc03 住居址出土土器

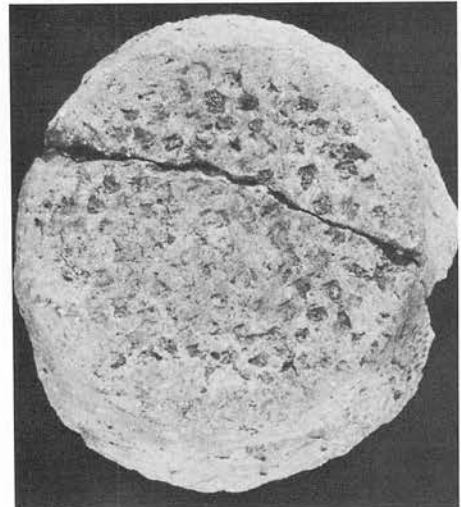
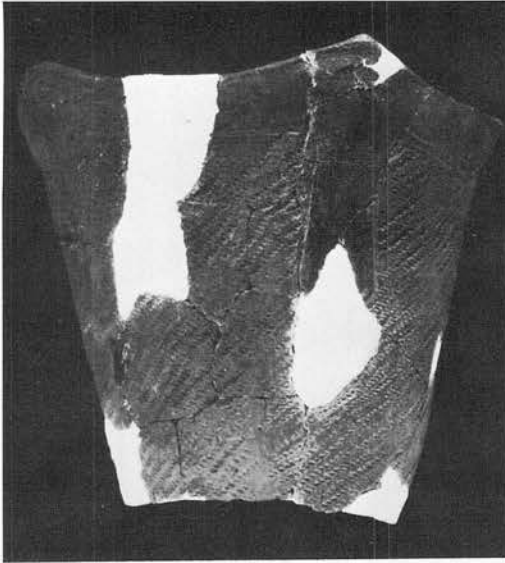
写真図版14 Dc03 住、Db71 豎穴状遺構出土土器



写真図版15 Df03 住居址出土土器

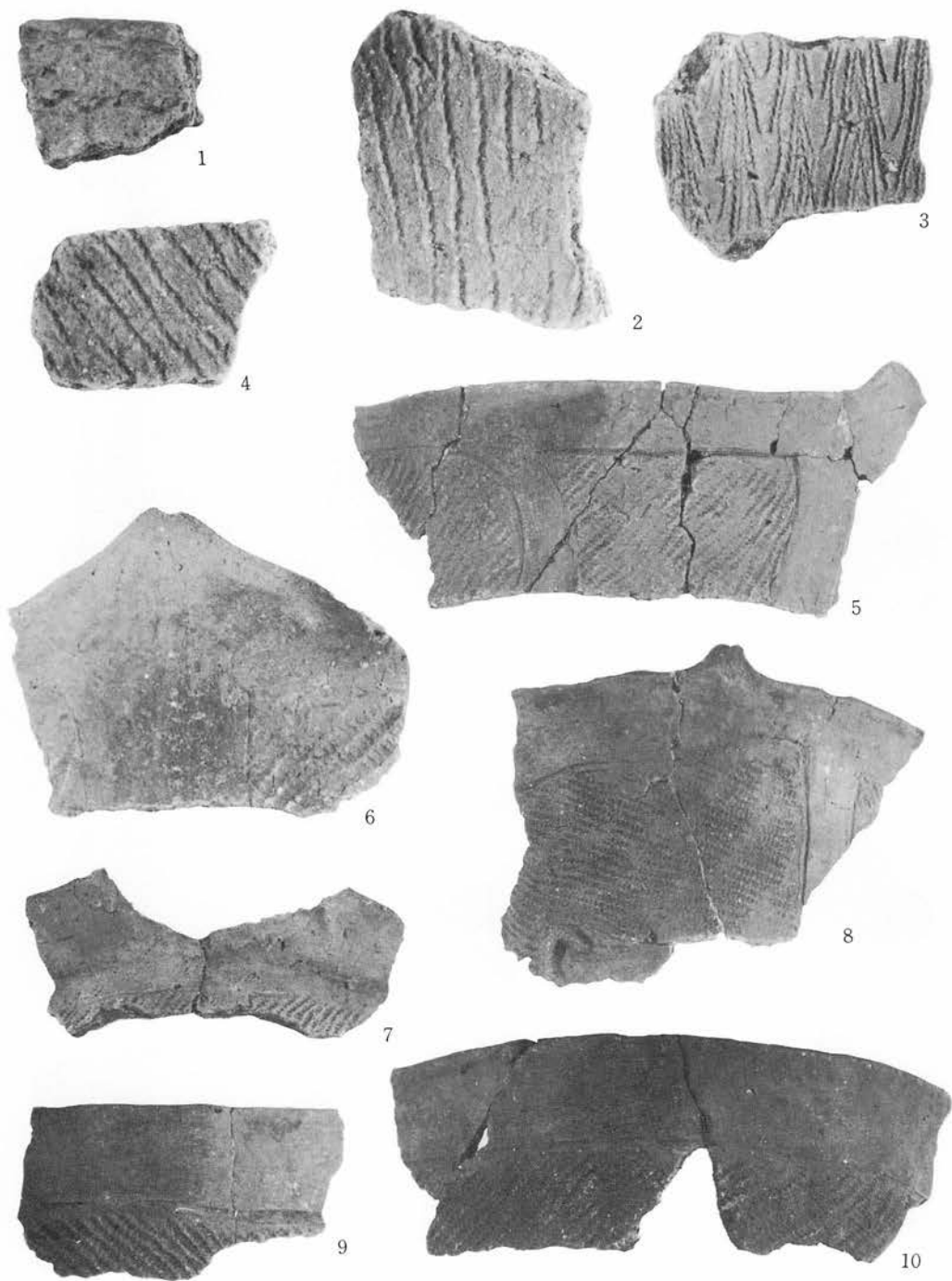


a : B e 62土坛出土土器

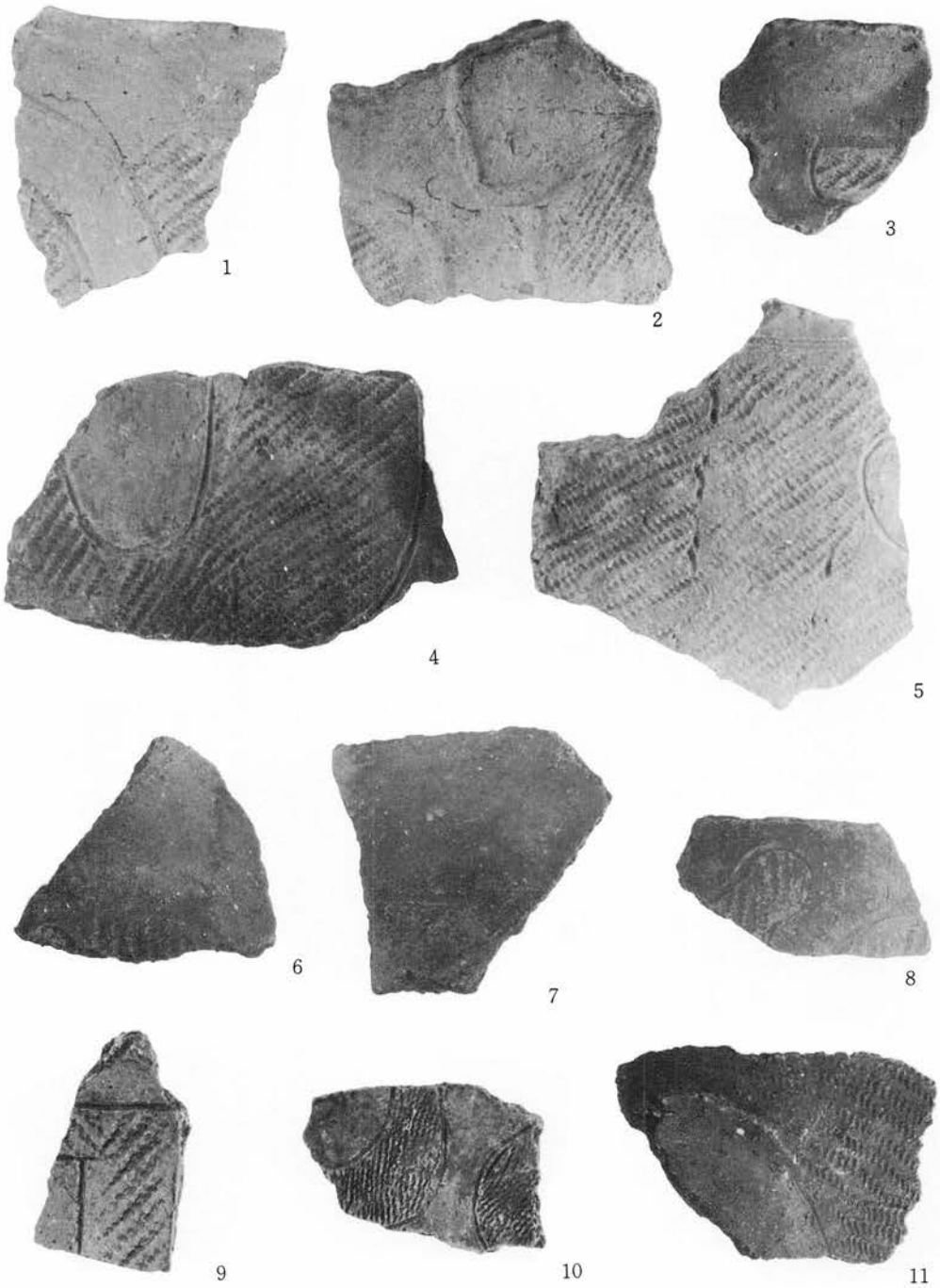


b : 遺構外出土土器(1)

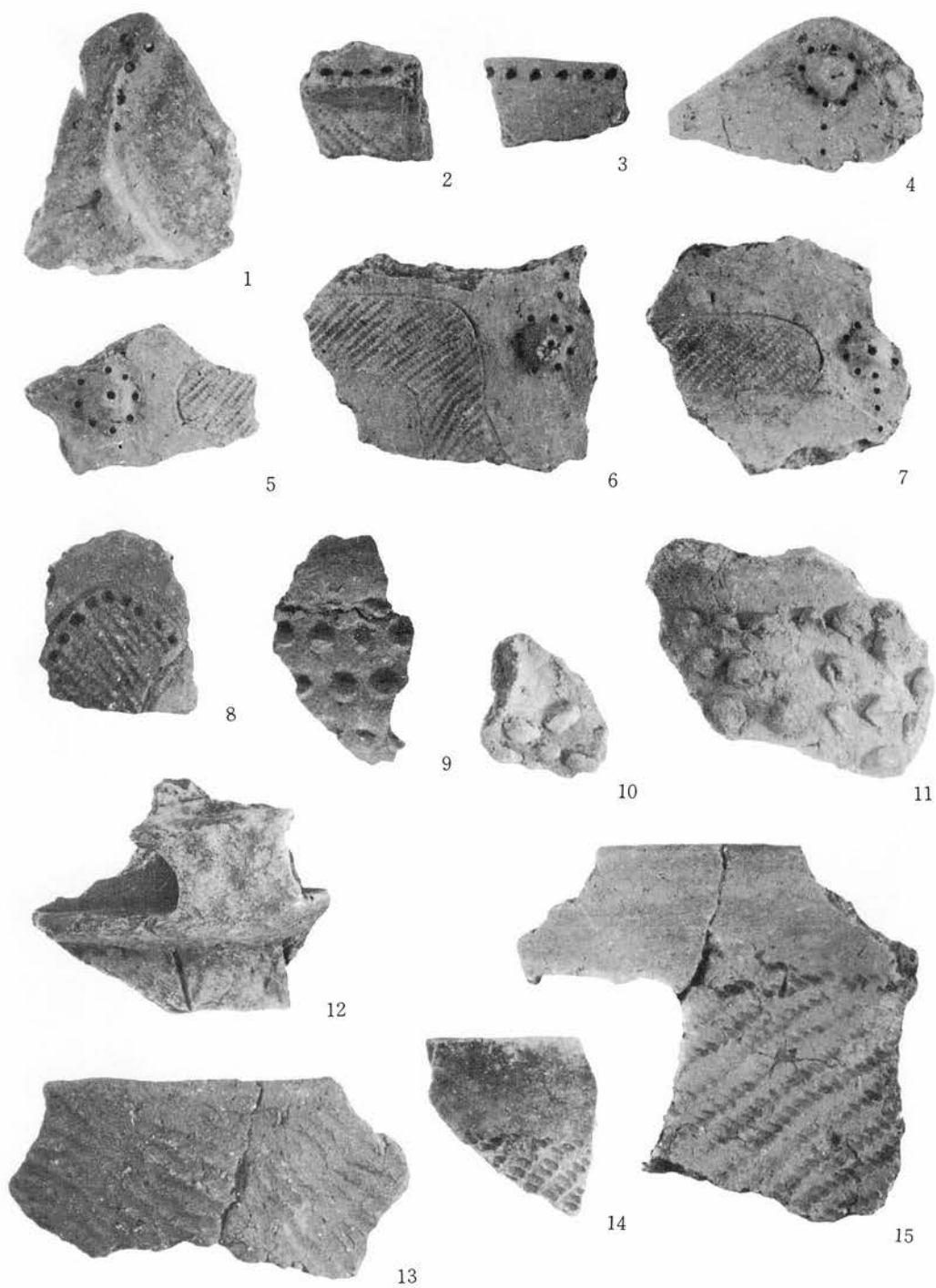
写真図版16 遺構外出土土器(1)



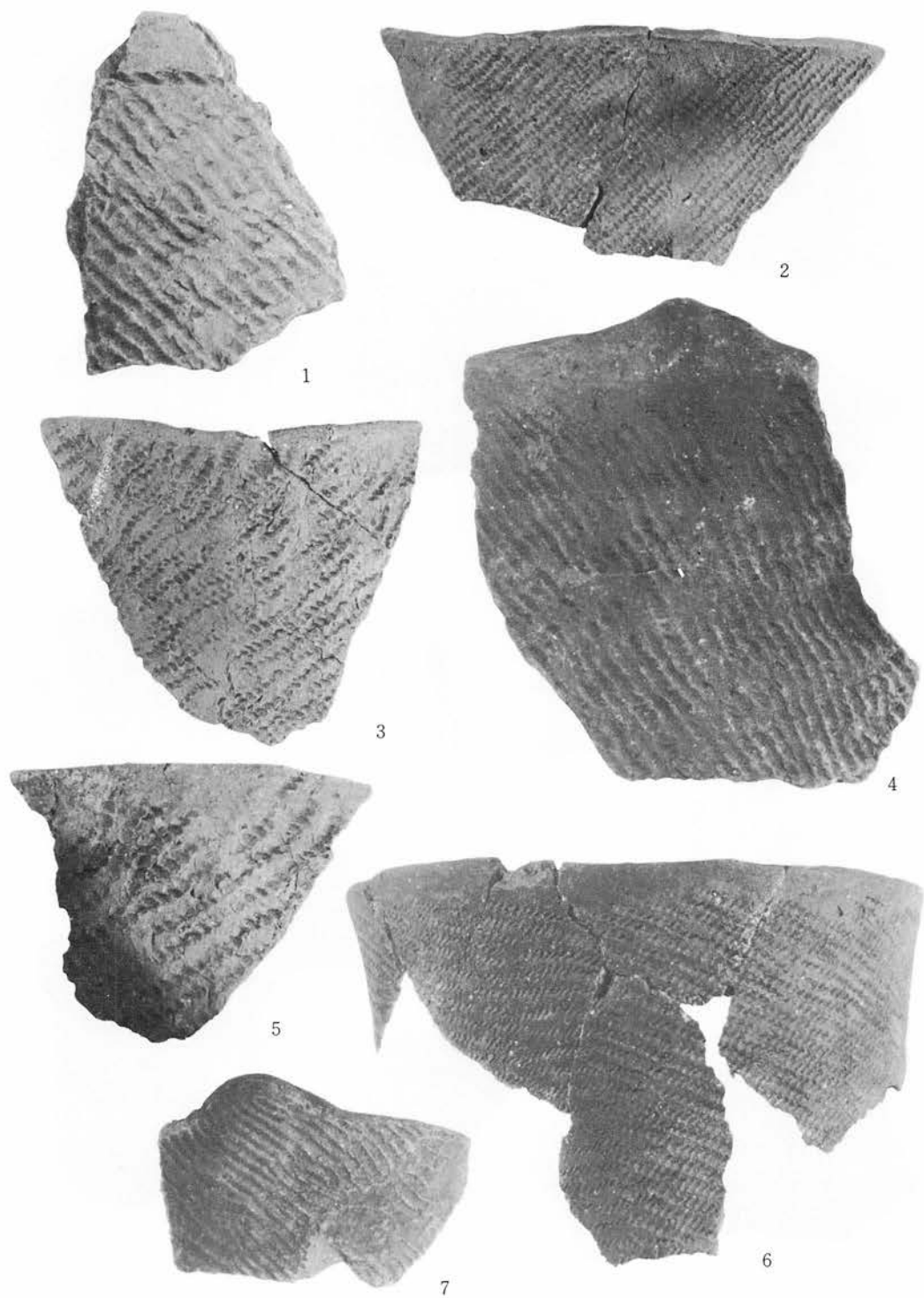
写真図版17 遺構外出土土器(2)



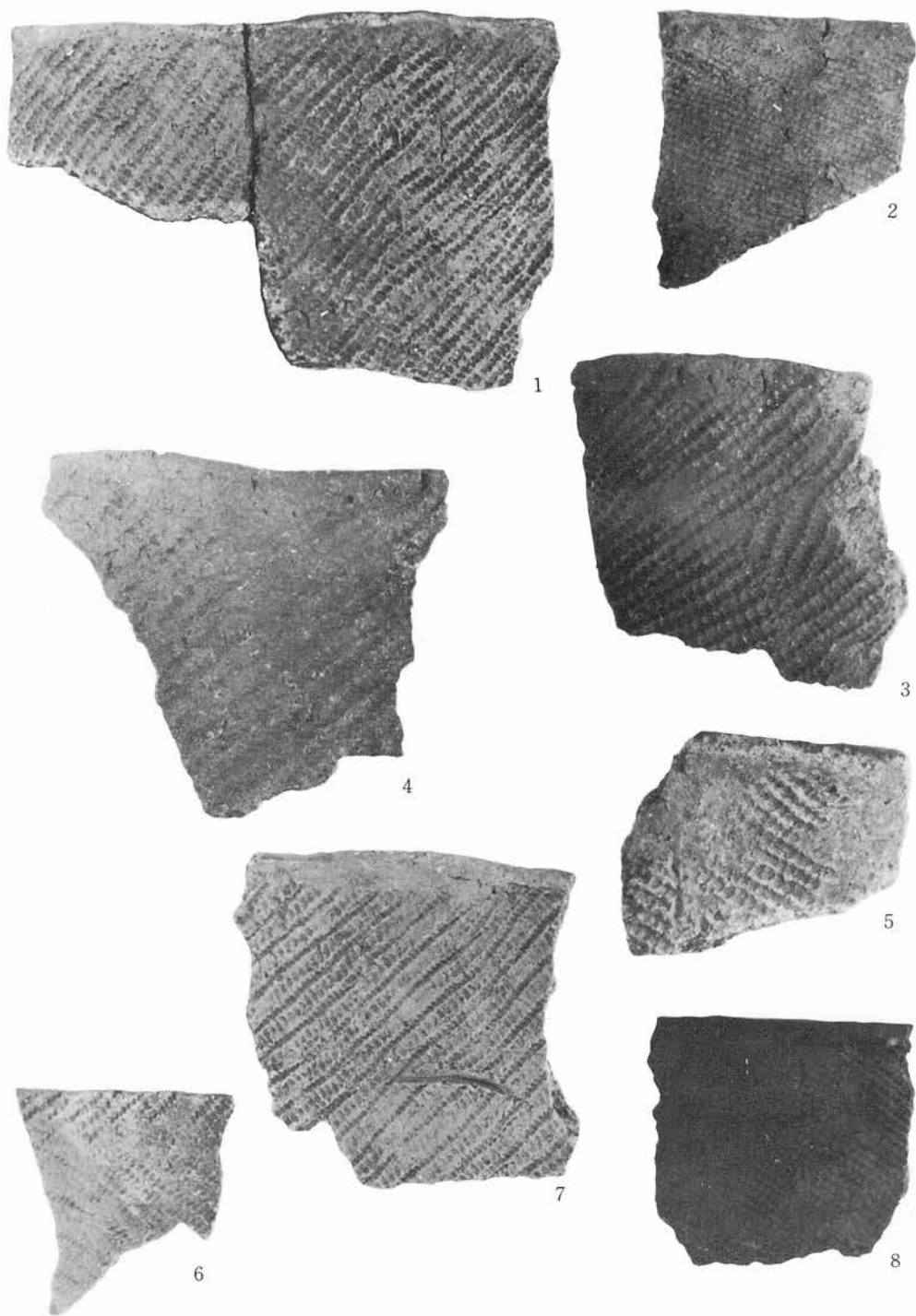
写真図版18 遺構外出土土器(3)



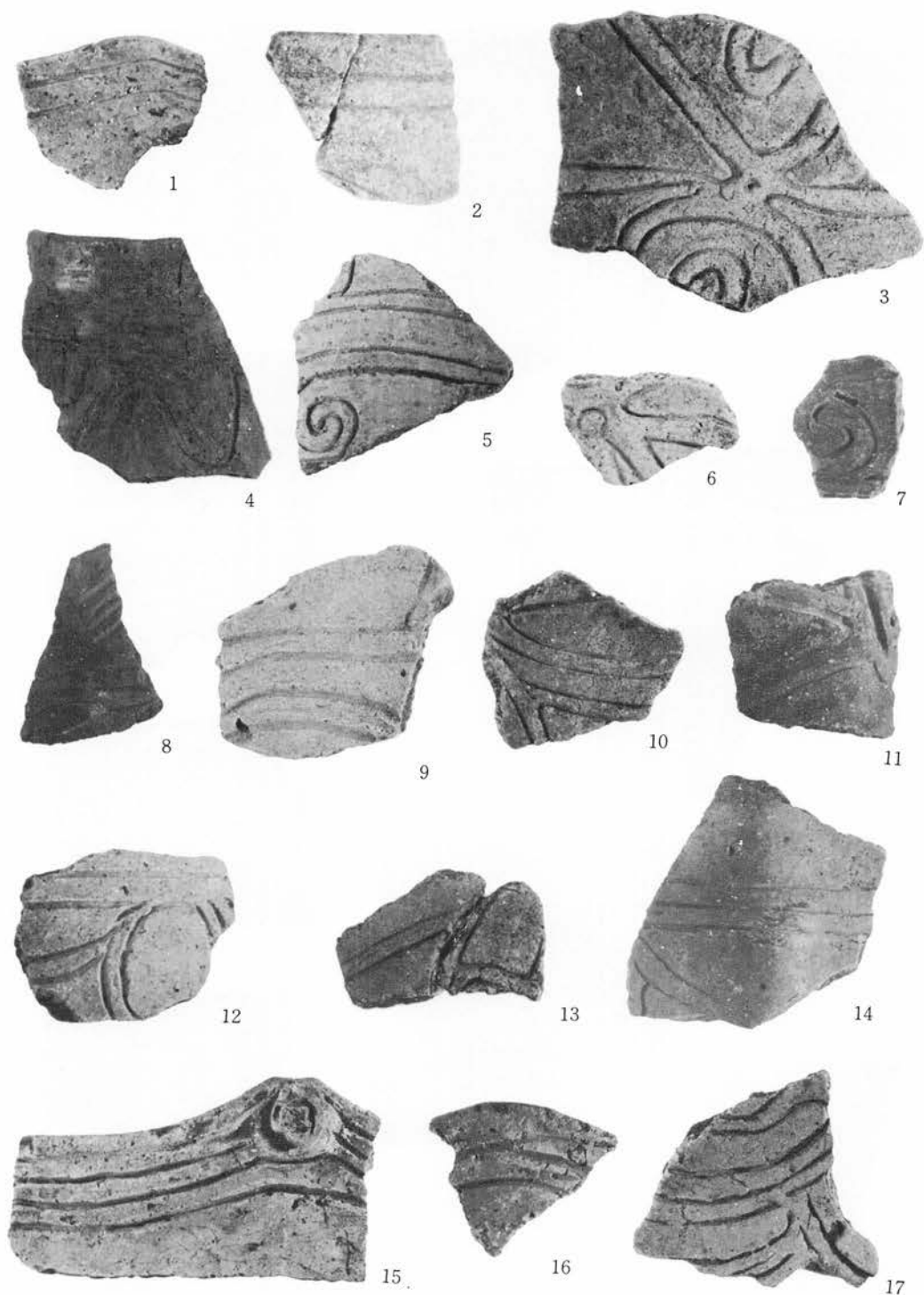
写真図版19 遺構外出土土器(4)



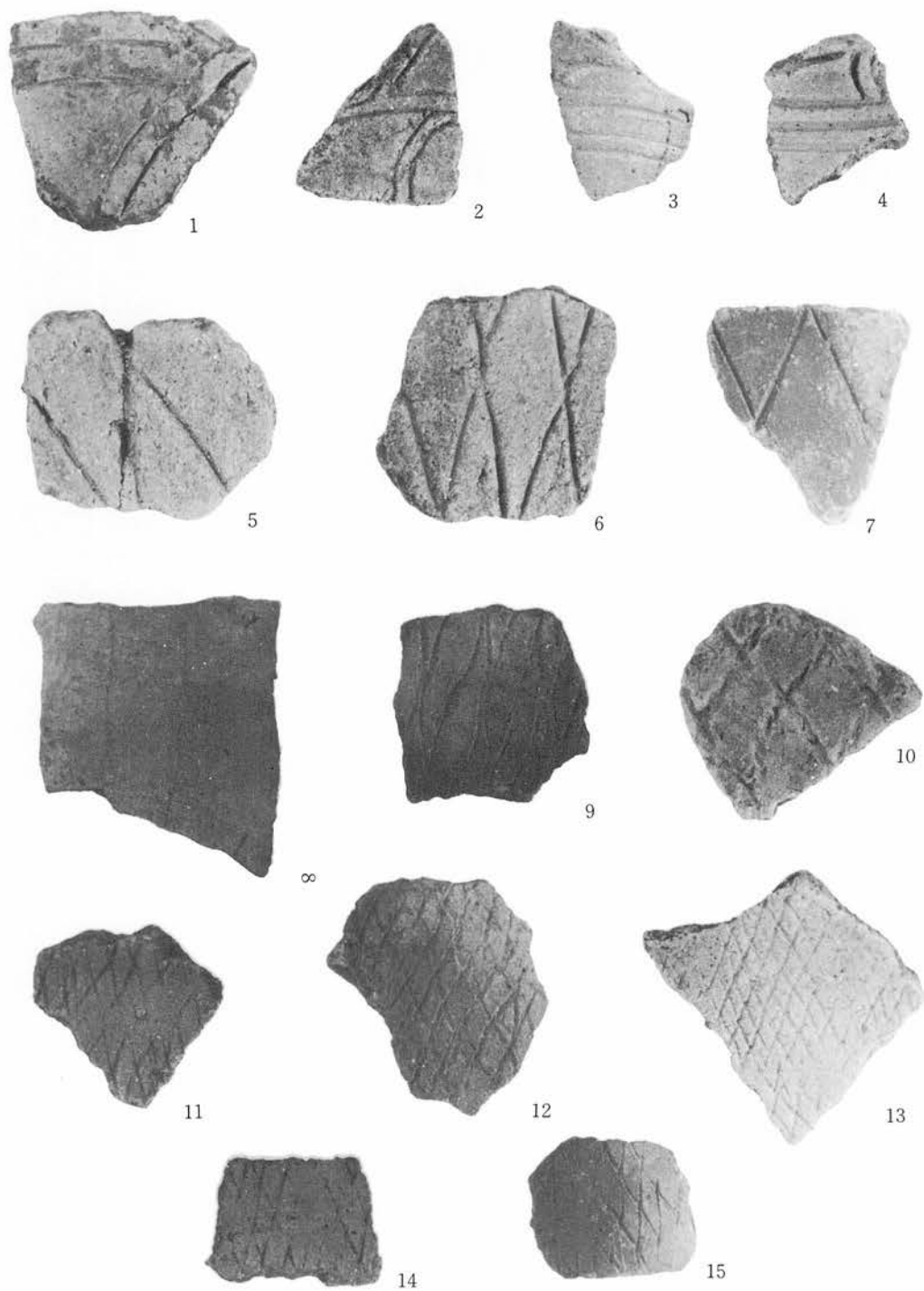
写真図版20 遺構外出土土器(5)



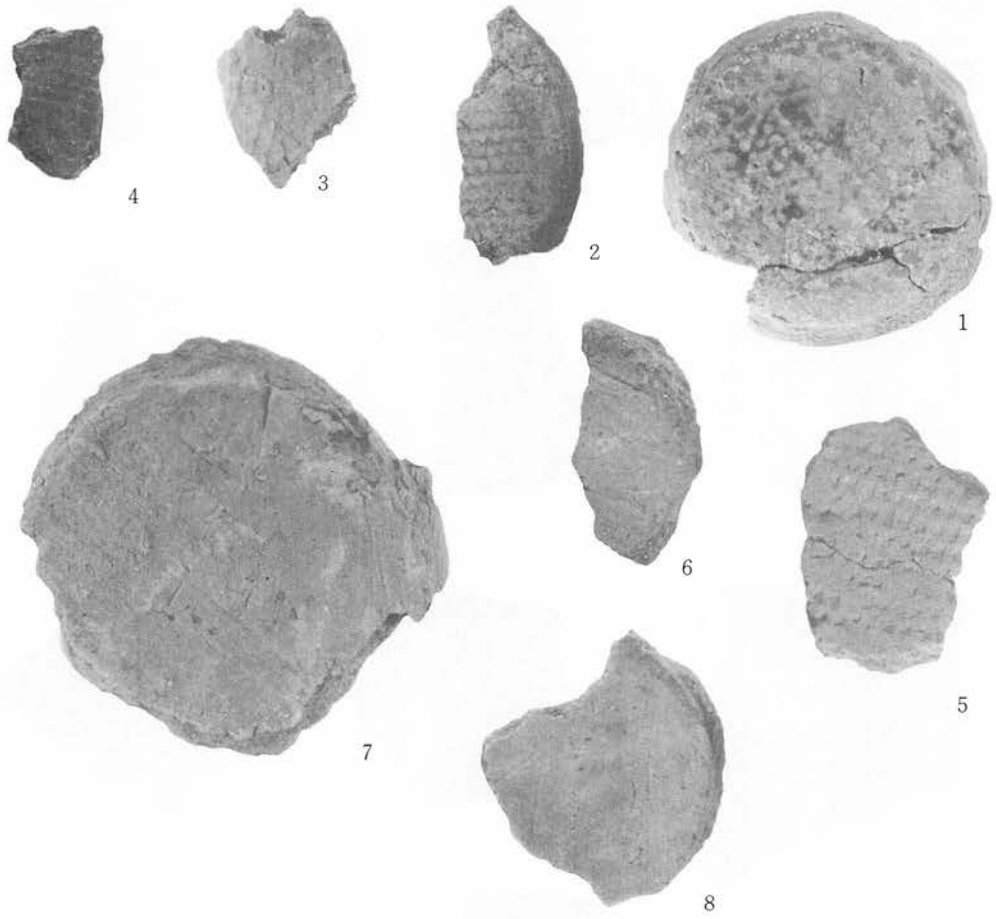
写真図版21 遺構外出土土器(6)



写真図版22 遺構外出土土器(7)



写真図版23 遺構外出土土器(8)



1～5：網状底
6～8：木葉底

写真図版24 遺構外出土土器(9)



1



2



3



4



5



6



7



8



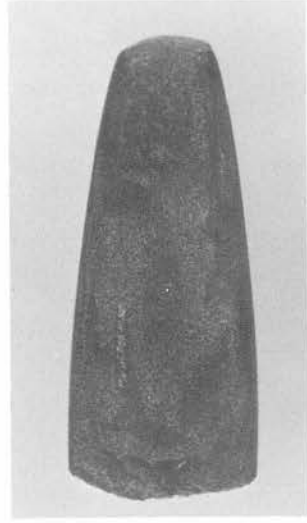
9



10



11



12



13



14



15



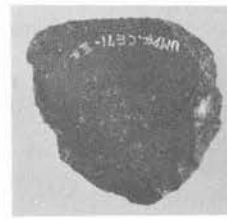
16



17



18



19



20



21

1 ~ 4 : C e 68住、 5 : C f 68住、 6 ~ 12 : D f 03住出土
13 ~ 21 : 遺構外出土

写真図版25 石器類(1)



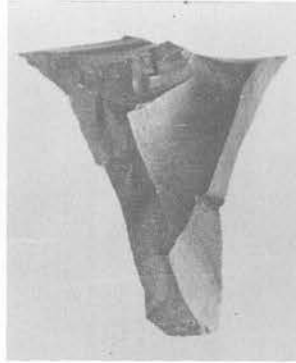
1



2



3



4



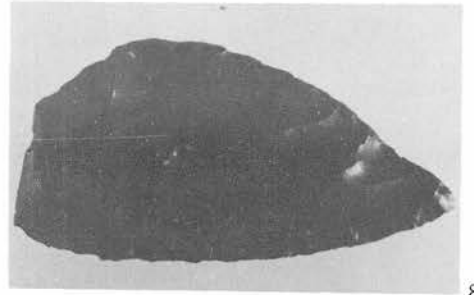
5



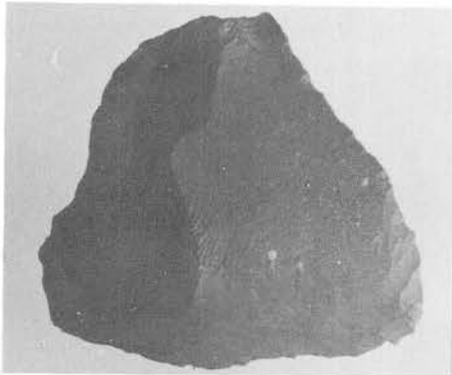
6



7



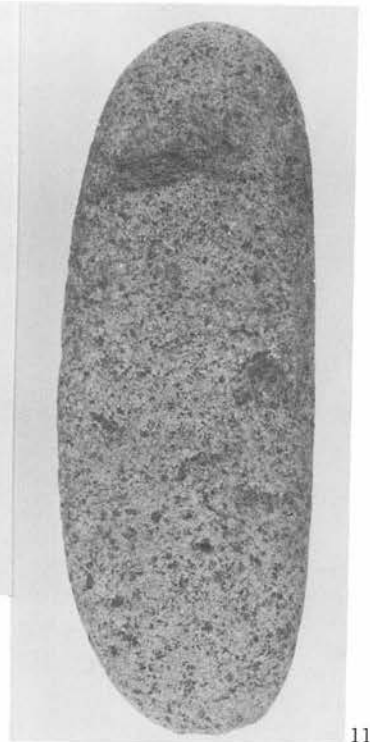
8



9



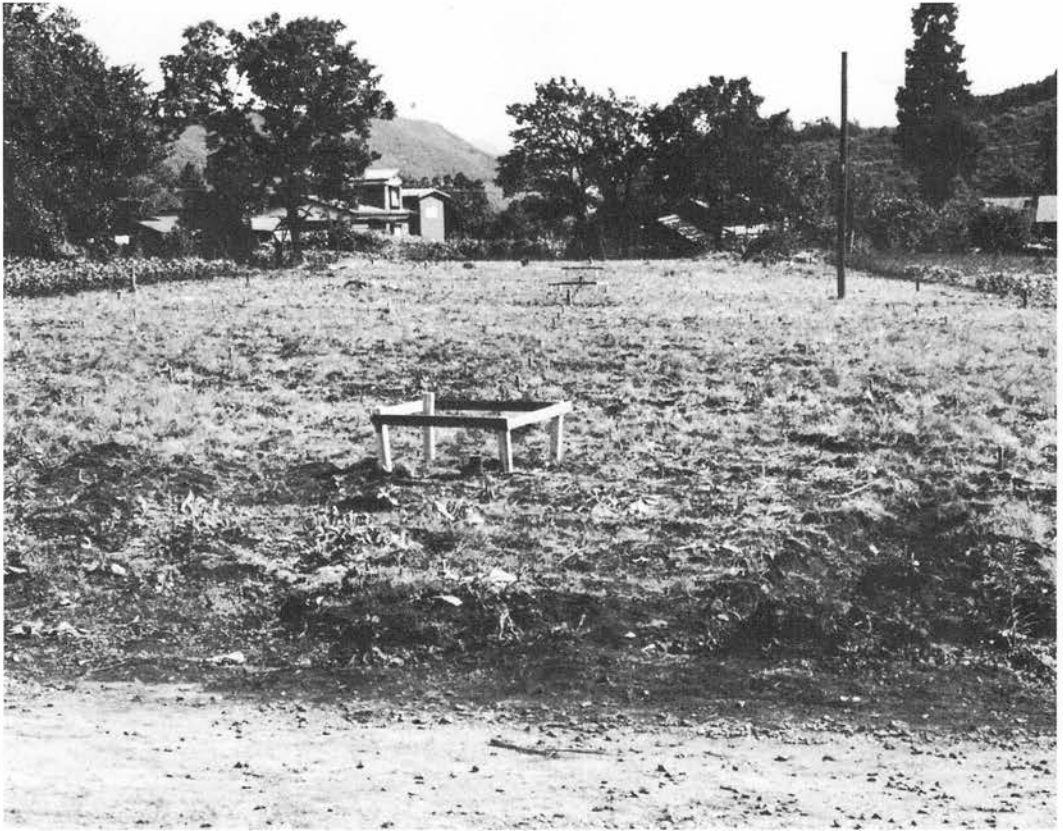
10



11

写真図版26 石器類(2) 遺構外出土

下 村 A 遺 跡

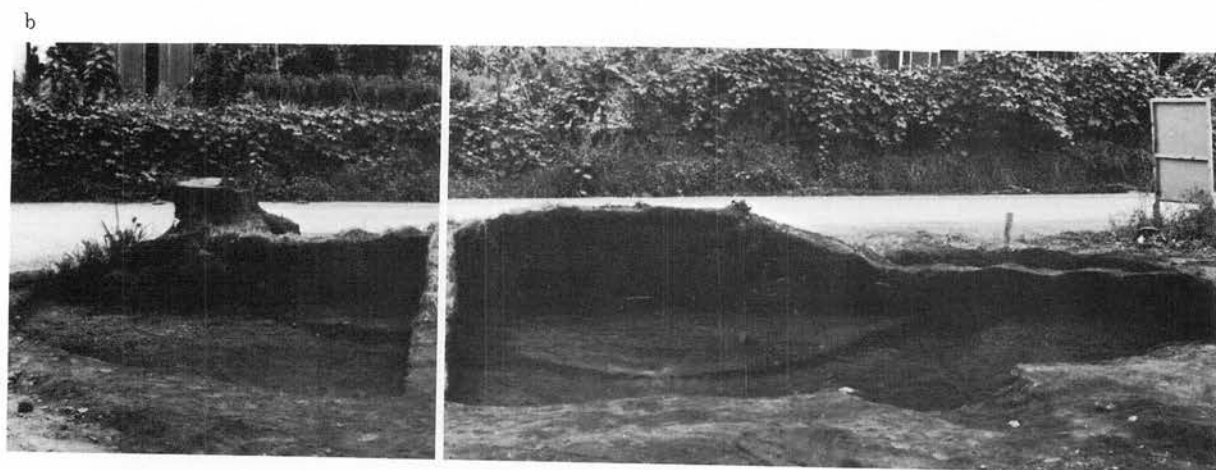


a

b



a : 遺跡近景 b : 調査風景
写真図版 I 遺跡全景



- a : 塚 全 景
b : 塚セクション (南北)
c : 塚セクション (東西)

写真図版 2 塚全景と土層断面



a



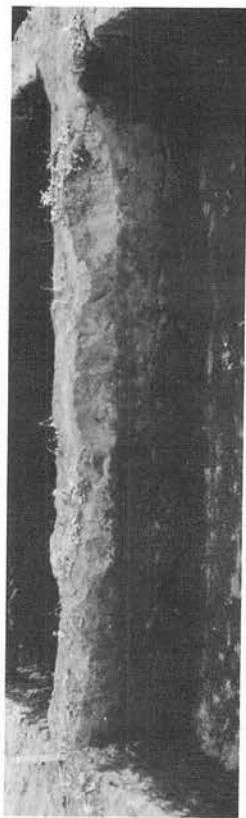
b



c

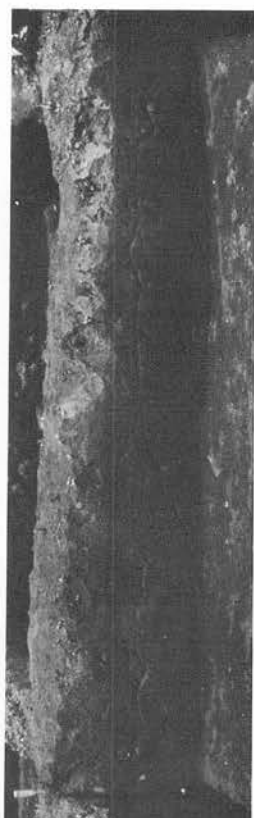
- a : 塚 近 景
- b : 塚 近 景
- c : 馬頭観音碑

写真図版 3 塚近景と古碑

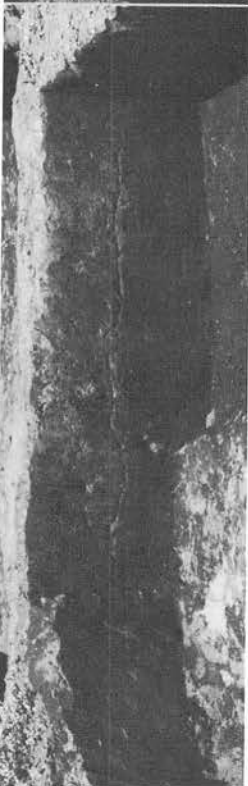


a

a・b：基本層序

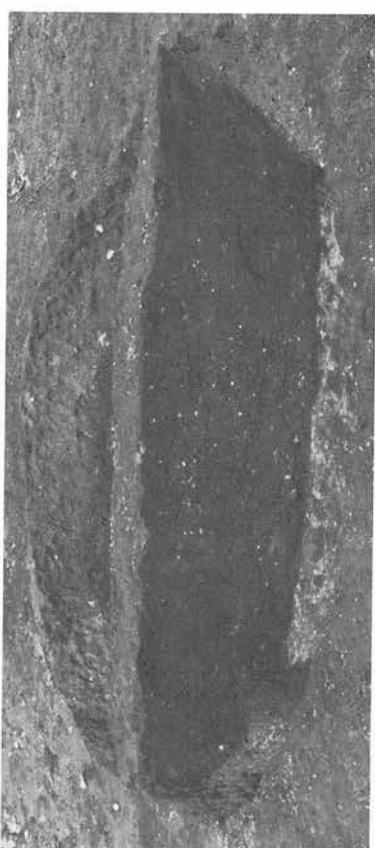


b



c

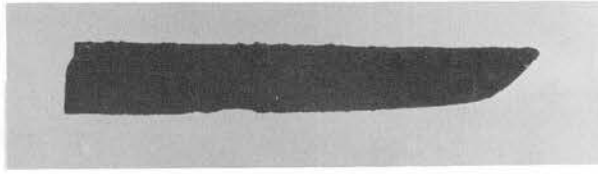
c：土壇平面



d

d：土壇埋土断面

写真図版4 基本土層と土壇



1



2



3



4



5



6



7



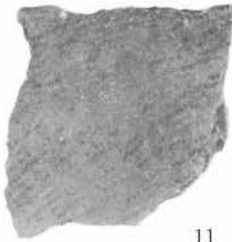
8



9



10

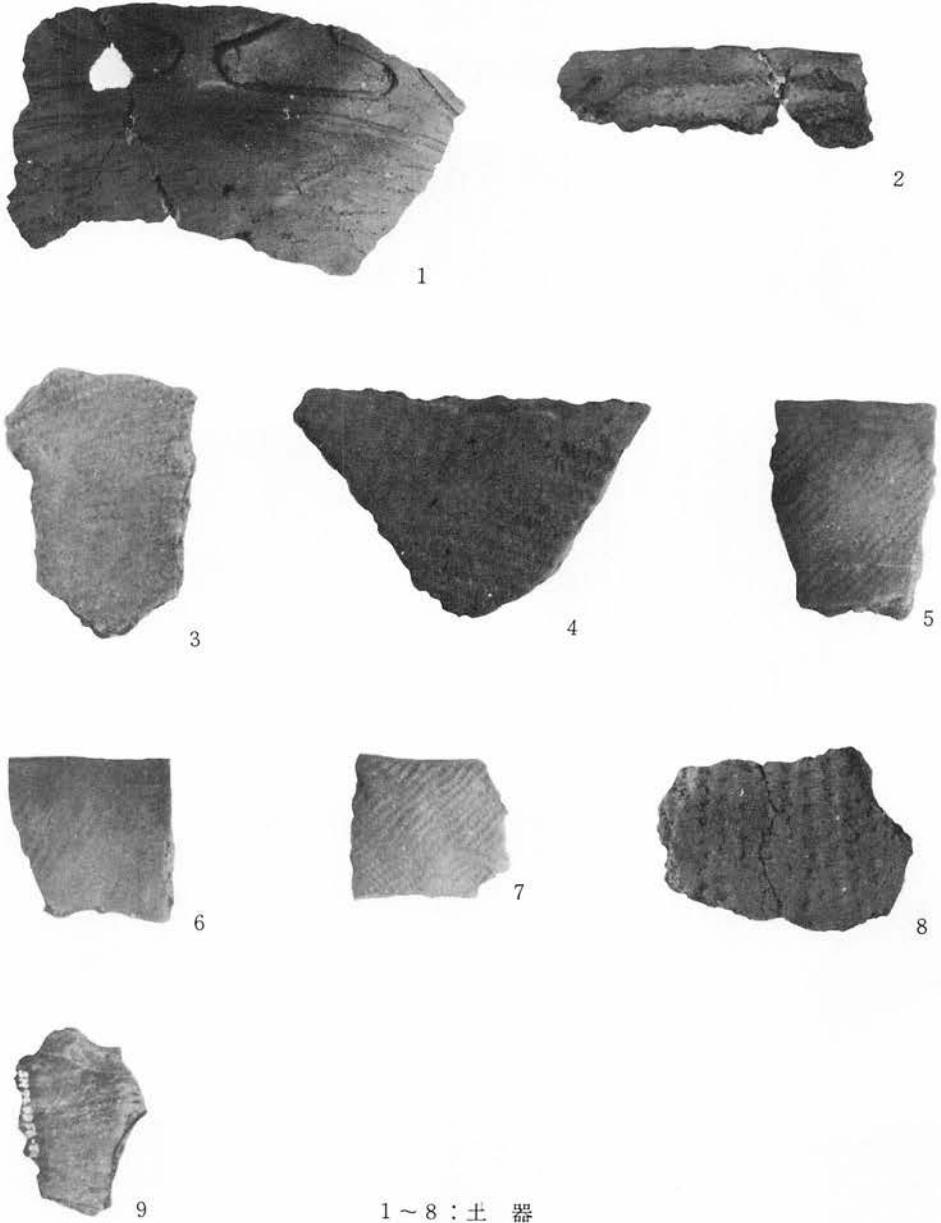


11



12

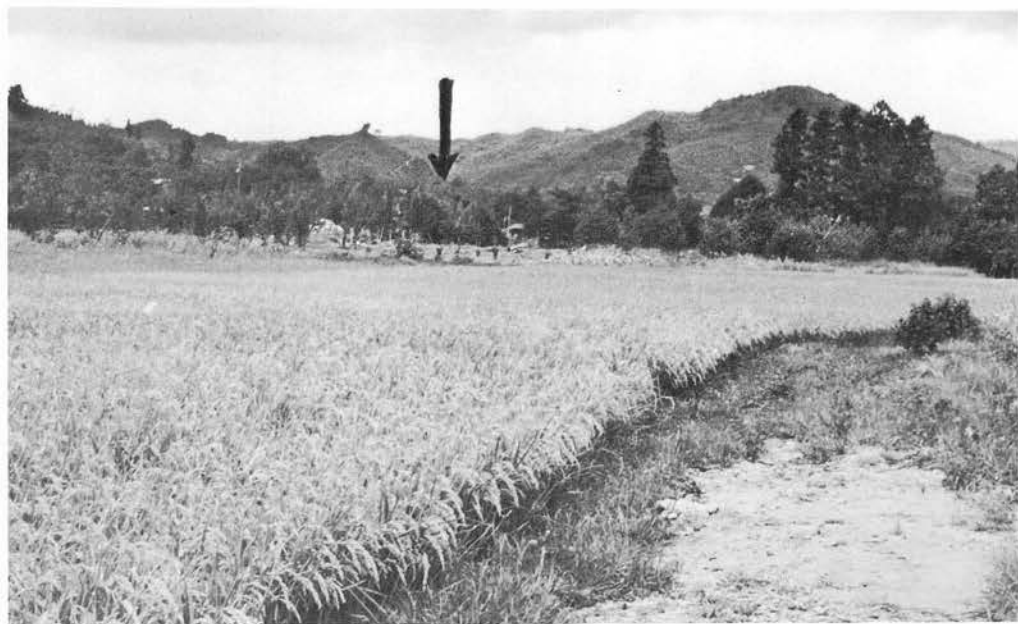
写真図版 5 塚埋土出土遺物



1～8：土器
9：フレイク

写真図版 6 遺構外出土遺物

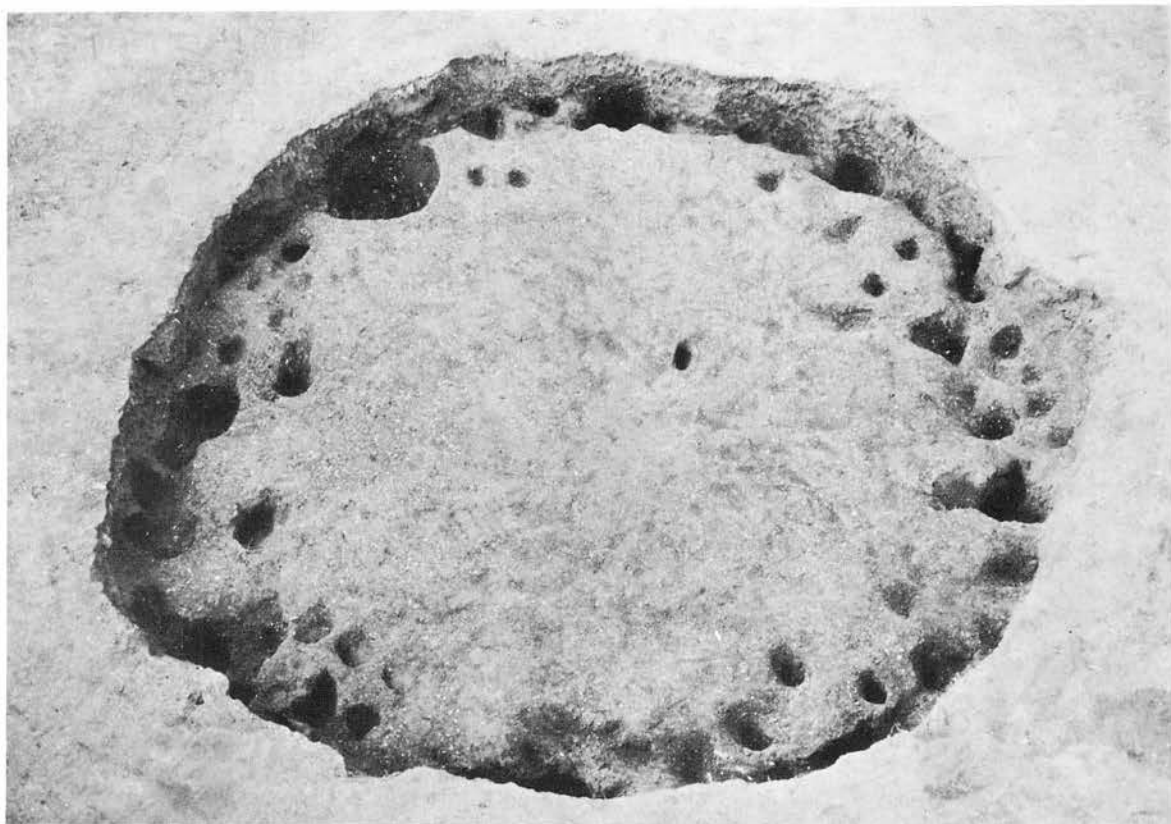
下 村 B 遺 跡



a : 遺跡遠景



写真図版 I 遺跡全景



a : 全 景

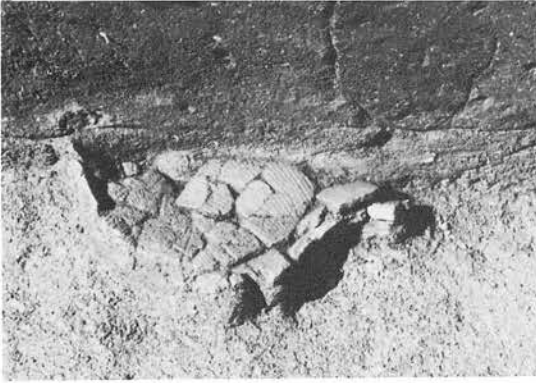


b : 埋土断面

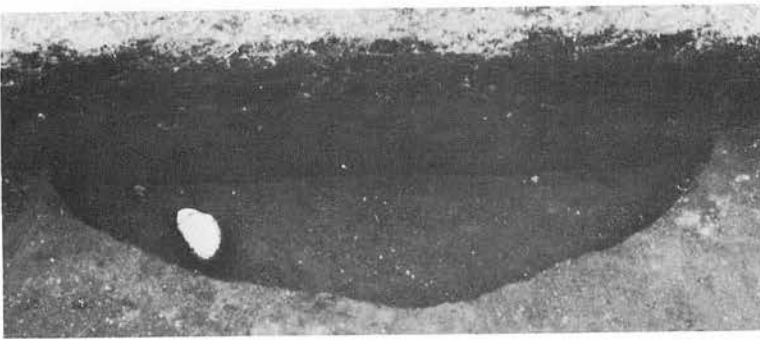
写真図版 2 Ah09 竪穴住居址



a : A h 12 豎穴状遺構



b : 土器出土状況



B d 12 豎穴状遺構

写真図版 3 Ah12、Bd12 豎穴状遺構



a : 遺構全景



b



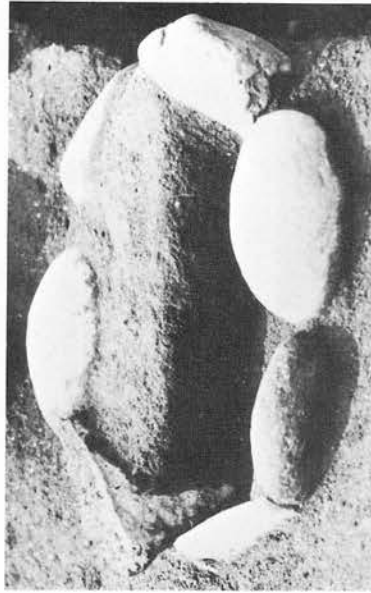
c

土層断面

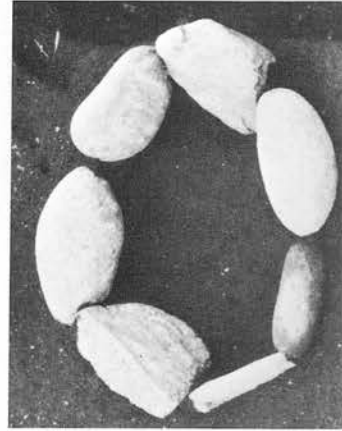
写真図版 4 Ah50 豎穴状遺構



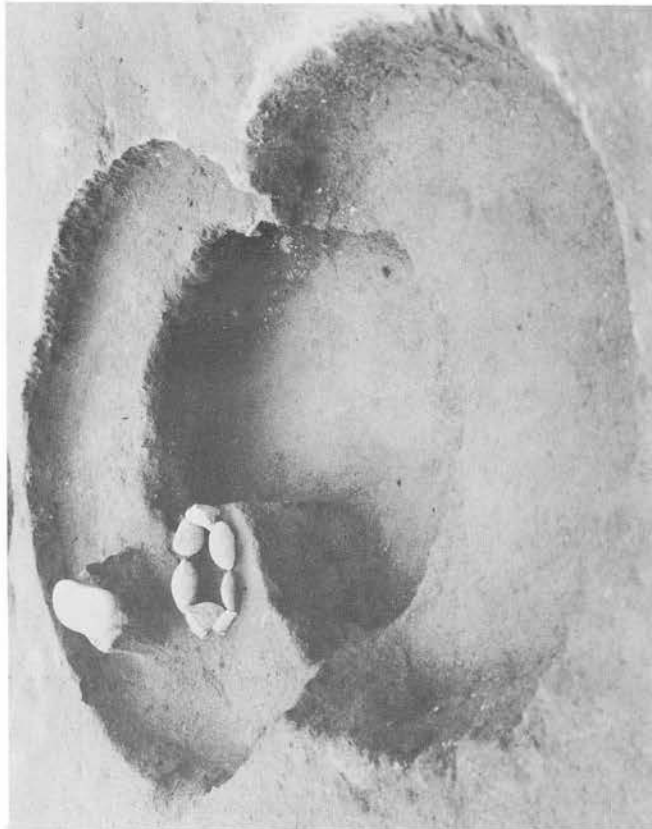
c



d



e

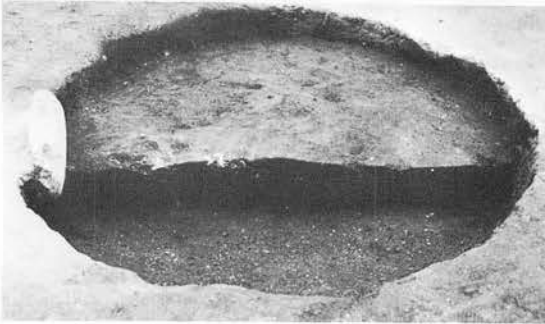
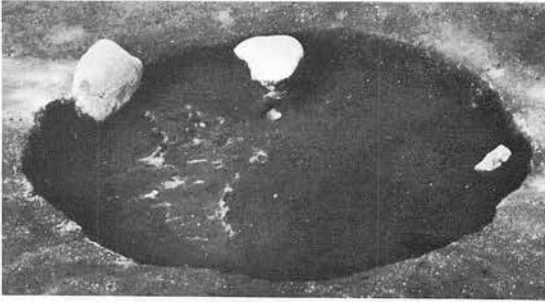


a



b

写真図版5 Bb03 住居址



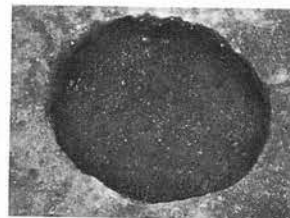
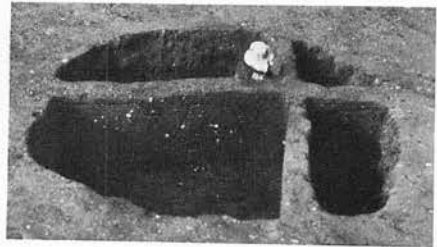
a. A i 03土 埴



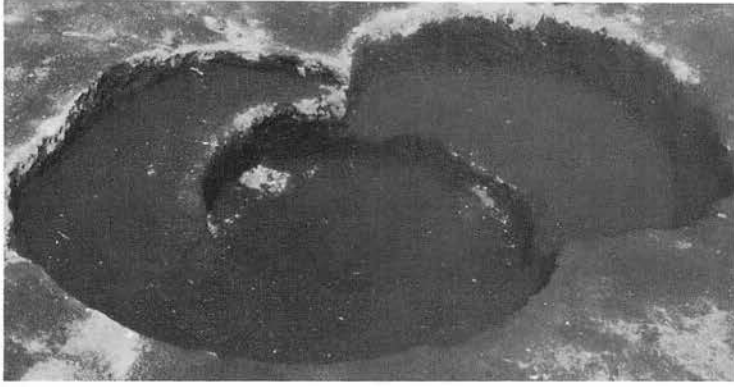
b. A i 53土 埴



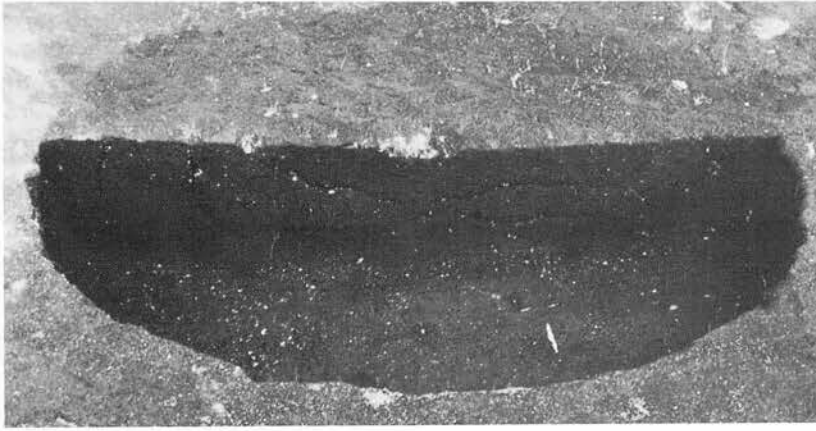
A i 03、A i 50、A i 53土 埴 (東より)



d. A i 50土 埴



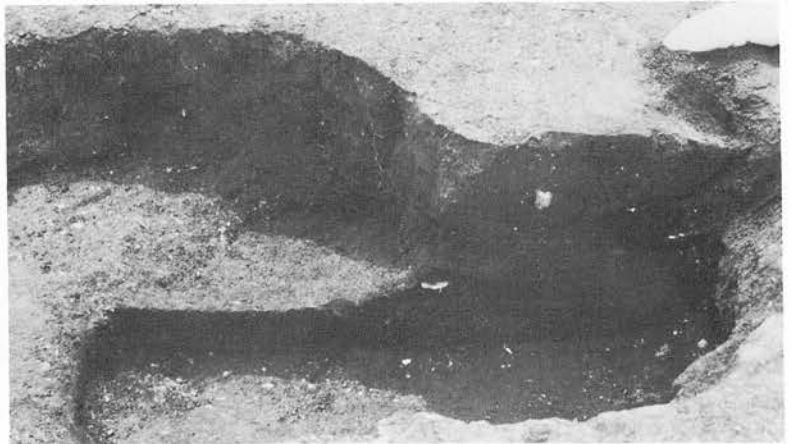
a



b



c



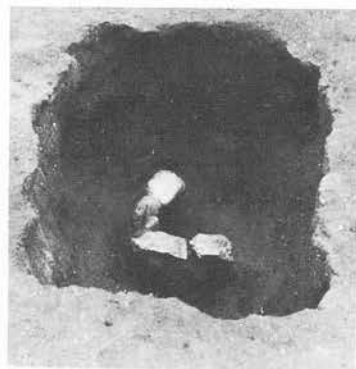
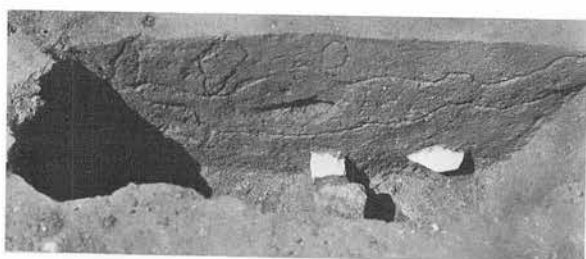
d

a : B b 03-1・2 土壇、B b 03住全景(南より)、b : B b 03-1 土壇断面
c・d : B b 03-2 土壇土層断面

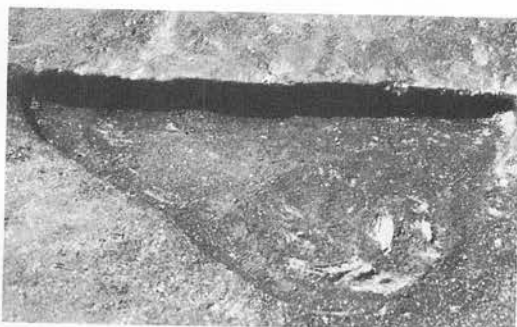
写真図版 7 Bb03-1 土壇、Bb03-2 土壇



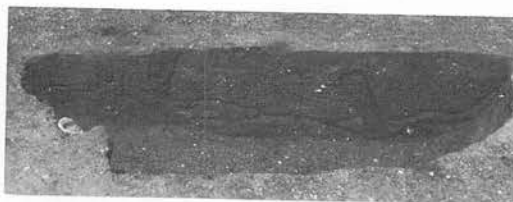
a :



b : B b 09土 坛

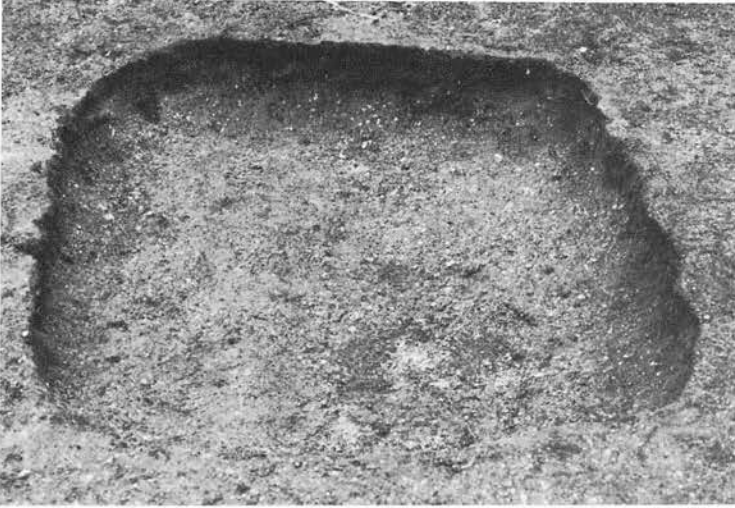


c : A i 56土 坛



d : B e 09土坛断面

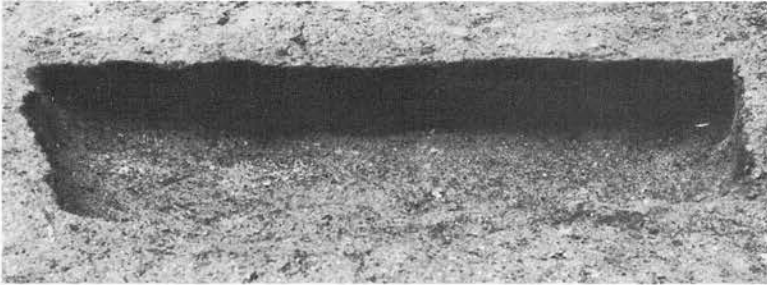
写真図版 8 土 坛



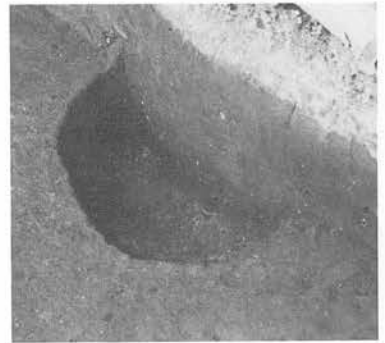
a : B e 50土坑

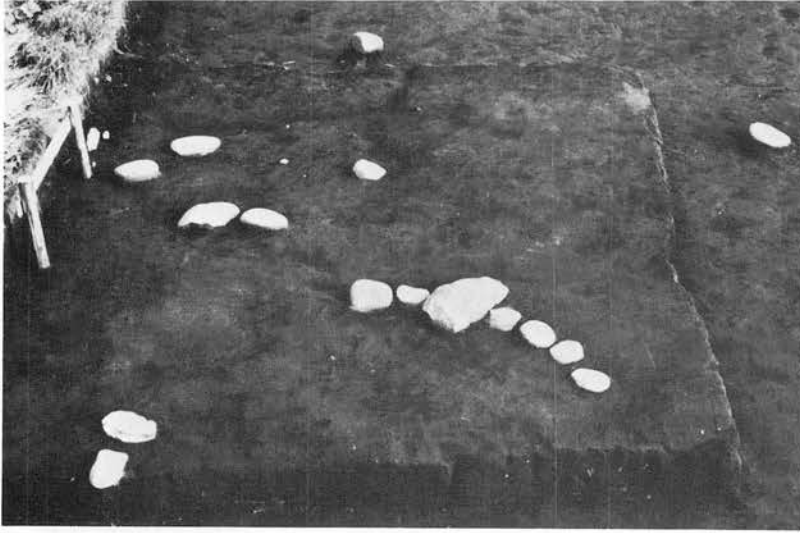


b : Aグリッド土器出土状況



c : B e 56土坑

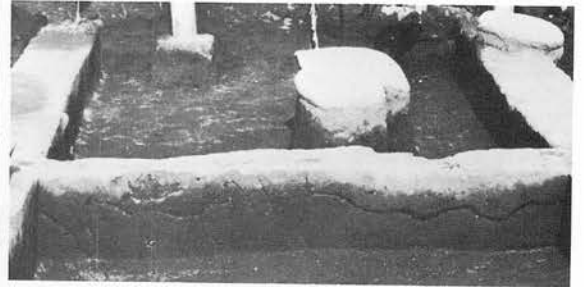
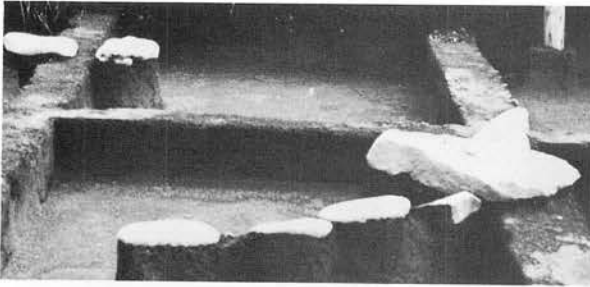




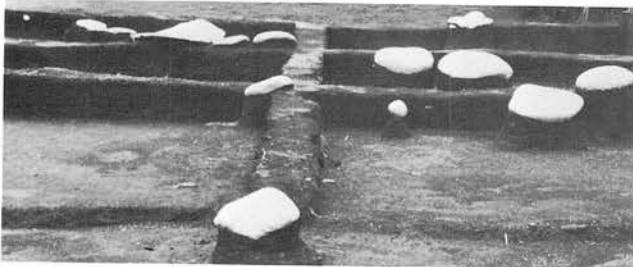
a: 遺構全景



b



c

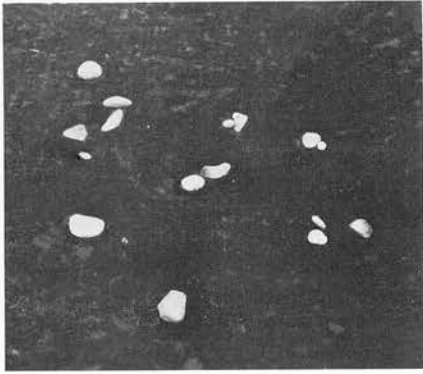


e

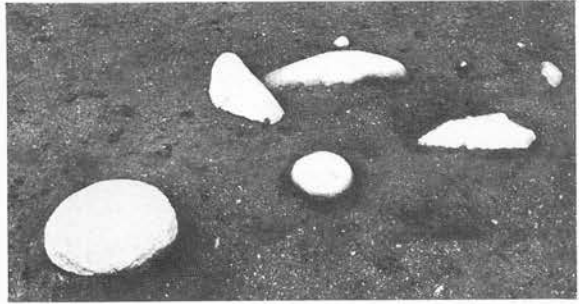
d

b~e: 土層断面

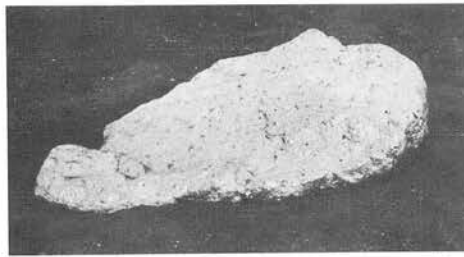
写真図版10 Bb56 配石



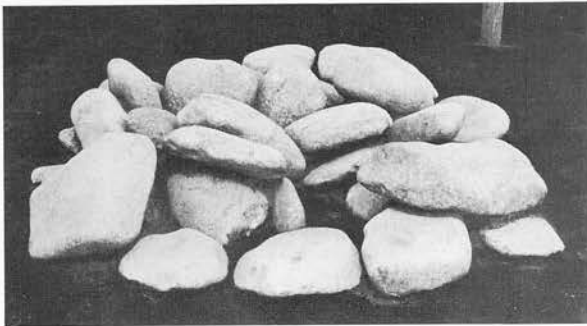
a : B区 礫検出状況



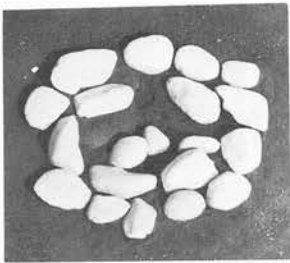
b : B c 56配石



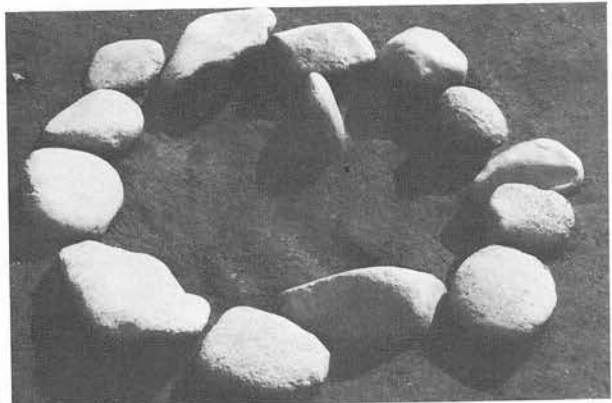
c : A j 53配石



e



f



g

d ~ g : B e 56配石

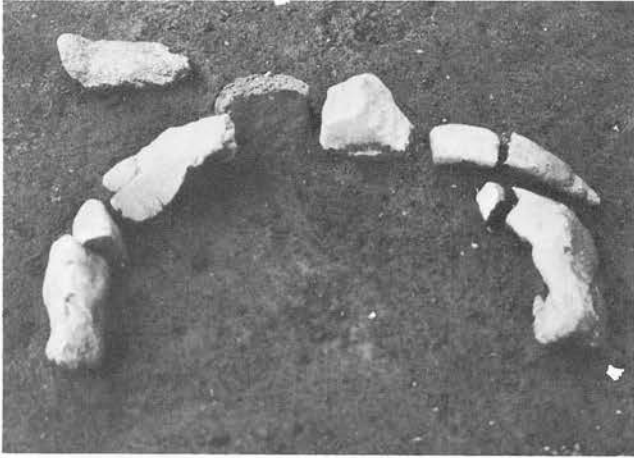
写真図版II Be56 配石



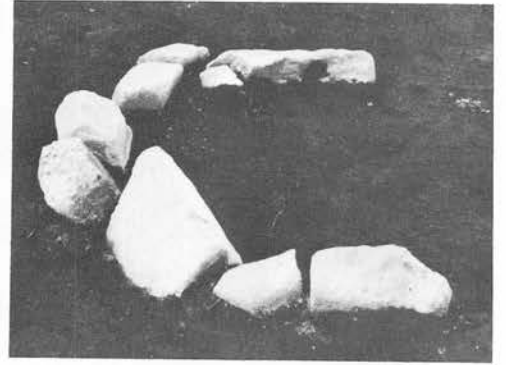
(B e 56配石除去面)



a : B e 56土壇

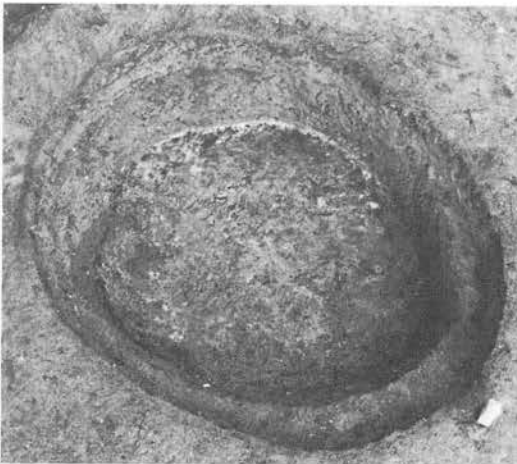


(東北より)



(東南面より)

b : C c 09炉址



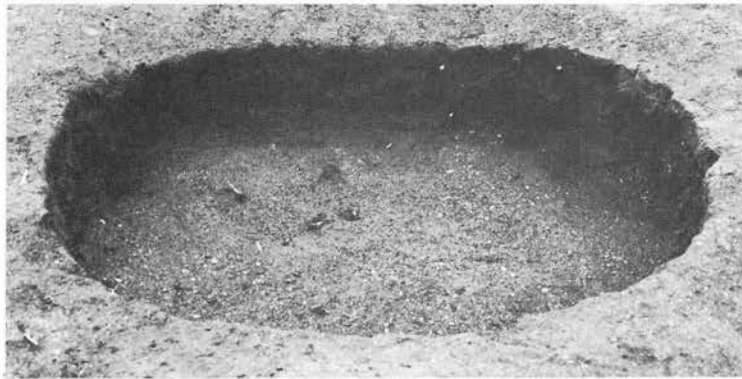
c : C d 03-2 土壇

写真図版12 土壇、炉址



a : C d 03-1 土壇、C d 06 土壇

b : C c 09-1 土壇、C c 09-2 土壇



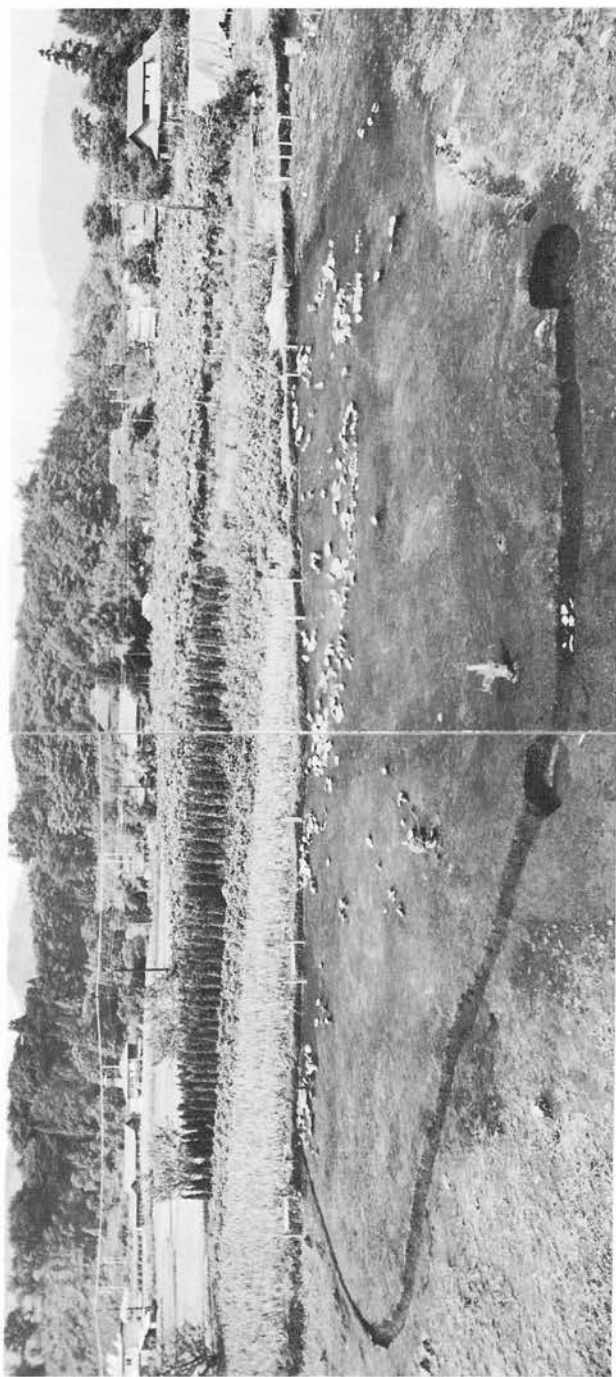
(土錘出土状況)



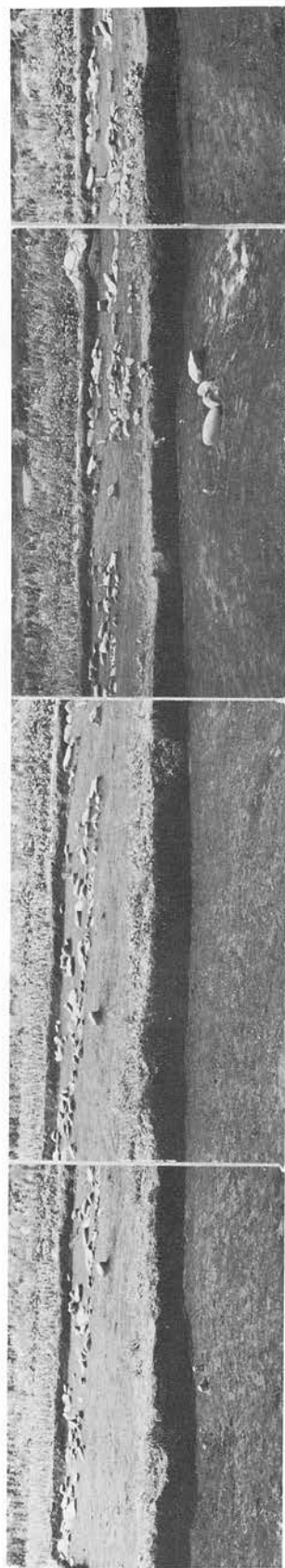
c : C d 06 土壇



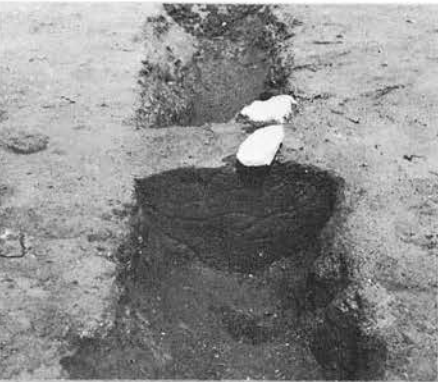
d : C d 06 土壇出土土錘状土製品



a : C、D区配石遺構群全景



b : 土層断面



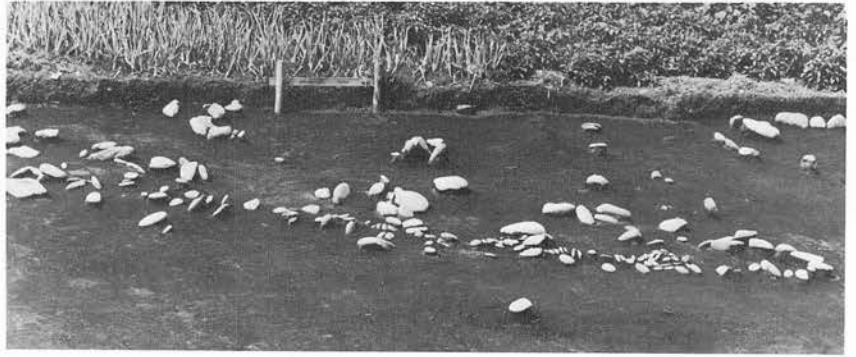
写真図版15 C、D区溝土層断面



写真図版16 C・D区配石群全景



a : 配石群
全景 (南より)

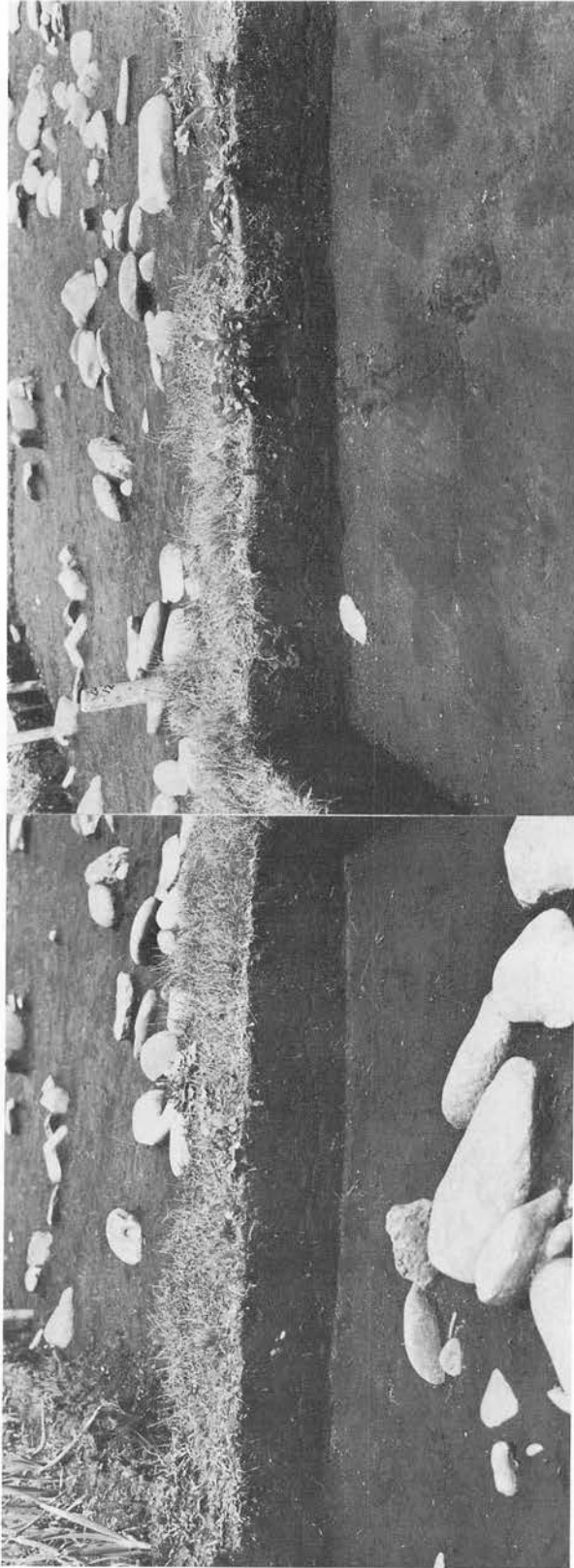


b : 配石群 (一部)

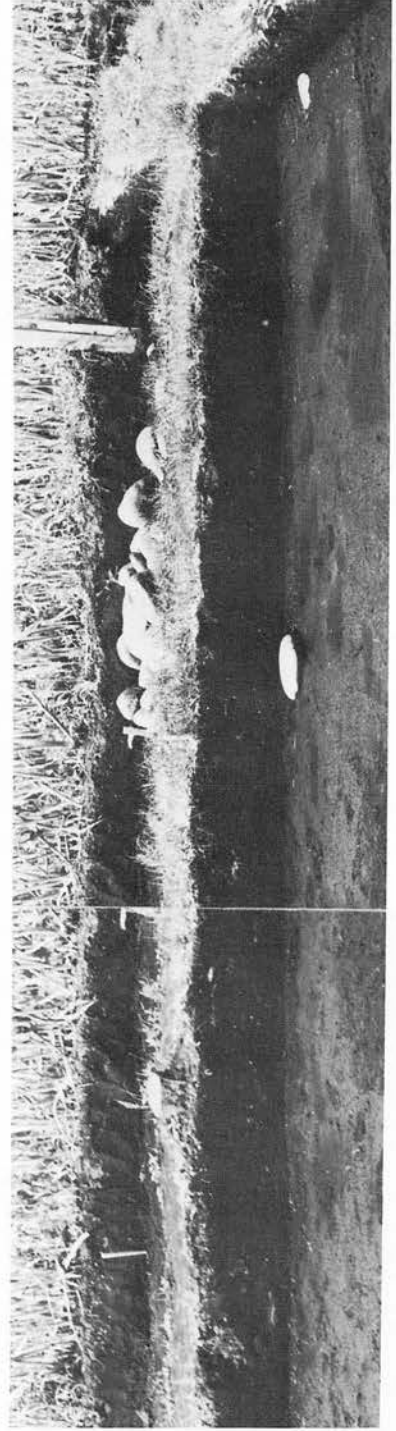


写真図版17 配石

c : 配石群全景 (ステレオカメラ撮影)



(南より)



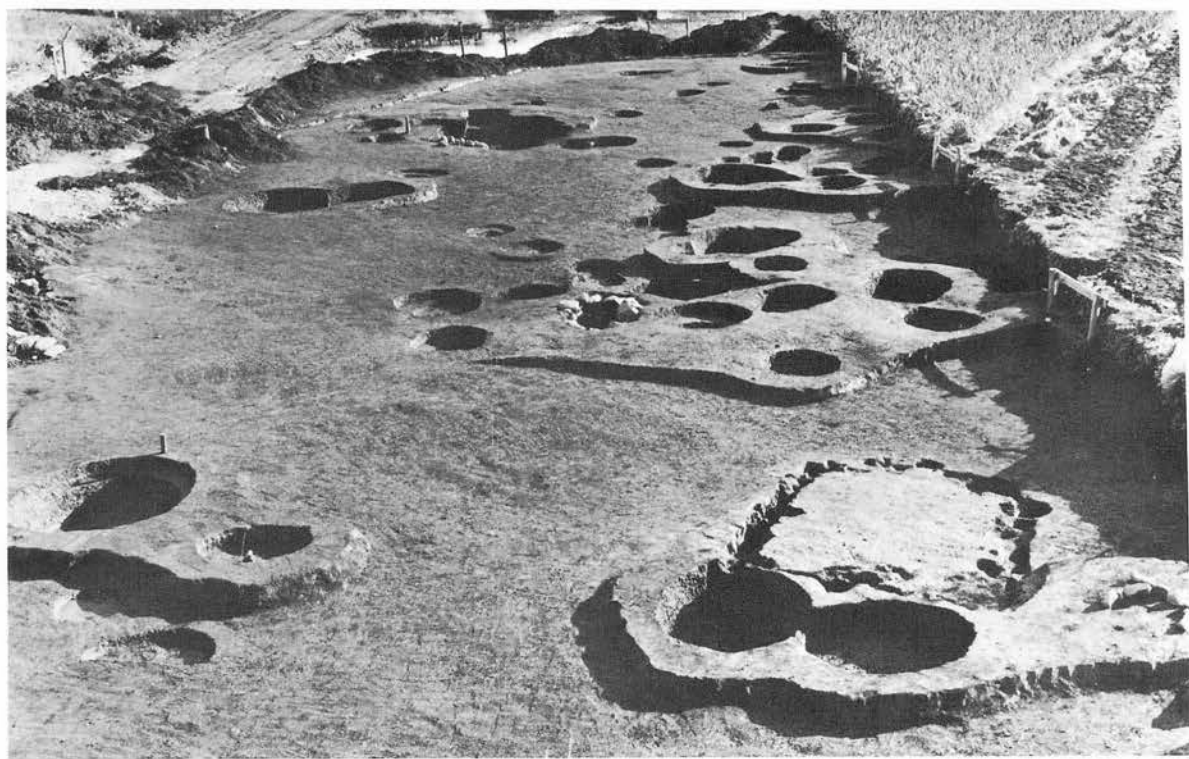
(東より)

C・D区土層断面

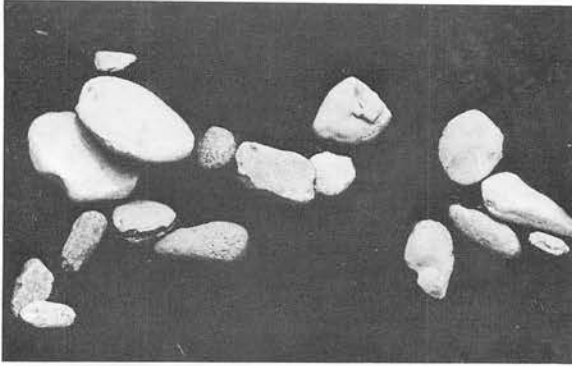
写真図版18 配石断面



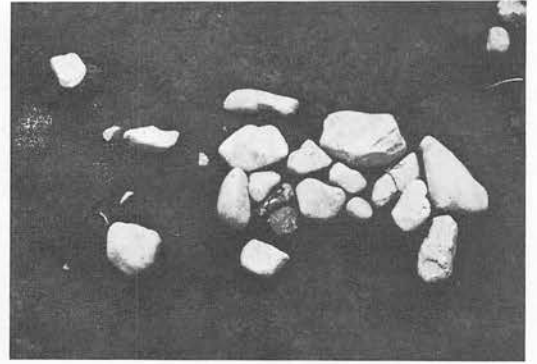
a : C区配石群全景



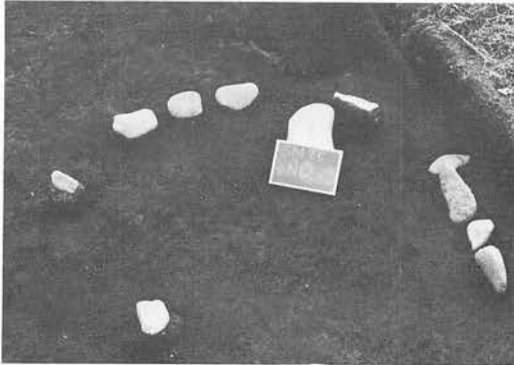
b : 同土坑群全景



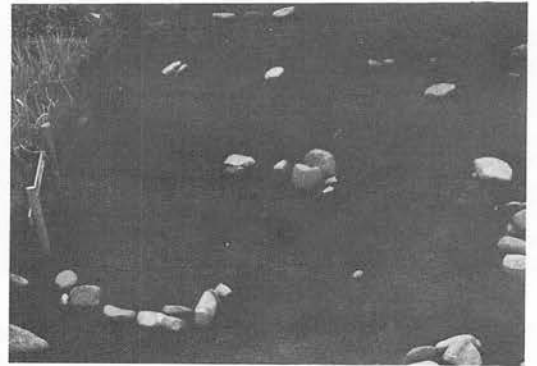
a : C e 09、C e 12配石



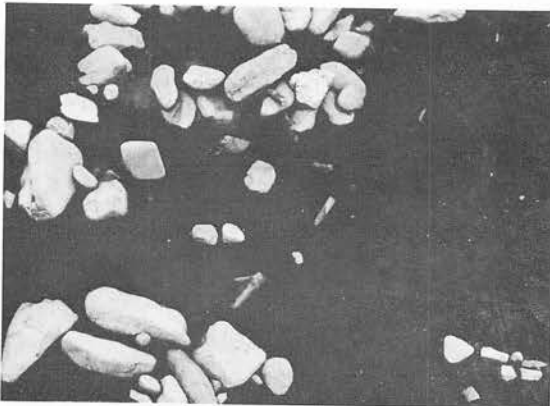
b : C f 12配石



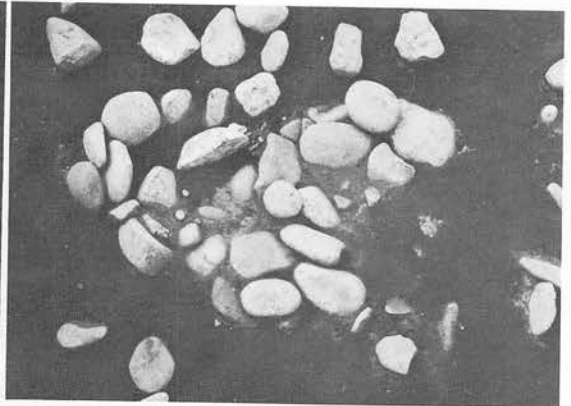
c : C f 15配石



d : C i 15-5配石

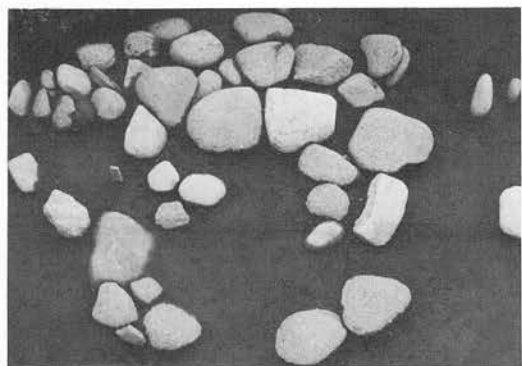


e : C f 09~C g 09、C f 06-1・2配石

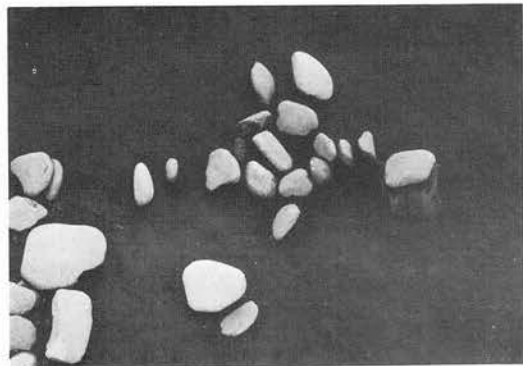


f : C j 12-1~3配石

写真図版20 配石

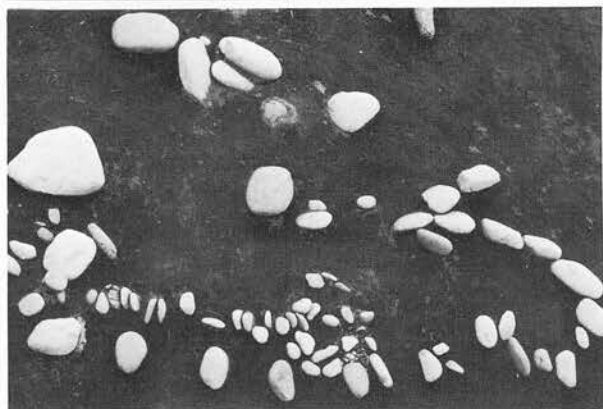


a



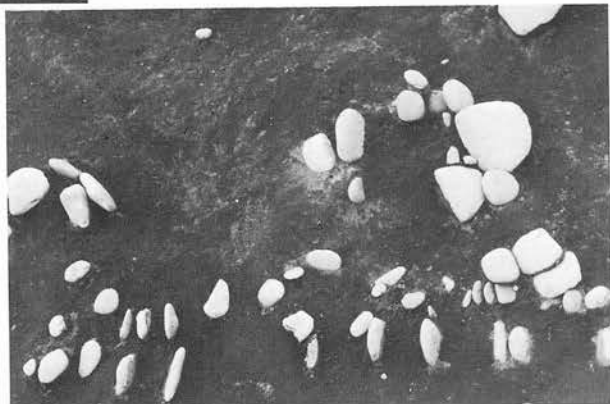
b

a : D d 15配石遺構
b : D c 15配石遺構

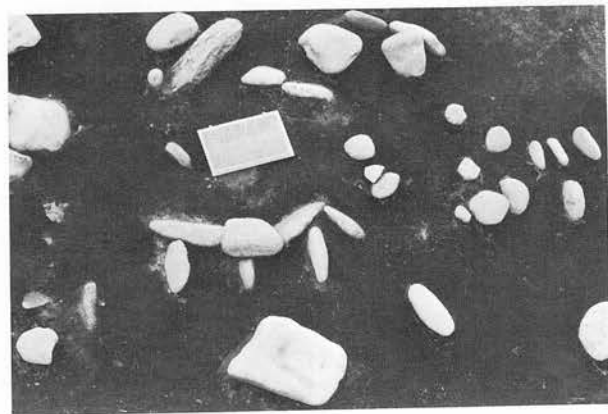


c

c : C h 09-1配石、C h 12-2配石
C h 09列石遺構(一部)
d : C i 12-3配石、C h 09列石
遺構(一部)



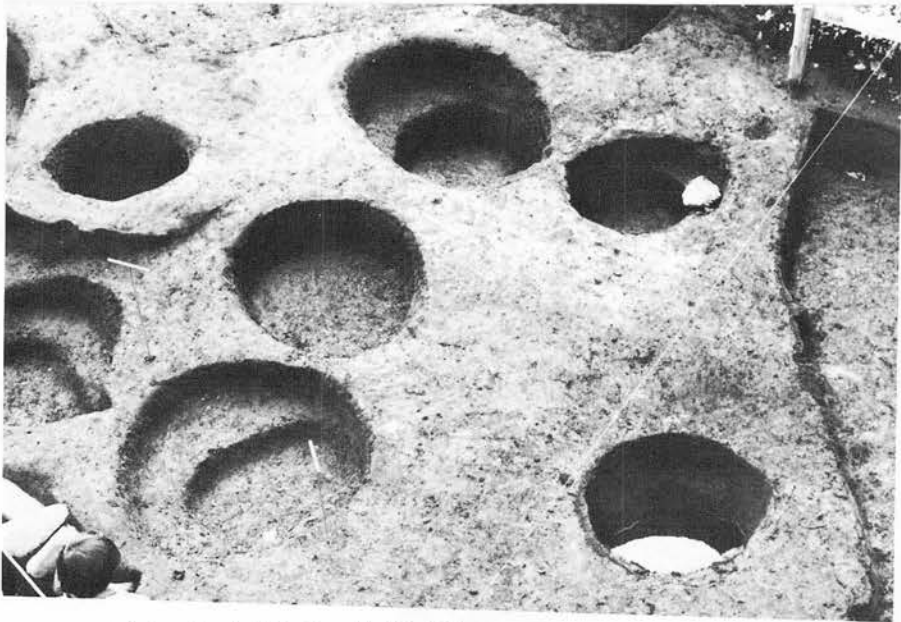
d



e

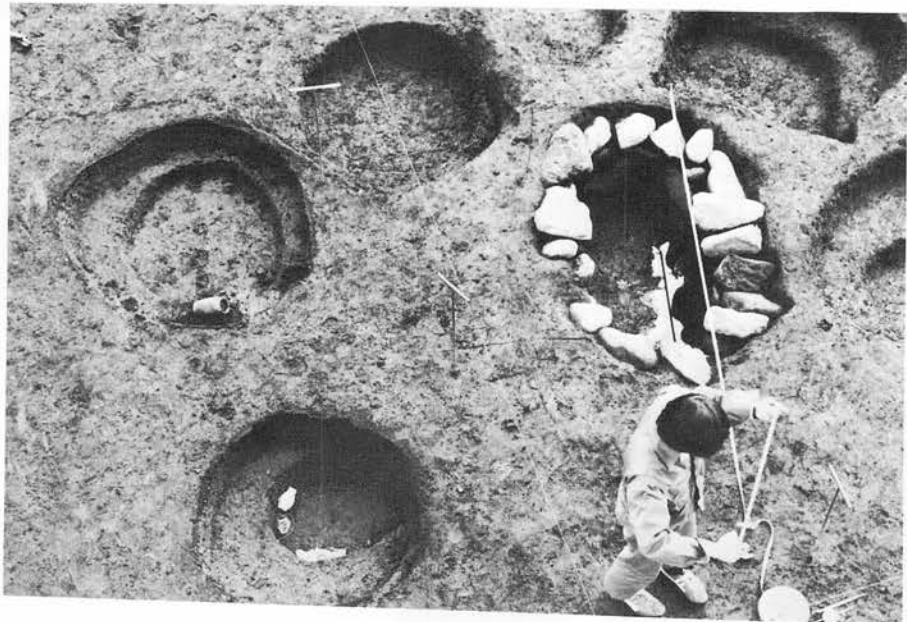
e : C h 09列石遺構(一部)、
C j 12-1配石遺構

写真図版21 配石



a : C f、C g区検出土壇群（北より）

a



b : C f区検出土壇群（北西より）

b

写真図版22 土壇群



a



b



c

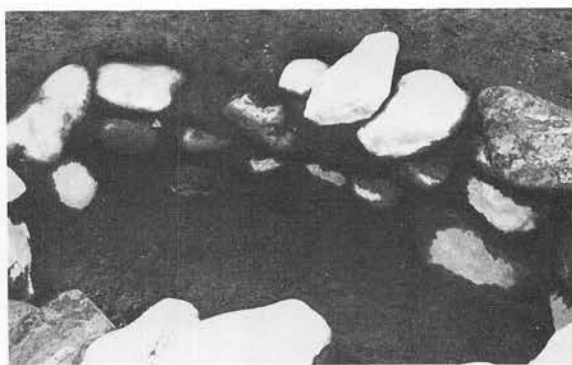


d

a ~ c : 石積状況
(北より)
d : 石除去後土壇
(北より)



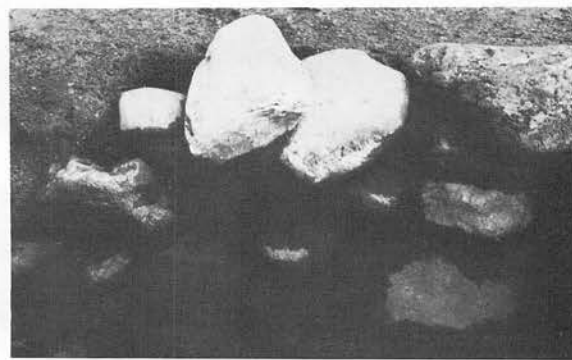
a : 東 壁



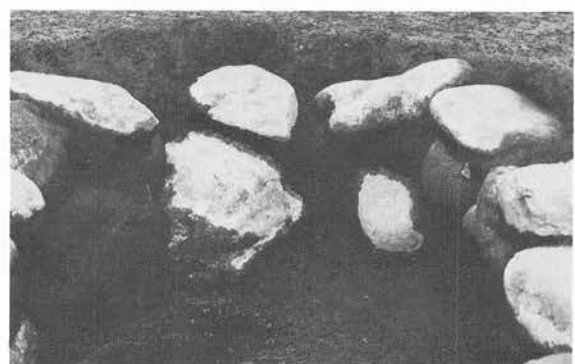
b : 西 壁



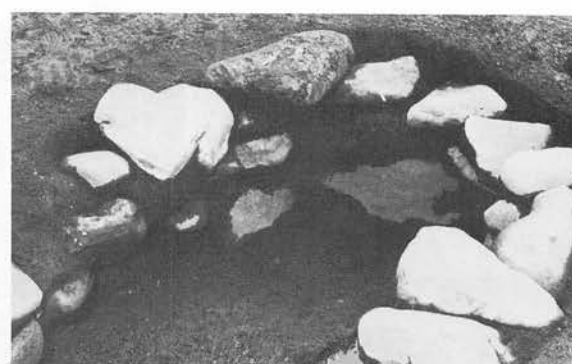
c : 東 壁



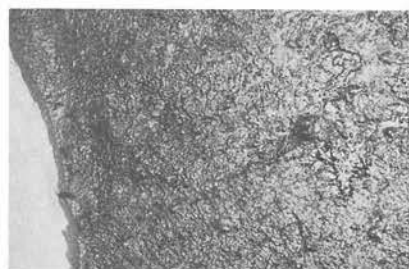
d : 西 壁



e : 北 壁

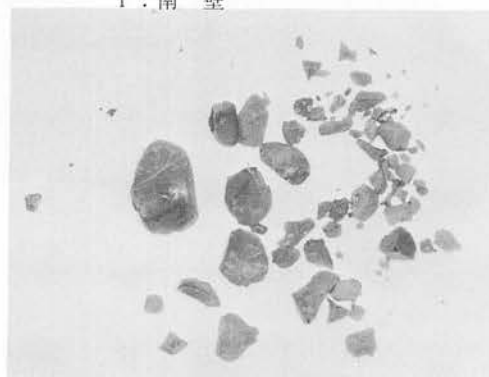


f : 南 壁



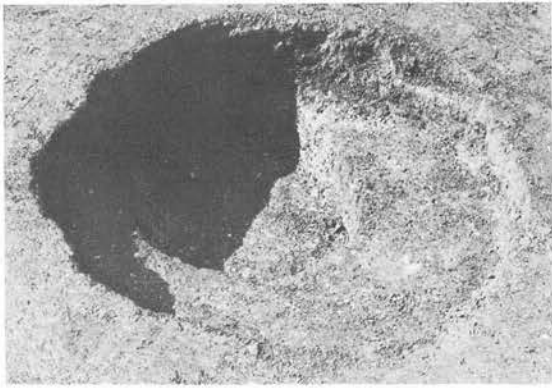
g : コハク出土状況

h : コハク

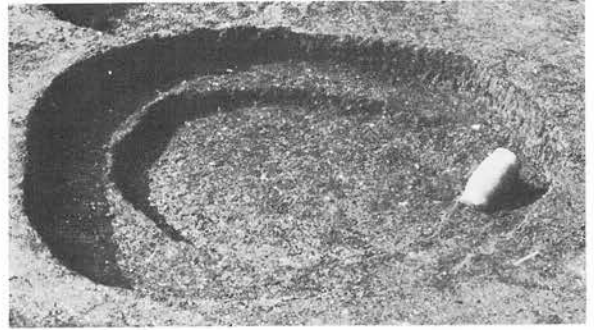


h

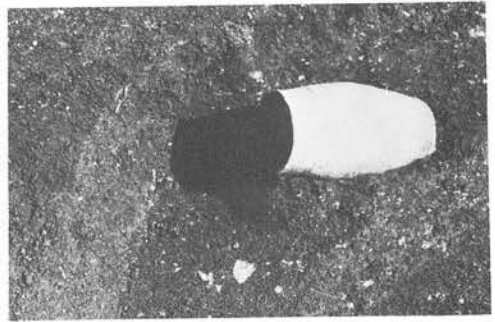
写真図版25 Cf09 石室状遺構



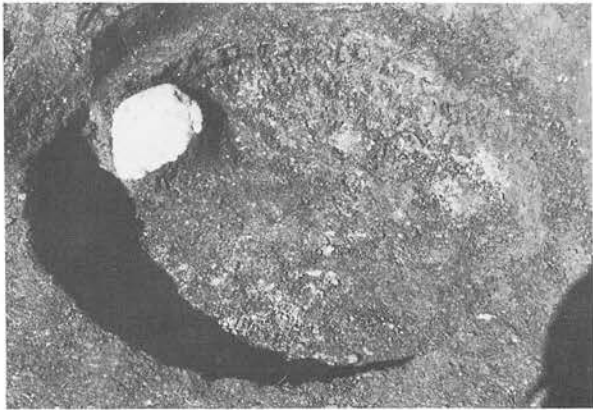
a : C f 06-1 土 坛



b : C f 06-2 土 坛



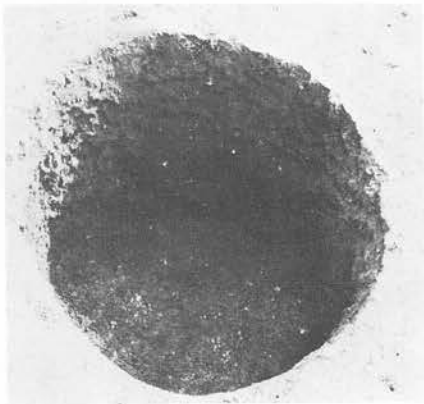
c : C f 06-2 土器出土状况



d : C g 09-1 土 坛



f : C g 09-2 土坛、C g 09-3 土坛



e : C g 12-1 土 坛



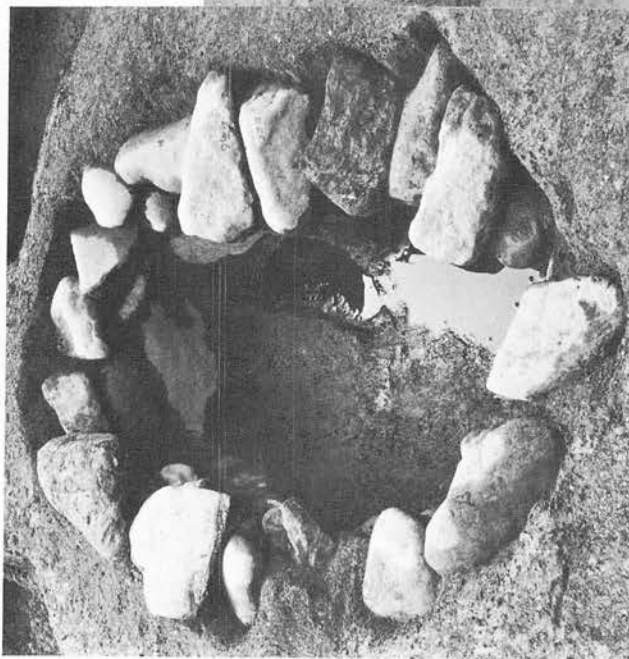
a

(北より)



b

(西より)



c

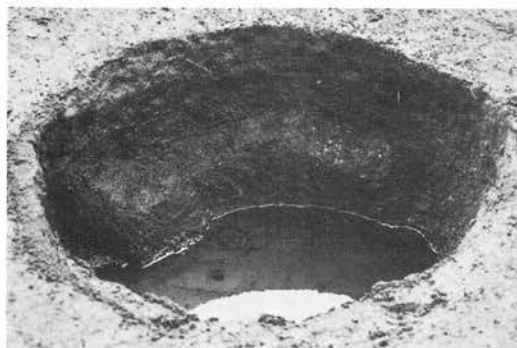
(北より)



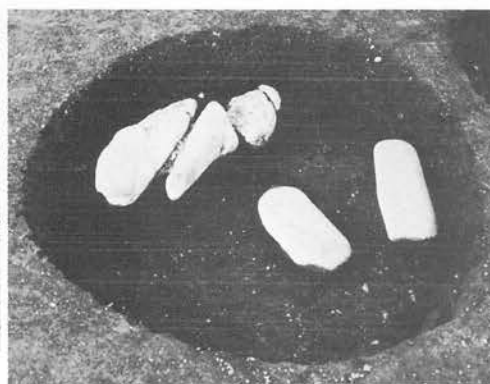
d

(東より)

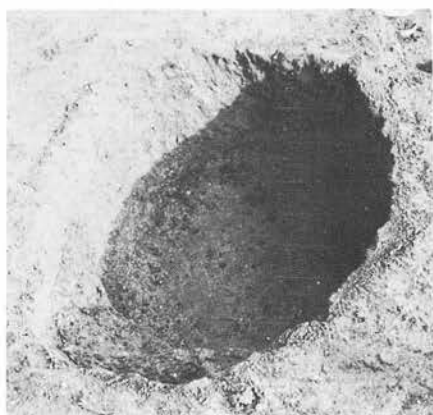
写真図版23 Cf09 石室状遺構



a : C e 12土坛



b : C f 12- 3土坛



c : C f 12- 1土坛



e : C f 12- 2土坛



d : C f 12- 1土坛
遺物出土狀況

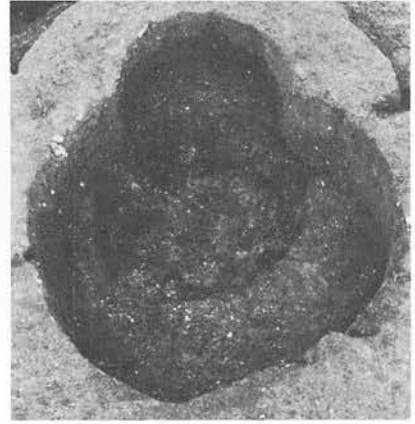


f : C h 12- 1土坛、C h 12- 2土坛
C h 12- 3土坛

写真図版27 土 坛



a

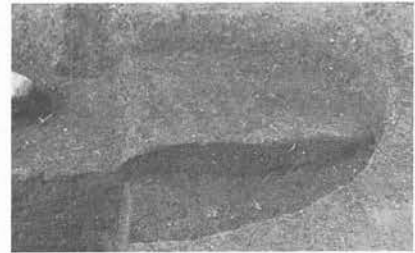


c

C g 12-3 ~ 5 土坛穴堀状况



b



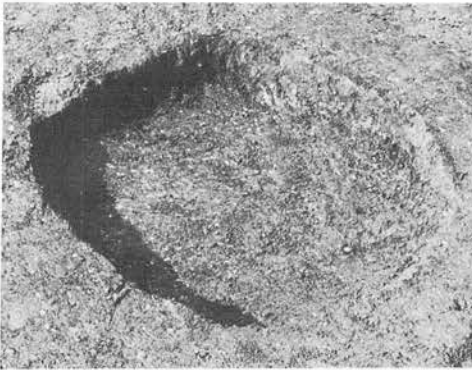
d

a : 土層断面

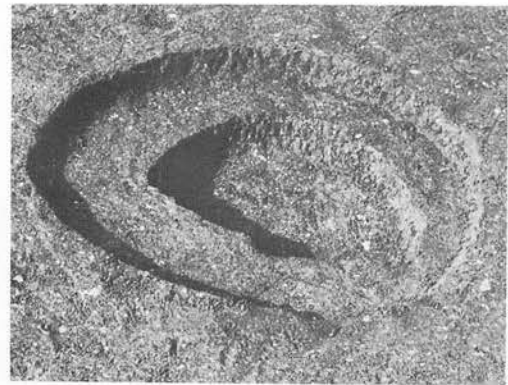
b : C g 12-4 土坛土層断面

d : C g 12-5 土坛土層断面

C g 12-3 土坛、C g 12-4 土坛、C g 12-5 土坛

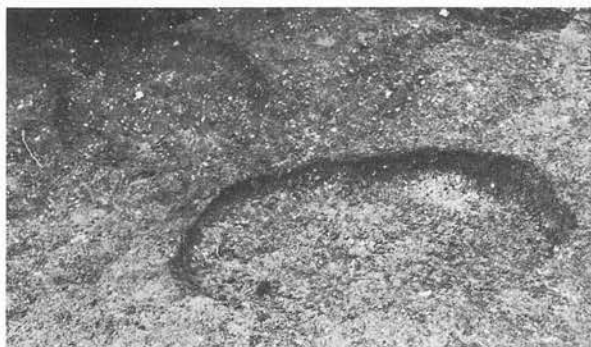


e : C h 09-1 土坛



f : C h 09-2 土坛

写真図版28 土坛



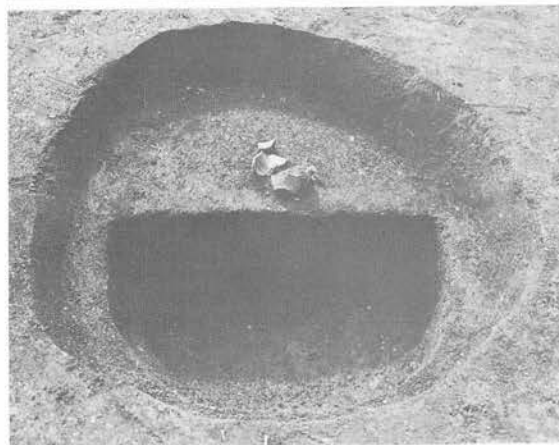
a : C g 15-1 土壇、C g 15-2 土壇



c



b : C i 15-1 土壇

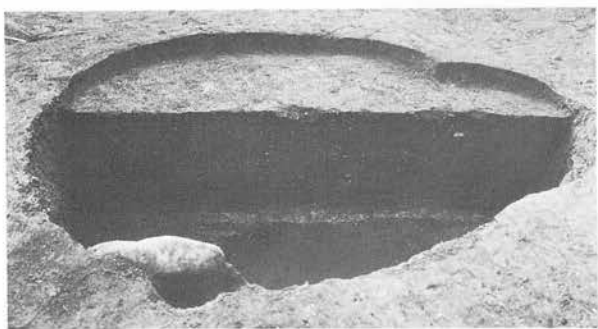


d

c : C i 15-4 土壇
d : 土層断面及び遺物出土状況



e : C i 15-4 土壇出土土器
f : C i 12-2 土壇土層断面



f



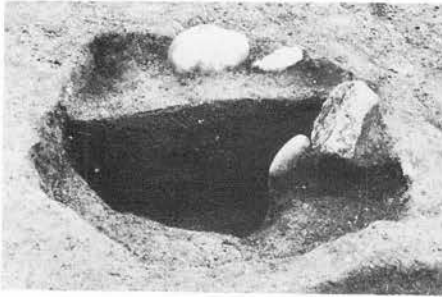
g

g : C i 12-2 土壇

写真図版29 土壇、出土土器



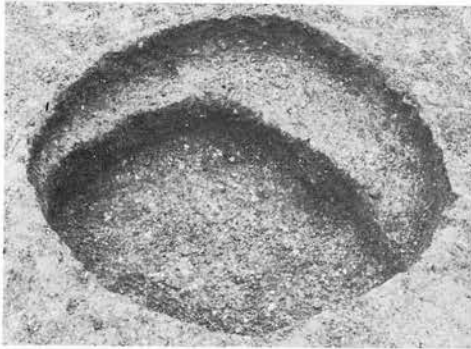
a : C i 12-1 土坛、C i 12-2 土坛、C i 12-3 土坛



b : C i 15-3 土坛



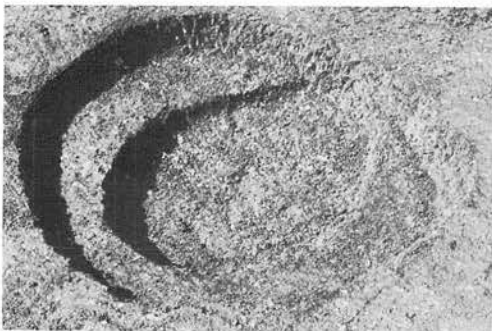
c : C i 15 土坛



d : C j 12-4 土坛



f



e : C j 06 土坛



g

C i 15-2 土坛

写真図版30 土坛



a : D a 09-1 土壇、D a 09-2 土壇



c

b



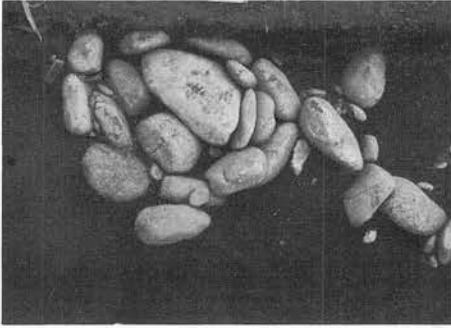
d



e

- b : D a 15-2 配石
c : D a 15-2 土壇
d : D a 15-2 土層断面
e : D a 15-2 土器出土状況

写真図版31 配石と土壇



a : D a 15-1 配石

a



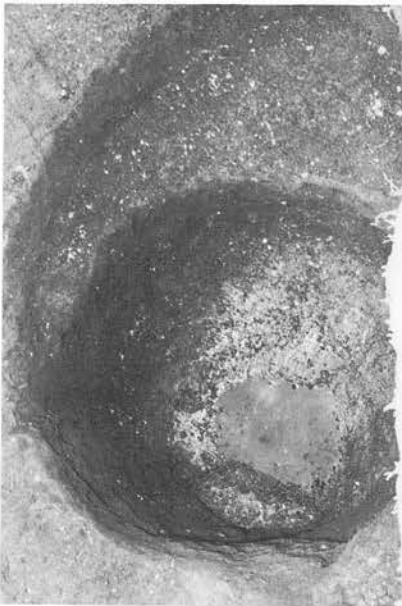
d



b : D a 15-1 土壇 (東より)



e



c : D a 15-1 土壇 (北より)



f

d ~ f : 土器出土状況

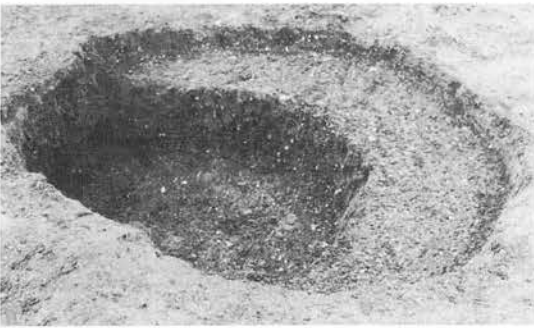
写真図版32 配石と土壇



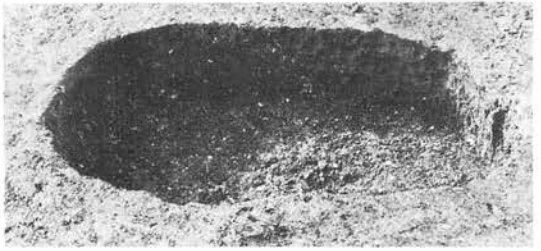
a : D a 12土坛、D a 09- 1 土坛、D a 09- 2 土坛



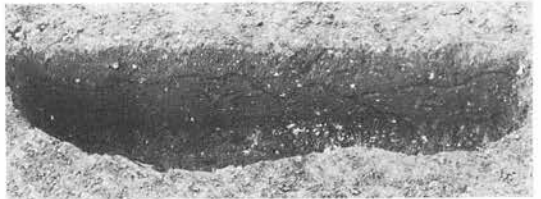
b : 同左土层断面



c : D a 15- 3 土坛



d

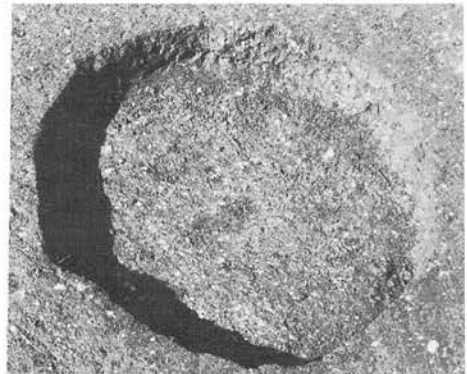


D b 15- 1 土坛

e



f : D b 15- 2 土坛



g : C j 12- 5 土坛

写真图版33 土坛



a



b

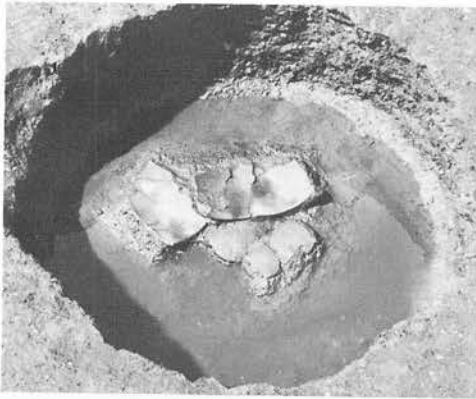


c



d

a ~ d : D a 09 土器埋設遺構



e



f



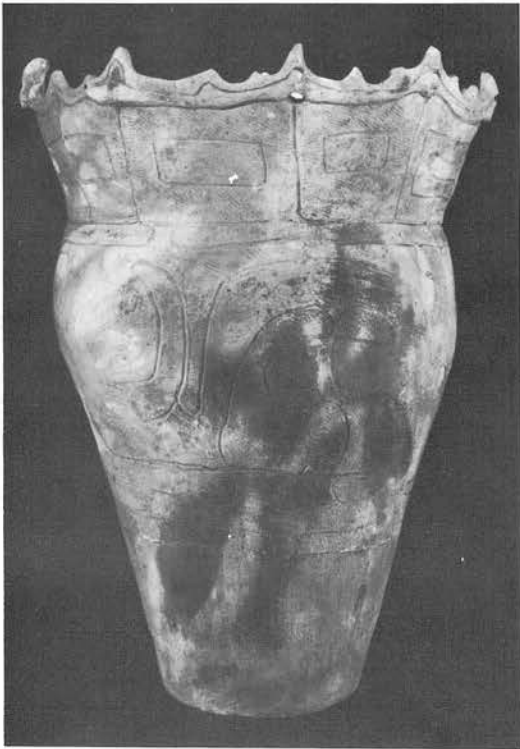
g



h

e ~ h : D a 50 土坑

写真図版34 土器埋設遺構と土坑



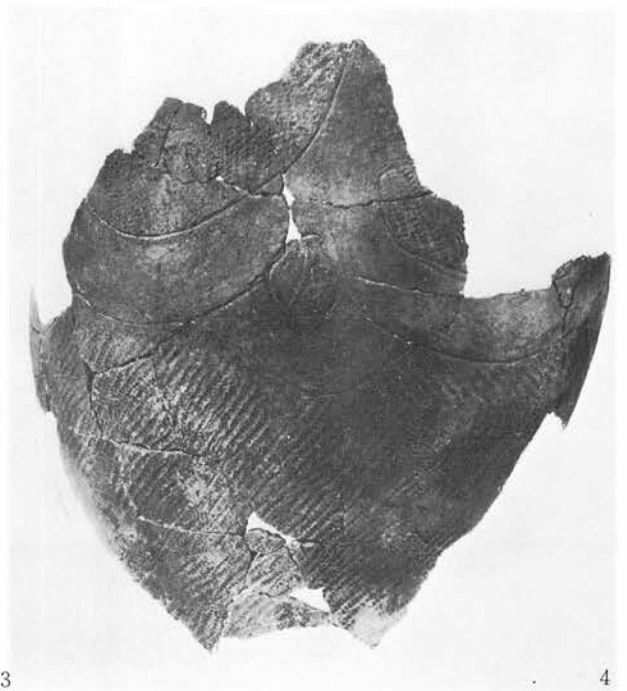
1



2



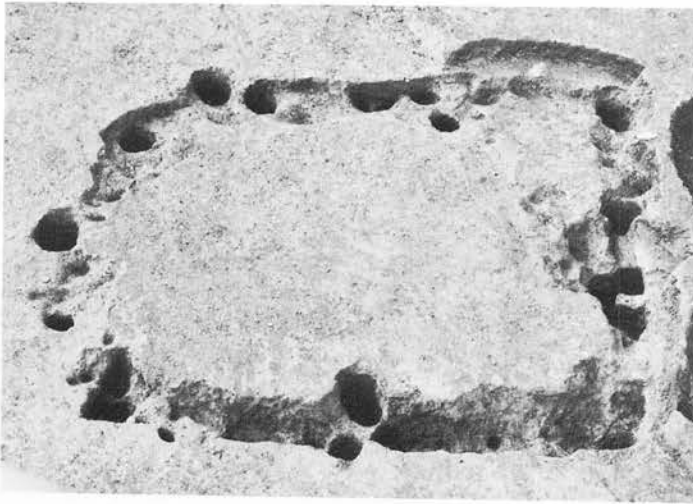
3



4

出土遺構 1 : D a 15- 1 配石土壇、 2 : D a 15- 2 配石土壇
3 : D a 50土壇、 4 : D a 09土器埋設遺構

写真図版35 配石土壇と土器埋設遺構出土土器



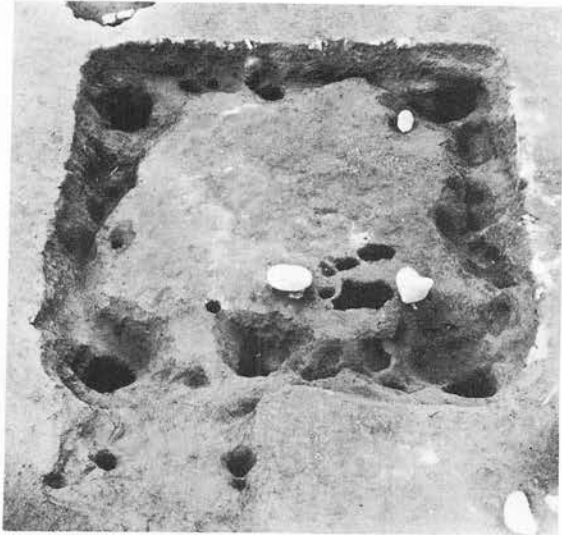
a

Cc12 住居址



b

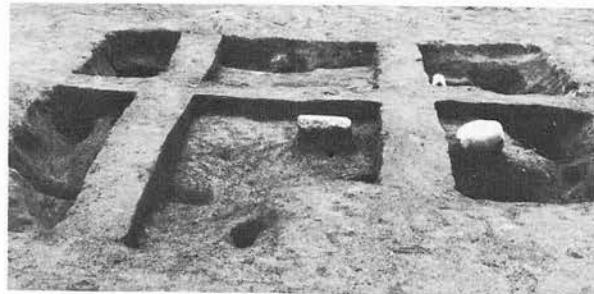
b ~ d Bb09 住居址



c

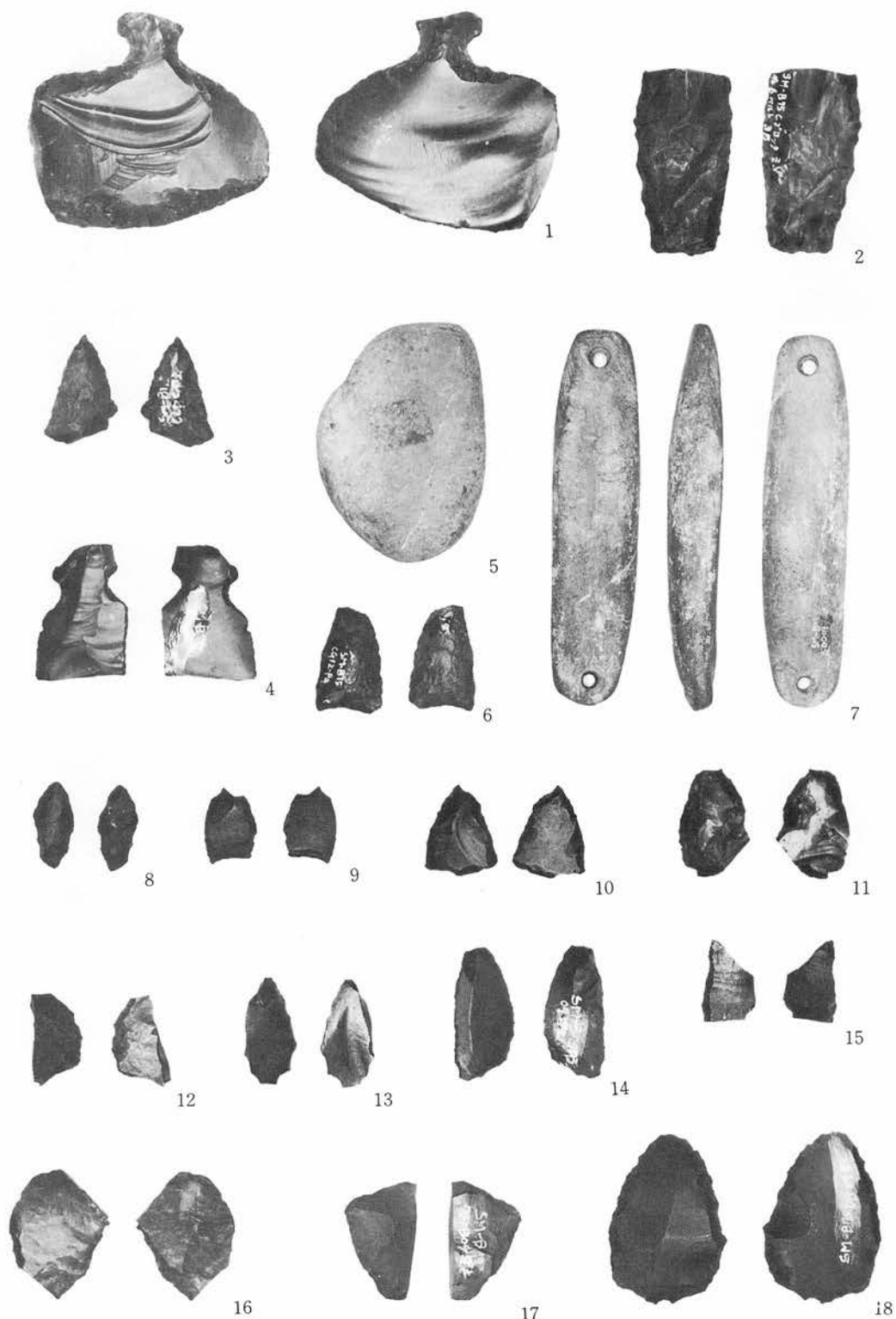


古銭 e

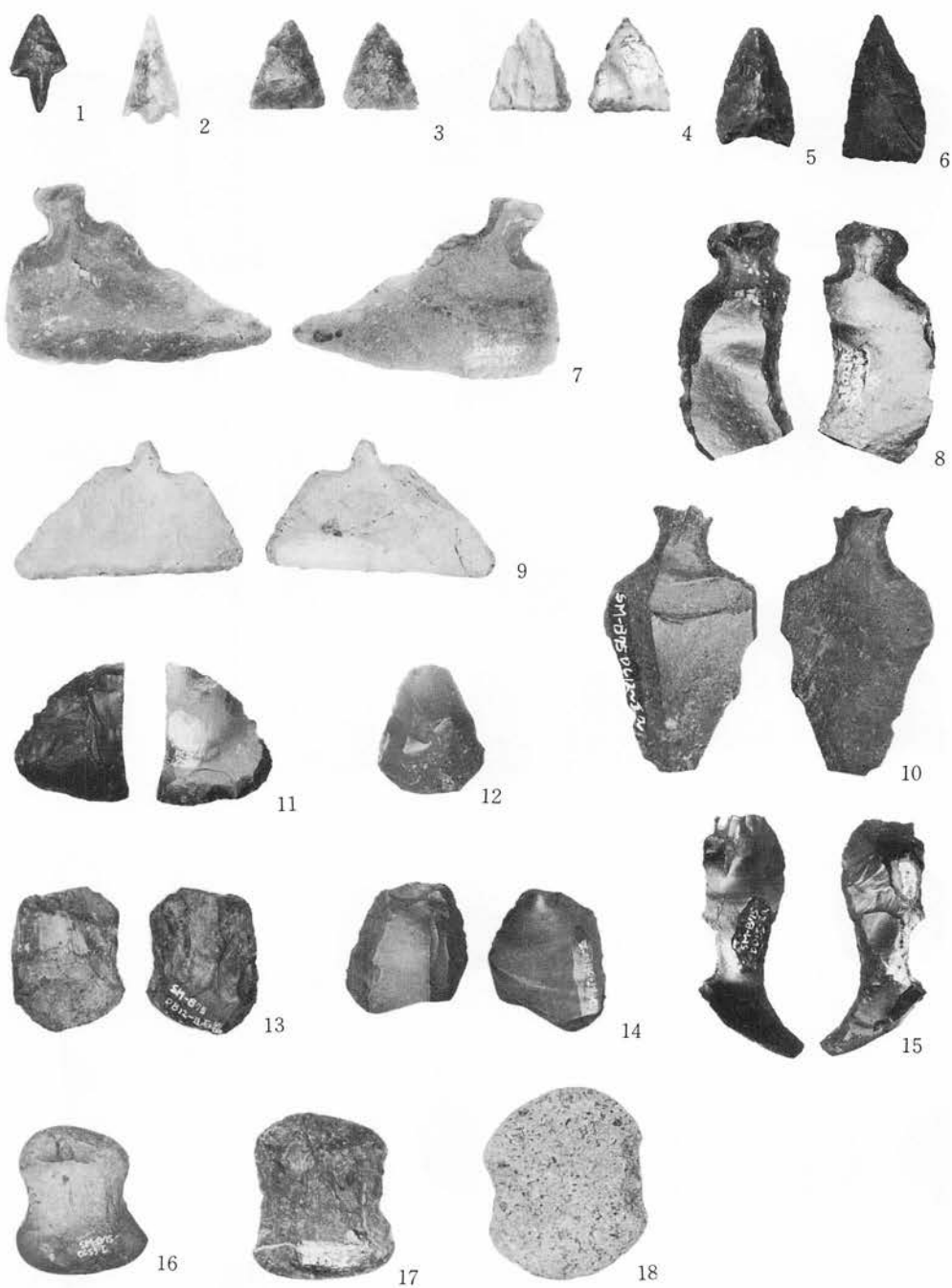


d

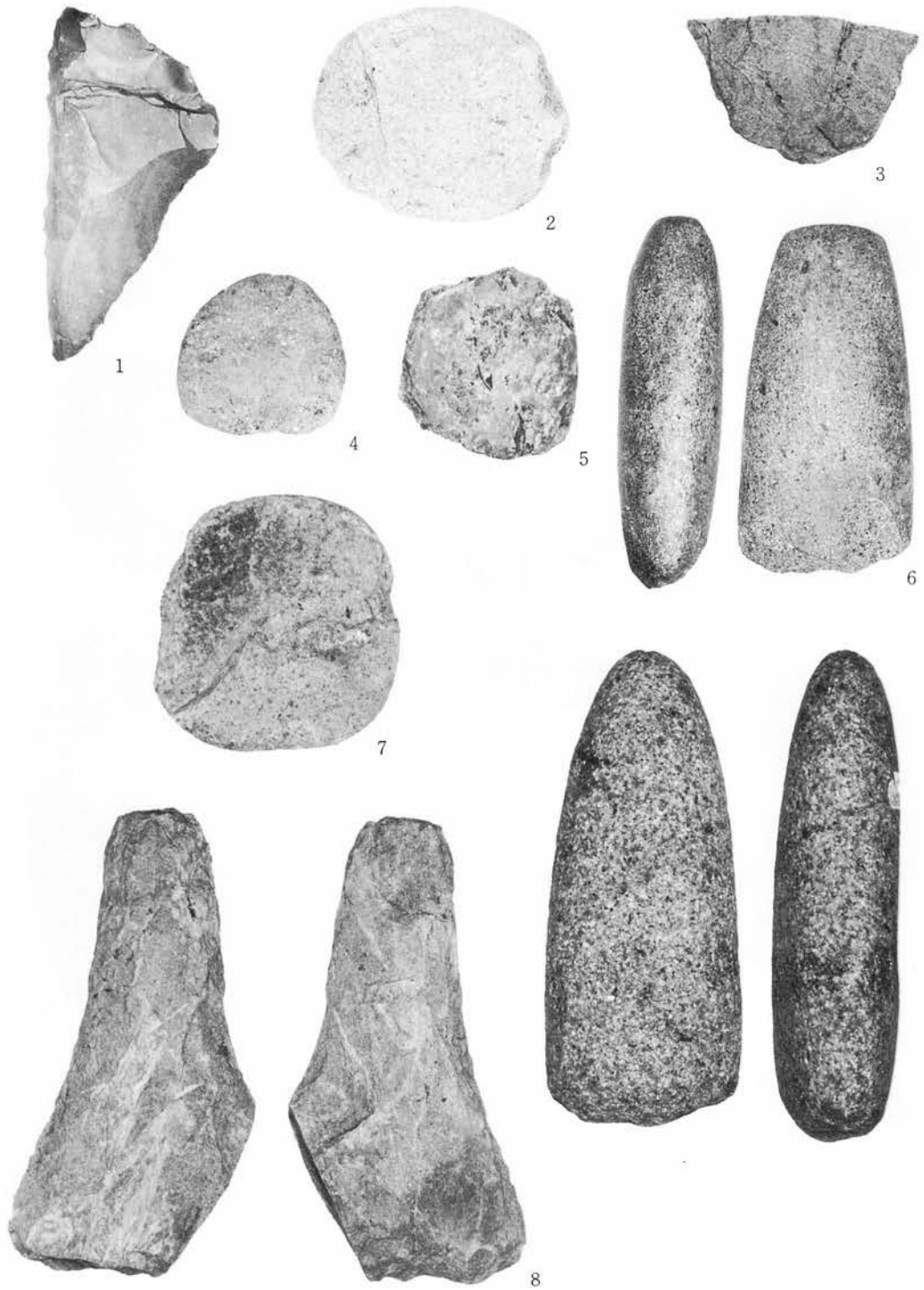
写真図版36 竪穴住居址と古銭



写真図版37 遺構内出土石器



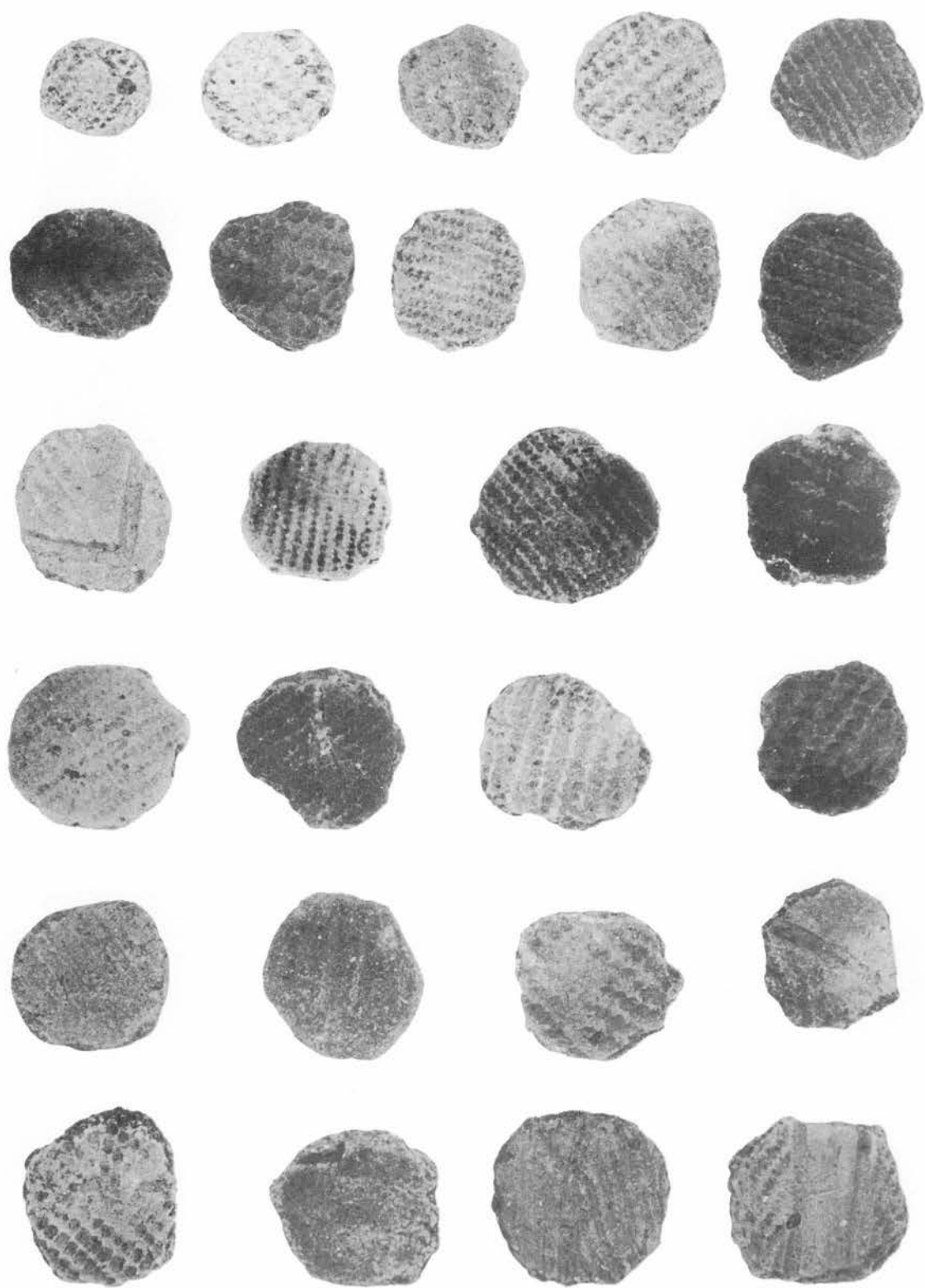
写真図版38 遺構外出土石器(1)



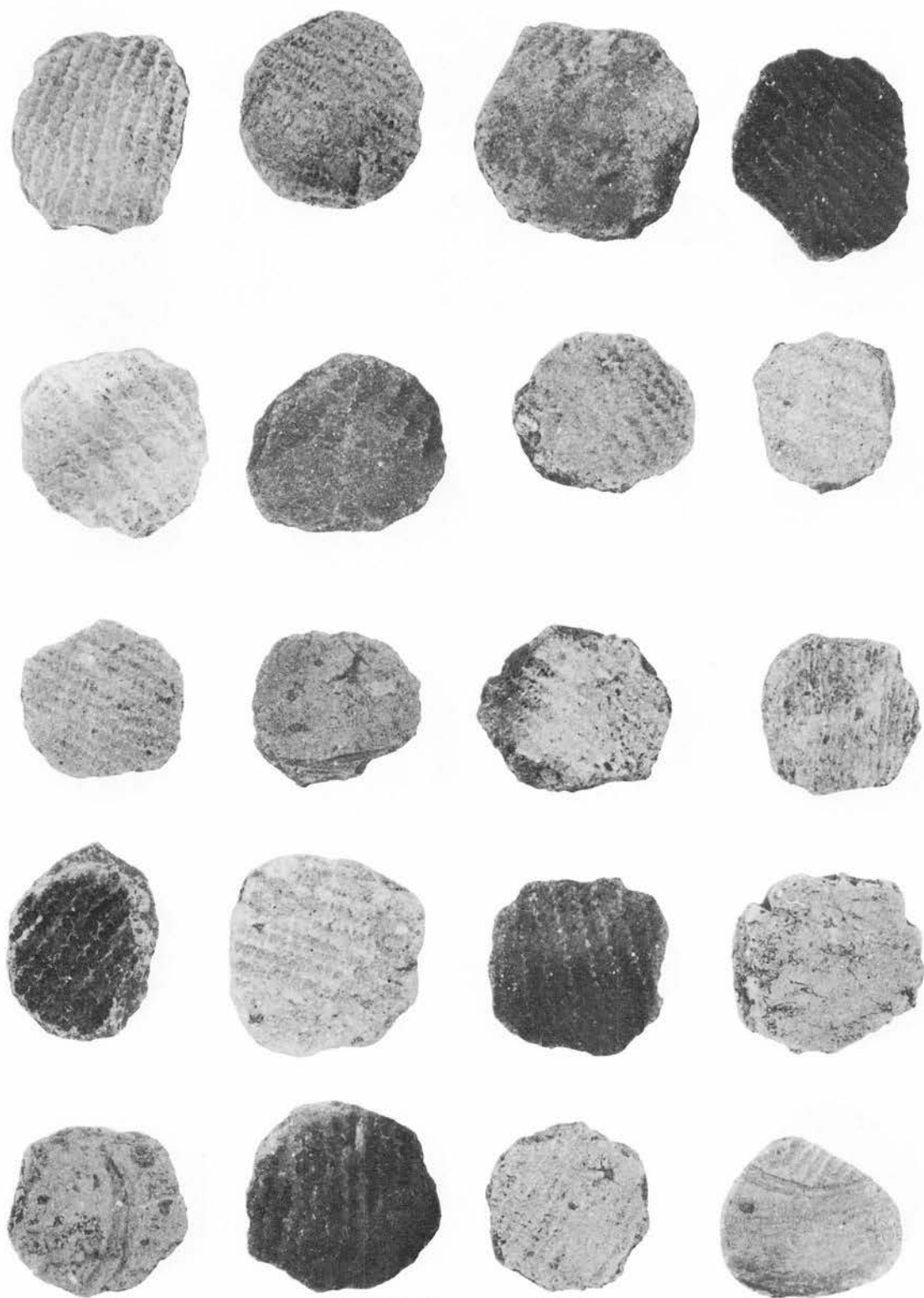
写真図版39 遺構外出土石器(2)



写真図版40 遺構外出土石器(3)



写真図版41 土製円盤(1)



写真図版42 土製円盤(2)



a : 土製円盤



b : 古銭

写真図版43 土製円盤(3)と古銭

岩手県埋文センター文化財調査報告第56集
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

昭和58年3月20日 印刷
昭和58年3月25日 発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷18
TEL (0196) 38-9001

印刷 川嶋印刷株式会社
〒021 一関市上大槻街4-7
